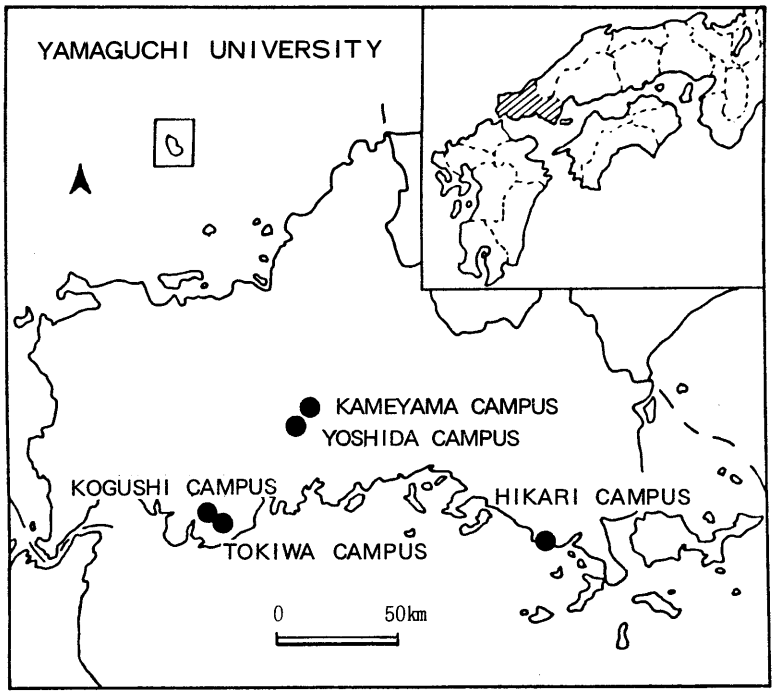
山口大学構内遺跡調査研究年報 Ⅲ

1 9 8 5

山口大学埋蔵文化財資料館

山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅲ



1 9 8 5

山口大学埋蔵文化財資料館

発刊にあたって

このたび、本学が昭和58年度に大学構内で実施した発掘調査の記録を『山口大学構内遺跡調査研究年報　Ⅲ』として刊行するはこびとなりました。

御承知のとおり、本学は吉田地区をはじめとして県内各地にキャンパスが分散しており、今回の発掘調査の結果、小串地区（医学部・医療短期大学部構内）および亀山地区（教育学部附属山口幼稚園・小学校構内）において新たに埋蔵文化財包蔵地が発見されるにいたり、広く一般社会へ周知されることとなりました。その成果として、独自の文化を育んできた地域の豊穣な歴史を掘りおこす貴重な知見が得られました。

教育・研究を通じ社会への貢献を使命とする本学において、埋蔵文化財の積極的な保護と活用を図ることは、考古学・歴史学のみならず、関連諸科学分野の発展に寄与するものと確信されます。

その意味からも、施設・環境整備と共に進む埋蔵文化財の調査・研究は将来を展望した両者の協調によって円滑に進められるべきことは言を俟たないのであります。

本書が学術資料として広く一般に活用され、もって古代文化と歴史の解明の一助となれば幸いに存じます。

最後に、発掘調査ならびに報告書の刊行にあたり御理解、御協力を賜わりました関係各位に対し謝意を表明するとともに、あわせて今後とも学内・学外の御指導・御協力をお願いしたい。

昭和60年12月

山口大学

学　長　　粟　屋　和　彦

序　　文

山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅲが発刊のはこびとなりました。山口大学埋蔵文化財資料館が昭和58年度に行なった山口大学構内の発掘調査の記録であります。

この報告書は、山口大学の施設・環境整備事業にともなう緊急調査でありますが、概要の項に記してあるとおり、既報とちがって今回は大学全域にわたる調査が行なわれることになったことであります。即ち山口大学吉田地区は勿論のこと、宇部地区における小串地区（医学部・医短）、 常盤地区（工学部・工短）にその調査が及んだことであります。このことは山口県及び宇部市からの調査要望の高かったこともさることながら、大学よりの特別の御配慮、関係部局の御高配のたまものであります。

昭和41年の山口大学の総合移転以来、吉田地区は周知の「吉田遺跡」として随時調査が進められていて、長年の調査資料が集積されています。資料館ではこの資料をもとに吉田地区の埋蔵文化財分布図を作りつつあります。将来の施設拡充、環境整備等にさいして埋蔵文化財調査の必要度合を事前に勘案出来る所までなりつつあります。

一方、宇部地区についてはその調査が緒についたばかりですが、小串地区、常盤地区とも周辺の遺跡分布状況からみて、構内に文化財の埋存の可能性が充分にあると考えられています。この報告書にあるとおり、医学部体育館の新営にさいして旧石器をはじめ土師、須恵器などの出土があり遺跡の指定を受けています。

現在山口大学では医学部の整備計画の推進に重点が移っていて、附属病院外来棟、基礎第二研究棟ならびに実験動物研究棟、RI 研究棟などの新営が目白押しに行なわれることと聞いています。工事の進展と調和をとりながら調査が進められ、早急に埋蔵文化財の有無の確認、分布図の作成等を行ない、医学部の整備計画が円滑に進むことを祈っています。

昭和60年12月

山口大学埋蔵文化財資料館

運営委員長　　黄　　基　雄

例　　言

1．本書は、山口大学埋蔵文化財資料館が昭和58年度に山口大学構内で実施した発掘・立会調査に関するもので、昭和59年度末までに整理作業が終了した調査報告書である。

2．昭和58年度の調査は、すべて施設・環境整備事業に伴う緊急調査である。

3．現場における作業は、資料館員河村吉行・森田孝一が担当し、出土した遺物整理は同館員竹内真弓・磯部貴文が中心となり行なった。なお一部の発掘調査にあたっては、人文学部考古学研究室の協力を得た。

4．調査の事務取り扱いは、事務局庶務課庶務係が担当し、また実際、現場にあたっての経理・事務は各関係部局の事務部が対処した。

5．遺構・遺物の実測と製図ならびに本文の執筆等は、河村、森田、磯部、福島朝子が分担作成し、それぞれ文責については目次および各章に記した。

なお、第2章5の吉田構内大学会館新営に伴う発掘調査の出土遺物に関しては、人文学部考古学研究室の協力のもと、当学生諸君が分担して実測、製図を行ない、また本文も資料館員の監修のもと執筆した。そのため第2章の執筆者は各文末に示した。＊印は山口大学人文学部考古学研究室学生。

6．現場における写真撮影は河村、森田が行ない、また本書の遺物写真は河村があたった。なお、PL.3の航空写真は山口県埋蔵文化財センター、PL.2,42,49の構内航空写真は本部事務局の提供による。

7．本書の編集は、本文を森田が、図版を河村が行ない、福島が補助した。

8．調査にあたっては、カラースライドを作製しており、資料館が保管している。広く利用されることを希望したい。

9．調査組織は次の通りである。（昭和59・60年度）

調査主体　埋蔵文化財資料館

館　　長　八木　充〔昭和58年4月1日～昭和60年3月31日〕
〃　　黄　基雄〔昭和60年4月1日～昭和60年5月9日〕
〃　　近藤喬一〔昭和60年5月10日～〕
調査担当　河村吉行
〃　　森田孝一
資料整理　竹内真弓（現姓河村）〔昭和56年4月1日～昭和59年3月30日〕
〃　　磯部貴文〔昭和59年4月1日～昭和60年3月30日〕
〃　　福島朝子〔昭和60年4月1日～〕

事務局（本部庶務課）

事務局長　佐藤士郎〔昭和57年7月9日～昭和60年2月1日〕
〃　　五田次雄〔昭和60年2月1日～昭和60年12月1日〕
〃　　大谷　巖〔昭和60年12月1日～〕

庶務部長　小林靖之〔昭和56年10月１日～昭和59年３月31日〕
〃　内藤　信〔昭和59年４月１日～〕
課長　田崎　智〔昭和55年10月１日～昭和59年７月31日〕
庶務課長　金谷英夫〔昭和59年８月１日～〕
課長補佐　元永道徳〔昭和58年10月１日～昭和60年３月31日〕
〃　大多和拳則〔昭和60年４月１日～〕
係長　片山正雄
本田正春，岩佐厚子，杉山美由紀

10．昭和58年度の発掘調査・整理等にあたって下記の方々の御協力を得た。（官職は昭和58年度時点）

山口大学

事務局　庶務部　人事課長　山崎繁行，課長補佐　吉岡隆夫，人事係長　西野雅博，河内和郎，給与係長　森田義富，金子孝志

経理部　部長　重吉雅裕，課長　幸　文雄，用度係長　森本茂雄，藪　達己

施設部　部長　大西丈二，企画課長　栗尾晋祐，総務係長　梅村　馨，中光博輝，企画係長　川西智信，建築課長　菅野國夫，課長補佐　佐伯　敦，第一工営係長　藤井　幸，小川賀津夫　澤谷弘美，第二工営係長　稲垣實造，河田徹也，第三工営係長　平田　治，設備課長　田村寅雄，電気係長　亦野高志，松田清司，鴻池啓次，機械係長　鈴木輝美，岡田吉彦，園田　廣

学生部　部長　山本和之，次長　友瀧二郎，学生課長　矢取勝海
課長補佐　大谷壽美人，学生係長　林　季生，山本直行，山根　猛

教育学部　事務長　光永　等，事務長補佐　金重　保，山口附属学校係長　柴川　治，光附属学校係長　伊藤敏穂，附属光中学校校長　中村　徹，副校長　大楽義人

医学部　事務部長　近藤春美，次長　繁竹良英，総務課長　堀江　正，課長補佐　西澤喜昭，庶務係長　石川俊輔，管理課長　兼田勝秋，課長補佐　宇山隆造，同大庭静男，環境係長　守田十三郎

工学部　事務長　佐々木實，事務長補佐　大多和拳則，会計係長　片山美徳，鎌田頼行

人文学部考古学研究室

山口県埋蔵文化財センター・宇部市教育委員会・山口市教育委員会・光市教育委員会・國分直一

（調査補助員、作業員）

井出吉彦，唐口勉三，川口幸子，北浦弘人，佐薙邦子，西山和子，向　直也，善永光一，恵谷泰典，古賀信幸，乾風千絵，岡村昌彦，杉原和恵，森下靖士，吉田　寛，米倉智美，渡辺由加，小田信子，柏本秋生，高下洋一，定池博之，菅波正人，西本泰子（以上人文学部考古学研究室）　足立セツ子，石津彰子，今住ゆきえ，北村カヨ子，黒坂千代子，佐々木品江，末岡琴美，谷川美彩世，中司郁子，中司道子，中野満子，中村多恵子，花村政枝，早川幸子，藤井月子，藤井松江，藤田千代子，藤村孚子，松尾秀子，三川郁子，宮家静代，山懸初子，山本由美子，吉村幸子，他宇部市シルバー人材センター

凡　　例

1．吉田地区における調査地区および層位、遺構の位置は国土座標を基準として北から南へ１～24、西から東へＡ～Ｚの番号を付して50ｍ方眼に区画した構内地区割のＡ－24区南西隅を起点（構内座標$x=0$，$y=0$）とする構内座標値で表示する。なお、平面直角座標系第Ⅲ系における座標値（x，y）と構内座標値（x，y）とは下記の計算式で変換される。

$$\begin{cases} x = \mathrm{X} + 20{,}600 \\ y = \mathrm{Y} + 64{,}750 \end{cases}$$

2．遺構の略号は下記の記号で表記した。

住居跡……SB，土壙……SK，溝……SD，井戸……SE，柱穴……PH

3．本書に使用した方位は吉田地区では真北，他地区においては磁北を示す。

4．標高数値は吉田地区、小串地区では海抜標高を示す。常盤地区、白石地区は構内に任意に設定した仮点からの相対標高値で、将来この仮点の海抜標高は明らかにし報告するつもりである。

5．土器の実測図は下記のように分類した。（ただし、第４章はこれに準じない。）

断面黒ぬり……須恵器　　断面白ぬり……弥生土器、土師器、瓦器、瓦質土器

断面網目……陶磁器　　器面網目（粗）……緑釉陶器　　器面網目（密）……黒色土器

本　文　目　次

第１章　昭和58年度山口大学構内遺跡調査の概要 ……（河村・森田）

1　昭和58年度調査の概要 …… 1

2　構内の調査について …… 3

①　吉田地区の現状 …… 4

②　小串・常盤地区等の調査実施について …… 4

第２章　吉田構内大学会館新営に伴う発掘調査 ……（河村・森田他）

1　調査の経過 …… 5

2　位置と環境 …… 6

3　層位 …… 10

4　遺構 …… 13

5　遺物 …… 22

6　小結 …… 67

第３章　吉田構内ラグビー場防球ネット設置に伴う調査 ……（磯部・河村）

1　調査の経過 …… 69

2　層位 …… 70

3　遺構 …… 70

4　遺物 …… 77

5　小結 …… 91

第４章　教育学部附属光小学校自転車置場設置に伴う試掘調査

……（森田・磯部）

1　調査に至る経過 …… 93

2　位置と環境 …… 94

3　「御手洗遺跡」の既往調査について …… 99

4　層位と遺構 …… 102

5　遺物 …… 103

6　小結 …… 108

第５章　宇部（常盤構内）工学部校舎新営に伴う試掘調査 ……（河村・福島）
1　調査の経過 …… 109
2　位置と環境 …… 111
3　層位 …… 115
4　遺物 …… 115
5　小結 …… 117
第６章　宇部（常盤構内）工学部図書館増築に伴う試掘調査 ……（河村）
1　調査の経過 …… 119
2　層位 …… 119
3　小結 …… 121
第７章　宇部（小串構内）医学部体育館新営に伴う試掘調査 ……（河村）
1　調査の経過 …… 123
2　位置と環境 …… 123
3　層位 …… 131
4　遺物 …… 131
5　小結 …… 133
第８章　教育学部附属山口小学校・幼稚園構内の試掘調査 ……（森田）
1　調査の経過 …… 135
2　位置と環境 …… 137
3　層位・遺構 …… 142
4　遺物 …… 150
5　小結 …… 165
第９章　昭和58年度山口大学構内の立会調査 ……（河村・森田）
第１節　吉田構内の立会調査 …… 169
1　理学部大学院校舎新営および付随工事に伴う立会調査 …… 169
2　正門・南門二輪車置場および正門花壇新営に伴う立会調査 …… 170
3　学生部アーチェリー場的台・電柱設置に伴う立会調査 …… 171
4　学生部厩舎散水栓工事に伴う立会調査 …… 172
5　学生部野球場散水栓取設工事に伴う調査 …… 173

6　学生部テニスコートフェンス改修に伴う立会調査 …… 174
7　教育部環境整備に伴う立会調査 …… 176
第2節　小串構内の立会調査 …… 178
1　医学部図書館新築に伴う立会調査 …… 178
2　医学部体育館新営付随工事に伴う立会調査 …… 180
付　編
◦鳥形木製品について …… （森田孝一） …… 181
◦県内の関連遺構・遺物出土地名表 …… 191
(1)　木簡 …… （菅波正人） …… 191
(2)　硯 …… （高下洋一） …… 193
(3)　輸入陶磁器 …… （吉田　寛） …… 196
(4)　緑釉陶器・瓦器 …… （杉原和恵） …… 200
(5)　竈付竪穴式住居跡 …… （森田） …… 204
◦遺物取り上げ工法の一例 …… （森田） …… 207
◦山口大学構内遺跡調査要項 …… 210
山口大学埋蔵文化財資料館規則 …… 210
山口大学埋蔵文化財資料館運営委員会規則 …… 211
◦山口大学構内の主な調査 …… 213
English　Summary …… 216

図 版 目 次

PL.1　山口大学吉田構内地区割および調査区位置図 …… 1～3
PL.2　吉田構内全景（北西から） …… 1～3
＜吉田構内大学会館新営に伴う発掘調査＞
PL.3　調査区全景（北から） …… 5
PL.4　(1)　調査区南西隅遺構分布状況（北から） …… 13～21
(2)　調査区南東隅遺構分布状況（北東から） …… 13～21
PL.5　(1)　調査区北東隅遺構分布状況（西から） …… 13～21
(2)　調査区中央部谷地形（西から） …… 13～19
PL.6　(1)　掘立柱建物跡ＳＢ１（南西から） …… 13

	(2)	井戸ＳＥ１（北西から）	14
PL.7	(1)	井戸ＳＥ１北西隅井側検出状況（南東から）	14
	(2)	井戸ＳＥ１遺物出土状況（南東から）	14
PL.8	(1)	井戸ＳＥ２（南西から）	15～16
	(2)	井戸ＳＥ３（南から）	16
PL.9	(1)	井戸ＳＥ４（北東から）	16～17
	(2)	井戸ＳＥ５（南東から）	18
PL.10	(1)	井戸ＳＥ６（北東から）	18～19
	(2)	土壙ＳＫ１（北西から）	19～21
PL.11	(1)	土壙ＳＫ２（北から）	21
	(2)	土壙ＳＫ３（南西から）	21
PL.12	(1)	現地説明会風景	5
	(2)	現地説明会風景	5
PL.13		遺構出土土器（土師器・陶器）	22～27
PL.14		遺構出土土器（土師器・須恵器・瓦質土器・磁器・陶器）	22～27
PL.15	(1)	包含層出土土器（弥生土器）	27～29
	(2)	包含層出土土器（土師器）	29～32
PL.16	(1)	包含層出土土器（土師器）	29～32
	(2)	包含層出土土器（土師器）	33～37
PL.17		包含層出土土器（土師器）	33～37
PL.18		包含層出土土器（須恵器）	37～43
PL.19		包含層出土土器（須恵器）	37～43
PL.20		包含層出土土器（瓦質土器）	43～47
PL.21	(1)	包含層出土土器（瓦質土器）	43～47
	(2)	包含層出土土器（白磁）	47～49・54
PL.22	(1)	包含層出土土器（龍泉窯系青磁）	49～51・55
	(2)	包含層出土土器（同安窯系青磁）	50～52・55
PL.23	(1)	包含層出土土器（黒色土器・緑釉陶器・瓦器）	50・52・55～57
	(2)	包含層出土土器（国産陶磁器ほか）	53・56～58
PL.24		包含層出土石器	58～63
PL.25		包含層出土石器・石製品	58～63
PL.26		包含層出土木製品	63～65
PL.27		包含層出土木製品・金属器・瓦・スラグ・植物遺体	63～66

<吉田構内ラグビー場防球ネット設置に伴う調査>

PL.28 (1) 調査区全景（南東から）…… 69・70

(2) 調査区全景（北西から）…… 69・70

PL.29 (1) トレンチ南半部全景（北西から）…… 69・70

(2) トレンチ北半部全景（南東から）…… 69・70

(3) 竪穴式住居跡（北東から）…… 70・73～75

PL.30 (1) 竪穴式住居跡遺物出土状況（東から）…… 70・75・77

(2) 竪穴式住居跡遺物出土状況（西から）…… 70・75・77

PL.31 (1) 竪穴式住居跡遺物出土状況（北西から）…… 70・75・77

(2) 竪穴式住居跡遺物出土状況（南西から）…… 70・75・77

(3) 竪穴式住居跡土層断面（北東から）…… 70・75

PL.32 (1) ＳＤ１（北東から）…… 76

(2) ＳＤ１（北西から）…… 76

PL.33 (1) ＳＤ２（北東から）…… 76・77

(2) ＳＤ３（北西から）…… 77

PL.34 (1) 第３グリッド深掘西壁土層断面（北東から）…… 70

(2) 調査風景 …… 69

PL.35 竪穴式住居跡出土土器、ＳＤ１上・中層出土土器 …… 77～82・87・88

PL.36 SD１中層出土土器・石器 …… 80～84・89

PL.37 ＳＤ１中・下層出土土器、その他の遺構および包含層出土土器 …… 81～87・89・90

<教育学部附属光小学校自転車置場設置に伴う試掘調査>

PL.38 (1) Ａトレンチ南壁土層断面 …… 102

(2) Ａトレンチ西壁土層断面 …… 102

PL.39 (1) Ｃトレンチ南壁土層断面 （石垣状遺構）…… 102

(2) 調査風景 …… 93

PL.40 出土遺物（磁器・陶器・瓦質土器）…… 103～107

PL.41 出土遺物（磁器・陶器・瓦）…… 103～107

PL.42 常盤構内（工学部・工業短期大学部キャンパス）全景（南から）…… 109・110

<宇部（常盤構内）工学部校舎新営に伴う試掘調査>

PL.43 (1) 調査区全景（北から）…… 109～111

(2) ＴＲ１全景（北から）…… 109・111・115

PL.44 (1) ＴＲ１北壁土層断面（南から）…… 109・111・115

(2) ＴＲ２全景（北から）…… 109・111・115
PL.45 (1) ＴＲ３全景（北から）…… 109・111・115
(2) ＴＲ４全景（西から）…… 109・111・115
PL.46 (1) ＴＲ５全景（北から）…… 109・111・115
(2) ＴＲ６全景（北から）…… 109・111・115
(3) 出土遺物（須恵器・磁器）…… 115・117
＜宇部（常盤構内）工学部図書館増築に伴う試掘調査＞
PL.47 (1) ＴＲ１全景（南から）…… 119～122
(2) ＴＲ２全景（西から）…… 119～122
PL.48 (1) ＴＲ３全景（西から）…… 119～122
(2) ＴＲ４全景（南から）…… 119～122
PL.49 小串構内（医学部・医療短期大学部キャンパス）全景（南西から）…… 123・125・126
＜宇部（小串構内）体育館新営に伴う試掘調査＞
PL.50 (1) ＴＲ１全景（南東から）…… 123・124・131
(2) ＴＲ２全景（北東から）…… 123・124・131
PL.51 (1) ＴＲ２中央部土層断面（北西から）…… 123・124・131
(2) ＴＲ３全景（南東から）…… 123・124・131
PL.52 (1) ＴＲ４全景（北東から）…… 123・124・131
(2) 出土遺物（土師器・須恵器・瓦質土器・磁器）…… 132・133
PL.53 出土遺物（ナイフ形石器・削器・剝片・細石核）…… 131・132
＜教育学部附属山口小学校・幼稚園構内の試掘調査＞
PL.54 (1) 小学校運動場全景（南から）…… 135・136
(2) Ａ・Ｂトレンチ全景（東から）…… 136・142～145
PL.55 (1) Ａトレンチ全景（東から）…… 136・142～145
(2) Ａトレンチ遺物出土状況（南西から）…… 142～145
PL.56 (1) Ａトレンチ遺物出土状況（南から）…… 142～145
(2) Ａトレンチ遺物出土状況（西から）…… 142～145
PL.57 (1) 鋤出土状況 …… 142～145
(2) 鍬出土状況 …… 142～145
(3) 脚状木製品出土状況 …… 142～145
PL.58 (1) 板状木製品出土状況 …… 142～145
(2) 鳥形木製品出土状況 …… 142～145

(3) 鳥形木製品出土状況 …… 142～145
PL.59 (1) 鳥形木製品出土状況 …… 142～145
(2) 加工木－1出土状況（鳥形木製品を外した状況）…… 142～145
(3) Aトレンチ完掘状況 …… 142～145
PL.60 (1) Cトレンチ全景（南から）…… 145
(2) Dトレンチ全景（南から）…… 145・147
PL.61 (1) Gトレンチ全景（北から）…… 147・148
(2) Gトレンチ全景（東から）…… 147・148
PL.62 (1) Gトレンチ竪穴式住居跡土器出土状況 …… 147・148
(2) Gトレンチ竪穴式住居跡竈付近土器出土状況 …… 147・148
PL.63 (1) Hトレンチ（幼稚園運動場）…… 149
(2)①Eトレンチ北壁土層断面 …… 146・147
②Fトレンチ北壁土層断面 …… 146・147
③発掘風景（Gトレンチ）…… 146～148
④現地説明会風景 …… 136
PL.64 (1) Aトレンチ第8層（黒色粘土層）出土土器・石器 …… 150・151
(2) Bトレンチ出土土器 …… 160・161
PL.65 Aトレンチ第7層（黒灰色粘質土層）出土土器 …… 157～160
PL.66 (1) Gトレンチ竪穴式住居跡出土土器 …… 162・163
(2) Eトレンチ出土瓦 …… 162
PL.67 Aトレンチ第8層（黒色粘土層）出土木器 …… 152～157
PL.68 Aトレンチ第8層（黒色粘土層）出土木器 …… 153～157
PL.69 Aトレンチ第8層（黒色粘土層）出土木器・植物遺体 …… 152～157

挿　図　目　次

＜吉田構内大学会館新営に伴う発掘調査＞

Fig. 1 調査区位置図 …… 5
Fig. 2 吉田遺跡位置図および山口盆地内遺跡分布図 …… 7
Fig. 3 土層断面図 …… 11～12
Fig. 4 SB－1 …… 13
Fig. 5 SE－1 …… 14
Fig. 6 SE－2 …… 15

Fig.7　ＳＥ－３ …… 16
Fig.8　ＳＥ－４ …… 16
Fig.9　ＳＥ－５ …… 17
Fig.10　ＳＥ－６ …… 18
Fig.11　ＳＫ－１ …… 19
Fig.12　ＳＫ－２，３ …… 20
Fig.13　遺構出土土器　その１ …… 23
Fig.14　遺構出土土器　その２ …… 24
Fig.15　遺構出土土器　その３ …… 25
Fig.16　弥生土器　その１ …… 27
Fig.17　弥生土器　その２ …… 28
Fig.18　土師器　その１ …… 30
Fig.19　土師器　その２ …… 31
Fig.20　土師器　その３ …… 33
Fig.21　土師器　その４ …… 34
Fig.22　須恵器　その１ …… 38
Fig.23　須恵器　その２ …… 39
Fig.24　瓦質土器　その１ …… 44
Fig.25　瓦質土器　その２ …… 45
Fig.26　輸入陶磁器　その１ …… 48
Fig.27　輸入陶磁器　その２ …… 49
Fig.28　輸入陶磁器　その３　黒色土器・緑釉陶器・瓦器 …… 50
Fig.29　国産陶磁器 …… 53
Fig.30　石製品　その１ …… 59
Fig.31　石製品　その２ …… 60
Fig.32　石鍔帯 …… 63
Fig.33　木製品　その１ …… 64
Fig.34　木製品　その２ …… 65
Fig.35　金属器・瓦 …… 66
＜吉田構内ラグビー場防球ネット設置に伴う調査＞
Fig.36　調査区位置図 …… 69
Fig.37　土層断面図 …… 71～72
Fig.38　遺構配置図 …… 73～74

Fig.39　竪穴式住居跡 …… 75
Fig.40　ＳＤ１ …… 76
Fig.41　住居跡出土遺物 …… 78
Fig.42　ＳＤ１上層出土遺物 …… 80
Fig.43　ＳＤ１中層出土遺物（１） …… 82
Fig.44　ＳＤ１中層出土遺物（２） …… 83
Fig.45　ＳＤ１中層出土遺物（３） …… 84
Fig.46　ＳＤ１下層出土遺物 …… 85
Fig.47　その他の遺構および包含層出土遺物 …… 86
＜山口大学教育学部附属光小学校自転車置場設置に伴う試掘調査＞
Fig.48　調査区位置図 …… 93
Fig.49　周辺地形図および遺跡分布図 …… 94
Fig.50　土層断面図 …… 102
Fig.51　出土遺物（磁器） …… 103
Fig.52　出土遺物（陶器） …… 104
Fig.53　出土遺物（陶器、瓦質土器） …… 105
Fig.54　出土遺物（瓦） …… 106
Fig.55　調査区位置図（１） …… 109
Fig.56　トレンチ設定図 …… 109
Fig.57　調査地（Ａ－校舎・Ｂ－図書館） …… 110
Fig.58　周辺地形図および遺跡分布図 …… 113
＜宇部（常盤構内）工学部校舎新営に伴う試掘調査＞
Fig.59　出土遺物 …… 115
Fig.60　土層断面図 …… 116
＜宇部（常盤地区）工学部図書館増築に伴う試掘調査＞
Fig.61　調査区位置図 …… 119
Fig.62　土層断面図 …… 120
Fig.63　トレンチ設定図 …… 121
宇部（小串構内）医学部体育館新営に伴う試掘調査＞
Fig.64　調査区位置図（１） …… 123
Fig.65　トレンチ配置図 …… 124
Fig.66　調査区位置図（２） …… 125～126
Fig.67　土層断面図（１） …… 127～128

Fig.68　土層断面図（２）…… 129～130
Fig.69　出土遺物（１）…… 132
Fig.70　出土遺物（２）…… 133
＜教育学部附属山口小学校・幼稚園構内の試掘調査＞
Fig.71　構内図 …… 135
Fig.72　小学校運動場トレンチ設定図 …… 136
Fig.73　周辺地形図および遺跡分布図 …… 138
Fig.74　Ａ・Ｂトレンチ設定図 …… 142
Fig.75　Ａ・Ｂトレンチ遺構配置図 …… 143
Fig.76　Ａトレンチ遺物出土状況図 …… 144
Fig.77　Ａ～Ｆトレンチ土層断面図 …… 146
Fig.78　Ｇトレンチ遺構図・土層断面図 …… 148
Fig.79　幼稚園運動場Ｈトレンチ設定図 …… 149
Fig.80　Ｈトレンチ南壁土層断面図 …… 149
Fig.81　Ａトレンチ第８層（黒色粘土層）出土土器（１）…… 151
Fig.82　木器（１）…… 152
Fig.83　木器（２）…… 154
Fig.84　木器（３）…… 155
Fig.85　木器（４）…… 156
Fig.86　石製品 …… 157
Fig.87　Ａトレンチ第７層（黒灰色粘質土層）出土土器 …… 158
Fig.88　Ｂトレンチ出土土器 …… 161
Fig.89　Ｅトレンチ出土瓦 …… 162
Fig.90　Ｇトレンチ（住居跡内）出土土器 …… 163
＜昭和58年度山口大学構内の立会調査＞
Fig.91　調査区位置図 …… 169
Fig.92　調査区位置図（１）…… 170
Fig.93　調査区位置図（２）…… 170
Fig.94　調査区位置図 …… 171
Fig.95　調査区位置図 …… 172
Fig.96　調査区位置図 …… 173
Fig.97　調査区位置図 …… 174
Fig.98　トレンチ位置図 …… 174

Fig.99　土層断面図 …… 175
Fig.100 調査区位置図 …… 176
Fig.101 調査区位置図 …… 178
Fig.102 試掘壙設定位置図 …… 179
Fig.103 土層断面図 …… 179
Fig.104 調査区位置図 …… 180
＜付　篇＞
Fig.105 各遺跡出土鳥形木製品 …… 184～185
Fig.106 県内出土木簡分布図 …… 193
Fig.107 県内出土硯分布図 …… 195
Fig.108 県内出土輸入陶磁器分布図（宋代，埦・皿）…… 200
Fig.109 県内出土緑釉陶器・瓦器分布図 …… 201
Fig.110 県内竈付竪穴式住居跡検出遺跡分布図 …… 206
Fig.111 遺物取り上げ工程 …… 208

表　目　次

Tab.1　昭和58年度調査一覧表 …… 1
Tab.2　遺構出土土器観察表 …… 26
Tab.3　弥生土器観察表 …… 29
Tab.4　土師器観察表（1）…… 31
Tab.5　土師器観察表（2）…… 35
Tab.6　土師器観察表（3）…… 36
Tab.7　須恵器観察表（1）…… 40
Tab.8　須恵器観察表（2）…… 41
Tab.9　瓦質土器観察表 …… 46
Tab.10　輸入陶磁器観察表 …… 54
Tab.11　輸入陶磁器・黒色土器観察表 …… 55
Tab.12　黒色土器・緑釉陶器・瓦器・国産陶磁器ほか観察表 …… 56
Tab.13　石製品観察表 …… 62
＜吉田構内ラグビー場防球ネット設置に伴う調査＞
Tab.14　出土遺物観察表（1）…… 87
Tab.15　出土遺物観察表（2）…… 88

Tab.16　出土遺物観察表（３）…… 89
Tab.17　出土遺物観察表（４）…… 90
＜教育学部附属山口小学校・幼稚園構内の発掘調査＞
Tab.18　出土土器観察表（１）…… 159
Tab.19　出土土器観察表（２）…… 164
＜昭和58年度山口大学構内の立会調査＞
Tab.20　教育部環境整備に伴う調査事項 …… 176
Tab.21　ボーリング調査結果表 …… 179
＜付篇＞
Tab.22　鳥形木製品（弥生～古墳）出土地名表 …… 186
Tab.23　県内出土木簡地名表 …… 192
Tab.24　県内出土硯地名表 …… 194～195
Tab.25　県内出土輸入陶磁器地名表 …… 197～199
Tab.26　県内出土畿内産瓦器地名表（３）…… 201
Tab.27　県内出土緑釉陶器地名表 …… 202～203
Tab.28　県内竈付竪穴式住居跡地名表 …… 205
Tab.29－１　山口大学埋蔵文化財資料館運営委員会委員 …… 212
Tab.29－２　山口大学埋蔵文化財資料館特別調査員 …… 212
Tab.30　山口大学内の主な調査一覧表　１ …… 213

第１章　昭和58年度山口大学構内遺跡調査の概要

１　昭和58年度調査の概要

山口大学埋蔵文化財資料館は、学内共同施設として、附属施設敷地を含む大学構内において掘削を伴う工事に際し、埋蔵文化財調査を要するものは、周辺における既往の調査結果や工事内容等を勘案しながら、埋蔵文化財に対する影響の度合に応じて、調査方法を事前（全面）・試掘・立会に区分し計画をたて、運営委員会にはかり承認を得たのち調査を実施している。さらに、その結果をふまえ、運営委員会が事後（保存・記録保存、試掘の場合は全面調査の必要性など）の決定をする。

山口大学吉田地区構内は「吉田遺跡」として著名な周知の遺跡であるため、前年度までは吉田地区構内のみを調査対象としてきたが、本年度以降は吉田地区以外の宇部市小串地区（医学部・医療短期大学キャンパス）、宇部市常盤地区（工学部・工業短期大学部キャンパス）、その他の諸施設敷地内の諸工事にも対応して調査を行なうことになった。

本年度は下記の通り16件の調査を行なった。

Tab.１　昭和58年度調査一覧表

調査区分	調　査　地　区	調査面積 (㎡)	調査期間	校内地区割	図版・挿図番号
事　前	大学会館新営予定地	2000	9月1日～12月26日	M－12区 N－12区	PL1－48
	ラグビー場防球ネット設置予定地	114	12月20日～1月19日	G－19区 H－19区	PL1－49
試　掘	教育学部附属光小学校自転車置場設置予定地	6	1月20日	――――	Fig.48
	医学部体育館新営予定地	260	2月2日～2月16日	――――	Fig.66
	工学部校舎新営予定地	70	1月23日～1月31日	――――	Fig.57
	工学部図書館増築予定地	70	2月24日～3月1日	――――	Fig.57
	教育学部附属山口小学校・幼稚園運動場整備予定地	60	3月26日～4月6日	――――	Fig.71

昭和58年度山口大学構内遺跡調査の概要

調査区分	調　査　地　区	調査面積 (㎡)	調査期間	構内地区割	図版・挿図番号
立　会	理学部大学院校舎新営および付随工事	410	6月17日 10月18日	M・N－20区 O ― 20・21区	PL1－50
	学生部正門・南門自転車置場設置工事	183	12月6日 ～ 12月14日	I ― 12・13区 J ― 13区 H ― 23区	PL1－51
	学生部アーチェリー場的台・電柱設置工事	33	2月1日	M ― 8区	PL1－52
	学生部廐舎関連工事	1.6	2月1日	L ― 9区	PL1－53
	学生部野球場散水栓取設工事	1	2月1日	J・K― 21区	PL1－54
	学生部テニスコート改修工事	12	3月12日 ～ 3月28日	C ― 17・18区 D ― 16・17区 E ― 16区	PL1－55
	教養部環境整備工事	80	3月16日 ～ 3月22日	I ― 16・17区 J ― 17区 K・L― 17・18区	PL1－56
	医学部図書館増築工事	4	11月1日	――――	Fig.104
	医学部体育館新営付随工事	1	3月31日	――――	Fig. 66

吉田地区の調査

9件の調査を行なった。このうち事前調査は大学会館新営とラグビー場防球ネット設置に伴う2件である。

大学会館新営予定地では小さな谷を狭んだ2つの丘陵上で古墳時代から中世にかけての柱穴、土壙が検出され、また谷部では湧水点が認められ、その汀線付近において5基の井戸（古墳時代1基、中世3基、不明1基）が検出された。谷の侵食および後世の削平によりいずれも井戸最下段しか残存していないが、古墳時代のものは方形プランを呈し、転用材により構築された横板組の井戸である。中世のものはすべて円形プランを呈し底面に曲物を据えたものである。なお包含層よりの出土遺物には多量の弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、瓦質土器、木製品、石製品があり、その中に畿内系瓦器、墨書土器、石製銙帯を含んでいるのが注目を引く。

ラグビー場防球ネット設置予定地では弥生時代中期後半から後期前半に属する溝や弥生時代終末から古墳時代初頭の竪穴式住居跡などが検出された。周辺では遺跡保存地区や昭和56年度に調査を実施した教育学部構内H－19区において弥生時代中期から古墳時代前期にかけての住居群が検出されており、付近一帯が居住区域として継続的に機能していたこと

を示唆する。今回検出した竪穴式住居跡はこの集落の時間的・空間的推移を知るうえで貴重な資料と考えられたため、保存の要請を行なったところ、設計の一部を変更して竪穴式住居跡の現地保存の措置がとられた。

立会調査は7件実施した。理学部大学院校舎新営および付随工事、並びに学生部アーチェリー場的台・電柱設置に伴う立会調査では、工事範囲内の地山がすでに削平されており、遺構、遺物が埋存していたとしても消失してしまっている可能性が強い。学生部野球場散水栓取設工事、学生部テニスコート改修工事、教養部環境整備に伴う立会調査ではそれぞれに遺物包含層が認められ、今後各周辺地域における諸工事の際には十分な調査が必要であろうと思われた。また学生部厩舎関連工事、学生部正門・南門二輪車置場および正門花壇新営工事での掘削は構内造成時等の置土の範囲内にとどまった。

小串地区の調査

試掘調査1件、立会調査2件を実施した。

医学部体育館新営に伴う試掘調査では顕著な遺構は検出されなかったが、旧石器をはじめとして土師器、須恵器、瓦質土器、磁器が出土し、遺跡の存在が明らかになった。また、これに付随する工事の立会調査では試掘調査時と同様の堆積が認められたが遺物、遺構は認められなかった。

医学部図書館増築に伴う立会調査ではキャンパス南端部における土層の堆積状態を確認したにとどまった。

常盤地区の調査

工学部校舎新営予定地および図書館増築予定地における2件の試掘調査を実施したが、前者で古墳時代の遺物が出土したものの両者とも後世にかなり削平を受けており、顕著な遺物、遺構は認められなかった。

その他付属施設の調査

2件の試掘調査を行なった。教育学部附属光中学校自転車置場新営予定地では近世末から近代初めの石垣を検出し、19世紀を中心とした瓦質土器や陶磁器、瓦が出土した。また教育学部附属山口小学校・幼稚園運動場整備に伴う調査においては、小学校運動場で古墳時代前期から中期の遺物包含層をはじめとして古墳時代の竪穴式住居跡、内部より多量の土師器、木器が出土した溝状遺構などを検出した。とりわけ溝状遺構より杆とセットで出土した鳥形木製品は霊鳥信仰を背景とした儀器と考えられるもので、当時の信仰・習俗を探るうえでの貴重な資料となった。

2　構内の調査について

①　吉田地区の現状

山口市に所在する吉田地区には隣接の教育学部附属養護学校を包括した広い範囲にわたって、「吉田遺跡」が埋存していることは古くから周知されていることで、昭和41年の総合移転開始以降、土木建設工事に際しては文化財保護法の手順に基づき、随時調査が実施されてきた。その結果、長年にわたる調査データの集積によって埋蔵文化財の分布図ができつつあり、そのため新たな工事に関しては、当該地周辺の埋文状況や工事内容等の検討により調査の必要度の判断がしだいに容易になってきている。

②　小串・常盤地区等の調査実施について

山口大学構内には吉田地区以外に小串地区（宇部市―医学部・医療短大・附属病院）、常盤地区（宇部市―工学部）があり、また附属施設として小・中学校（山口市・光市）、養護学校（山口市）などが県内に点在している。

これまで構内での埋蔵文化財調査は、吉田地区の総合移転を契機としていること、またそのため大学の整備計画の重点が長い間吉田地区に置かれていたこと、かつ埋蔵文化財が濃密に包蔵されていたことなどから、調査自体も必然的に吉田地区に集中し、他の地区についても本来必要であったものの調査体制の不十分さより容易に実施できない状況であった。しかし、吉田地区以外でも附属光小・中学校（御手洗遺跡）のように周知の遺跡が存在している所があり、小串・常盤地区や他の附属施設地についても周知の遺跡ではないものの、しかし、埋蔵文化財包蔵の有無について全く調査がなされておらず、後章（小串地区―第４章２・常盤地区―第６章２など）で説明するように周辺の遺跡分布状況から察して各構内に埋蔵文化財が埋存している可能性が十分に考えられた。また、仮に工事中において遺跡や遺物が発見された場合、文化財保護法によって工事が中断するケースも起こりえ、工事自体に大きな影響を及ぼす心配があることから、このような事態に陥らないためにも、小串地区の再開発計画を契機として昭和58年度より吉田地区以外でも調査を実施するに至った。ついてはなるべく早急に埋蔵文化財の有無の確認、分布図の作成を行ない、将来における整備計画等が円滑に進むようにしたいと考えている。

第２章　吉田構内大学会館新営に伴う発掘調査

１　調査の経過

大学会館は本学構成員の学術・文化活動、および課外活動領域の進展と人間的接触・相互理解を基軸とした福利厚生施設として本学希求の学内共同利用施設であった。

新営予定地は構内調査地区割でいうＭ－14区、吉田遺跡調査団の呼称する第Ｉ地区にあたる。付近一帯は現在までに多数の遺構、遺物が確認されており、特に新営予定地西方Ｋ・Ｌ－14区では弥生時代中・後期の土壙、古墳時代に属すると思われる竪穴式住居跡、土壙、溝状遺構および室町時代の環溝をもつ集落が検出されている。また、南東のＮ－14区からは古墳時代前期の竪穴式住居跡が検出されており、新営予定地周辺地域はキャンパス内においても遺構の分布密度の極めて高い地域のひとつとして位置づけることができる。

大学会館新営の具体化と呼応して、昭和57年12月資料館は新営予定地内における遺構、遺物の分布状況を把握すべく予定地内３カ所に調査区を設定して試掘調査を実施した。その結果、弥生時代後期の竪穴式住居跡をはじめとして弥生から古墳時代の土壙および中世の土壙、溝、柱穴が検出され、東から西への地山面の下降に対応して遺構は新営予定地西方に向かうにつれてさらに良好な残存・分布状況を示すものと理解された。これを受けて学内関係諸機関、諸部局との協議の結果、新営予定地を新たに他地域に求め、新候補地の試掘調査を踏まえた上で当初の新営予定地を北方に設計変更することで合意が得られた。そのため昭和58年９月１日から12月24日にかけて新営予定地約2000㎡について人文学部考古学研究室の協力を得て調査を実施した。また、11月25日には現地説明会を実施し、学内外の見学者多数が訪れた。

（河　村）

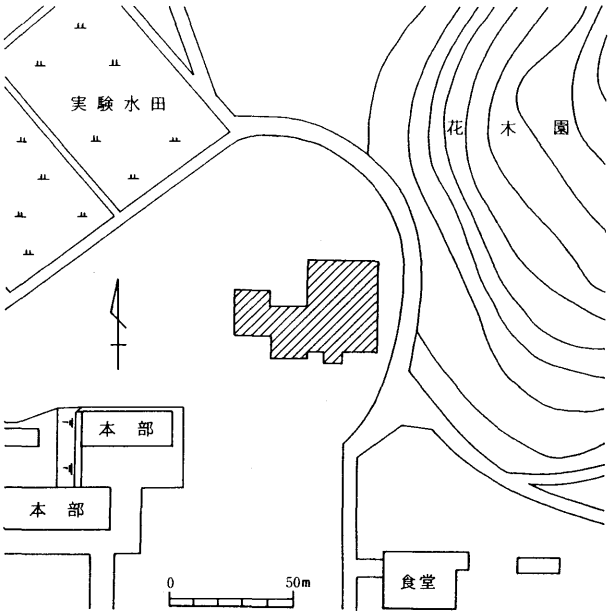


Fig. 1　調査区位置図

2　位置と環境

吉田遺跡は行政上山口県山口市大字吉田1677－1に所在する山口大学吉田構内72万㎡にわたって存在する縄文時代から近世にいたる遺跡群の総称である。本遺跡は山口県のほぼ中央に位置する山口盆地の東縁の一角に展開し、姫山、今山から派生した洪積台地とそれに隣接する沖積低地上に立地する（Fig.2)。北東－南西に開ける盆地の中央部は木戸山山麓に源を発し、小郡湾に注ぐ椹野川が貫流する。左岸では高倉山、黒河内山、右岸では吉敷丘陵から続く楯木山、鋤尖山が聳え立ち、さらにその奥部には県中央部における分水界をなす鳳翩山が悠然たる姿を見せている。

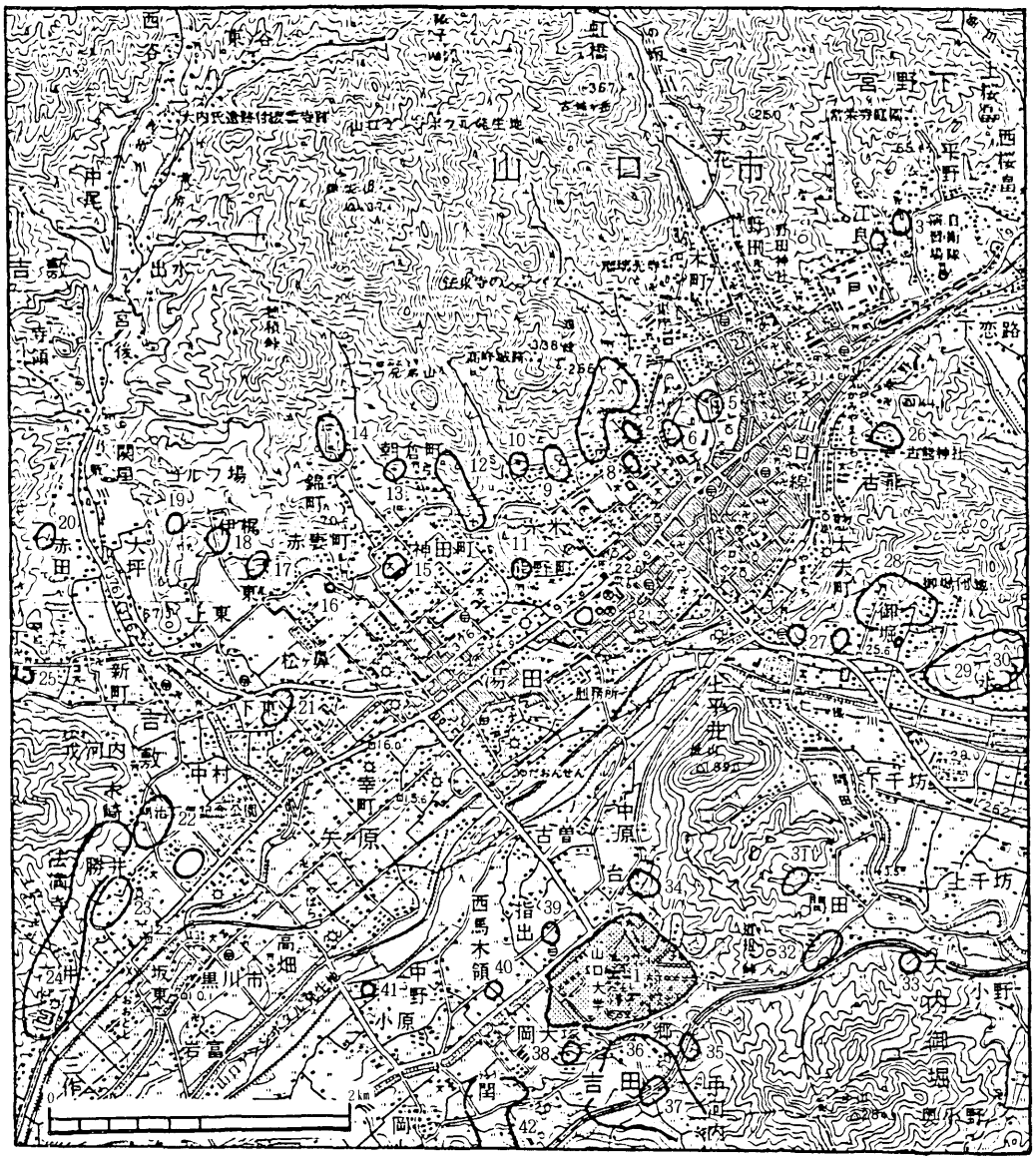
山口盆地における遺跡は縄文時代から中世まで総数約80カ所を数え、主として椹野川氾濫原を除く盆地縁辺部に多く存在している[1]。

盆地内において人々が最初に生活の場として選定したのは各山地から派生した、沖積低地を臨む低丘陵上であった。縄文時代晩期のことであり、土壙が検出された木崎遺跡[2]、吉田遺跡[3]等が知られている。しかし、多くの遺跡は遺物包含地であり、現在までのところ、生活を如実に裏付ける住居跡等は発見されていない。

縄文時代以降、稲作の伝播とともに開花した弥生文化は、それまでの生活様式を一変させた。可耕地の追求は山裾の低地への進出を促進し、前期末には下東遺跡[4]、吉田遺跡[5]等の集落の形成によって具現化する。その他、中期の遺跡として朝倉大歳遺跡[6]、荻峠遺跡[7]等、後期の遺跡として堂道遺跡[8]等がある。

生活の場が水平的、特に垂直的に移動していく一方で、墳墓は朝田墳墓群[9]、茶臼山石棺墓群[10]、乗ノ尾石棺群[11]、黒川遺跡[12]等、沖積低地を見下ろす低丘陵上に営まれる。中でも朝田墳墓群は県下でも有数の墳墓群として知られている。第Ⅰ～第Ⅳ地区と呼ばれる各丘陵上には弥生時代から古墳時代にかけての墳墓が群集しており、箱式石棺墓、土壙墓等の多様な埋葬形態の群集する集団墓から首長墓、家族墓へと変遷していく過程を観察することができる。

弥生時代終末から古墳時代初頭には盆地内においても階層分化に起因すると思われる方形台状墓等の特定個人墓が築かれるようになる[13]。しかし、これらは墳墓形態および副葬品に若干の優位性が認められる程度で、盆地内を統合するほどの強大な首長層の出現は5世紀中葉の天神山古墳[14]、朝田第Ⅱ地区第13号墓[15]等の出現まで待たなければならない。いわゆる畿内系竪穴式石室を内部主体にもつ古墳の出現であり、ここに盆地内あるいは少なくとも椹野川右岸の統合がなされたと考えられる。天神山古墳群では第1号墳と第8号墳で竪



1	吉田遺跡（山口大学吉田キャンパス）	10	木戸神社古墳群	21	下東遺跡	32	問田遺跡
2	白石遺跡（山口大学附属山口小学校）	11	権現山古墳	22	木崎遺跡	33	新開古墳
3	竹の花遺跡	12	荻峠遺跡	23	太田遺跡	34	日吉神社古墳群
4	江良遺跡	13	朝倉遺跡	24	朝田墳墓群	35	乗ノ尾石棺群
5	松柄遺跡	14	朝倉河内古墳群	25	天神山古墳群	36	神郷大塚遺跡
6	亀山遺跡	15	湯田楠木町遺跡	26	古熊遺跡	37	吉田岡畠遺跡
7	鴻ノ峰・白石古墳群	16	赤妻古墳	27	橋村・御堀石棺群	38	大塚古墳
8	茶臼山古墳群	17	土師宮古墳群	28	御堀遺跡	39	郷遺跡
9	糸米古墳群	18	伊梶堤遺跡	29	入野遺跡	40	馬木遺跡
		19	大判石棺	30	氷上古墳	41	中島古墳
		20	泉山古墳群	31	問田・山崎遺跡	42	小路遺跡

Fig. 2　吉田遺跡位置図および山口盆地内遺跡分布図

穴式石室が確認されており、第1号墳から短甲1領、武器、農工具、第8号墳から武器、漁具、農工具が出土している。また、朝田墳墓群第Ⅱ地区第13号墳は前方後円墳で、前方部と後円部に各1基の主体部をもつ。後円部主体は竪穴式石室で排水施設を伴う。墳丘および前方部主体より武器、農工具、石製品が出土している。

これら豊富な副葬品に見られるように強大な権力を有したであろう首長層の墳墓は5世紀後半に構築される赤妻古墳[16]を最後に短期間のうちに姿を消し、代わって6世紀には被葬者の質的差異と呼応して家族墓的な性格を有する、畿内文化の流れをくむ横穴式石室や北部九州より招来された竪穴系横口式石室をもった小円墳・横穴墓が盆地内各所に築造される。朝田墳墓群[17]、朝倉河内古墳群[18]、白石古墳群[19]、鴻ノ峰古墳群[20]などがこれにあたる。

集落跡には下東遺跡[21]と吉田遺跡[22]が知られており、両者とも住居跡、土壙等が検出されている。

以上、古墳時代までを概観すると、盆地内に分布する諸遺跡に比べ充実した規模・内容をもつ吉田遺跡が縄文時代以降、古墳時代に致るまで椹野川流域における集落の中心的存在であったことは容易に推察できる。吉田遺跡は昭和41年から継続的に調査が行なわれており、集落構造の時間的・空間的・質的な変遷過程のモデルを一遺跡においてパターン化できる有数の集落遺跡として位置づけることができる。また円筒埴輪等も採集されていることなどから畿内系の古墳の存在も予想され、埋葬跡をもあわせもつ多様な遺跡であることを示唆している。

律令国家の成立とともに地方制度として国・郡・里の行政区画が設定され、山口盆地は周防国吉敷郡に属することになる。この時代の遺跡はまだあまり明らかにされておらず、わずかに吉田岡畠遺跡[23]で平安時代の土壙群、黒川遺跡[24]で平安時代の掘立柱建物や溝が検出されている。

律令体制が崩壊し武家政権の時代になると、鎌倉から室町時代の建物跡、溝の検出された吉田岡畠遺跡[25]をはじめとして、室町時代の遺跡が多く認められるようになる。とりわけ大内氏の関係遺跡は著名で、大内館跡、築山館跡、高嶺城跡、淩雲寺跡などがある。昭和53年以降、山口市教育委員会によって大内氏館跡の調査が継続的に行なわれており、当時の大内氏の栄華を偲ぶことのできる遺構や遺物が検出されている。[26]

（磯　部）

〔注〕
1）山口県教育委員会『山口県遺跡地図』（1972年）。

2）山口県教育委員会『朝田墳墓群Ⅰ・木崎遺跡』（1976年）。
3）小野忠熙「山口大学吉田遺跡」（『考古学ジャーナル』 第9号、1967年）。
同　　上「山口大学構内吉田遺跡の性格」（『学園だより』 第6号、山口大学、1970年）。
山口大学吉田遺跡調査団『山口大学吉田遺跡発掘調査概報』（1976年）。
山口大学埋蔵文化財資料館『山口大学構内遺跡調査研究年報　昭和56年度』（1981年）。
4）山口県教育委員会『下東遺跡・荻峠遺跡』（1975年）。
5）注3）に同じ。
6）山口市教育委員会『朝倉大蔵』（1982年）。
7）注4）に同じ。
8）山口県教育委員会『堂道・五反地遺跡』（1973年）。
9）注2）に同じ。
山口県教育委員会　『朝田墳墓群Ⅱ・鴻ノ峰1号墳』（1977年）。
同　　上　『朝田墳墓群Ⅲ』（1978年）。
同　　上　『朝田墳墓群Ⅲ－B，Ⅳ・糸米遺跡』（1979年）。
同　　上　『朝田墳墓群Ⅴ』（1982年）。
同　　上　『朝田墳墓群Ⅵ』（1983年）。
10）山口市教育委員会　『茶臼山石棺群・大判石棺調査報告』（1978年）。
11）山口県教育委員会　『美祢市内川古墳・山口市乗ノ尾遺跡』（1973年）。
12）山口県教育委員会　『黒川遺跡』（1980年）。
13）朝田墳墓群、黒川遺跡等でみられる。
14）山口市教育委員会　『天神山古墳』（1979年）。
同　　上　『天神山古墳Ⅱ』（1982年）。
15）山口県教育委員会　『朝田墳墓群Ⅵ』（1983年）。
16）弘津史文　「周防國赤妻古墳並茶臼山古墳（其一）」（『考古学雑誌』 18－4、1928年）。
舟形石棺と箱式石棺を内部主体にもち、鏡、甲冑類、巴形銅器等の多量の副葬品が出土した。
17）注9）に同じ。
18）朝倉河内古墳群発掘調査委員会　『朝倉河内古墳群調査報告』（1975年）。
19）山口県教育委員会　『白石古墳群』（1980年）。
20）山口県教育委員会　『朝田墳墓群Ⅱ・鴻ノ峰1号墳』（1977年）。
21）注4）に同じ。
22）注3）に同じ。
23）山口県教育委員会　『吉田岡畠・吉田大浴・下長野遺跡』（1973年）。
24）注12）に同じ。
25）注23）に同じ。
26）山口市教育委員会　『大内氏館跡Ⅰ』（1981年）。
同　　上　『大内氏館跡Ⅱ』（1980年）。
同　　上　『大内氏館跡Ⅲ』（1981年）。
同　　上　『大内氏館跡Ⅳ』（1982年）。
同　　上　『大内氏館跡Ⅴ』（1983年）。

3　層位

調査区内は当初、姫山から南へ派生した低丘陵上に立地するものと思われたが、調査の結果、東部および南西隅においてそれぞれ東から西に延びる二つの小支丘陵と両丘陵縁辺部を侵食しつつ北ないしは北西に開ける谷あいに立地することが判明した。東部では92～108／1000で下降する丘陵縁辺部が後世の水田造営等に伴う暗渠掘削によって$x=568$・$y=665$、$x=590$・$y=674$、$x=615$・$y=660$を結ぶライン付近で切断されており階段状を呈している。また、南西隅は丘陵の北縁辺部の一端にあたる。

谷は調査区外南東方向の景観・立地およびN－15区での検出遺構、分布状況から推してその上流部付近にあたるものと思われ、両丘陵の地山である黄橙褐色粘質土層を深さ約70cm、さらにその下部に堆積する青灰色粘土層を約60cm侵食し、南部においては青灰色砂礫層、北部においては砂礫層を基底面（谷底）とする。基底面への傾斜は東部においては比較的緩やかであるが、西部においては丘陵縁辺部の侵食が強く急傾斜の斜面を形成する。基底面は南部で標高21.30m、北部で標高20.80m前後で南から北へ緩やかに下降しており、第33層以下の堆積土が砂礫を含まず、そのほとんどが粘土層であることからこの谷は初期の段階では比較的緩やかな流水開析が進行していたものと思われる。

一方、土層の堆積状況をみると、第33層は南部を中心に水平に近くしかも広範囲に堆積するが、それ以下の各堆積層はブロック状に堆積している。また、この谷にはさらに調査区中央部$x=590$、$y=660$、付近を湧水点として幅9.6～12.0m、東部の丘陵縁辺部との比高差1.0～1.3mをもち、北ないしは北西に開く小規模な谷が存在し、基底面には第33層が65cm以上の厚さで堆積している。この小規模な谷の緩斜面からは完形の土師器高坏（Fig.19, 18・19）が出土し、また井戸も埋存することから谷の埋没が少なくとも古墳時代前期、すなわち第33層の堆積をもって開始したことを示唆する。そして、第12層の堆積により谷が埋没した近世以後、水田耕作等の土地利用が開始され、それ以前の段階では各丘陵間は広汎な低湿地を形成していたものと思われる。

調査区内において地山に至る堆積層は24層に分層される（Fig. 3 ）。第１層は腐蝕土および構内造成時等の置土層を含む表土で、南西隅では直下が地山となっている。第２層：暗灰色土層は旧水田耕作土、第３層：暗灰橙色粘質土層は床土である。第４層：灰橙色土層以下が非人為的な堆積層であるが、遺物を包含するのは第５層：黄灰褐色土層、第９層：青灰褐色砂質土層、第12層：灰橙色粘質土層、第22層：黒茶色粘土層、第23層：黄茶色粘土層、第29層：灰褐色粘質土層、第30層：茶褐色粘土層、第33層：黒色粘土層の計８層で

層　位

1. 表土（腐蝕土、構内造成時の置土）
2. 暗灰色土（旧水田耕作土）
3. 明暗橙色粘質土（床土）
4. 灰橙色土
5. 黄灰褐色土
6. 灰黄橙色粘質土
7. 暗茶褐色粘質土
8. 茶褐色粘質土
9. 青灰褐色砂質土
10. 淡灰橙色土
11. 濁淡灰茶色粘質土
12. 灰橙色粘質土
13. 淡茶橙色粘質土
14. 灰茶橙色粘質土
15. 暗茶橙色粘質土
16. 橙褐色粘質土混り灰橙色粘質土
17. 暗灰橙色粘質土
18. 黒褐色土
19. 茶橙色粘質土
20. 淡灰茶橙色粘土
21. 灰色粘土
22. 黒茶色粘土
23. 黄茶色粘土
24. 灰黄褐色粘土
25. 暗灰色粘土
26. 茶橙色土
27. 灰黒色土
28. 淡灰色粘質土
29. 灰褐色粘質土
30. 茶褐色粘土
31. 淡灰茶色土
32. 暗灰茶褐色粘土
33. 黒色粘土（粘性大）
34. 淡灰黒色粘土
35. 淡黒茶色粘土
36. 灰黒色粘質土
37. 黒色粘土
38. 灰白色粘土
39. 暗黒茶色粘土
40. 黒橙色粘土
41. 淡灰褐色粘質土

Fig. 3　土層断面図

ある。しかし、各遺物包含層は両低丘陵上からの流れ込みによるもので、弥生時代前期から近世の遺物を多量に包含する第29層に明示されるように、明確な時期差をもった堆積状況を示しておらず、各時期の遺物が混在する。

地山は調査区東部最高所で標高約24.00ｍ、南西隅最高所で約22.20ｍ、谷基底面で約20.30ｍである。

（河　村）

4　遺構

建物

SB 1（Fig. 4　PL. 6 (1)）

調査区南東隅 x ＝583、y ＝676付近で検出した身舎１間×１間の掘立柱建物跡である。第５層（黄灰褐色土層）を掘り込んで営まれており、北東隅を起点として桁行長3.4ｍ、梁行長2.9ｍの規模をもつ。棟方向N－74°－W。４個の柱穴の底径および検出面よりの深さはそれぞれＰ１が12cm、18cm。Ｐ２が14cm、18cm。Ｐ３が８cm、21cm。Ｐ４が12cm、12cmでＰ４は二段掘りとなっている。

出土遺物には土師器皿、磁器湯呑があり、近世に下るものであろう。

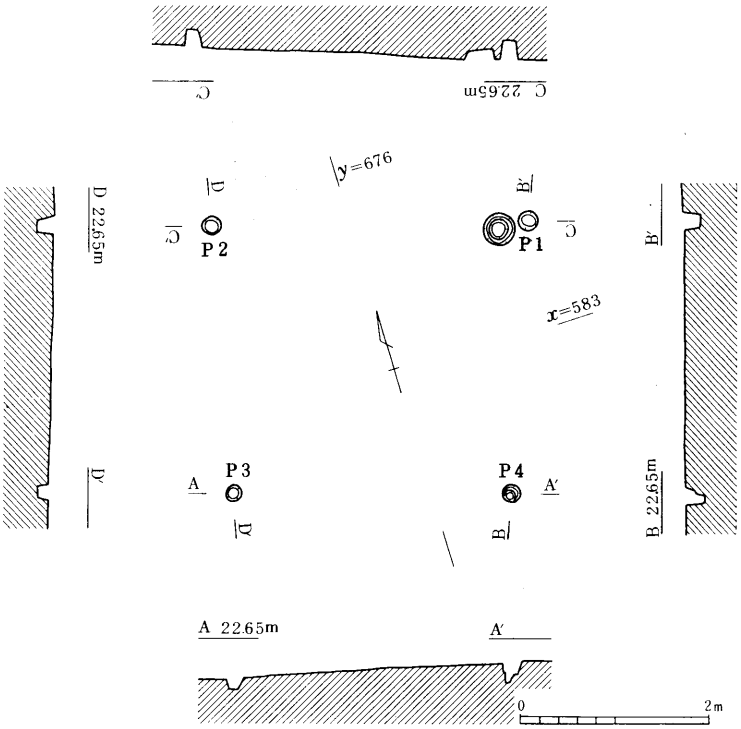


Fig. 4　SB－1

井戸

調査区中央部から北西に開く谷の谷頭部を中心に古墳時代前期のもの１基、古代から中世のもの３基計４基が

検出されたが後世の削平が著しい。また調査区西側で近世のものが１基ある。

SE１（Fig. 5　PL. 6(2)，７）

x＝589、y＝658付近で検出した平面形態方形の横板組井戸である。長軸125㎝、短軸100㎝の規模をもつ。谷基底部への落ち込みに対応して地山は西から東へ下降している。谷の侵食および後世の削平が著しく深さはわずかに最深部の西部で約20㎝、最浅部の東部で約10㎝を残すにすぎない。底面標高は約20.85ｍである。

底面には井戸側最下段のうち西、南辺二側辺が検出された。西辺は矢板を転用し、南辺は長さ105㎝、幅37㎝、厚さ0.2～0.4㎝の転用部材を使用する。内側に倒れ込んだ状態で検出された井戸側南辺は西端部に焼痕が認められた。

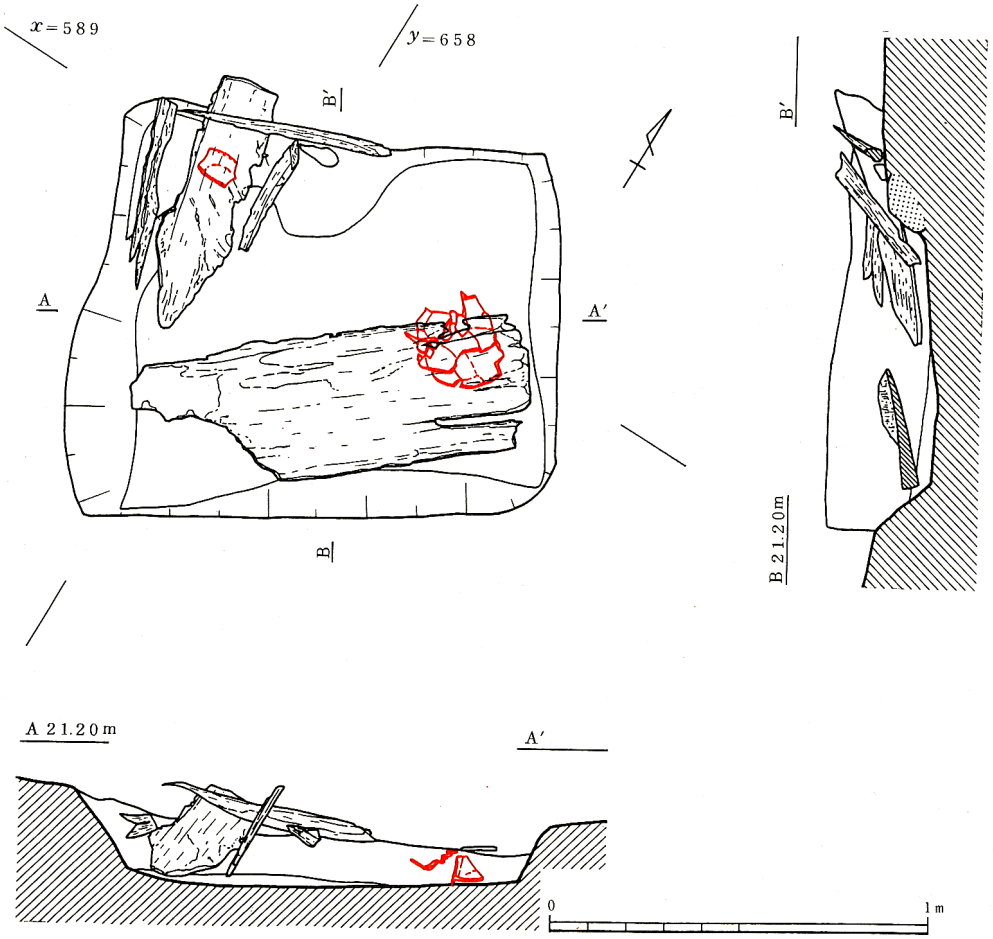


Fig. 5　SE－1

遺　　構

出土遺物には土師器があり、底面東隅から甕、西隅から高坏が出土した。出土遺物から古墳時代前期に比定される。

SE 2（Fig. 6　PL. 8 (1)）

x ＝597、y ＝660付近で検出された平面形態ほぼ円形の井戸で他の３基と距離をおいてやや高所に構築されている。谷の侵食および後世の削平により検出面での規模は上面径95cm、最深部での深さ35cmを残すにすぎない。底面は二段に掘削されており上段部には底面を被覆するように周辺加工された厚さ約６cmの結晶片岩の板石を裾え、湧水に対応した水利処理を行なっている。この板石上部に底板を欠いた厚さ約２cmの曲物を井戸側（井筒）[1]として設置したものと思われるが、断片的にしか検出されず板石縁辺に認められる小礫と

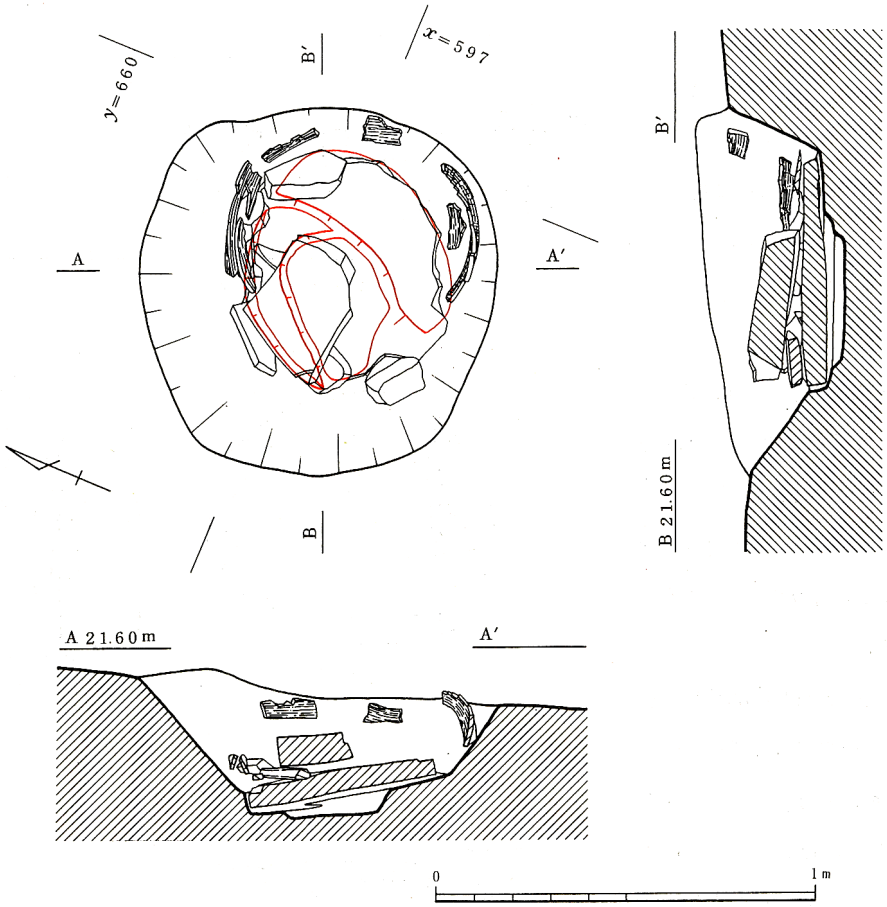


Fig. 6　SE－2

の位置関係、力学的相関関係は判然としない。

出土遺物には底面板石直上部より須恵器片１点があるが、詳細な時期比定は困難である。

SE３（Fig.７　PL.８(2)）

谷基底面への落ち込み部分で検出した平面形態ほぼ円形の曲物設置井戸である。上面径72～76㎝、底面径57～60㎝、深さは谷の侵食および後世の削平によりわずかに最深部の南部で約15㎝、最浅部の北部で約６㎝を残すにすぎない。底面は北から南へ若干下降しており、底面標高は約21.15ｍである。井戸側（井筒）は底板を欠く曲物を設置したものと思われるが、最下段を北西周縁部で検出したにとどまった。

出土遺物は土師器皿１点があり平安時代後期の所産。

SE４（Fig.８　PL.９(1)）

SE２の南西、心－心距離にして約４ｍに位置する平面形態ほぼ円形の曲物設置井戸である。上面径66～

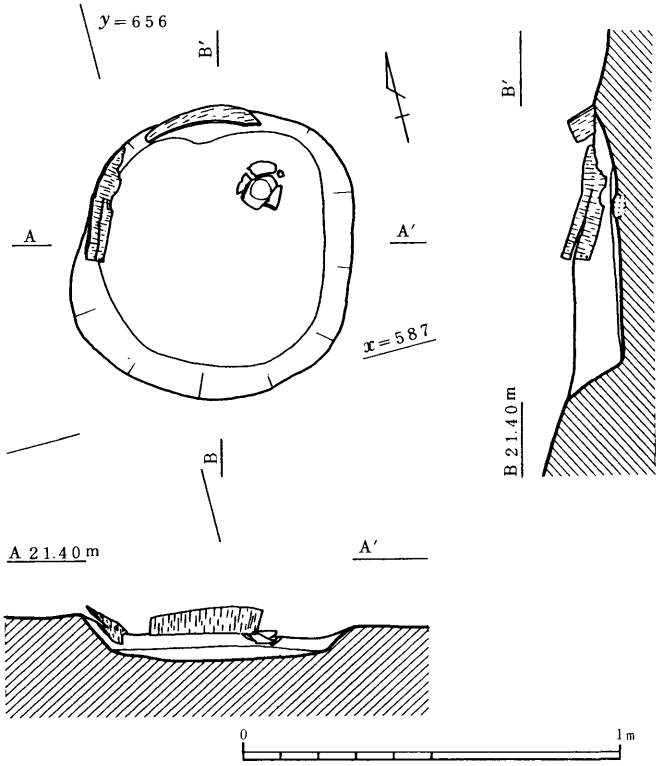


Fig.７　SE－３

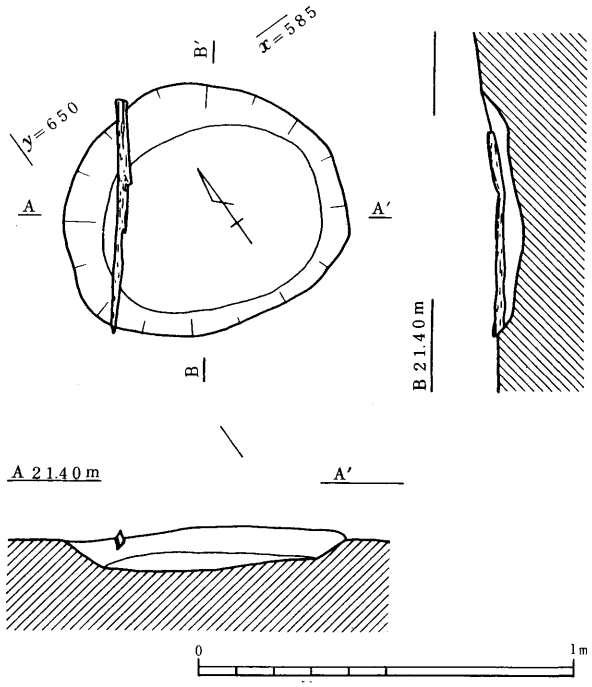


Fig.８　SE－４

75cm、底面径48～57cm、深土はわずかに最深部の中央部で約10cm、最浅部で約４cmを残すにすぎない。最深部の底面標高は約21.15mである。後世の削平が著しく、井戸側（井筒）最下段にあたる周縁に沿わない厚さ0.2cmの曲物を北辺で検出したにとどまった。

内部からの出土遺物は皆無であったが、規模、底面標高等からSE３と同時期の可能性がある。

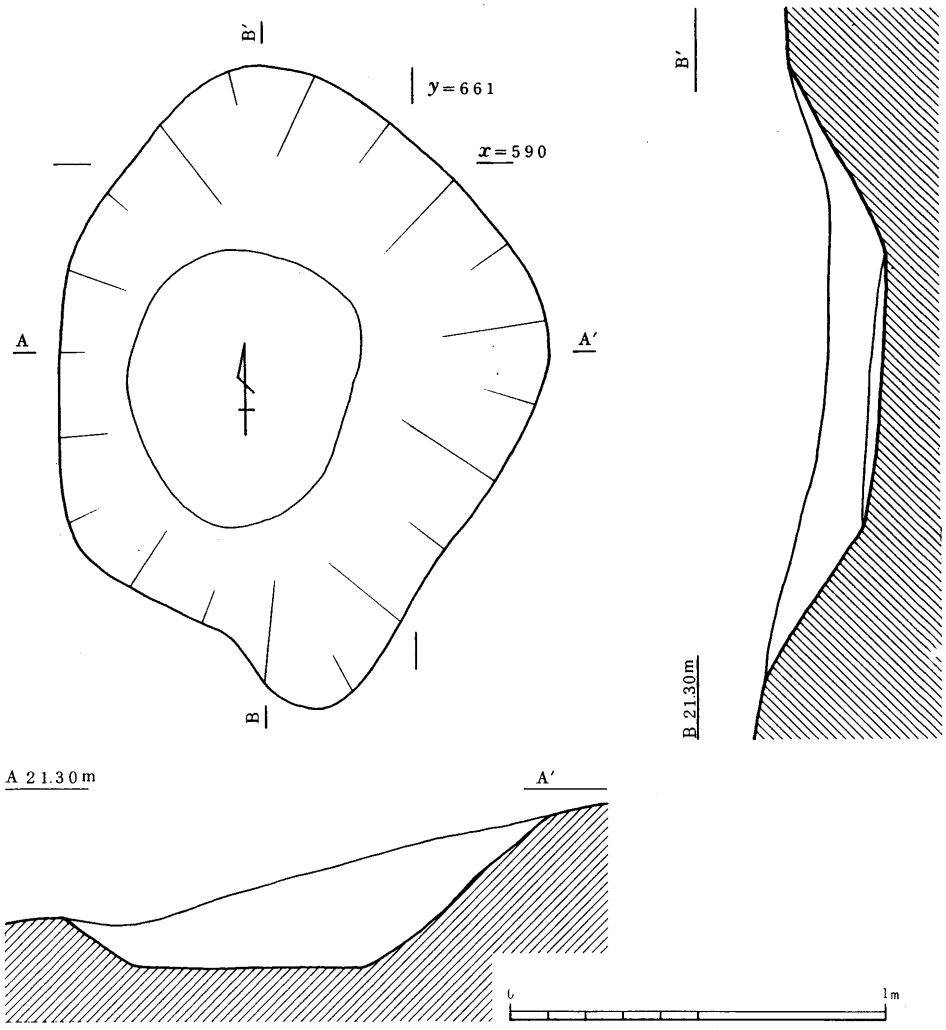


Fig. 9　SE－５

SE 5 (Fig. 9　PL. 9 (2))

SE 2 の北東、心－心距離にして約 5 mに位置し、谷最奥部への北からの落ち込み部分で検出した不整形の井戸である。井戸側（井筒）の設備がみられず、素掘り井戸であろう。長・短軸の規模は上面でそれぞれ163cm、130cm、底面でそれぞれ71cm、61cmである。底面は平坦であるが、地山の下降に対応して深さは最深部で28cm、最浅部で11cmである。底面標高は約20.80 mである。

出土遺物は皆無であった。

SE 6 (Fig.10　PL.10(1))

調査区北西隅、x ＝590、y ＝632付近で検出した平面形態不整円形の素掘りの井戸で

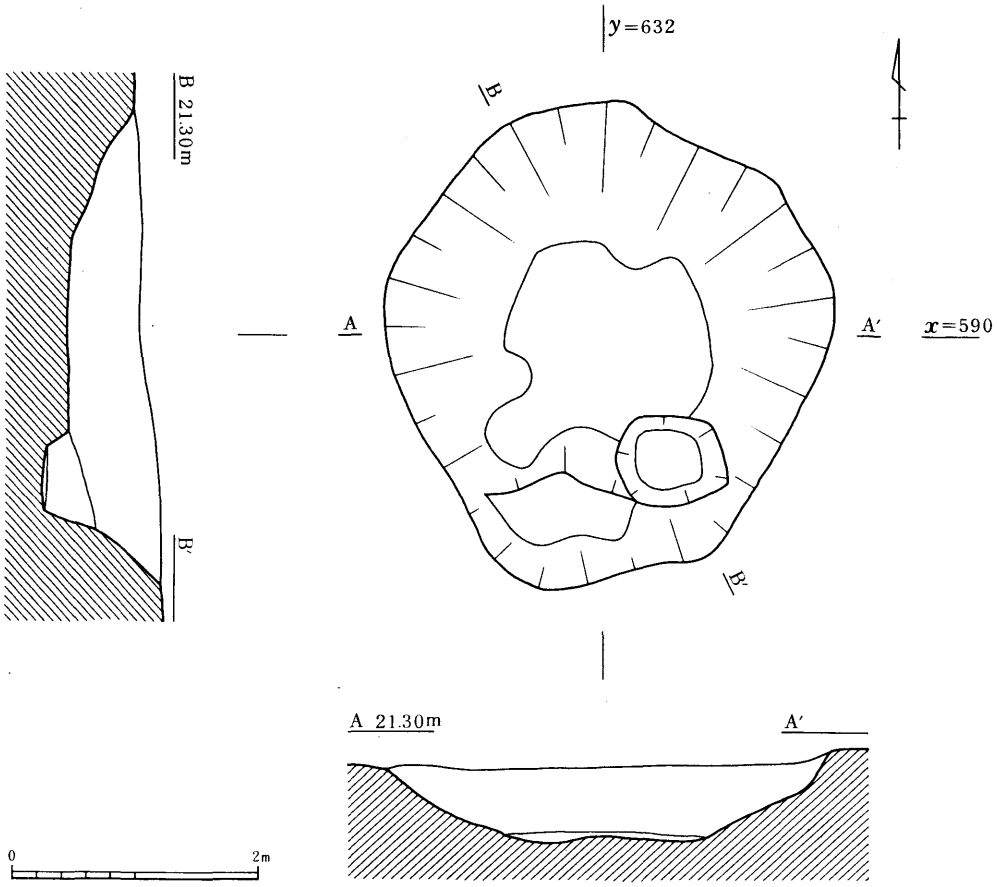


Fig.10　SE－6

ある。長・短軸の規模は上面でそれぞれ386cm、360cm、底面でそれぞれ166cm、151cm、深さは最深部で約60cm残存する。南東隅には井戸掘削時に掘り込まれたと思われる長軸89cm、短軸73cm、底面からの深さ約17cmの不整楕円形のピットが検出された。

出土遺物には土師器坏、埦、皿、須恵器坏のほかに瓦質土器、磁器等があるが、ピット内から井戸内祭祀のものと思われる完形の土師器小皿8点が一括出土した。出土遺物から井戸の上限は平安時代中期頃と思われる。

土壙

SK1（Fig.11　PL.10(2)）

調査区北東隅 $x=612$、$y=669$付近で検出された平面形態隅丸方形の土壙である。検

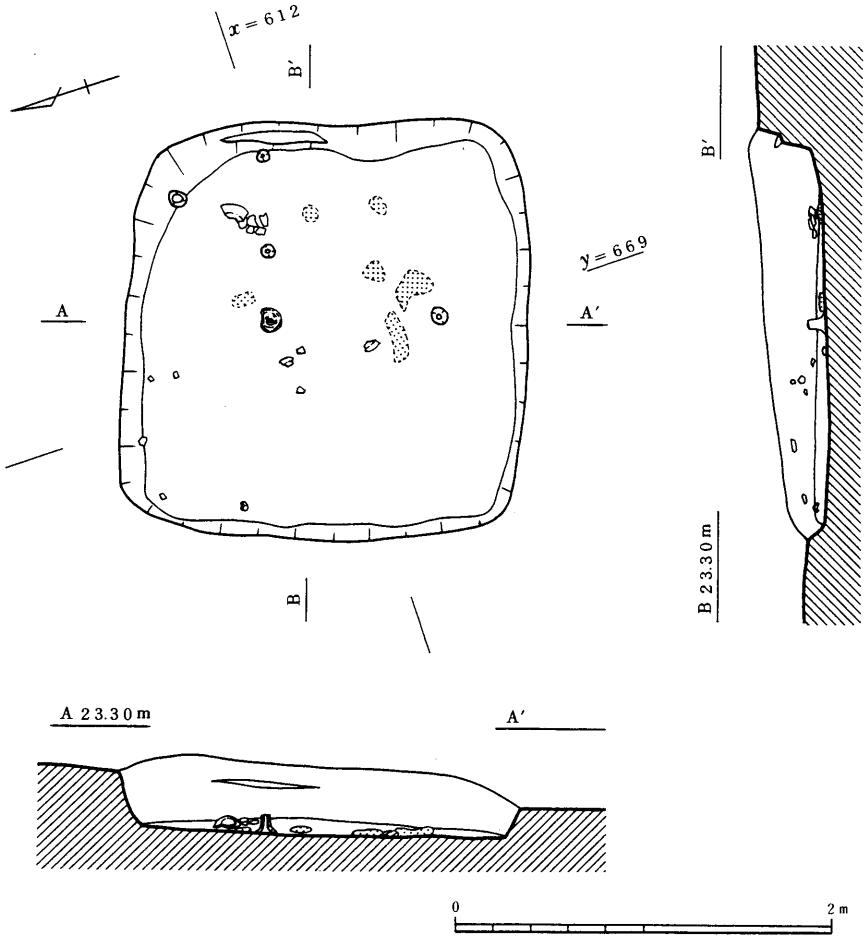


Fig.11　SK－1

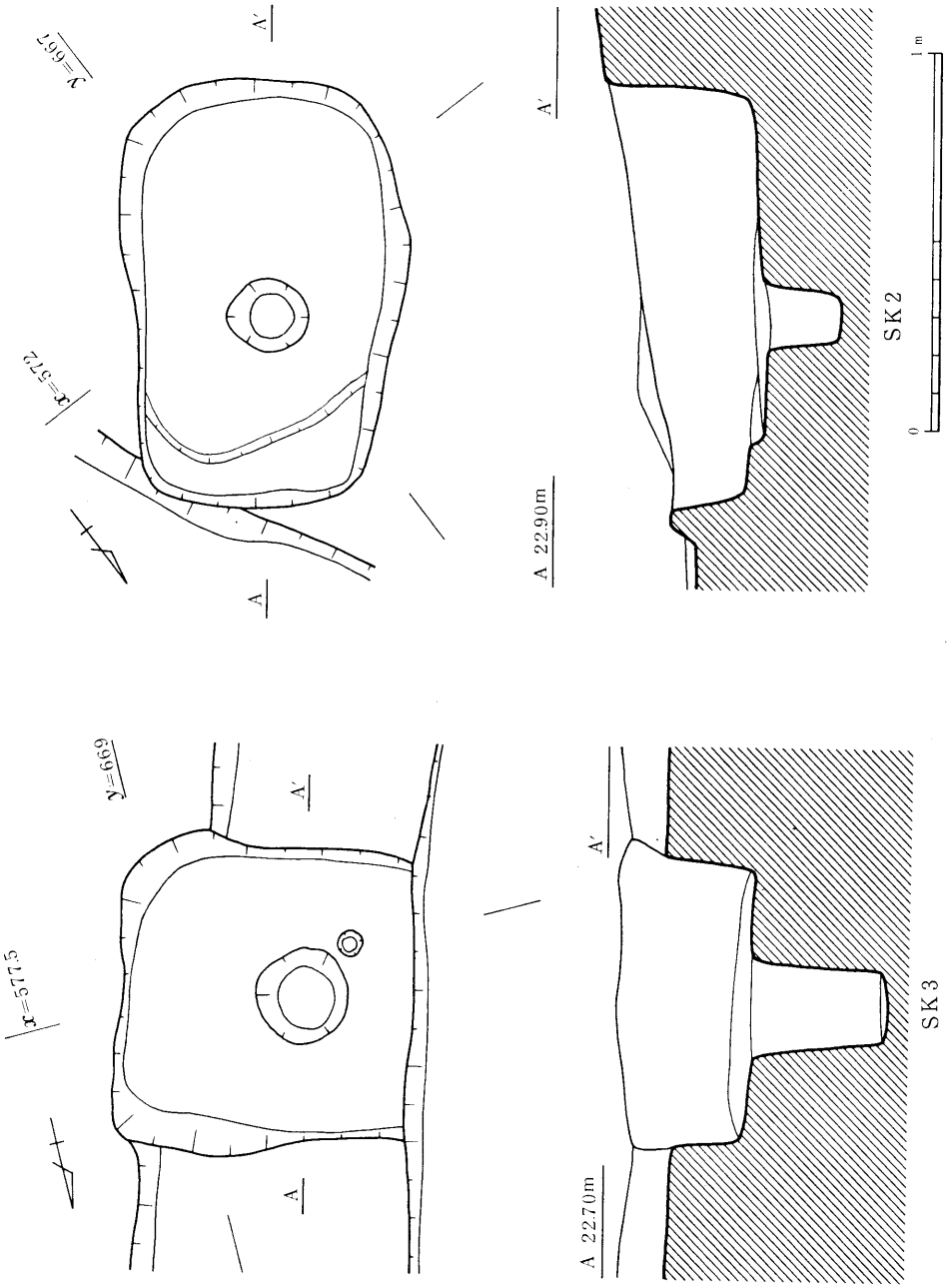


Fig.12 SK－2，3

出面での規模は一辺216㎝、深さは地山が東から西に下降しているため最深部の東部で28㎝、最浅部の西部で10㎝である。北東から南西にわずかに下降する壙底には、本土壙外の小ピットとは掘削規模の異なる径約８㎝の小ピットが４カ所に認められたがその性格については不明である。また、南部壙底直上からは、ブロック状に炭化物が５カ所認められた。

遺物は小片の他、壙底に接して中央部で脚部、東部で坏部のほぼ一個体分の高坏が出土した。

SK 2（Fig.12　PL.11(1)）

調査区南東隅 $x=572$、$y=667$付近で検出された平面形態隅丸長方形の土壙である。北東隅は暗渠に伴う掘削により消失している。検出面での規模は長軸114㎝、短軸70㎝、深さは地山が東から西へ下降しているため最深部の東部で38㎝、最浅部の西部で26㎝である。壁面はほぼ垂直で壙底は平坦であるが、西部で二段掘りとなっており北西部に沿って壙底より５㎝高い平坦面をもつ。壙底標高は22.35ｍである。

壙底中央部には径19～22㎝、深さ21㎝のピットが検出された。

なお、出土遺物は皆無であった。

SK 3（Fig.12　PL.11(2)）

SK１の北約5.3ｍ、$x=577.5$、$y=669$付近で検出された。西部を暗渠に伴う掘削により消失しているがSK１同様隅丸長方形の平面形態をもつものと思われる。検出面での規模は長軸75㎝以上、短軸75㎝、深さ26～34㎝で壁面はほぼ垂直に立ち上がる。壙底標高は22.30ｍである。

壙底中央部に径25㎝,深さ35㎝および径７㎝、深さ５㎝のピットが検出された。

内部から遺物は出土していない。

（河　村）

5　遺物

出土した遺物は整理用コンテナ約30箱であり、その大半は包含層からの出土で時期的には古代から中世にかけてのものが最も多い。包含層については前章で述べた通り、旧床土以下地山までの堆積層を数層にわけることができるが、各層いずれも遺物に時期幅があり一部撹乱ないし二次的堆積の可能性も考えられるため、土層別の時期決定には躊躇せざるを得ない。そのため包含層の遺物は各層ごとではなく、下記の通りに分け説明する。

(1)　遺構出土土器

(2)　包含層出土土器

Ⅰ．弥生土器　　Ⅱ．土師器（古墳時代）

Ⅲ．土師器（古代～近世）Ⅳ．須恵器

Ⅴ．瓦質土器　　Ⅵ．輸入陶磁器・緑釉陶器・黒色土器・瓦器・国産陶磁器ほか

(3)　石製品

(4)　木製品

(5)　金属器・瓦・植物遺体

(1)　遺構出土土器

SB－1（Fig.13，1・2　PL.13）

1は薄手の白磁器の湯呑と思われる。体部は内彎しながら立ち上がり、端部はやや尖がりぎみにおさめる。2は土師器の皿である。体部は上方へ直線的に開き、器肉は薄い。内外面ともに横ナデ調整。底部は回転糸切り後、刷毛調整。内面には薄く煤が付着。

PH－1（Fig.13，3　PL.13）

陶器の鉢と思われる。外面は横ナデ。糸切り底。釉のかかり具合は粗末で発色は悪く、底部と内面の一部を除いた部分に施釉する。

SK－1（Fig.13，4　PL.13）

土師器の高坏である。坏底部からにぶく屈曲し、口縁部は直線的に立ち上がり端部はわずかに外反する。脚柱はエンタシス状にやや膨らみ、裾部は水平に近く折れ曲がり端部はわずかに反り上がる。裾部はほぼ接地している。坏部内面は横ナデの後、底部は箆状工具による縦方向のナデ、口縁部も箆状工具によるナデである。脚部外面は縦方向の箆磨き、内面は箆削りを施す。

SE－2（Fig.13，5　PL.13）

土師器の甕である。扁球形の胴部をもち、口縁部は直線的に外反する。口縁端部は丸い。

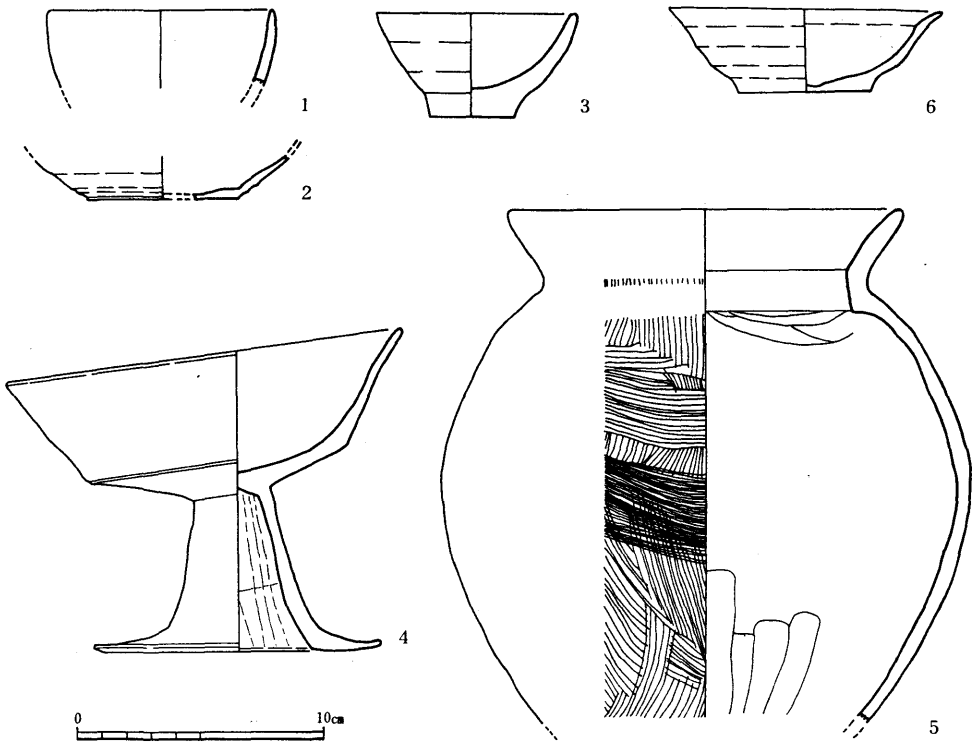


Fig.13　遺構出土土器　その1

内外面は横ナデ。胴部外面は不定方向の刷毛目調整、内面は篦削りされている。

SE－3（Fig.13，6　PL.13）

土師器の坏である。いびつなつくりで口縁端部は外反する。内外面とも横ナデで、糸切り底である。所々に煤付着。

SE－6（Fig.14，15，7～31　PL.13，14）

土師器甕・皿・鉢・椀、須恵器坏、磁器皿・椀、瓦質土器火鉢・擂鉢・鼎・羽釜（壷か）および須恵質陶器壷がある。17～29は底面小ピット中よりの一括出土。

7・8は共に瓦質土器の甕である。7は短く内傾する口縁部が肥厚し、端部上面はやや丸味を帯びて平坦におわる。内外面共に横ナデ調整。8も肥厚する口縁部は短く直立し、端部上面は平坦で外面をつまみ出す。口縁下部には一条の凹線が走る。内外面共に横ナデでわずかに刷毛目が残る。9は薄手の土師器皿である。丸味を帯びた平底で、体部は底部との明確な稜線をもたず、わずかに内彎気味にゆるやかに立ち上がる。口縁端部はわずかに内彎する。内外面とも横ナデ仕上げ。10は磁器染付椀の口縁部である。体部は内彎して

立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。端部内外面に二条の圏線、外面圏線下には雲状文を施す。11は青磁皿で底部の大部分を欠損する。体部は無施釉の底部との明確な稜をもち強く内彎して立ち上がる。内外面に貫入がみられる。12は須恵質陶器壷で頸部以下を欠損する。口縁部は外反気味に直立する。内外面とも横ナデ仕上げ。13も須恵質陶器壷で上半部と底部の大部分を欠損する。極めて薄手で平底の底部に張りの少ない胴部をもつ。底部内面はナデ、他は横ナデ仕上げ。14～18は瓦質土器である。14は火舎の口縁部。外面に断面三角形の粘土帯を貼付し端部は肥厚する。突帯上位に刷毛状工具による刺突文を刻み、下位に陽刻「X」状スタンプを押捺する。内面および外面文様帯以下は刷毛目、他は横ナデ仕上げ。15は擂鉢の口縁部であろう。16・17は羽釜ないしは壷の口縁部と思われる。17は張りの強い肩部に球形の胴部をもつと思われる。内外面とも横ナデ仕上げ。18は鼎である。下ぶくれの胴部下位に一条の断面長方形の突帯をめぐらす。突帯上位外面には煤が付着する。13は土師器台付皿である。横ナデ仕上げで糸切底。20～26は土師器小皿。底部は大部分が平底であるが軽い上げ底を呈するもの（20）もある。体部は直線的に立ち上がるもの（20・22・24）と、内彎気味に立ち上がるもの（21・23・25・26）とがある。体部は全て横ナデ、底部は風化のため不明のもの（21）を除いてすべて糸切りである。27は土師器坏で体部の大部分を欠損する。底部はほぼ平底であるが、中央部がくぼんで軽い上げ底状をなす。体部内面下半部に段を有する。外面は風化が著しく調整は不明だが、内面は横ナデと思われる。28は須恵器坏身で体部の大部分を欠損する。底部と体部の境より内側にやや内傾する高台を貼付する。底部はナデ、体部は内外面とも横ナデ仕上げ。29は土師器埦で底部を欠損する。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。外面は横ナデ、内面は風化のため不明である。30・31は瓦質土器である。30は擂鉢の口縁部。端部内面は外上

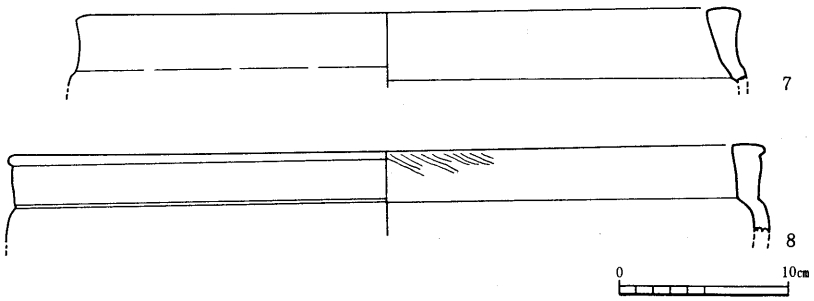


Fig.14　遺構出土土器　その2

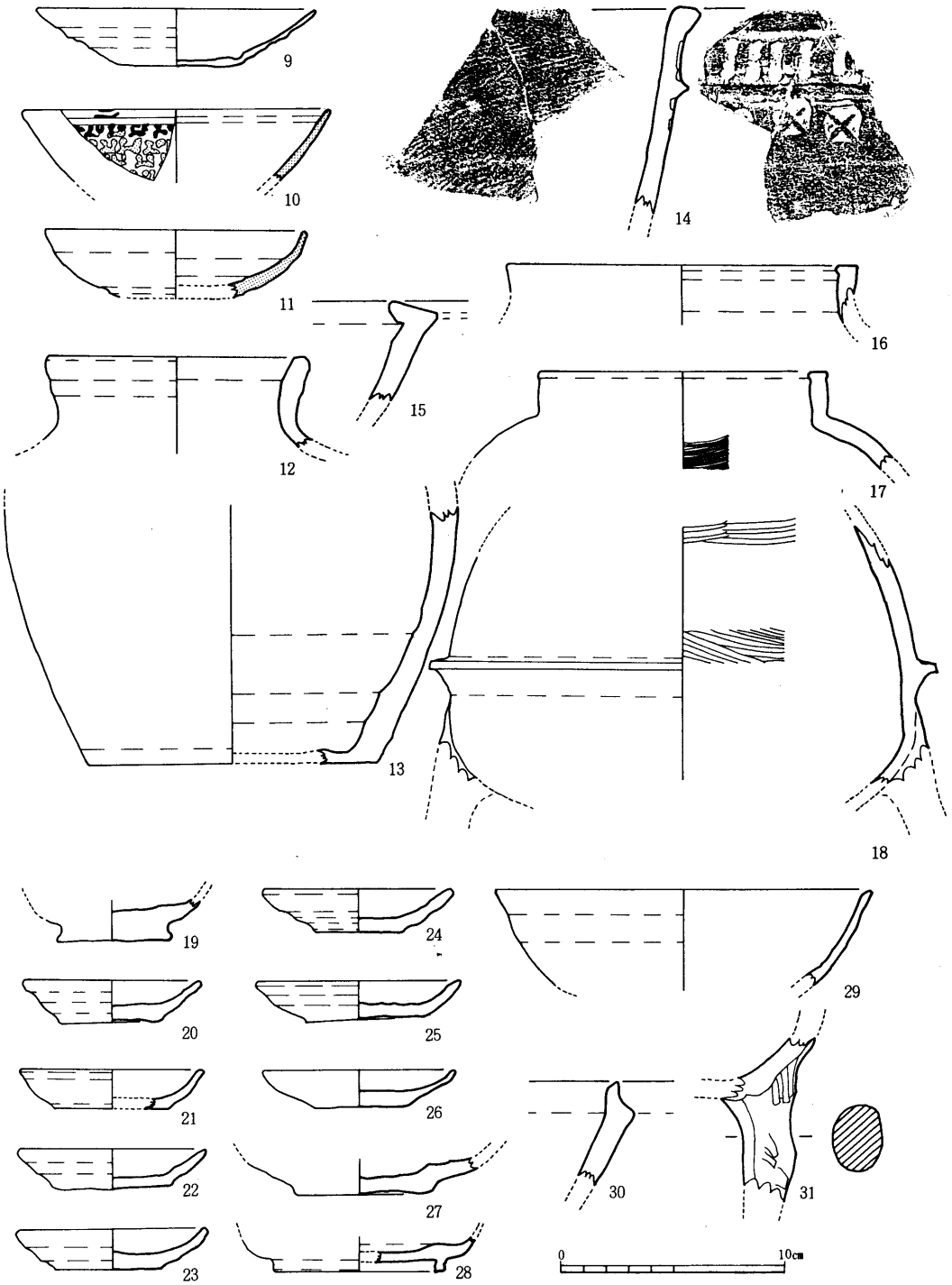


Fig.15　遺構出土土器　その３

Tab. 2　遺構出土土器観察表

No.	種類	器種	口径 *底径 (cm)	器高 (残存高) (cm)	色調	胎土	焼成	備考
SB－1								
1	白磁	湯呑	9.2	(3.1)	淡白色	精緻	良好	
2	土師器	皿	* 6.1	(1.7)	淡灰褐色	精緻	良好	下半部
PH－1								
3	陶器	鉢	8.1 * 3.4	4.2	灰白色	精緻	良好	
SK－1								
4	土師器	高坏	16.1 *11.7	12.1	淡赤褐色	精緻	良好	
SK－2								
5	土師器	甕	15.5	(20.7)	淡黄褐色	精緻	良好	
SE－3								
6	土師器	皿	10.8 * 5.3	3.4	灰褐色	精緻	良好	
SE－4								
7	瓦質土器	大壺	36.8	(4.5)	外面は灰白色，内面は灰黒色	精緻	良好	口縁部片
8	瓦質土器	大壺	38.8	(5.1)	外面は灰黒色，内面は灰白色	精緻	良好	口縁部片
9	土師器	皿	12.3 * 5.4	2.5	灰色	良好 若干砂粒がまじる	良好	
10	白磁染付	埦	13.4	(3.1)	素地は灰白色，文様は群青色	精緻	良好	口縁部片 染付文様は雲文
11	青磁	埦	11.5	(3.0)	淡緑灰色	精緻	良好	底部を欠く，内外面に貫入がみられる
12	須恵質陶器	壺	11.4	(3.7)	灰茶褐色	精緻　径0.5～1㎜程度の砂粒を含む	良好	口縁部片
13	須恵質陶器	壺	*12.9	(11.3)	外面は灰黒色 内面は灰白色	砂粒を含む		下半部
14	瓦質土器	火舎			内外面とも黒灰色 断面は白色	精緻	良好	口縁部片
15	瓦質土器	擂鉢			外面は黒灰色，内面は白灰色，断面は黄灰色	精緻　砂粒を含む	良好	口縁部片
16	瓦質土器	壺あるいは羽釜	15.6	(1.2)	内外面とも黒灰色 断面白灰色	精緻	良好	口縁部片
17	瓦質土器	壺あるいは羽釜	12.7	(3.8)	内外面とも黒灰色 断面白灰色	精緻	良好	口縁部片
18	瓦質土器	鼎		(9.9)	内外面とも黒灰色 断面白灰色	精緻	良好	胴部片
19	土師器	台付皿	5	(1.8)	赤褐色	精良	良好	底部片
20	土師器	皿	7.7 * 4.4	1.9	明乳灰褐色（肌色）	精緻　金雲母(?)，砂粒を含む	良好	
21	土師器	皿	7.9 * 5.1	1.7	淡灰茶褐色	精緻　0.5～2㎜程度の石英を含む	良好	
22	土師器	皿	8.3 * 5.3	1.9	肌色	やや大粒の砂粒を含む	良好	
23	土師器	皿	8.2 *4.65	1.7	茶褐色	精良	良好	
24	土師器	皿	8.2 * 3.9	1.9	外面乳灰色 内面乳灰赤褐色	精良	良好	
25	土師器	皿	8.9 * 5.4	1.7	乳灰白色	精良	良好	
26	土師器	皿	8.5 * 4.1	1.6	橙褐色	径1～3㎜程度の長石，石英を含む	良好	
27	土師器	坏	* 6.1	(1.6)	明乳灰褐色(肌色)	精緻　砂粒を含む	良好	底部
28	須恵器	坏身	* 7.5	(1.5)	青灰色	精緻	良好	底部片
29	土師器	埦	*16.8	(4.1)	淡灰茶褐色	精緻　径1～1.5㎜程度の石英を含む	良好	口縁部片
30	瓦質土器	擂鉢			内外面とも灰白色	やや粗い	良好	口縁部片
31	瓦質土器	鼎			内外面とも灰白色	粗い	良好	脚上半部

方に突出し、内面に6条の櫛描き条痕を有する。内外面とも横ナデ仕上げ。31は鼎脚部で下半部を欠損する。外面は縦方向の箆削り後縦ナデ、内面は横ナデである。

出土遺物は鎌倉時代のものと、室町時代のものとに大別でき、前者は井戸内底面ピット状遺構内出土のものが、後者は覆土出土のものがそれにあたる。

（森下靖士＊）

(2)　包含層出土土器

Ⅰ．弥生土器

壷（Fig.16・17，1～5　PL.15）　1・2・3は口縁部。1は朝顔形に大きく外反する口縁部を下垂させるいわゆる柳井田式といわれるものである。外面に箆による鋸歯文を施す。口縁下部には径0.4cmの穿孔が見られる。風化が著しく調整は不明である。2は複合口縁をなすが上段はその大部分を欠損する。下段は朝顔形に大きく外反し、上段は内傾して立ち上がる。内外面とも刷毛目がわずかに残る。3は朝顔形に外反し、頸部に一条の沈線をめぐらす。外面は丁寧な横ナデ、内面は風化が著しく調整は不明。4・5は胴部破片で貝殻施文による綾杉文を有する。5は一条の「M」字状突帯をめぐらす。4・5とも風化が著しく調整は不明瞭であるが、5は突帯基部に若干刷毛目を残す。

ミニチュア土器（Fig.17，6）　全体手捏ねによるもので、内面は箆で仕上げている。底部外面に黒斑がみられる。

鉢（Fig.17，7　PL.15）　胴部上半は内彎気味に立ち上がり、口縁はわずかに外反する。内外面ともに風化が著しく調整は不明である。口縁部外面には煤が付着する。

壷・甕等の底部（Fig.17，8～15　PL.15）　形状はバラエティーに富むが、風化

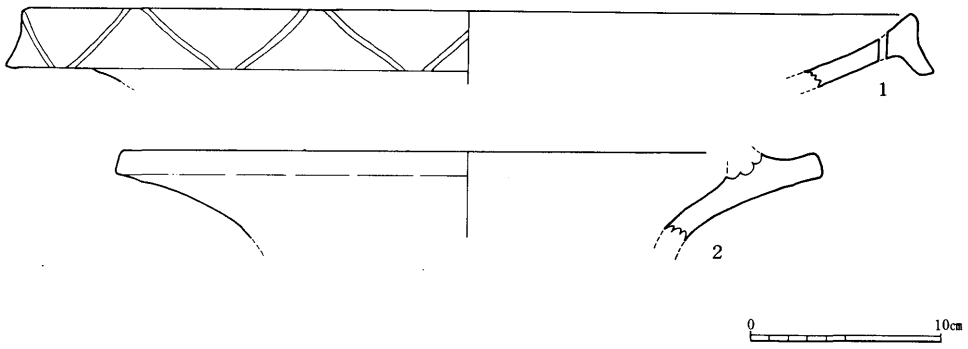


Fig.16　弥生土器　その1

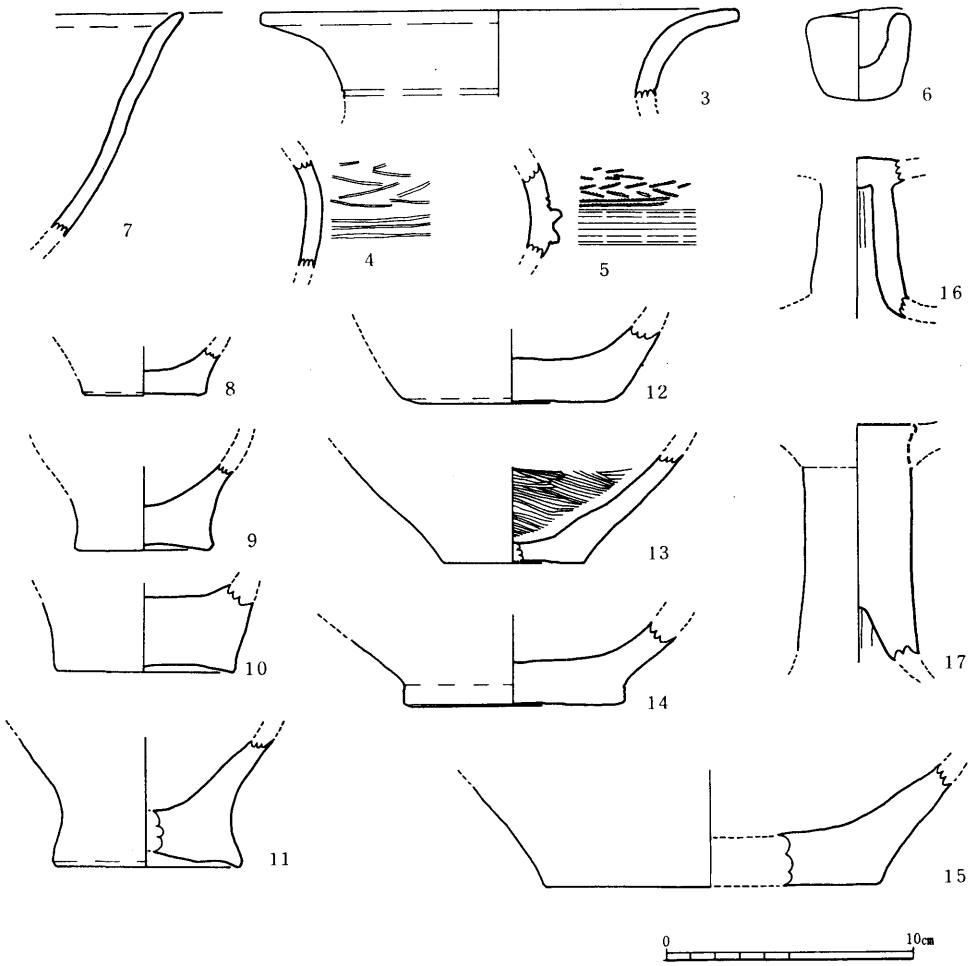


Fig.17　弥生土器　その2

が著しく調整のわかるものは少ない。8は最も小型で平底を呈し、9～11はやや上げ底である。12は底部周縁がやや丸味を帯びる。13は小さく不安定な底部で胴部はわずかに内彎してゆるやかに立ち上がる。内面に丁寧に横方向の刷毛目を残す。14は安定した円盤貼付の壷の底部。15は安定した底部の大型品。

高坏（Fig.17，16・17　PL.15）　共に脚部であり、裾部を欠損する。16は小型品、17は長脚で坏部に脚柱を挿入するタイプ。

以上の弥生土器は前期末から後期後半の広範囲にわたるものである。量的には中期後半から後期にかけてのものが多いようである。

（森　下＊）

Tab. 3　弥生土器観察表

No.	器種	口径 *底径 (cm)	器高 (現存高) (cm)	色調	胎土	焼成	備考
1	壷	46.0	(3.8)	外面－淡灰褐色, 内面－淡黄褐色	精緻　径1～2㎜程度の砂粒を少量含む	良好	
2	壷	25.8	(4.6)	外面－淡灰赤褐色, 内面－淡黄灰色	粗い　径1～8㎜程度の石英を多量含む	良好	
3	壷	19.2	(3.5)	淡灰茶褐色	精緻　径1～1.5㎜程度の石英,長石を含む	良好	
4	壷			淡赤褐色	やや粗い　径1～2㎜程度の石英,長石を含む	良好	貝殻施文の綾杉文
5	壷			淡赤褐色	精緻　径0.5～1㎜程度の石英,長石を含む	良好	貝殻施文の綾杉文 M字状突帯をめぐらす
6	ミニチュア土器	4.2 2.8	3.7	外面－明褐灰色, 内面－灰白色	粗い　径1～2㎜程度の砂粒を多量含む	やや不良	外底に黒斑 手捏ね,指圧痕あり
7	鉢	·		淡黄褐色	精緻　径1～3㎜程度の石英,長石を含む	不良	上半部,口縁外部に煤付着
8	甕	* 4.6	(1.6)	淡黄褐色	やや粗い　径3㎜程度の石英,長石を含む	不良	
9	甕	* 5.3	(3.1)	淡茶褐色	精緻　径0.5㎜程度の砂粒を含む	やや不良	
10	甕	* 7.2	(2.8)	明茶褐色	精緻　径1～1.5㎜程度の石英,長石を含む	良好	
11	甕	* 7.3	(5.1)	明茶褐色	精緻　径2㎜程度の石英,長石を含む	不良	
12	壷	* 7.0	(2.8)	外面－淡黄褐色, 内面－淡灰褐色	精良　径2㎜程度の石英,長石を含む	良好	内面に指圧痕
13	壷	* 5.6	(4.3)	明灰茶褐色	精緻　径0.1～2㎜程度の砂粒を含む	やや不良	
14	壷	* 8.2	(2.7)	淡黄褐色	精緻　径2～10㎜程度の砂粒を多量含む	不良	
15	壷	*13.4	(4.0)	淡茶褐色	やや粗い　径2～3㎜程度の石英,長石を含む	不良	
16	高坏			淡黄褐色	精緻　径2㎜程度の石英,長石,雲母を含む	良好	
17	高坏			淡赤褐色	精緻　径1～2㎜の砂粒を含む	不良	

Ⅱ．土師器（古墳時代）（Fig.18・19）

壷（Fig.18，1・2　PL.15）　1は扁球形の胴部に短く外反する口縁部をもつ。口縁端部はわずかに内彎し、丸く終わる。口縁部内外面ともナデ、内面は篦削り調整。内外面に所々煤付着。2は肩部の張りが大きく、底部は1に比べるとやや尖りぎみ。内面は篦削り調整。時期的にはその器形から見て2が1に先行するものと思われ、4世紀末から5世紀中葉であろう。

埦（Fig.18，3）　口径に比べ、器高が低い。口縁端部はわずかに外反し、尖りぎみ。内外面とも指圧痕があり、篦状工具による調整痕が見られる。器形的には山本一朗氏[1)]のいう須恵器を共伴する土師器（14式新）の埦の特徴と類似し、6世紀前半のものであろう。

甕（Fig.18，4～9　PL.16）　4～8は「く」の字に外反する口縁部をもつもので、直線的に開くもの（4）、外彎しながら開くもの（5・6）、内彎ぎみに開くもの（8）がある。4は頸部と口縁部の境に篦状工具による押圧整形がなされ、内外面とも横ナデ調整が施される。5は口縁端部が尖る。調整は風化が激しく不明。6は頸部外面に一条の凹線がめぐる。口縁部内外面とも刷毛の後ナデ、頸部外面刷毛目仕上げ。7は口縁端部欠損のため、口縁部の形体は不明。胴部上位はなだらかに下る。調整は外面に横方向のタタキ痕が見ら

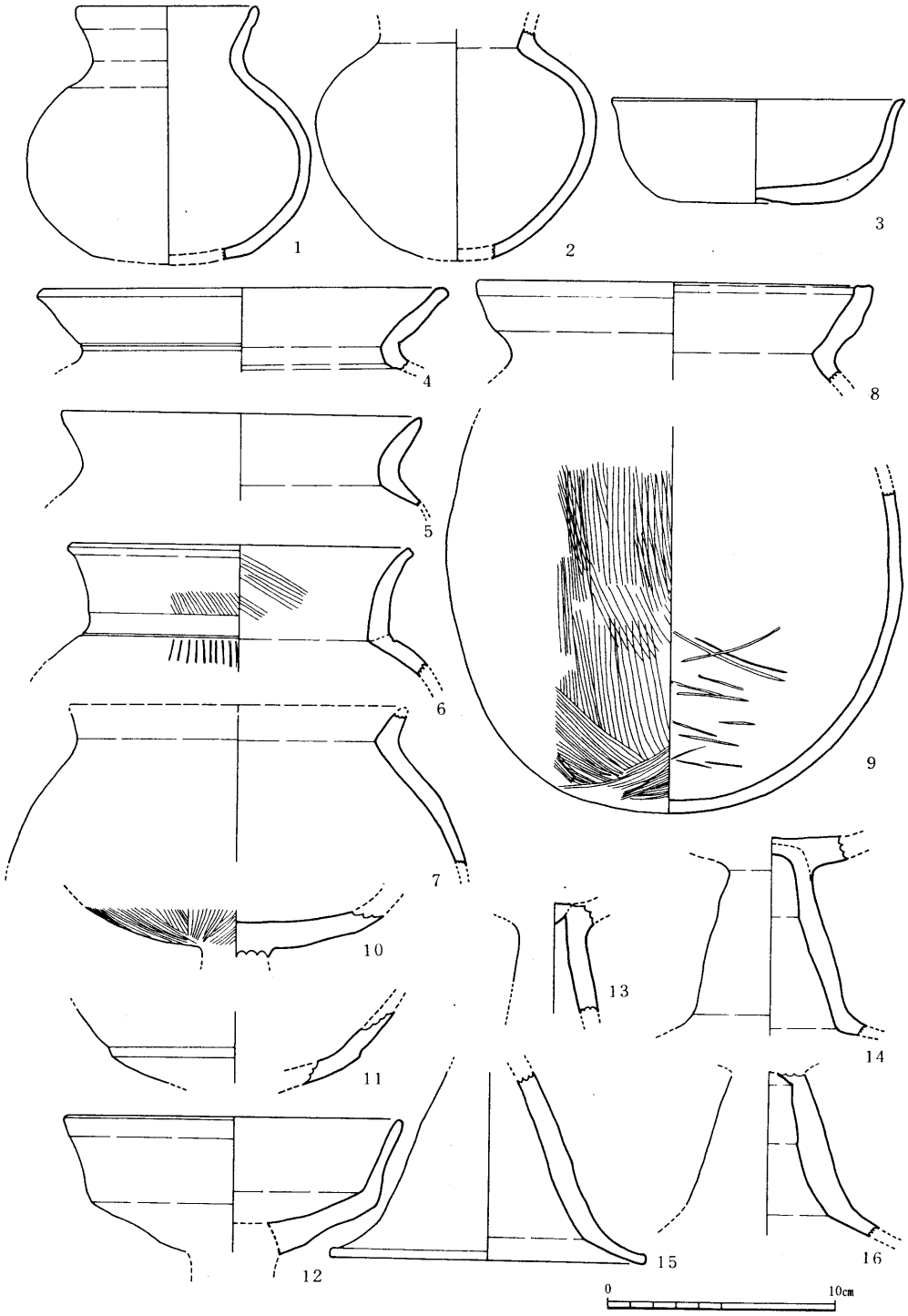


Fig.18　土師器　その1

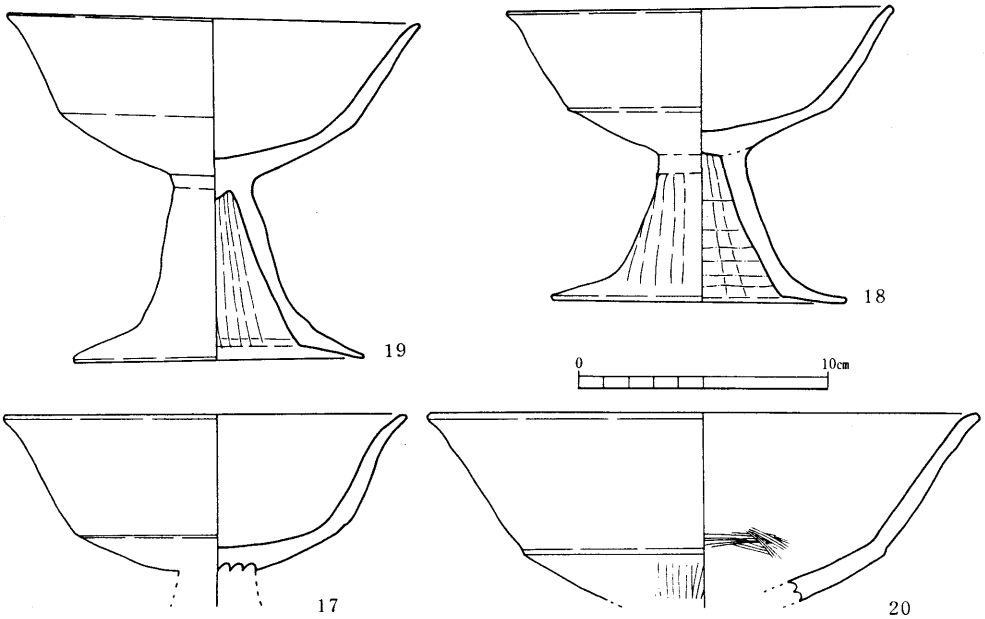


Fig.19　土師器　その2

Tab. 4　土師器観察表（1）

No.	器　種	口　径 *底　径 (cm)	器　高 (残存高) (cm)	色　　調	胎　　土	焼成	備　　考
1	壷	7.8	(11.4)	赤褐色	やや粗	良好	
2	壷		(10.2)	淡橙褐色	やや粗	良好	
3	椀	12.8	4.6	淡黄灰褐色	精緻	良好	
4	甕	17.6	(3.6)	淡黄灰褐色	やや粗	良好	
5	壺	15.7	(4.0)	茶褐色	粗	良好	
6	甕	14.9	(5.6)	淡灰茶褐色	精緻	良好	
7	甕		(6.6)	淡黄褐色	やや粗	不良	
8	甕	17.4	(4.2)	淡灰茶褐色	精緻	良好	
9	甕		(17.5)	外面－淡灰褐色,内面－淡褐色	やや粗	良好	
10	高　坏		(2.0)	淡赤褐色	やや粗，砂粒を含む	良好	
11	高　坏		(3.9)	淡黄灰褐色	やや粗	良好	
12	高　坏	14.5	(5.9)	淡灰茶褐色	精緻	良好	
13	高　坏		(4.8)	淡橙灰褐色	精緻	やや不良	
14	高　坏		(8.6)	淡黄灰褐色	やや粗	やや不良	
15	高　坏	13.9	(8.2)	明灰茶褐色	やや粗，砂粒を含む	不良	
16	高　坏		(7.0)	赤褐色	精緻	やや不良	
17	高　坏	15.9	(6.3)	淡褐色	精緻	良好	
18	高　坏	15.0 *11.8	11.7	淡褐色	精緻	良好	
19	高　坏	16.6 *11.7	13.7	橙色	やや粗，砂粒を少量含む	やや不良	
20	高　坏	15.3 *11.7	11.7	灰白色	精緻	良好	坏部外面に黒斑あり

れる。8は口縁端部に平坦面をもつ。内外面とも横ナデ調整。9は丸底の底部から均一の厚さで倒卵形胴部へ移行する。外面は胴部に縦方向の粗い刷毛目仕上げ。内面は篦削りで底部内面には指圧痕が残る。外面には所々煤付着。以上の甕の中で4・8・9は器形から見ると長胴化へ向かう5世紀前後のものであろう。また5は6世紀前葉のものと思われる。

高坏（Fig.18，19，10～20　PL.15，16）　10は埦状の坏部をもつものと思われ、内面はナデ、外面は坏と脚の接合部から放射線状に縦方向の刷毛目調整を施す。11は反転部の稜が明瞭であるが、屈曲度は小さい。外面はナデの後篦磨き、内面は横ナデ調整である。12は反転部の稜が不明瞭で口縁部は直立ぎみに外反する。調整は風化が激しく不明。13は脚部と坏部を連続して成形し、円板充塡法により坏部を接合する。14～16はふくらみぎみに下方へ開く柱状部から、角度を変えて裾部に至る。14の調整は内面が縦方向の篦削り。15は外面が縦方向のナデ、脚裾は横ナデ調整である。16の調整は風化が激しく不明。12は坏部は深く、口縁部が直立ぎみに立ち上がり、反転部外面の稜がにぶいなど高坏形赤色土器の退化していく前段階の特徴を示し、6世紀前葉のものであろう。17～19は埦状の坏部をもつもので口縁端部は外反する。18・19は下方へ開く柱状部から角度を変えて、水平に近く折れ曲がる。18は低い脚部をもち、体部外面は横ナデ、反転部内面上半は横方向、下半は縦方向のナデ調整。脚柱部外面は縦方向の篦削り、裾部の内外面は横ナデ、内面は横方向の篦削りである。19は円板充塡法により坏部を接合し、反転部外面の稜が不明瞭で坏部に比べ脚高は低い。脚柱はエンタシス状にややふくらみ、脚裾は水平に近く折れ曲がっている。坏部外面は横ナデ、反転部内面の上半は横方向、下半は縦方向の調整がなされる。脚柱外面は篦削り、脚裾は横ナデ、脚部内面は篦削り調整。19の脚柱がエンタシス状にふくらむという特徴から18は19に若干先行するものと考えられ、時代は5世紀後葉から6世紀前葉にかけてのものと思われる。20は坏部の破片で脚部を欠失する。坏部下半には明瞭な稜線を有する。内面の下半部には横方向の刷毛目、外面には縦方向の刷毛目を残す。17～19に比べて大型品である。

（定池博之＊）

〔注〕　1）山本一朗「防長の土師器」『山口県の土師器・須恵器』（『周陽考古学研究所報』1981年）。

Ⅲ．土師器（古代～近世）

小皿（Fig.20，1～7　PL.16，17）　切り離しは、すべて糸切りである。やや上げ底を呈する1以外は平底である。1～3は口径7.5～8.8㎝、器高1.4～1.8㎝を測る小皿で内外面ともろくろ回転による横ナデを施している。4はやや浅めの小皿である。調整は横ナデ。5は深めの皿である。体部はやや外反しながら直線的に立ち上がる。全体的に風化が著しいが外面にわずかに横ナデがみられる。6・7は口縁部を欠失する。比較的薄手で内外面ともろくろ回転による横ナデの痕が顕著に残る。

坏（Fig.20，21，8・9・11～16・29～32　PL.16，17）　8の底部は篦による切り離しで、ナデによる調整を施している。指圧痕が残っており平底である。底部内面には篦削りによるとみられる痕跡がある。体部は内外面とも横ナデである。9は破片で底部は糸切りである。調整は内外面とも横ナデ。11～13は糸切りで平底。調整は横ナデである。14は糸切りでやや上げ底を呈する。風化のため調整は不明。15は糸切りの後、高台を貼り付けナデを

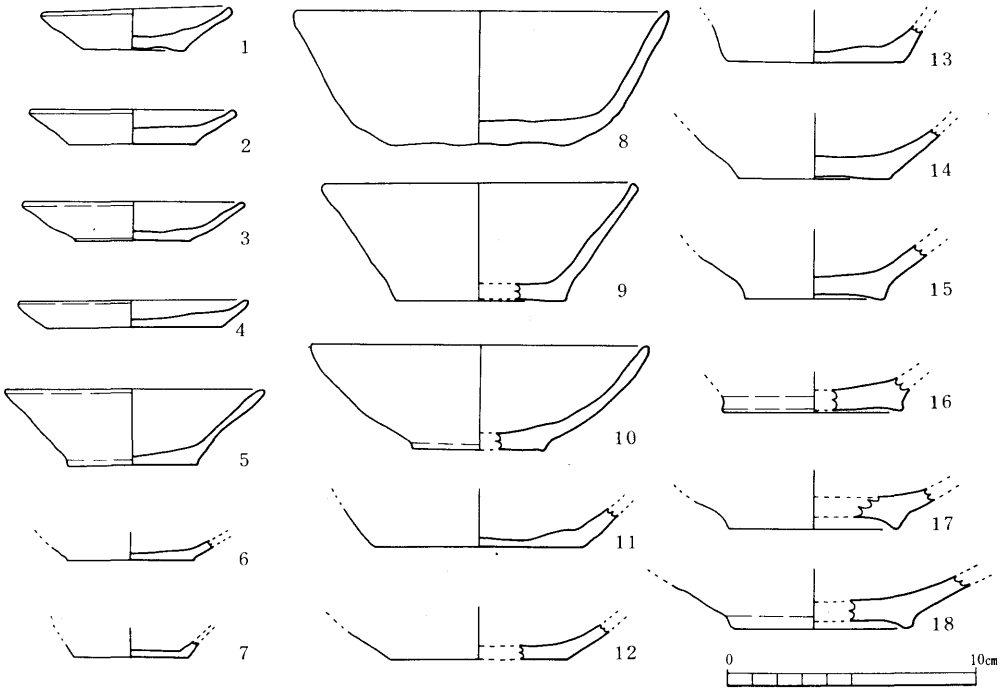


Fig.20　土師器　その3

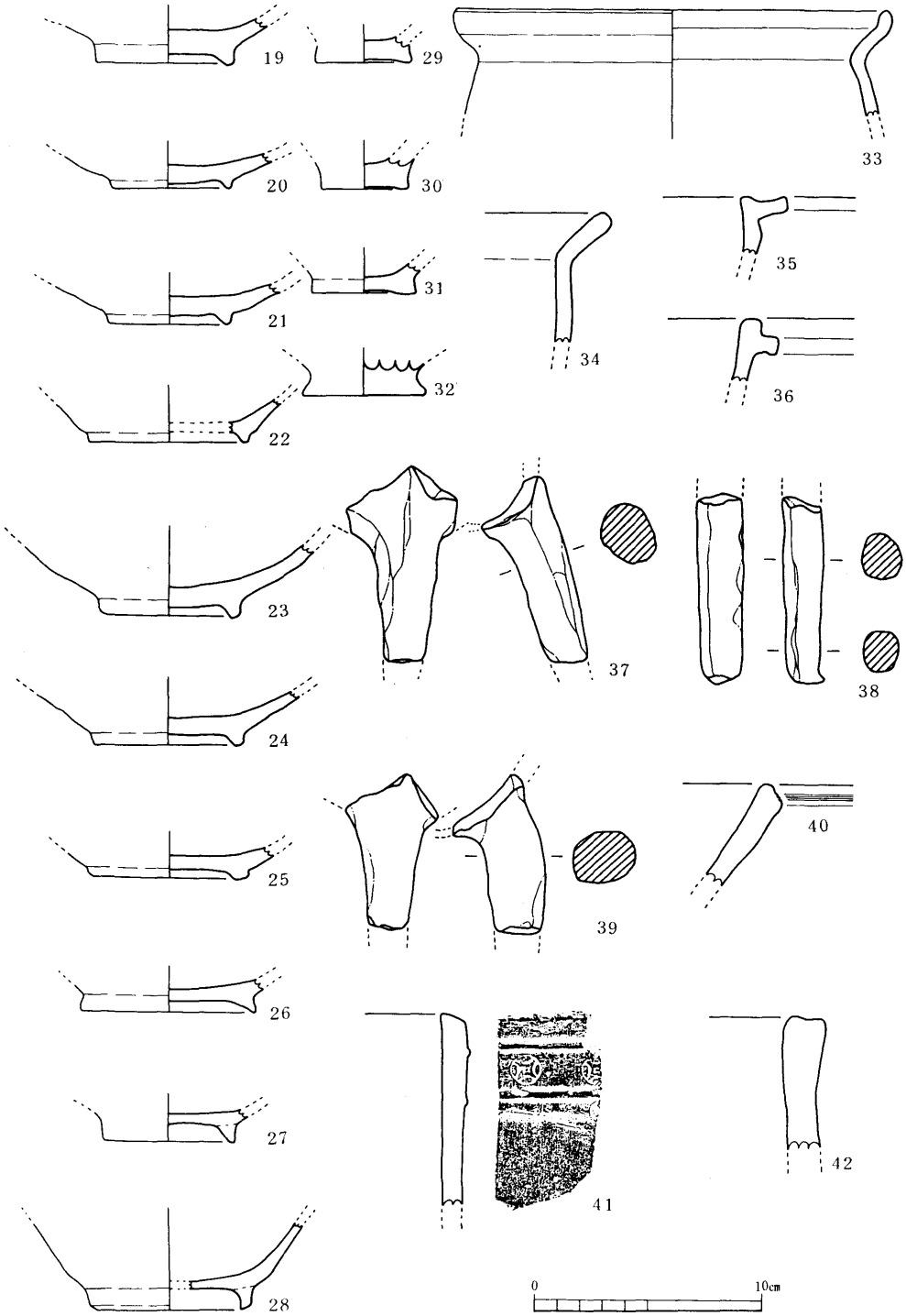


Fig.21　土師器　その4

施したものと思われるがほとんど剝落している。内外面とも横ナデによる調整である。16はやや上げ底の底部の破片。調整は風化のため不明。29～32はいわゆるベタ高台状のもので、すべて糸切り底である。29～31は若干上げ底、32は平底を呈する。調整は31が内面に横ナデ痕を残すのみで、他は風化のため不明。

椀（Fig.20・21，10・17～28　PL.17）　10は体部が大きく開き、口縁部は若干厚い。底部は糸切り。内外面ともに横ナデ仕上げ。17・18は糸切りをした底部に高台をつけ横ナデしている。19は底部を糸切りし、やや外に開き気味の高台を貼り付け横ナデを施す。内面はナデ、外面は横ナデによる調整である。20・21は底部の切り離し方法は不明。ともに低く細い高台を貼り付け横ナデを施す。19・20の外底には箆によるものと思われる痕跡がある。21は外底はナデ、体部外面は横ナデ、内面は箆磨きによる調整で重ね焼きの跡を残す。22は底部の破片。小さめの高台を貼り付け横ナデしている。23は底部を糸切りし、断面が方形に近い高台を貼り付け横ナデを施す。体部外面は横ナデ、内面は風化が著しく調整は不明。24・25は糸切り底で高台を貼り付ける。内面は箆磨き、外面は横ナデ。26は底部の破

Tab. 5　土師器観察表（2）

No.	器種	口径 *底径 (cm)	器高 (現残高) (cm)	色調	胎土	焼成	備考
1	小皿	(7.5) *(4.1)	1.8	淡橙色	良　0.1～0.3cm程度の長石を含む	良好	
2	小皿	(8.2) *(5.1)	1.4	にぶい黄橙色	やや粗い　0.1cm以下の砂粒を多量に含む	良好	
3	小皿	(8.8) *(4.6)	1.6	淡橙色	精良	良好	
4	皿	(9.1) *(6.9)	1.1	にぶい橙色	精良	良好	
5	皿	(10.4) *5.2	3.0	灰白色	精良　0.1cm程度の砂粒，雲母を少量含む	やや軟	
6	小皿	*(5.1)	(0.8)	灰黄褐色	精良	良好	
7	小皿	*4.5	(0.8)	淡橙色	精良	良好	
8	坏	(14.8) *7.2	5.4	灰白色	精良　0.1～0.3cm程度の砂粒を少量含む	やや軟	
9	坏	(12.4) *6.8	4.7	明褐灰色	精良	良好	
10	椀	(13.5) *(5.3)	4.2	灰白色	精良　0.1～0.2cm程度の砂粒を微量含む	良好	
11	坏	*8.4	(1.6)	にぶい褐色	良　0.1～0.3cm程度の砂粒を含む	良好	
12	坏	*(7.0)	(1.5)	にぶい黄橙色	精良	良好	
13	坏	*7.1	(1.6)	浅黄橙色	精良　0.2cm前後の砂粒を少量含む	良好	
14	坏	*(6.1)	(2.0)	内－淡橙色，外－褐灰色	精良	良好	煤付着（外面下部）
15	坏	*(5.6)	(2.2)	にぶい黄橙色	良　0.1～0.25cmの石英，長石を含む	良好	

Tab. 6　土師器観察表（3）

No.	器　種	口　径 *底　径 (cm)	器　高 (現残高) (cm)	色　　調	胎　　土		焼成
16	坏	*　7.1	(1.4)	灰黄褐色	精良	0.01~0.02cm程度の長石を少量含む	良好
17	埦	*(6.8)	(1.6)	灰白色	良	0.1cm程度の砂粒を少量含む	やや軟
18	埦	*(6.9)	(2.1)	明灰褐色,底部外面に褐灰色の部分あり	精良	0.1~0.2cm程度の砂粒を少量含む	良好
19	埦	*(5.7)	(2.0)	灰白色	精良	0.1cm前後の長石を微量含む	良好
20	埦	*　5.2	(1.7)	灰白色	精良		良好
21	埦	*　5.2	(1.7)	灰白色	精良		良好
22	埦	*(7.0)	(1.9)	灰白色	精良		良好
23	埦	*　5.5	(3.2)	灰黄色	精良	0.2cm前後の長石を微量含む	良好
24	埦	*(6.4)	(2.4)	淡黄色，底部外面に黄灰色の部分あり	精良		良好
25	埦	*　6.0	(1.4)	灰白色，底部外面は灰色	精良	0.05~0.2cm程度の砂粒を少量含む	良好
26	埦	*　7.5	(1.5)	浅黄橙色	精良	0.2cm前後の砂粒を微量含む	良好
27	埦	*　5.4	(1.4)	内－淡黄色，外－灰黄褐色	やや粗い	0.05~0.1cm程度の砂粒を多量に含む	やや軟
28	埦	*(6.2)	(3.8)	内－灰白色，外－浅黄橙色	粗い	0.05~0.2cm程度の砂粒を多量に含む	やや軟
29	坏(皿)	*(4.0)	(1.2)	淡黄色	良	0.1cm程度の長石を微量含む	良好
30	坏(皿)	*　3.5	(1.5)	灰白色	良	0.2cm前後の長石を少量含む	やや軟
31	坏(皿)	*　4.5	(1.4)	灰白色	良		良好
32	坏(皿)	*(5.4)	(1.5)	明褐灰色	精良	0.05~0.1cm程度の砂粒を含む	やや軟
33	甕	(18.8)	(4.7)	内－茶褐色，外－黒褐色	精良	0.2cm程度の石英，長石を含む	良好
34	甕		(5.7)	浅黄橙色	粗い	0.05~0.15cm程度の砂粒を多量に含む	不良
35	鍋		(2.5)	にぶい橙色	精良	0.02~0.05cm程度の砂粒を少量含む	良好
36	鍋		(2.7)	淡赤褐色	良	0.02~0.05cm程度の砂粒を少量含む	良好
37	鼎(脚)		(8.6)	明黄褐色	精良	0.05~0.1cm程度の砂粒を少量含む	良好
38	鼎(脚)		(8.5)	明黄褐色	精良	0.05~0.1cm程度の砂粒を少量含む	良好
39	鼎(脚)		(6.8)	明黄褐色	精良	0.1cm前後の砂粒を少量含む	良好
40	鉢		(4.5)	淡黄色	精良	0.1cm前後の砂粒を微量含む	良好
41	火　鉢		(8.4)	浅黄橙色	精良	雲母を少量含む	良好
42	火　鉢		(5.6)	灰白色	やや粗い	0.1~0.4cm程度の長石を多量に含む	やや軟

片で風化が著しい。27は高台を貼り付けた外底に板状圧痕を残す。調整は不明。28はやや高めの内彎する高台を貼り付ける。

甕（Fig.21，33・34　PL.17）　33は体部以下を欠失する。口縁部はやや外彎しながら立ち上がり、口縁端部は直立する。調整は横ナデ仕上げ。34も口縁部で、肥厚しながら外反する。風化が著しく調整は不明。

土鍋（Fig.21，35・36　PL.17）　ともに口縁部の破片である。鍔は口縁部の上端に近い位置に貼付されている。

土鼎（Fig.21，37～39　PL.17）　いずれも脚部である。37・39は下半部を欠失する。すべて手捏ねで、成形時の指圧痕が見られる。

鉢（Fig.21，40　PL.17）　口縁部の破片で、口縁端部は面をなし、二条の沈線がめぐる。内面は横方向の刷毛目、外面は風化のため不明。

火鉢（Fig.21，41・42　PL.17）　41は直線的に立ちあがる体部をもつ。口縁部下に二条の低い突帯を貼付し、その間に「㊗」のスタンプを押捺している。42は41に比べかなり肉厚であり、大甕の可能性もある。かなり風化しており調整は不明。

これらの時期について概述すると、皿、坏、埦は概ね平安時代後半から鎌倉時代にかけてのものが大半であるが、6・7のように室町時代後半から近世まで下るものも含まれている。甕（33）は、周防国府ID・IG地区SK106出土のものに近似するもの[1]で、平安時代中頃まで遡る可能性をもつ。土鍋や鼎は鎌倉時代を中心としたもので、火鉢は室町時代のものと思われる。

（福　島）

〔注〕　1）吉瀬勝康「周防国府跡昭和53年度発掘調査概報」『防府市文化財調査年報Ⅱ』、防府市教育委員会、（1979年）。

Ⅳ　須恵器

蓋（Fig.22，1～10　PL.18）　1～4はつまみの破片。頂部が窪むもの（1・2）、扁平で頂部を手持ち篦削り成形したもの（3）、退化した扁平な宝珠状のもの（4）がある。すべて回転ナデ調整。5は断面四角形のやや外反する環状つまみを有し、口縁部は上方に反り上がる。口縁部および外面は回転ナデ、内面は静止ナデ。6は扁平なボタン状のつまみを有し、天井部からゆるやかに下降して断面鳥嘴状の口縁部にいたる。端部は鋭い。全面回転ナデ調整。7～10はすべて端部が外方へ開き鳥嘴状の口縁部をもつ。端部外面は窪む。7は天井部が「ドーム」状にふくらむ。天井部内面を除き回転ナデ調整。内面は静止ナデ。8は平坦な天井部をもつものと思われ、全面回転ナデ調整。9は「ドーム」状の天井部（内外面）が不整方向のナデ、他は回転ナデ調整。10は天井部に指圧痕が残る他は回転ナデ調整。7・8においては回転ナデ調整後、天井部外面に「刷毛」状工具による調整痕が認められる。

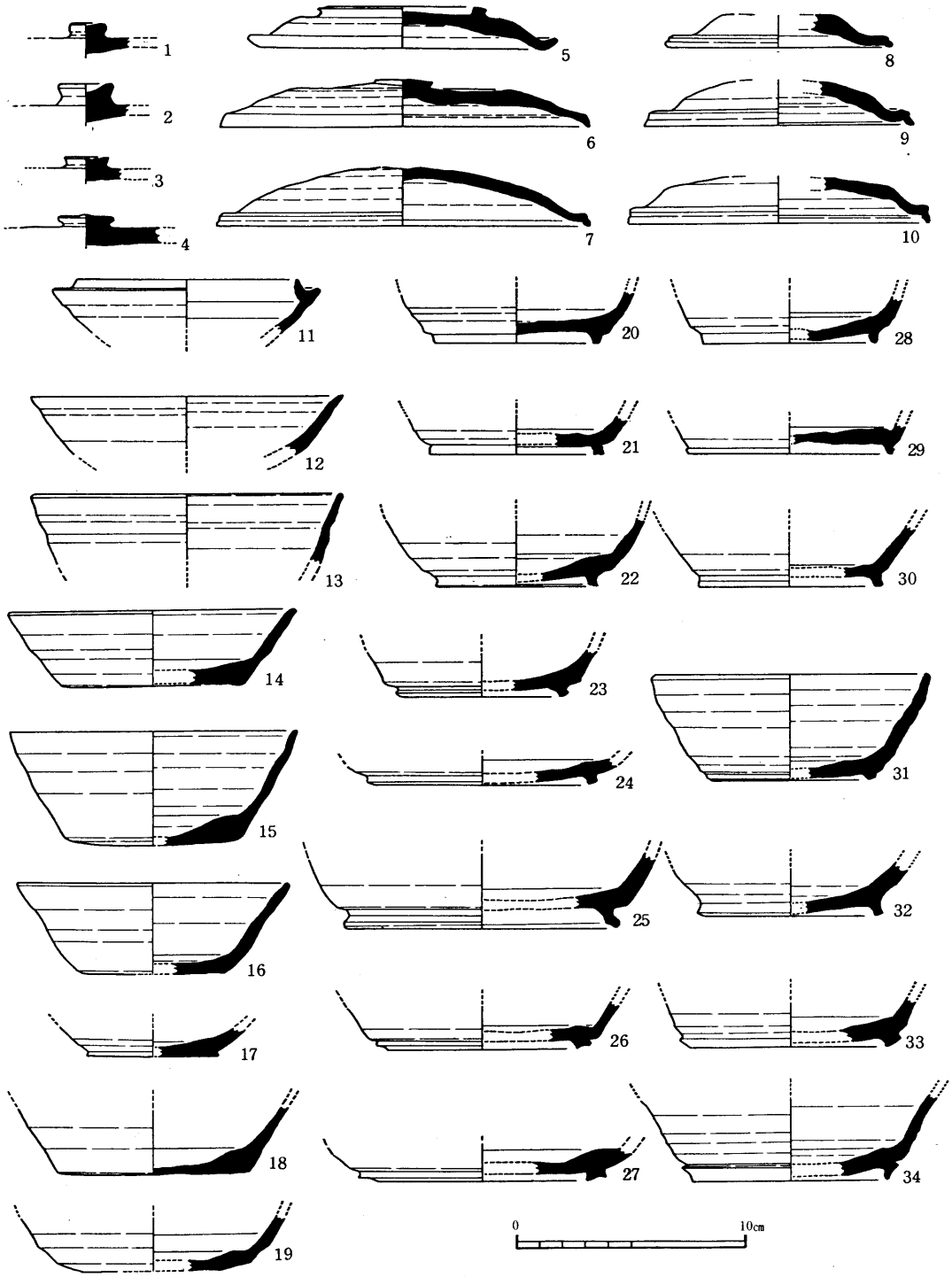


Fig.22　須恵器　その1

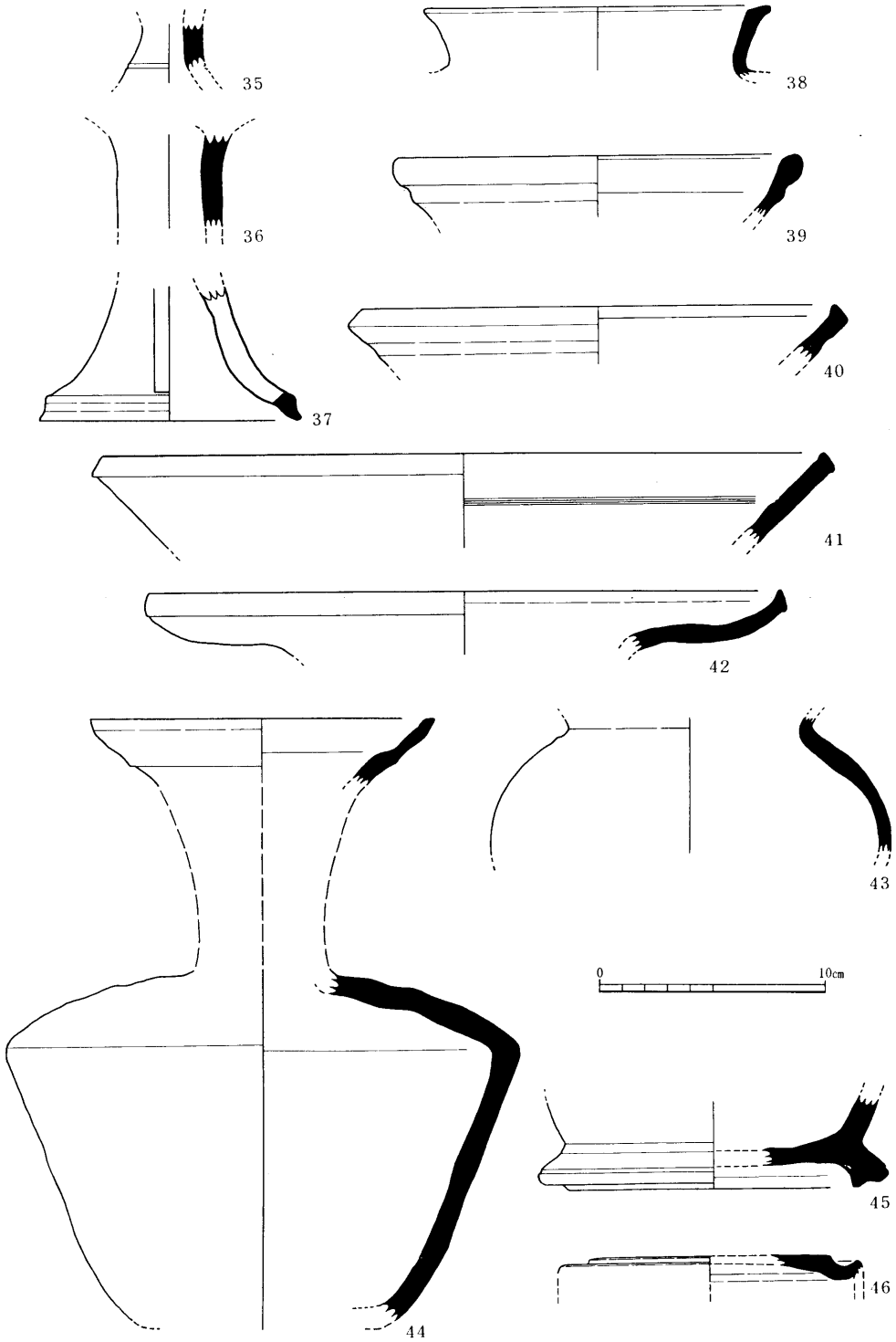


Fig.23　須恵器　その2

Tab. 7　須恵器観察表（1）

No.	器種	口径 *底径 (cm)	器高 (既存高) (cm)	色調	胎土	焼成	備考
1	蓋		(1.3)	暗青灰色	精緻	良好	一部に墨痕あり
2	蓋		(1.8)	暗青灰色	精緻	良好	
3	蓋		(1.1)	暗青灰色	精緻	良好	
4	蓋		(1.5)	黄灰色	精緻	良好	
5	蓋	12.2	1.9	青灰色	砂粒を含む	良好	
6	蓋	16.2	2.2	青灰色	砂粒を含む	良好	
7	蓋	16.4	(2.7)	外面－紫灰色，内面－暗青灰色	1～2㎜程度の砂粒を含む	良良好	外面一部に刷毛状の工具痕あり
8	蓋	9.8	(2.0)	青灰色	精緻	良好	
9	蓋	11.9	(3.0)	外面－明青灰色，内面－青灰色	精緻	良好	
10	蓋	13.2	(2.1)	外面－青灰色，内面－黄灰色	精緻	良好	
11	坏	9.7	(2.5)	外面－灰オリーブ色，内面－灰白色	やや粗	やや良好	
12	坏	13.7	(2.7)	外面－青灰色，内面－明青灰色	精緻	良好	
13	坏	13.6	(3.2)	外面－灰オリーブ色，内面－青灰色	精緻	良好	
14	坏	12.6	3.5	外面－明オリーブ灰色，内面－緑灰色	精緻	良好	
15	坏	12.7	5.2	外面－灰白色，内面－明青灰色	精緻	良好	
16	坏	6.3	4.1	青灰色	砂粒を含む	良好	
17	坏	5.8	(1.3)	外面－明オリーブ灰色，内面－オリーブ灰色	精緻	良好	
18	坏	8.5	(3.0)	明緑灰色	精緻	良好	
19	坏		(2.3)	外面－灰黄色，内面－にぶい褐色	精緻	良好	
20	埦	* 7.2	(3.2)	外面－青灰色，内面－暗青灰色	精緻	良好	
21	埦	* 7.6	(1.5)	外面－暗青灰色，内面－灰色	精緻	良好	
22	埦	* 7.1	(3.0)	灰白色	やや粗	不良	
23	埦	* 6.5	(2.0)	明青灰色	精緻	良好	
24	埦	* 9.2	(0.8)	外面－灰色，内面－灰白色	精緻	良好	ヘラ記号
25	埦	*11.9	(3.1)	外面－青灰色，内面－灰褐色	精緻	良好	
26	埦	* 8.3	(1.8)	外面－浅黄色，内面－灰色	精緻	良好	
27	埦	* 9.2	(1.3)	外面－明青灰色，内面－青灰色	精緻	良好	
28	埦	* 7.6	(2.0)	灰白色	精緻	良好	
29	埦	* 8.9	(1.2)	明青灰色	精緻	良好	
30	埦	* 8.1	(2.5)	外面－緑灰色，内面－青灰色	精緻	良好	
31	埦	11.8 * 6.8	4.8	暗青灰色	砂粒をやや多く含む	良好	
32	埦	* 7.5	(2.1)	浅黄色	やや粗	やや不良	
33	埦	* 8.6	(2.0)	オリーブ灰色	精緻	良好	
34	埦	* 8.6	(3.6)	明緑灰色	精緻	良好	
35	高坏		(3.3)	灰白色	精緻，1㎜大の石少量含む	やや不良	
36	高坏		(4.0)	灰白色	精緻	やや不良	
37	高坏		(5.7)	外面－灰オリーブ色，内面－青灰色	精緻	良好	かたく焼きしまり外面に変質が認められる
38	甕	15.2	(2.8)	外面－黒色，内面－オリーブ灰色	精緻，1㎜大の石2，3含む	良好	

Tab. 8　須恵器観察表（2）

No.	器　種	口径 *底径 (cm)	器　高 (現存高) (cm)	色　　調	胎　　土	焼成	備　　考
39	鉢	17.6	(3.0)	青灰色	精緻　径0.5㎜大の石多量含む	良好	
40	鉢	21.0	(2.5)	外面－明オリーブ灰色，内面－浅黄色	精緻　径1㎜大の石2,3含む	良好	
41	鉢	32.0	(4.0)	外面－明灰色，　内面－暗青灰色	精緻	良好	
42	盤状高坏	28.0	(2.8)	外面－灰色　，　内面－暗緑灰色	精緻　径1㎜大の石含む	良好	調整があらい
43	壺		(6.0)	外面－黄褐色，　内面－灰白色	精緻	良好	外面に変質が認められる
44	長頸壺	15.2		口縁部外面－緑灰色，肩部外面－赤灰色 胴部外面－灰白色，内面－灰白色	粗い	やや軟	変質が認められる
45	長頸壺	*12.6	(3.9)	青灰色	精緻　径1㎜大の石2,3含む	良好	
46	硯	15.5	(1.2)	青灰色	精緻	良好	

坏（Fig.22，11～19　PL.18）　11は立ちあがりが短く外反し、受部は外上方へ短く伸びる。立ちあがり端部は鋭い。全面回転ナデ調整。12は体部が内彎気味に立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。端部は鋭い。全面回転ナデ調整。13は体部が直線的に開き口縁部にいたる。全面回転ナデ調整。14は口径に比べて器高が低い。体部は直線的に立ち上がり、口縁部は外反する。底部は篦切り後ナデ仕上げ、他は回転ナデ調整。15は体部が底部から一旦稜をなして内彎気味に立ち上がり、端部は鋭い。底部は篦切り底で、体部は内外面とも回転ナデ調整。16は平坦な底部から体部が内彎気味に立ち上がり、体部中位で外反する。底部は篦切り底で、体部全面は回転ナデ調整、底部内面は静止ナデ。17は円盤状の篦切り底で全面回転ナデ調整。18は体部がななめ直線的に立ち上がる。底部外面は篦切り後ナデツケ、底部内面は不整方向のナデ、体部内外面は回転ナデ調整。19は底部と体部の境が不明瞭で体部が内彎しながら立ち上がる。底部は篦切り、体部全面回転ナデ調整。

埦（Fig.22，20～34　PL.18）　20～27は底部端よりやや内側に高台を貼り付けるもの。20は断面逆台形状の直立する高台を付す。21は断面四角形の高台を付し、端部がやや窪む。22は体部がなだらかに内彎気味に立ち上がる。23は「ハ」の字状に開く高台を付す。24は底部外面に篦記号が認められる。25は大型のもので外方に屈曲しながら開く高台を付す。26・27はともに扁平な高台を付す。22が底部内面に静止ナデを施す他は、すべて全面回転ナデ調整。28～33は底部と体部の境に高台を貼り付けるもの。28は断面三角形状の高台を付し、全面回転ナデ調整。29は体部が平坦な底部から急角度を成して立ち上がるもので全面回転ナデ調整。30・32はともに断面長方形の高台を付す。30は底部外面篦切リ後ナデツケ。その他は回転ナデ調整。32は底部内外面不整方向のナデ、体部全面回転ナデ調整。31は成形

がやや粗雑で直線的に体部が立ち上がる。全面回転ナデ調整。33・34は大きく外方へ開く高台を有するもの。33は外ふんばりの扁平な高台を付す。底部は篦切り後ナデツケ。底部内面は静止ナデ、その他は回転ナデ調整。34は底部内面不整方向のナデ。その他は回転ナデ調整。

高坏（Fig.23，35～37　PL.19）　すべて脚部の破片。35・36ともに上半部で、35は外面に一条の沈線を有する小型のもの。外面は回転ナデ調整。内面は絞り痕が残る。36はやや厚手のもの。37は裾部が「ハ」の字形にゆるやかに開くもので、脚端部は鳥嘴状に尖り気味に終わる。裾部に長方形の透しを有する。36・37とも全面回転ナデ調整。

甕（Fig.23，38　PL.19）　直線的に外反する口縁部の破片。口唇は平坦で内傾する。全面回転ナデ調整。

鉢（Fig.23，39～41　PL.19）　すべて口縁部の破片。39は口縁端部が肥厚し丸く終る。40は内端部がやや内側につまみ出されている。41は広口のもので口縁部は直線的に開く。口縁部内面に浅い二条の沈線が巡る。39～41ともすべて回転ナデ調整。

盤状高坏（Fig.23，42　PL.19）　坏部の破片。坏部は浅く、内彎しながら立ち上がる。口縁端部は断面鳥嘴状に上方に突出する。内面および口縁部は回転ナデ調整。

短頸壺（Fig.23，43　PL.19）　体部上半部の破片。球形の体部をもち、肩部にセットになると思われる蓋との重ね焼き痕が認められる。全面回転ナデ調整。

長頸壺（Fig.23，44・45　PL.19）　44は頸部と底部を欠損する。口縁部は内側に弱く屈曲し端部は平坦でやや内傾する。肩部は強く張り、最大径を肩部にもつ。全面回転ナデ調整。口縁部全面および肩部に一部自然釉（緑色）がかかる。45は底部の破片。「ハ」の字形に開く高台を付す。高台端部は窪み、内側端が接地する。高台外面下半部に一条の沈線が巡る。内面および高台は回転ナデ調整、底部は篦切りの後、ナデを施す。

硯（Fig.23，46　PL.19）　陸の周辺から外縁にかけての部分である。堤は顕著でなく、外縁は陸よりわずかに低い。陸部分は多方向にナデ調整が施される。他は回転ナデ調整。

これらの器種の時期であるが、桑原邦彦・池田善文両氏の防長地域における編年[1]を参考にして推考してみれば、6世紀後半から7世紀前半代にさかのぼるであろうと思われるものが含まれているが[2]、おおよそ、8世紀から9世紀前半代、下っても9世紀後半代[3]のものにおさまるようである。また、豊前における小田富士雄氏[4]の編年に対照するとXII期～VIII期、畿内・陶邑編年[5]ではIV型式I段階～V型式にかけてのものが多い。

（高下洋一＊・柏本秋生＊）

〔注〕
1）桑原邦彦・池田善文『防長地域の須恵器窯跡と編年研究』（『周陽考古学研究所報』、1981年）。
2）注1）によると、ⅣA期頃になる。
3）注1）によると、ⅦA期からⅧB期になる。
4）小田富士雄他『天観寺山窯跡群』（北九州市埋蔵文化財調査会、1977年）。
5）中村浩『和泉陶邑窯の研究－須恵器生産の基礎的考察－』（歴史学研究叢書、1981年）。

V．瓦質土器

土鍋・土鼎（Fig.24，1～17　PL.20）　1～11は土鍋・土鼎の口縁部から体部にかけての破片である。口縁はいずれも短く外反し、上端をわずかにつまみ上げるものが多い。端部外面は丸くおさまるものと面をなすものがある。体部はくびれ部より直線的に下方へ内傾するもの（1～4・11）と垂直気味に下がるもの（5・6・8～10）に大別でき、またくびれ部外面が凹むもの（1・2・4・5）もある。調整をみると、大半の口縁部は横ナデ仕上げであるが、3は口縁内面に横方向の刷毛目を施す。体部は内面が横ナデのもの（1・2・8・11）と横方向に刷毛目調整を施すもの（3・10）があり、外面は縦方向に刷毛目が認められる（3・7～10）。また、2は指圧による整形・調整が施されるが粗雑である。12・13は外面に鍔状の突帯が貼付けられている。12は口縁端部外面直下に貼付され、上面は水平な面をなし、端部外面をわずかに上方へつまみ上げている。13は断面長方形の突帯を有する。14は胴底部の破片で、内面は比較的細かい刷毛目調整、外面は格子目の叩きが施されている。15～17は土鼎の脚部で、15・16は上半部、17は下半部である。17は先端が外側へわずかに開き、いわゆる獣足気味である[1]。いずれも指圧成形後ナデ調整。15の体部内面には粗い刷毛目痕が残る。

擂鉢（Fig.24，18・19　PL.20）　内面に櫛状工具による条痕が施される。18は端部が肥厚する口縁をもち、条痕は一単位四本である。内面に刷毛目調整が認められる。19は風化のためかなり器表が磨滅している。

鉢（Fig.25，20～26　PL.20，21）　20～25は口縁部である。20～24は口縁部が肥厚するもので20は内傾する面をもつ。21は片口を有するもので、片口部分は断面方形状を呈する。22は外傾面を有する口縁。23・24は口縁上端が水平面をなすもので、24は外面が凹面を呈する。25は体部が次第に厚味を帯びて立ち上がり口縁部にいたるもので、上端はやや外傾する面をもち、三条の沈線がめぐる。また、口縁部外面直下に幅広い凹みを有するが浅い。26は平底の底部からやや内彎気味に立ち上がる短い体部をもち、口縁端部は内側にわずかに張り出し、中凹みの面を呈する。これらの口縁部の調整は、判明するものでは横ナデ（21・

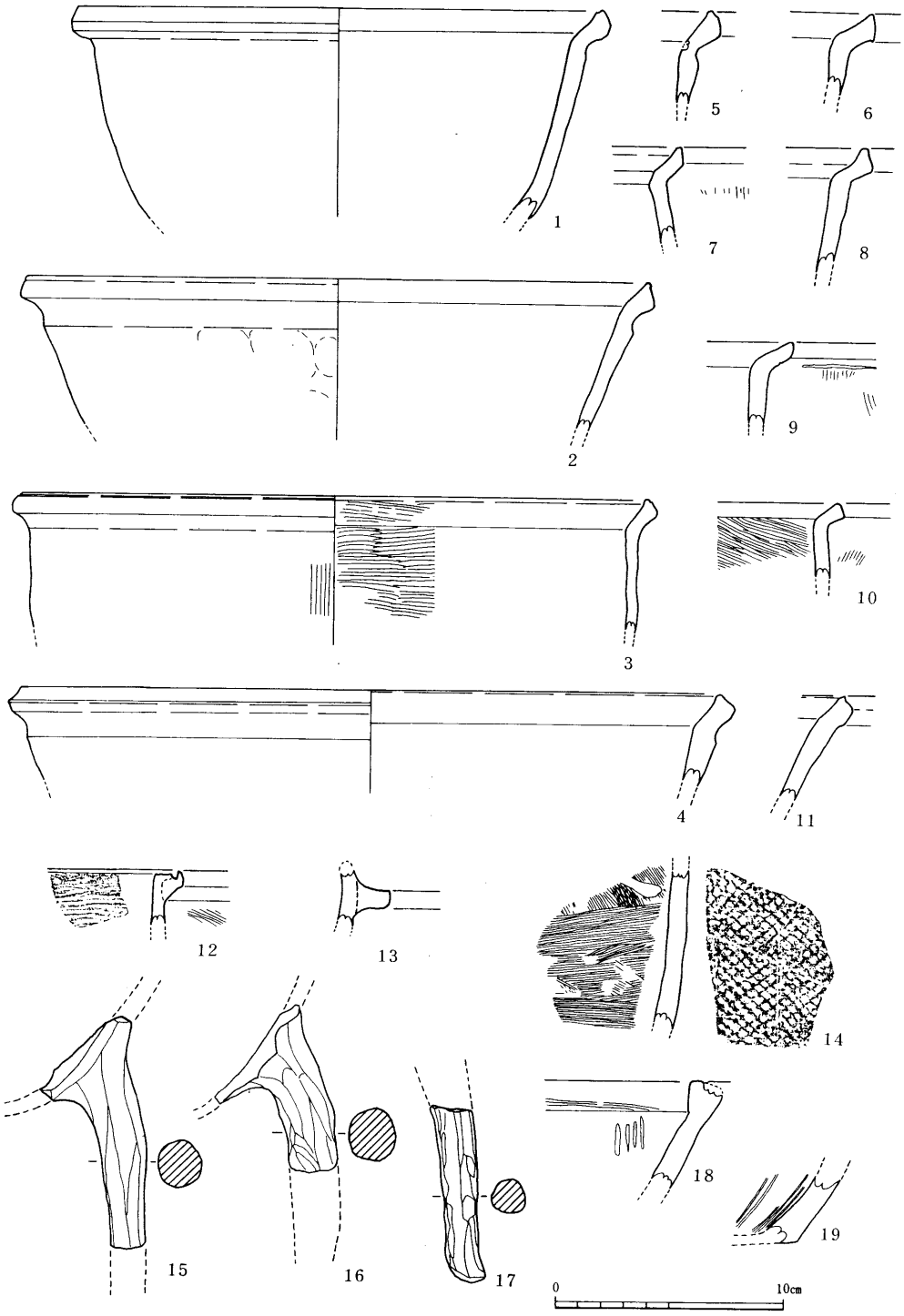


Fig.24　瓦質土器　その1

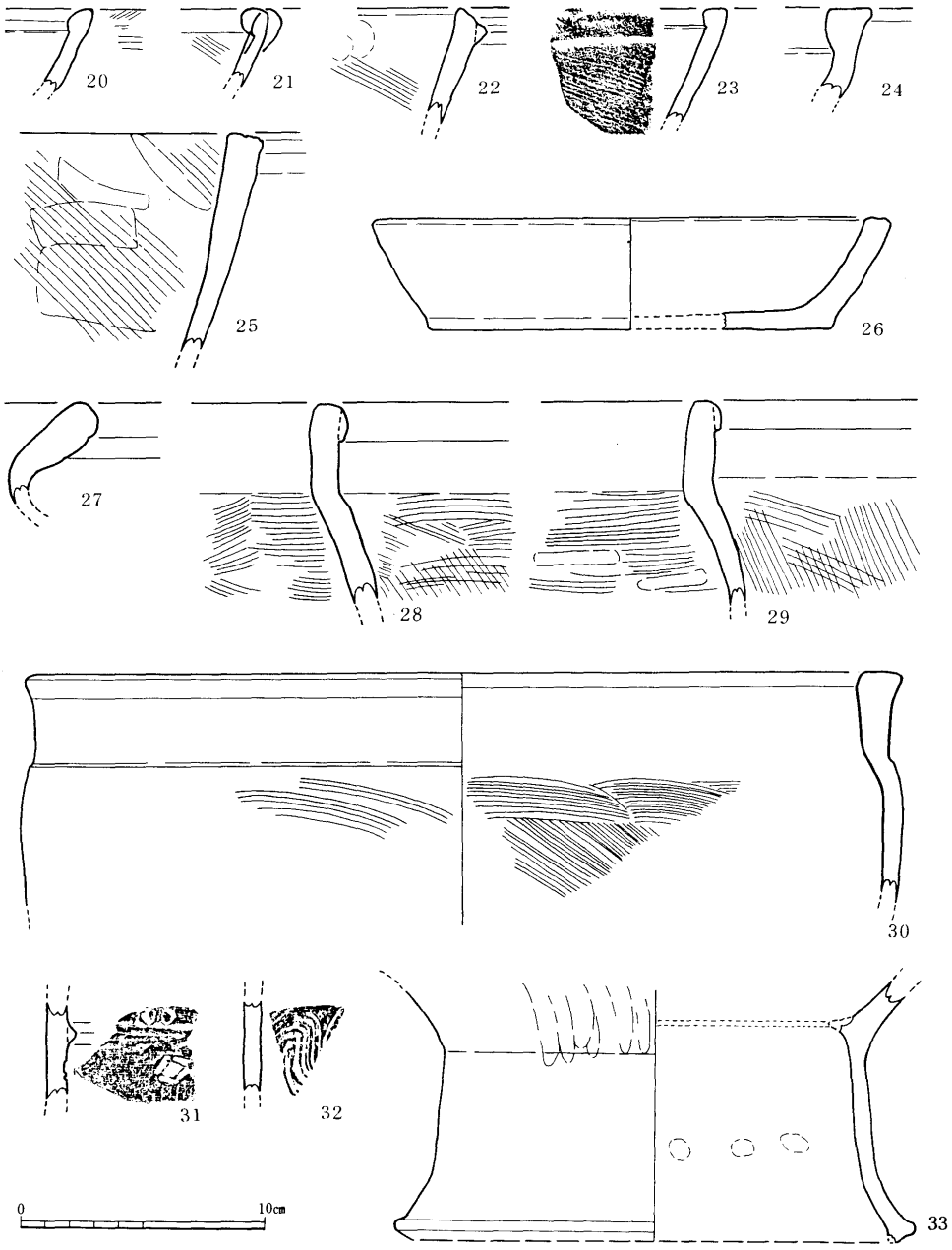


Fig.25　瓦質土器　その2

Tab. 9　瓦質土器観察表

No.	器　種	口径 *底径 (cm)	器　高 (現存高) (cm)	色　　調	胎　　土		焼成	備　　考
1	土　鍋	23.0	(9.3)	内－浅黄橙色，外－灰白色	良	石英，長石，雲母，砂粒を含む	良好	煤付着（内・外）
2	土　鍋	27.1	(6.5)	内－灰色　　外－浅黄橙色	良	石英，長石，雲母，砂粒を含む	良好	
3	土　鍋	27.4	(5.9)	灰黒色	精良	長石，雲母，砂粒を含む	良好	
4	土　鍋	30.6	(4.1)	内－淡橙色，外－灰黒色，断面－淡橙色	精良	1～2㎜の石英を多く含む 0.5㎜の黒雲母を含む	良好	
5	土　鍋		(4.1)	内－灰色，　外－濃い灰色	精良	石英，雲母を含む	良好	
6	土　鍋		(3.6)	内－灰白色　　外－灰色	やや粗い	長石，石英，砂粒を含む	良好	
7	土　鍋		(3.6)	内－淡黄褐色，外－濃い茶褐色	精良	1㎜程度の砂粒を含む	良好	
8	土　鍋		(5.2)	灰白色	精良	石英，雲母，砂粒を含む	良好	煤付着（内外とも上部約4cm）
9	土　鍋		(3.7)	内－淡黄色　　外－黒褐色	精良	石英，雲母を含む	やや不良	煤付着（外）
10	土　鍋		(3.4)	内－淡黄色　　外－茶褐色	精良	1㎜程度の砂粒を含む	良好	
11	土　鍋		(4.7)	内－灰色　　外－濃い灰色	精良	雲母，長石を含む	良好	煤付着（外）
12	土鍋（鼎）		(2.4)	灰黒色	精良	1㎜程度の砂粒を少量含む	良好	
13	土鍋（鼎）		(2.4)	内－淡黄灰色　外－灰黒色	良	2㎜以下の砂粒を含む	良好	風化（内）
14	土鍋（鼎）		(7.0)	内－黒褐色　　外－灰褐色	精良	1㎜程度の砂粒を少量含む	良好	
15	鼎（脚）		(9.9)	体部－灰色　脚部－灰白色	良	石英，長石，雲母，砂粒を含む	良好	
16	鼎（脚）		(7.3)	内－淡灰色　　外－灰色	良	長石，雲母，砂粒を含む	良好	
17	鼎（脚）		(7.7)	淡灰白色	精良	1㎜程度の砂粒を含む	良好	煤付着（外）
18	擂　鉢		(4.7)	内－淡橙色　　外－灰黒色	精良	3㎜以下の石英，長石を含む	良好	
19	擂　鉢		(2.6)	内－黄褐色　　外－灰色	精良	石英，長石，砂粒を含む	良好	
20	鉢		(3.4)	内－淡褐色　　外－黒褐色	良	石英，長石，雲母を含む	良好	煤付着（外）
21	鉢		(3.3)	淡黄色	精良	石英，長石，砂粒を含む	良好	
22	鉢		(4.7)	灰黒色	精良	1～3㎜の石英，砂粒を含む	良好	
23	鉢		(4.6)	内－灰色，外－淡灰白色　断面－淡黄色	精良	石英，雲母と少量の砂粒を含む	良好	
24	鉢		(3.7)	内－灰白色　　外－黒褐色	精良	石英，長石，雲母，砂粒を含む	良好	煤付着（外）
25	鉢		(8.9)	灰白色	良	石英，長石，雲母，砂粒を含む	良好	
26	鉢	19.8	4.5	内－淡黄褐色，外－淡黄褐色（胴部）黒褐色（底部）	良	2㎜以下の石英，長石を含む	良好	
27	甕		(3.6)	内－灰色　　外－淡灰色	良	石英，長石，雲母を含む	良好	
28	甕		(8.0)	灰色	精良	石英，長石，雲母を含む	良好	
29	甕		(8.1)	灰色	精良	長石，雲母，砂粒を含む	良好	
30	甕	35.8	(9.5)	灰色	精良	石英，長石，雲母，砂粒を含む	良好	
31	火　舎		(3.6)	灰色	精良	石英，長石，雲母，砂粒を含む	良好	
32	不　明		(3.7)	灰色	精良	石英，長石，雲母を含む	良好	
33	不　明	19.4	(10.1)	黒褐色，断面－淡橙色	精良	1㎜程度の石英を含む	良好	

22・24・26）が多い。25の体部内面には斜め方向の刷毛目調整および削り痕が認められる。

甕（Fig.25，27～30　PL.21）　27は大きく外反する口縁の破片で、頸部内面は稜をもたずに屈曲し、口縁端部は丸味をもつ。28・29は内傾する体部をもち、口縁部は直立する。口縁端部外面に扁平で貧弱な粘土帯が貼付けられている。30は口縁が直立し、端部は肥厚し面をなす。いずれも口縁部調整は横ナデである。28～30の体部内外面は粗く刷毛目を施す。

火舎（Fig.25，31　PL.21）　口縁ないしは体部下位の破片で、外面に扁平な断面三角形の突帯が貼付けられており、その上方に二つの小円、下方に菱形のスタンプを押捺している。

その他（Fig.25，32・33　PL.21）　32・33は器種不明。32は外面に櫛描状の波状文が施されている。33は内面中位に端部を欠損した突出部がある。成形は比較的粗雑で、内外面に指圧による凹凸面を残し、また外面には成形時の粘土接合の痕跡もみられる。突帯より下位は内外面が横ナデ、突帯上位内面は横刷毛目、他の部分はナデツケが施されている。

瓦質土器の大半は、鎌倉時代から室町時代の範疇におさまるものであるが、下右田遺跡[2]や松岡睦彦氏[3]による防長の中世土器編年試案を参照してみると、今回出土したものは、土鍋では鎌倉時代前半期のものが多く、また甕や火舎（31）では室町時代後半に位置づけられるものがあるなど、これらの土器類には全体的にかなりの年代幅が認められる。

（乾風千絵＊・米倉智美＊・渡辺由加＊）

〔注〕
1）松岡睦彦氏は脚部先端の突出部を「爪」部としている。山口県教育委員会『吉田岡畠・吉田大浴・下長野』（1973年）。
2）山口県教育委員会『下右田遺跡　第4次調査概報・総括』（1980年）。
3）松岡睦彦「山口県域における古代中世の土器」（『山口考古』、山口考古学会、1983年）。

Ⅵ．輸入陶磁器・緑釉陶器・黒色土器・瓦器・国産陶磁器ほか

輸入陶磁器

白磁（Fig.26，1～39　PL.21）

1～17は埦の口縁部で、口縁端部が玉縁を呈するものである。4・9・11・13・14の口縁部付近には釉が二重にかかる。16・17は小形の玉縁で、皿になる可能性もある。18～21・26は皿の口縁部である。19は口縁端部付近で上方に弱く屈曲し、ほぼ直立する。20・21はやや外反する口縁を持つ。体部外面下半を除き施釉しており、内面には1条の沈線を有する。22～25・27・28は埦の口縁部である。25は口縁端部が丸く、端部外側がやや外方に突出する。27・28は口縁部がやや外反し、端部は水平面をなすもので、28の外面には指頭痕が認められる。29～35は埦の底部である。29～32は断面四角の高台を有するもので、削り

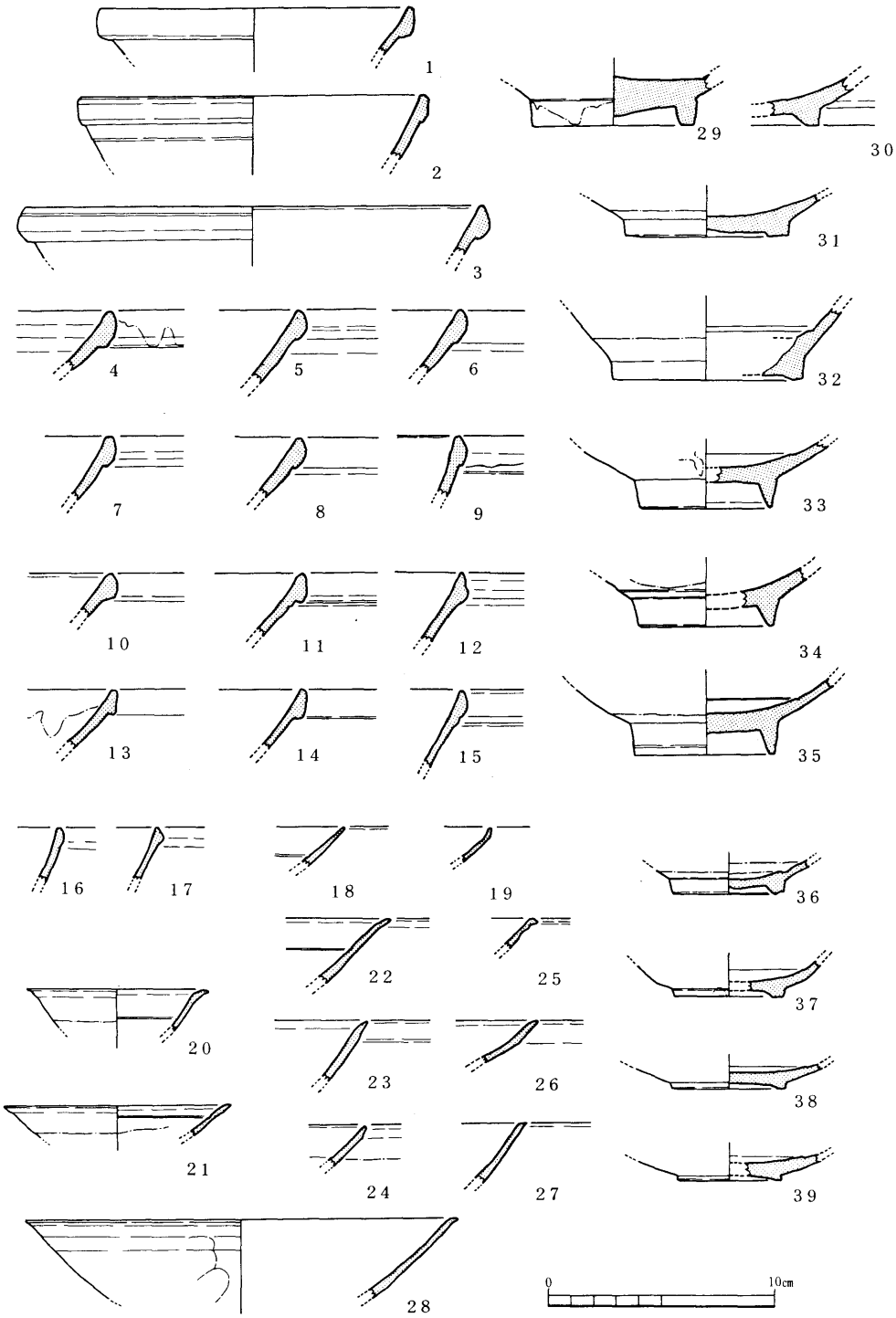


Fig.26　輸入陶磁器　その1

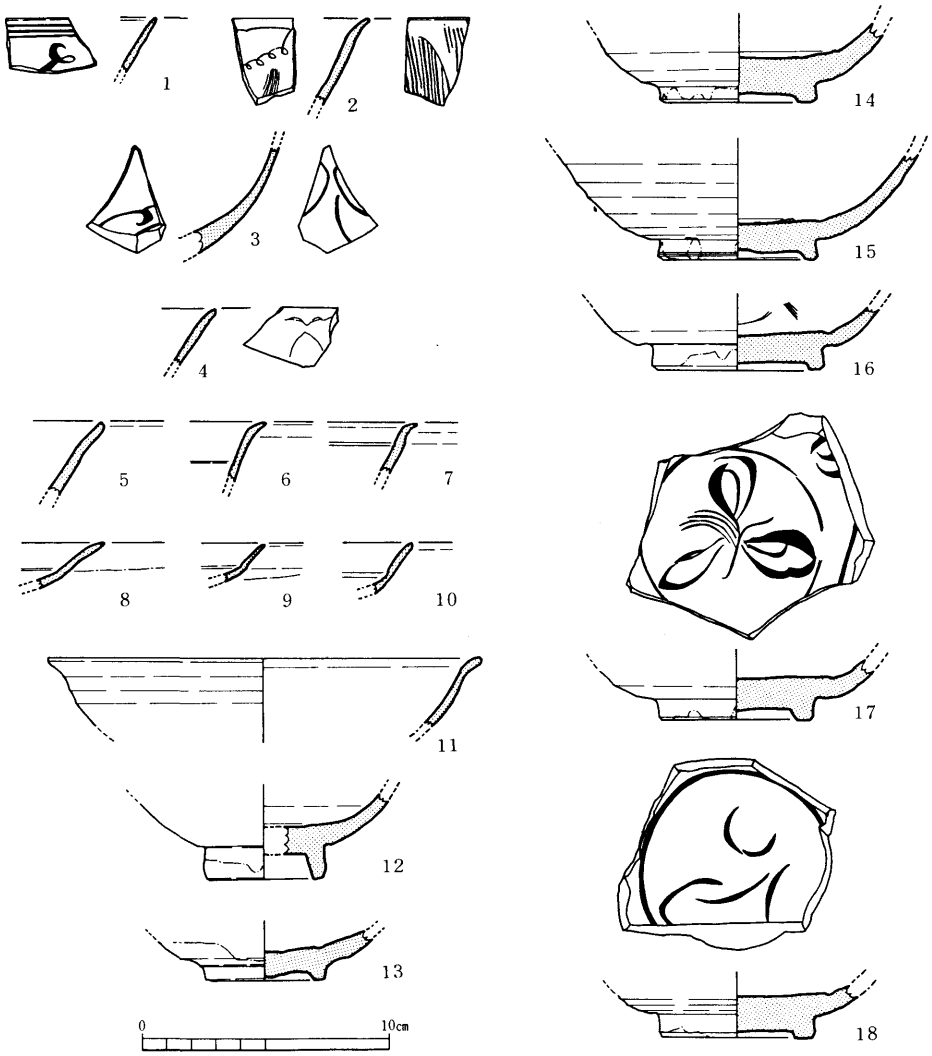


Fig.27　輸入陶磁器　その2

出しが深く比較的高い高台を持つもの（29・30）と、高台が厚く削り出しのわずかなもの（31・32）とに大別される。前者は外底と高台畳付部が露胎となるが、後者は更に体部下半までが未施釉である。33～35は尖り気味の高台を有するもので、高台付近から外底にかけては施釉しない。36～39は皿の底部である。36～38は断面四角の高台を有し、36は見込み部分の釉を輪状にカキ取る。37・38は外底と高台畳付部を除き施釉を行なう。39は高台状の削り出しを有するもので、高台と外底には施釉しない。

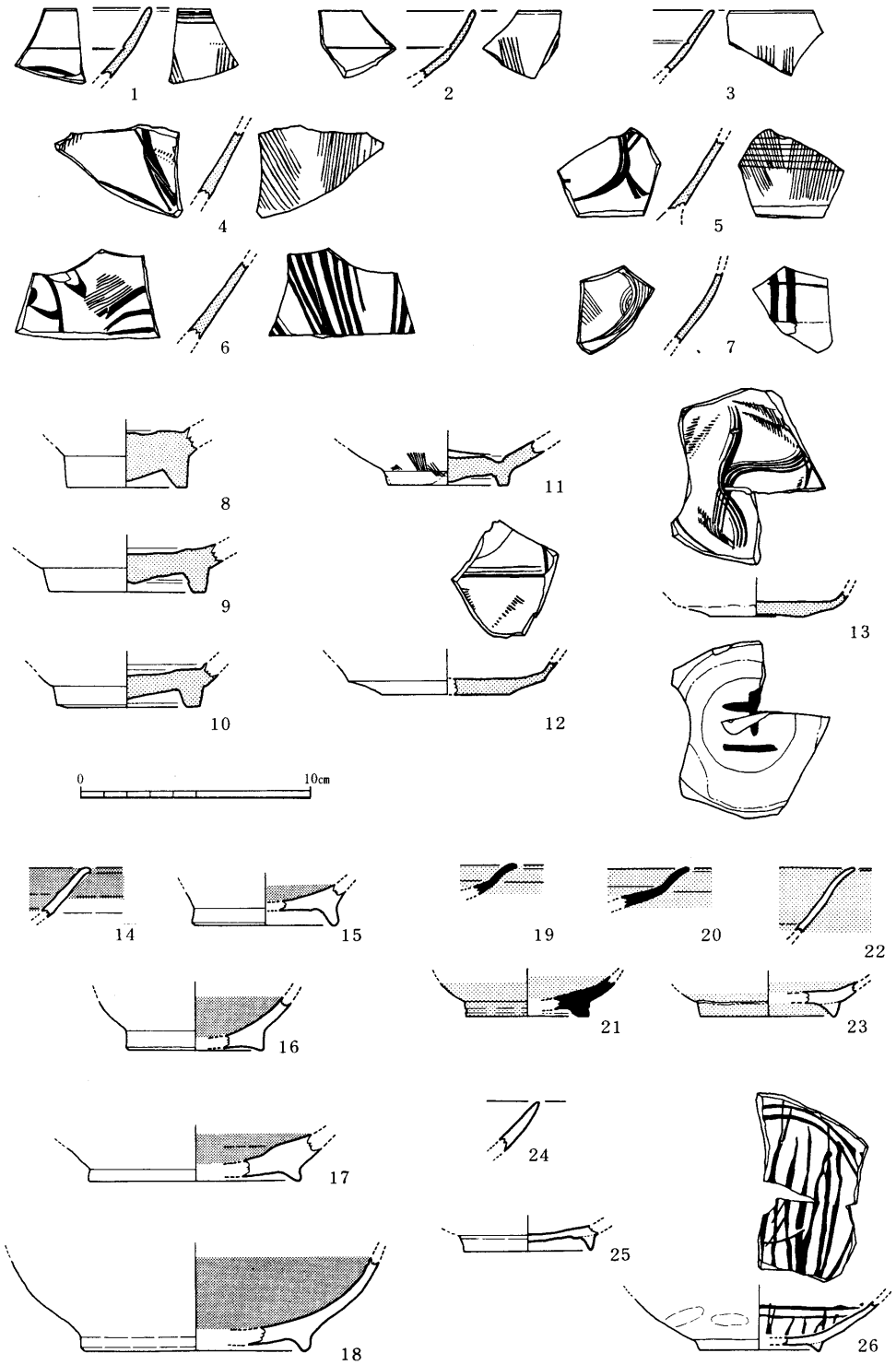


Fig.28　輸入陶磁器　その３　黒色土器・緑釉陶器・瓦器

遺　　物

龍泉窯系青磁（Fig.27, 1～18　PL.22）

1は内面に3条の沈線と片彫り文様が認められるもので、横田賢次郎・森田勉氏による分類[1]のⅠ－4類に属する。2は外面に蓮弁の櫛目文、内面に片彫り文様と櫛目文を有する。Ⅰ－6・b類。3は内外面に片彫り文様を有するもので、体部下半の破片と思われる。4は外面に無鎬蓮弁文を有するもので、口縁端部には釉の垂みが見られる。Ⅰ－5・a類。5～7は埦の口縁部である。7は短く外反する口縁を持ち、内面には1条の沈線を有する。外面には何らかの文様を施しているが、小破片のため不明。8～10は皿の口縁部で、8・9は体部下半が未施釉だが、10は残存部全面に施釉する。11はやや外反する口縁を持つ埦である。12は埦の底部で高台部下半と畳付部および外底は露胎となる。13は小埦の底部と思われ高台付近および外底は未施釉である。14～18は埦の底部で、高台畳付部と外底には施釉されない。14・15は内外面とも無文のもので、Ⅰ－1類に比定される。15は内底見込みに2箇所の重ね焼きの痕跡が認められる。16は内面に細かい櫛目文が施される。17・18はⅠ－2類で、17は内底見込みに片彫りの優雅な蓮華文を有する。18は退化した葉文を持つもので、この型式の中ではやや後出するものである。

同安窯系青磁（Fig.28, 1～13　PL.22）

1～3は埦の口縁部片で、外面に細かい櫛目、内面に1条の沈線を有する。1は外面にも3条の浅い沈線を有し、内面には片彫り文様も認められる。3点ともⅠ－1・b類に比定できる。4～7は埦の体部片。4は外面に細かい櫛目を有し、内面には櫛目と片彫り文様とを併用する。5は外面に細かい櫛目、内面に片彫り文様を施す。なおこの破片下部には高台の剝離痕が認められる。4・5ともⅠ－1・b類。6は外面に片彫りの平行線が施され、内面には櫛目と片彫り文様が併用される。Ⅲ－1・c類。7は外面に片彫りの平行線、内面に櫛描き花文を有する。破片の外面下半は露胎となる。Ⅲ－1・b類に属する。

8～11は埦の底部片である。8の底部はやや厚く、釉は残存部の内面のみに施される。9・10の底部は比較的薄い。内底見込みの釉が輪状にカキ取られており、残存部の外面は露胎となる。Ⅲ－2類の可能性がある。11は外面に細かい櫛目を施し、内面は無文で、高台畳付部と外底には施釉しない。Ⅰ－1・b類。12・13は皿の底部である。12は内面に櫛目と直線状の片彫り文様を有する。外底は未施釉である。Ⅰ－2類。13の内面には片彫り文様とジグザグ文様とがともに櫛状工具によって施される。体部外面下半から底部は露胎となる。なお内底の一部には重ね焼きの痕跡を有し、外底面には「十一」と判読できる墨書が認められる。Ⅰ－1・b類の範疇に含まれる可能性もある。

以上、輸入陶磁器は、全て包含層中から検出されたものであり、一括性に乏しいが、上記の資料のほとんどは12世紀から13世紀前半に位置づけられるものである。

黒色土器（Fig.28，14～18　PL.23）

5点出土。これらは全て内面および口縁部のみに炭素を吸着させる、いわゆるA類の椀で、胎土や技法等により在地産のものと考えられる。

14は口縁部および体部上位が残る破片で、口縁はわずかに外反し丸くおさまる。口縁部は内外面とも横ナデ、体部内面は篦磨きが施され、外面は篦ナデによる稜が認められる。15～18は底部および体部下半が残る破片である。15はハの字状を呈する比較的高い高台を持ち、高台内側に浅い凹みが巡る。16は器表面の磨滅が著しいものであるが、高台はかなり低いものと思われる。内面は篦磨きを施す。17・18は15・16よりかなり大型である。17は外下方に張る低い高台を有する。内底見込みはゆるやかな凹みを呈しており、器壁は厚味がある。全体に磨滅が著しいが、内面には一部篦磨きが認められる。18は直立気味の高台からゆるやかに立ち上がる体部を持つ。体底部は内外面ともに篦磨きと思われるが磨滅のため不明瞭である。底外面は篦削りを施す。

緑釉陶器（Fig.28，19～23　PL.23）

胎土が須恵質のもの（19～21）と土師質（22・23）のものとに大別できる。

19・20は皿形を呈するもので、大きく外反する口縁を持ち、端部は丸くおさめる。内外全面に施釉が認められる。21は椀の底部で、厚味のある安定した削り出し高台を持ち、外底面を除き施釉する。外底面には回転篦削り、内面には回転ナデを施す。22は椀の口縁部で、端部に至って大きく外反する口縁を持つ。内面には弱い屈曲が認められる。23は底部で貼り付け高台を有するものである。釉は本来全面に施されていた可能性が高いが、風化のため現状では剝落している部分が多い。

瓦器（Fig.28，24～26　PL.23）

三点ともに椀形を呈する。24はやや内彎してのびる口縁部の小片で、端部は窄まりながら丸くおさまる。内側に沈線は認められない。表面は風化している。25は底部で、見込み部分と高台部が残存する。高台は細長い三角形状を呈し、端部はほとんど面をなさない。風化が著しく、暗文等の調整は不明瞭である。26も底部で、口縁部から体部上半を欠損する。高台は端部が幅1㎜程度の面をなすが、断面三角形に近い。内面は見込み部分に0.2～0.4㎝前後の幅広い篦磨きを平行線状に粗く施し、その後体部に横方向の篦磨きを行なっている。外面には篦磨きが見られず、指頭圧痕が顕著に認められ、器表が凹凸面をなす。

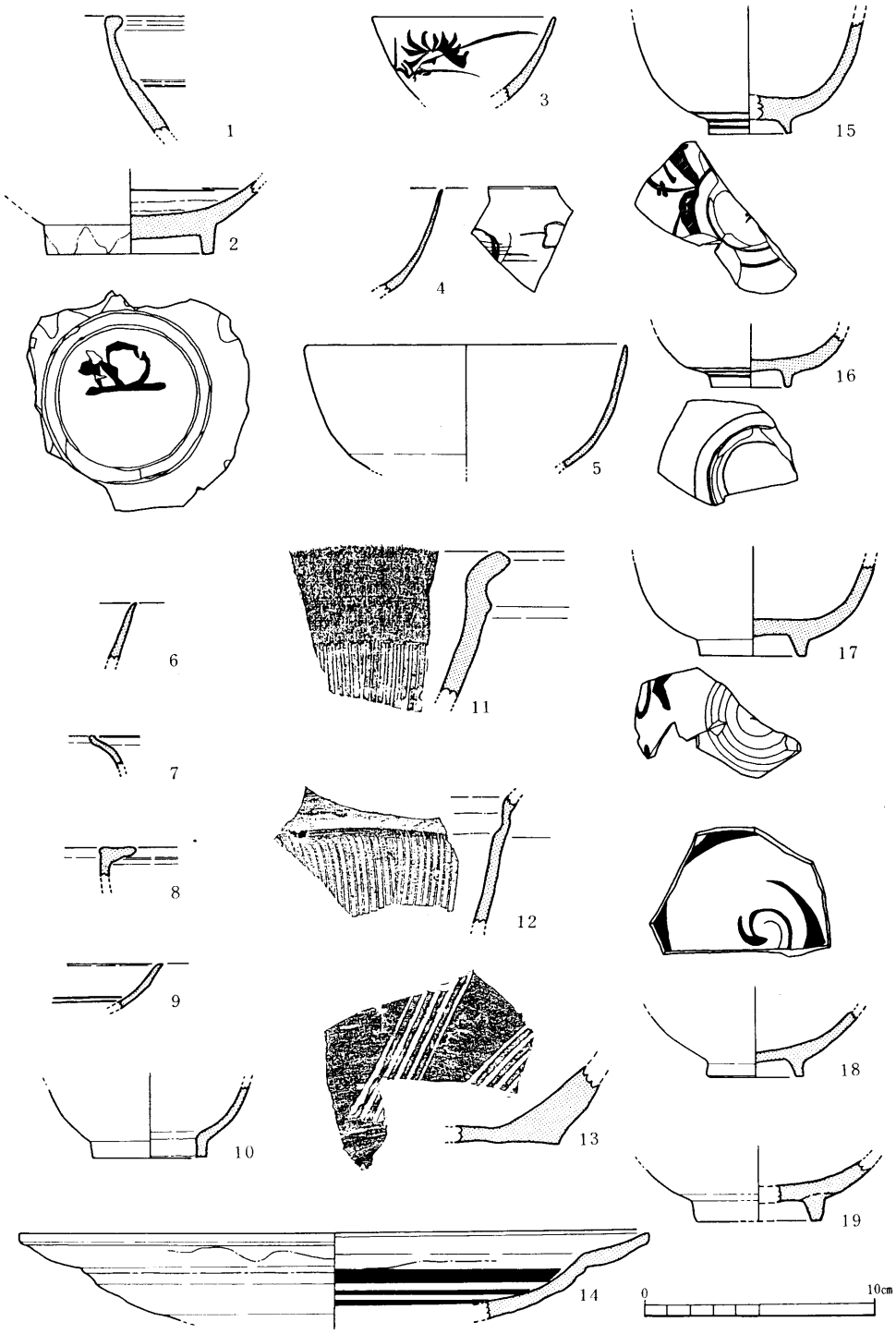


Fig.29　国産陶磁器

Tab.10 輸入陶磁器観察表

No.	器種	口径 *底径 (cm)	器高 (現存高) (cm)	色調 釉	色調 素地	胎土	焼成	備考
白磁（Fig.26）								
1	塊	13.6	(2.1)	濁った透明	灰白色	精緻	良好	
2	塊	15.0	(2.9)	やや濁った透明	灰白色	精緻 微細砂粒含む	良好	
3	塊	20.0	(2.1)	やや濁った透明	青灰白色	精緻 微細砂粒含む	良好	
4	塊		(2.6)	やや濁った透明	灰白色	緻密	良好	玉縁はやや粗雑
5	塊		(3.2)	やや濁った透明	青灰白色	緻密	良好	
6	塊		(2.7)	濁った透明	灰白色	精緻	良好	全体につくりが粗雑
7	塊		(2.8)	透明	灰白色	精緻	良好	
8	塊		(2.6)	やや濁った透明	灰白色	精緻	良好	玉縁はやや粗雑
9	塊		(2.7)	やや黒味を帯びる濁った透明	灰白色	精緻	良好	
10	塊		(1.9)	濁乳白色，内面貫入あり	乳白色	精緻	良好	33と同一個体か
11	塊		(2.7)	透明	灰白色	緻密	良好	玉縁は粗雑
12	塊		(3.0)	透明	灰白色	精緻 微細砂粒含む	良好	
13	塊		(2.6)	濁った透明，外面貫入目立つ	乳白色	精緻	良好	14と同一個体か
14	塊		(2.6)	濁った透明，内面貫入あり	乳白色	精緻	良好	13と同一個体か
15	塊		(3.4)	濁った透明，内面貫入あり	乳白色	精緻 微細砂粒含む	良好	
16	不明		(2.3)	透明	灰白色(白色強い)	精緻	良好	皿の可能性あり
17	不明		(2.3)	透明 非常に薄く施釉	灰白色	精緻 黒色粒子他 微細砂粒含む	良好	皿の可能性あり
18	皿		(1.7)	透明	灰白色(白色強い)	精緻	良好	
19	皿		(1.6)	黄色味を帯びる濁乳白色	灰白色	精緻	良好	
20	皿	8.0	(1.9)	やや濁った透明	灰白色	精緻	良好	
21	皿	10.0	(1.3)	透明	灰白色	精緻	良好	
22	塊		(2.9)	濁った透明	灰白色	精緻 微細砂粒含む	良好	
23	塊		(2.6)	透明	灰白色	精緻	良好	
24	塊		(1.7)	黒味を帯びる濁った透明	灰白色	精緻	良好	
25	塊		(1.4)	濁った透明，内外面貫入あり	褐色を帯びる乳白色	精緻	良好	
26	皿		(1.9)	透明	灰白色	精緻	良好	
27	塊		(2.6)	透明 非常に薄く施釉	青灰白色	緻密	良好	35と同一個体か
28	塊	19.0	(3.5)	やや黄色味を帯びる濁った透明	乳白色	精緻	良好	
29	塊	* 7.1	(2.3)	濁った透明	灰白色	精緻 黒色粒子他 微細砂粒含む	良好	底部 回転ヘラ切り
30	塊		(2.1)	やや濁った透明	褐色を帯びる乳白色	精緻	良好	釉の風化著しい
31	塊	* 7.2	(1.9)	白色を帯びる，やや濁った透明	灰白色	精緻 黒色粒子他 微細砂粒含む	良好	底部回転ヘラ切り
32	塊	* 8.4	(3.1)	透明	灰白色(白色強い)	精緻	良好	
33	塊	* 5.8	(2.8)	濁乳白色	乳白色	精緻	良好	10と同一個体か
34	塊	* 5.9	(2.5)	緑色を帯びる濁った透明	灰白色	精緻 微細砂粒含む	良好	
35	塊	* 6.2	(3.3)	透明 非常に薄く施釉	灰白色	緻密 内底に微細砂粒目立つ	良好	高台の沈線は意図的ではない 27と同一個体か
36	皿	* 4.9	(1.4)	白色の粒子混じる白色	灰白色	精緻 黒色粒子他 微細砂粒含む	良好	
37	皿	* 4.8	(1.6)	やや濁った透明	灰白色	精緻	良好	

Tab.11　輸入陶磁器・黒色土器観察表

No.	器　種	口径 *底径 (cm)	器　高 (現存高) (cm)	色調 釉	色調 素　地	胎　土	焼成	備　考
38	皿	* 5.0	(1.1)	黄褐色混じる透明	乳白色	精緻	良好	
39	皿	* 4.6	(1.1)	黄褐色混じる透明	乳白色	精緻　微細砂粒含む	良好	
龍泉窯系青磁（Fig.27）								
1	椀		(2.2)	緑灰色(灰色強い)	青灰白色	精緻	良好	Ⅰ－4 類
2	椀		(3.5)	青灰色	灰白色	精緻	良好	Ⅰ－6・b 類
3	椀		(4.3)	青緑灰色	灰白色	精緻	良好	
4	椀		(2.3)	青灰色	灰白色	精緻	良好	Ⅰ－5・a 類
5	椀		(3.0)	緑灰色	灰白色	精緻	良好	
6	椀		(2.5)	緑灰色	灰白色	精緻	良好	
7	椀		(2.1)	緑灰色	灰白色	精緻	良好	外面に文様あり（小片のため詳細不明）
8	皿		(1.9)	やや黄褐色帯びる緑灰色	灰白色	精緻	良好	
9	皿		(1.5)	緑灰色	灰白色	精緻	良好	外面に鉄分付着
10	皿		(2.1)	黄褐色帯びる緑灰色	灰白色	精緻	良好	
11	椀	17.2	(3.0)	青灰色	灰白色	精緻	良好	
12	椀	* 4.9	(3.5)	緑灰色	器肉：灰色 器表：灰茶褐色	精緻　微細砂粒含む	良好	
13	椀	* 4.8	(1.9)	緑灰色	暗灰白色	精緻　微細砂粒含む	良好	内面の釉は不良
14	椀	* 6.3	(3.0)	緑灰色	灰白色	精緻　内底には長石粒目立つ	良好	釉の剝落著しい Ⅰ－1 類
15	椀	* 6.4	(4.2)	緑灰色	青灰白色	精緻	良好	高台の沈線は意図的ではない　Ⅰ－1 類
16	椀	* 6.9	(2.5)	緑灰色	灰白色	精緻　微細砂粒含む	良好	
17	椀	* 6.2	(2.4)	緑灰色	器肉：灰白色 器表：緑灰白色	精緻	良好	Ⅰ－2 類
18	椀	* 6.2	(2.1)	緑灰色	灰白色	精緻	良好	Ⅰ－2 類
同安窯系青磁（Fig.28）								
1	椀		(3.0)	緑灰色	灰白色	精緻	良好	Ⅰ－1・b 類
2	椀		(2.9)	緑灰色	灰白色	精緻　微細砂粒含む	良好	Ⅰ－1・b 類
3	椀		(2.7)	緑灰色	灰白色	精緻	良好	Ⅰ－1・b 類
4	椀		(2.9)	緑灰色	青灰白色	精緻	良好	Ⅰ－1・b 類
5	椀		(3.1)	緑灰色	灰白色	精緻	良好	高台剝離痕あり Ⅰ－1・b 類
6	椀		(3.1)	緑灰色	灰白色	精緻　砂粒含む	良好	外面の片彫りは4条1単位　Ⅱ－1・c 類
7	椀		(2.8)	緑灰色	灰白色	精緻	良好	Ⅱ－1・b 類
8	椀	* 5.2	(2.6)	青緑色(透明度高い)	灰白色	精緻　微細砂粒含む	良好	底部回転ヘラ切り
9	椀	* 6.8	(2.1)	黄褐色混じる青灰色（灰色強い）	体部～高台上部：青灰白色 高台下部：茶灰白色	精緻	良好	底部回転ヘラ切り Ⅱ－2類か
10	椀	* 6.2	(2.0)	青灰色(灰色強い)	灰白色	精緻　微細砂粒含む	良好	底部回転ヘラ切り Ⅱ－2 類か
11	椀	* 5.2	(1.9)	緑灰色(緑色強い)	器肉：暗灰白色 器表：緑灰白色	精緻	良好	底部回転ヘラ切り Ⅰ－1・b 類
12	皿	* 5.5	(1.4)	灰色	灰白色	精緻	良好	Ⅰ－2 類
13	皿	* 4.0	(1.2)	灰色	器肉：灰白色 器表：淡黄灰色	精緻	良好	外底に墨書 Ⅰ－1・b 類か
黒色土器（Fig.28）								
14	椀		(2.1)	内面 外面口縁上部 } 黒灰色，外面下部濁黄灰褐色		精緻　微細砂粒含む	良好	
15	椀	* 7.4	(1.7)	内面：黒灰色 外面：やや淡い濁黄灰褐色で一部黒灰色		精良　細砂粒含む	やや不良	炭素の浸透著しい

Tab.12 黒色土器・緑釉陶器・瓦器・国産陶磁器ほか観察表

No.	器種	口径 *底径 (cm)	器高 (現存高) (cm)	色調 釉	色調 素地	胎土	焼成	備考
16	椀	* 7.0	(2.3)	内面黒灰色，外面やや淡い濁黄灰褐色で高台磨滅部は黒灰色		精緻 微細砂粒含む	やや不良	炭素の浸透度やや高い
17	椀	*10.2	(2.0)	内面黒灰色，外面濁黄灰褐色		精緻 細砂粒含む	良好	
18	椀	*10.9	(4.0)	内面黒灰色，外面濁黄灰褐色		精緻 細砂粒含む	良好	
緑釉陶器（Fig.28）								
19	皿		(1.2)	淡緑色	灰白色	精緻 微細砂粒含む	良好	須恵質
20	皿		(1.7)	淡緑色	灰白色	精緻 微細砂粒含む	良好	須恵質
21	椀	* 5.4	(1.7)	淡緑灰色	灰白色	精緻 細砂粒含む	不良	須恵質
22	椀		(2.8)	明緑色	淡黄褐色	精緻	良好	土師質
23	椀	* 5.9	(1.5)	暗緑灰色	淡褐色（黒色を帯びる）	精良 微細砂粒含む	不良	土師質
瓦器（Fig.28）								
24	椀		(2.2)	器表淡灰色，器肉灰白色		精緻 微細砂粒含む	良好	
25	椀	* 5.6	(1.0)	器表淡黒灰色，器肉灰白色		精良 微細砂粒含む	不良	
26	椀	* 5.3	(2.1)	器表黒灰色，器肉灰白色		精緻 微細砂粒含む	良好	暗文あり
国産陶磁器ほか（Fig.29）								
1	四耳壺		(5.0)	黄褐色（ほとんど剝落）	淡茶灰色	精緻	良好	中国産か
2	椀	* 7.2	(3.2)	乳灰白色	淡橙褐色	精緻	良好	外底に墨書の花押
3	椀	8.0	(3.6)	透明 染付は濁緑灰色	灰白色（白色強い）	精緻	良好	染付
4	椀		(4.5)	やや濁った透明 染付は緑灰色	灰白色（灰色強い）	精緻	良好	染付
5	椀	14.0	(5.4)	褐色味帯びる透明	乳白色	精緻	良好	やや軟質
6	椀		(2.5)	乳青白色	灰白色（白色強い）	精緻	良好	
7	壺		(1.4)	青味を帯びる透明	灰白色	精緻 黒色粒子含む	良好	
8	壺		(1.3)	明茶褐色 口唇部は光沢なし	灰白色	精緻	良好	
9	不明		(1.9)	淡青色を帯びるやや濁った透明 染付は青色	灰白色（白色強い）	精緻	良好	染付あり
10	不明	* 5.0	(3.1)	乳白色	乳白色	精緻	良好	やや軟質
11	擂鉢		(6.4)	——	器表，赤味を帯びる茶褐色 器肉，灰色	精緻	良好	
12	擂鉢		(5.6)	暗赤褐色	茶褐色 器肉の外面側のみ灰色	精緻	良好	
13	擂鉢		(3.4)	——	器表：茶褐色，器肉：灰色 器肉の外面側と外底は赤褐色	精緻	良好	
14	皿	27.2	(3.8)	①茶褐色 ②黒褐色 ③光沢ある明茶褐色	赤褐色，口縁に近づくにつれ灰色味強くなる	精緻	良好	
15	椀	* 3.6	(4.8)	やや青味を帯びる透明 染付は緑灰色と淡青灰色を使い分ける	青灰白色（白色強い）	精緻 外底に砂粒目立つ	良好	染付
16	椀	* 3.5	(2.4)	濁った透明で部分的に赤味を帯びる 染付は緑灰色	青灰白色（白色強い）	精緻	良好	染付
17	椀	* 4.6	(4.0)	乳青白色 染付は淡緑灰色	灰白色	精緻	良好	染付
18	椀	* 4.2	(2.8)	①乳白色 ②透明	茶褐色 器肉の外面側は赤褐色	精緻	良好	
19	椀	* 5.4	(2.6)	淡黄褐色（軟質）	内面灰色，外面赤褐色	精緻	良好	

高台部は横ナデを施す。なお内底面に重ね焼きと思われる痕跡を留める。色調は内面黒色で、暗文は光沢のある銀黒色を呈するが、外面は炭素の吸着が不十分で、一部は灰白色となる。これら3点の瓦器は、その器形や調整等の特徴から、県内でも類例の少ない畿内産の瓦器[2)]で、いわゆる和泉型に属するものと思われる。小片のため全体の形状や器高指数等は不明であるが、高台等の特徴により、尾上氏編年[3)]のⅢ期に相当し、13世紀前半を下らない年代が想定できる。なお和泉型瓦器椀は、これまで瀬戸内地域で広くその分布が確認されているものである[4)]。

国産陶磁器ほか（Fig.29, 1～19　PL.23）

1は中国産の四耳壷と推定される口縁部片である。頸部は短く窄まり、内傾する口縁を持つ。端部は肥厚し、外方に突出する。頸部と胴部の境には、断面台形の小さな隆帯を巡らす。なおこの種の器形のものは、県内では周防国府跡等でも発見されているが、経筒の外容器に転用されることも多く、山口市坂本経塚、山陽町長光寺山経塚等に例をとることができる。本例は12世紀後半から末に比定できる資料である[5)]。

2は埦の底部で、ほぼ直立するしっかりした高台を持つ。内底見込みの釉を輪状にカキ取り、それよりやや上方に1条のロクロびき沈線を有する。高台から外底にかけては施釉しない。なお外底には墨書の花押が認められる。5・6は埦の口縁部である。5は体部が内彎しながら立ち上がり、中位からは直線的に外上方にのびる。6は端部をわずかに外反させる。7は小型の壷の口縁部で、短く上方に屈曲する。8も壷の口縁部と思われ、直立した口縁端部の外側を大きく外方に拡張させる。9はやや内彎する口縁部で、体部内面には2条の染付の細線を有する。10は畳付部を露胎とする。9・10は小片で器種不明である。

11～13は擂鉢である。11は口縁部で、内外面ともナデ調整が施される。内面下半には櫛状工具による放射状の筋目を有する。12は体部片で上位に屈曲が認められ、内面には太い凹線状の窪みを有する。内面の屈曲部以下には比較的細かい放射状の筋目を持つ。13は底部片で、体部の器肉がやや厚めであるにもかかわらず、底部は薄い。内面には5条を一単位とする筋目が認められる。14は大形の皿で、底部を欠損する。体部上位で外方に屈曲し、やや内彎する口縁部へと続く。屈曲部以下には、まず内外面ともに釉を施し、内面に限ってその上に重ねて施釉したものを縞状に残しながら削り取る。更にその後、口縁部の内外面に再び施釉する。3・4・15～17は近世の染付の埦である。3は小埦の口縁部で、体部には優美な菊花文が描かれる。4も口縁部で、外面には花文の一部が認められる。15・16は底部で、畳付部以外は全て施釉する。15は高台およびその付近に3条の圏線を巡らせ、

体部には花文を描く。16は15とほぼ同位置の３条の圏線に加えて、外底にも１条の圏線を巡らす。釉は不良で厚い。17も底部で、花文を有し、畳付部から外底にかけては施釉されない。18・19も近世の椀の底部である。18は内外面とも釉を渦巻状に施した後、再び施釉する。19は外底および高台部を除き施釉するが、内底では剝落が目立つ。

（杉原和恵＊・吉田　寛＊）

〔注〕
1）横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について－型式分類と編年を中心として－」（『九州歴史資料館研究論集』４、1978年）。
2）周防で他に畿内産の瓦器を出土する遺跡には、防府市周防国府跡がある。
吉瀬勝康「周防国府跡出土の瓦器」（『古文化談叢』第14集、1984年）。
3）尾上実「南河内の瓦器椀」（『古文化論叢』藤沢一夫先生古稀記念、1983年）。
4）川越俊一「中・四国地方の瓦器－特に広島県下出土例を中心として－」（『芸備』第11集、1981年）。
5）田平徳栄「輸入陶磁器の性格と年代」『霊仙寺跡』（『東脊振村文化財調査報告書』第４集、1980年）。

(3)　石製品

石製品の大半は各包含層から出土しており、遺構内出土のものは１点（１）のみである。なお、説明上、平面図が両面記載の場合は便宜的に左図をＡ面、右図をＢ面とし、片面の場合は記載図をＡ面、裏面をＢ面とする。法量はTab.13の法量表に記述し本文中では省略した。また石質の専門的鑑定は将来に譲るもので、現時点明らかなもののみ記した。

石鏃（Fig.30，１～３　PL.24）　１は完形品で、平面正三角形を呈し、基部形態は凹基無茎式である。先端は鋭く尖り、基部は体長の⅓以上まで大きく抉りが入る。全体的に丁寧な整形で、縁辺は交互剝離によって細かく調整が施されており、断面はレンズ形である。石質はチャート。２は先端部を欠失しているが二等辺三角形を呈する凹基無茎式の鏃で、基部は大きく抉りが入る。縁辺は粗雑な交互剝離による調整がなされ、Ａ面には中央から先端、および両逆刺端へむかって稜を有す。Ｂ面中央部は大剝離面のままで平面をなす。断面には厚みがある。石質は安山岩系。３は石鏃の未製品と思われるもので、原材の表皮部を剝いで扁平な剝片をとり、Ａ面は周縁に粗雑な剝離による整形を施しているが、中央部から先端、および一部周縁には自然面が残存し、Ｂ面は大剝離面のままである。基部は弧状をなす。なお、石錐の可能性もある。石質は安山岩系。

石器剝片（Fig.30，４・５　PL.24）　４は水晶製の剝片で、図の右半部両面周辺には細かい調整剝離がみられ、一部刃が潰れている。５は姫島産黒曜石で、両面とも調整剝離面は認められない。

石斧（Fig.30，６～８　PL.24）　３点あり、いずれも太型蛤刃石斧である、６は刃部で、基部中央で裏面にかけ大きく剝離欠損。刃部の形状は円刃であり、刃先にはわずか

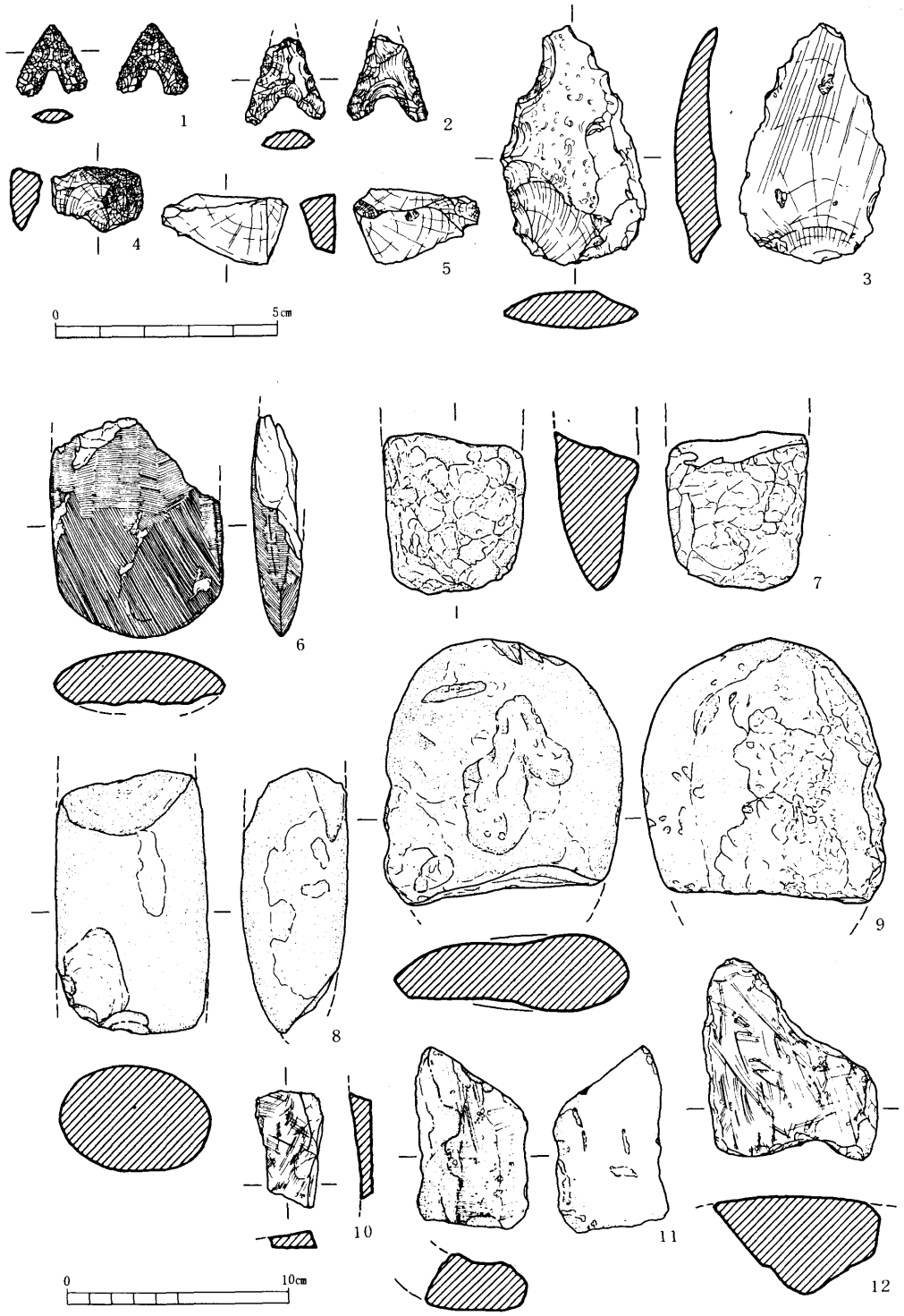


Fig.30　石製品　その1

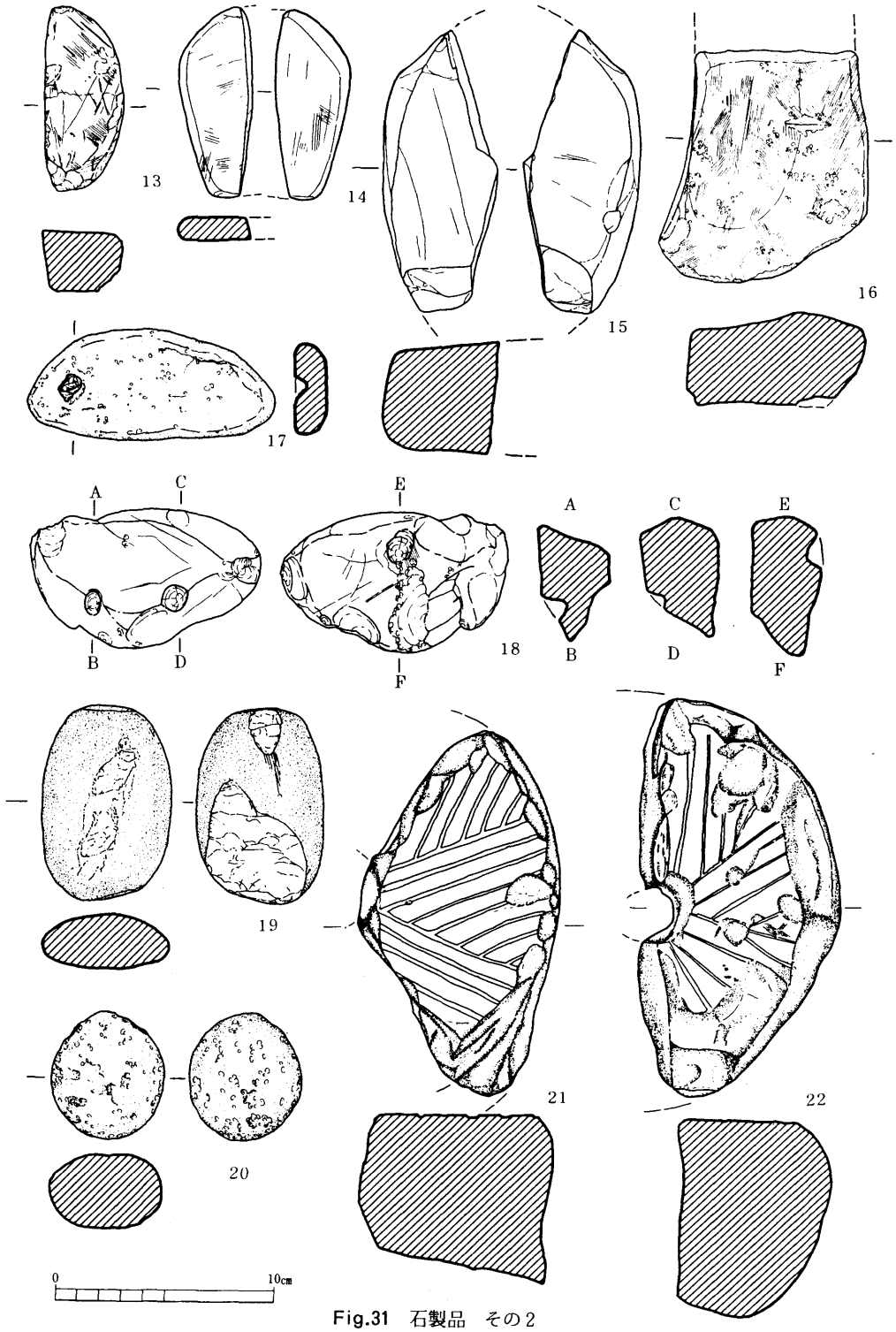


Fig.31 石製品 その2

に使用痕が認められる。表面は全体に丁寧に研磨されており、刃部では右下りの斜め方向に研磨痕がみられる。断面はレンズ形をなす。7は基部中央で横割れ破損。器表は一部研磨面を残すが、ほとんど二次的な打撃によって剝落している。断面は概して楕円形である。8は基端および刃先欠損。断面は厚味のある楕円形を呈する。器表には一部研磨調整痕が認められるが、風化が著しく器表の約½は剝離している。

凹石（Fig.30，9　PL.24）　1点のみ出土。平面楕円形を呈すると思われるが、一端部が約¼程度欠損する。器表は風化が著しいが、両面とも中央部には敲打による凹みがあり、B面ではかなり広く認められる。

砥石（Fig.30・31，10～16　PL.24，25）　7点出土しており、13以外は破損および一部欠損する。10は小破片で、A面と右側面に研砥面が残る。11は風化が著しいが、曲面を呈する研砥面がある。また器表の一部に、鑿状工具の削りによる痕跡を留める。12はA面のみ研砥面が残存しており、表面には細かい擦痕が認められる。13は全面を研砥面として使用。A・B両面、左側面は、わずかながら中凹みを呈する。14は片側面が欠損する。使用痕として細い擦痕が残る。15はA・B両面が研砥で平坦面をなす。16はA・B両面および左側面を研砥面として使用し、曲面を呈する。風化を受けているが、表面には使用痕を認める。

用途不明石製品（Fig.31，17・18　PL.25）　17は平面長楕円形を呈する扁平な自然石の長軸方向片面端部寄りの1カ所に、深さ0.5cmを測る敲打および回転穿孔による明らかに人為的な凹穴を有するものである。18もA面2カ所、B面1カ所に径1cm前後、深さ平均0.7cmを測る凹穴をもつ。B面の一部には敲打痕が認められる。全体が磨滅している。

磨石（Fig.31，19・20　PL.25）　19は平面楕円形の扁平な転礫を利用したもので、B面は二次的な剝離面をもつが、全体によく研磨が施されている。上下両端は敲打によって平坦面をなす。またA面中央部および側辺の一部にも敲打痕が認められる。20は小型のもので、全面に使用痕がみられるが器表には敲打痕が顕著に残る。

石臼（Fig.31，21・22　PL.25）　2点出土。21は下臼（雄臼）、22は上臼（雌臼）である。21は臼面を約⅓残し、受皿以下は欠損。臼面は直径20cm内外で受皿内底面から約3.5cmの高さを測り、ふくらみは無く平坦で、8分画8溝が施される。芯棒孔は復原径2cm内外。22は上面が欠損しており、平面図は下面を記載する。復原径19cm内外を測るもので、約½程欠損する。風化がかなり著しく、大部分は元の器表面を留めない。臼面は平坦面をなし、目は8分画で、溝数は現状では断定し難いが、6～7本と推定する。側面中位には中心線を挟んで対峙する2カ所に挽き穴と察する深さ2.5～3cmの方形孔が施される。

Tab.13　石製品観察表

（　）は現存値

番号	器種	長さ (cm)	最大幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石質	出土地
1	石鏃	1.6	1.6	0.3	0.6	チャート	柱穴
2	石鏃	(2.0)	1.8	0.4	(1.1)	安山岩系	第9層　橙褐色粘質土
3	石鏃未製品	5.3	3.3	0.8	15.5	安山岩系	第29層　灰褐色粘質土
4	剝片	2.0	1.4	0.7	2.4	水晶	排土中
5	剝片	2.8	1.5	0.8	3.5	黒曜石	第5層　黄灰褐色土
6	石斧	(9.8)	7.5	(2.4)	(220.0)		第30層　茶褐色粘土
7	石斧	(7.2)	6.3	3.8	(225.0)		第30層　茶褐色粘土
8	石斧	(11.9)	6.8	4.7	(594.5)		第33層　黒色粘土
9	凹石	12.0	10.9	3.4	(608.0)		第33層　黒色粘土
10	砥石	(3.0)	(5.3)	0.7	19.0		第22層　黒茶色粘土
11	砥石	(8.2)	(5.2)	2.6	97.3		第29層　灰褐色粘質土
12	砥石	(9.1)	(7.9)	4.6	226.5		第22層　黒茶色粘土
13	砥石	8.4	3.7	2.7	136.1		第22層　黒茶色粘土
14	砥石	8.7	(3.4)	1.1	51.0		排土中
15	砥石	(12.9)	(5.3)	5.1	511.1		第30層　茶褐色粘土
16	砥石	(10.5)	9.5	4.0	579.5		第36層　灰黒色粘質土
17	用途不明石器	11.4	5.1	1.5	161.3		第33層　黒色粘度
18	用途不明石器	10.4	6.4	3.6	286.5		第33層　黒色粘度
19	磨石	8.8	5.8	2.4	231.0		第27層　灰黒色土
20	磨石	5.8	5.1	3.4	139.9		第22層　黒茶色粘土
21	石臼	(16.5)	(9.1)	8.4	1462.0		SE1
22	石臼	(18.0)	(9.1)	9.0	1879.5		SE1
23	石銙	2.5	4.1	0.6	11.5		第33層　黒色粘土

芯棒孔は径3.5cm内外。なお、21と22は石質が異なる。

石銙帯（Fig.32　PL.25）　石銙帯は丸鞆1点である。平面形は楕円形を長軸方向に平行して約⅕程度切りとった形を呈し、下辺は直線をなす。中央やや下寄りに1.8×0.3cmの長方形の透し穴があり、透し穴の中央部上方と左右やや下方の三方に裏面まで貫通する径0.1cmの小穴が穿たれている。表面・側面は丁寧な研磨面であるが、裏面は潜り孔部分を中心にかなり剝離している。周縁は面取りが施される。なお、この種の丸鞆は、革帯に金属の鋲で以って装着するもので、亀田氏[1]の分類に従えばCタイプ、平城宮調査報告書[2]では石銙帯aに属し、同類のものは平城京東三坊大路、京都府西野山古墳などから出土しており、山口県内では見島ジーコンボ古墳群のものに、裏金具を伴ったものがある。

石製品の時期について　これら石製品は共伴する土器が明確ではないため、詳細な時期を比定することはできないが、他遺跡出土の同種遺物からの類推によって、次のように考えられる。1～5の石鏃・石器剝片は、弥生時代までにおさまる。その中でも1・2は形状的に縄文時代にまで遡り得るもので、特に1は縄文時代の範疇でも古い段階に属するものと察する。6～8の石斧は、いずれも弥生時代のものと考えられる。9の凹石は、県内の類例から見て弥生時代のものである可能性が高い。10～16の砥石は時間の経過に伴う顕著な形態・石質の変化はみられず、また、使用・研ぎ直しによる形状の変化などの理由により、特に破片にあっては、それ自体から時代を判断することは、極めて困難である。17・18の用途不明石製品、19・20の磨石については、いずれも時期が不明である。21・22の石臼は、より遡っても中世と思われる[3]。23の石銙帯は阿部義平氏[4]によるとこのタイプは796年から807年に行なわれた可能性が強いとの見解がある。

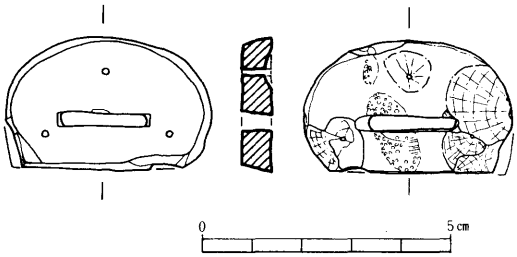


Fig.32　石銙帯

（西本泰子＊・小田信子＊）

〔注〕
1）亀田博「銙帯と石帯－出土銙・石銙の研究ノート」（『考古学論叢』関西大学考古学研究室、1983年）。
2）奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告Ⅵ』（1975年）。
3）三輪茂雄『臼』（1978年）。
4）注2）に同じ。

(4)　木製品

1～7（Fig.33　PL.26）は落ち込み部包含層下層出土。8（Fig.34　PL.27）はSE1内出土である。

1は木簡である。一端部は方頭で左右から端部側縁を切り欠くが、反対の端部は欠損して形態不明である。墨痕は認められない。現存長10.0cm、幅3.8cm、厚さ0.5cm。2は柄杓の柄である。全体を滑らかに丸木状に削り、先端部を両側から削って尖らせている。長さ32.7cm、直径2.0cm。3・4は下駄であり、両者とも連歯のものである。3は平面は長楕円形を呈し、歯を削り出した際の鋸の痕が残っている。前緒孔は円形で、横緒孔は欠損しているが、楕円形で垂直に穿孔されている。位置は台の中央よりやや後部にある。なお、台表面には前緒孔に接して、足指による磨滅によって生じた浅い凹みがわずかに認められる。長さ18.9cm、幅9.8cm、台の厚さ1.8cm。4は平面は不整長楕円形を呈する。現状は中

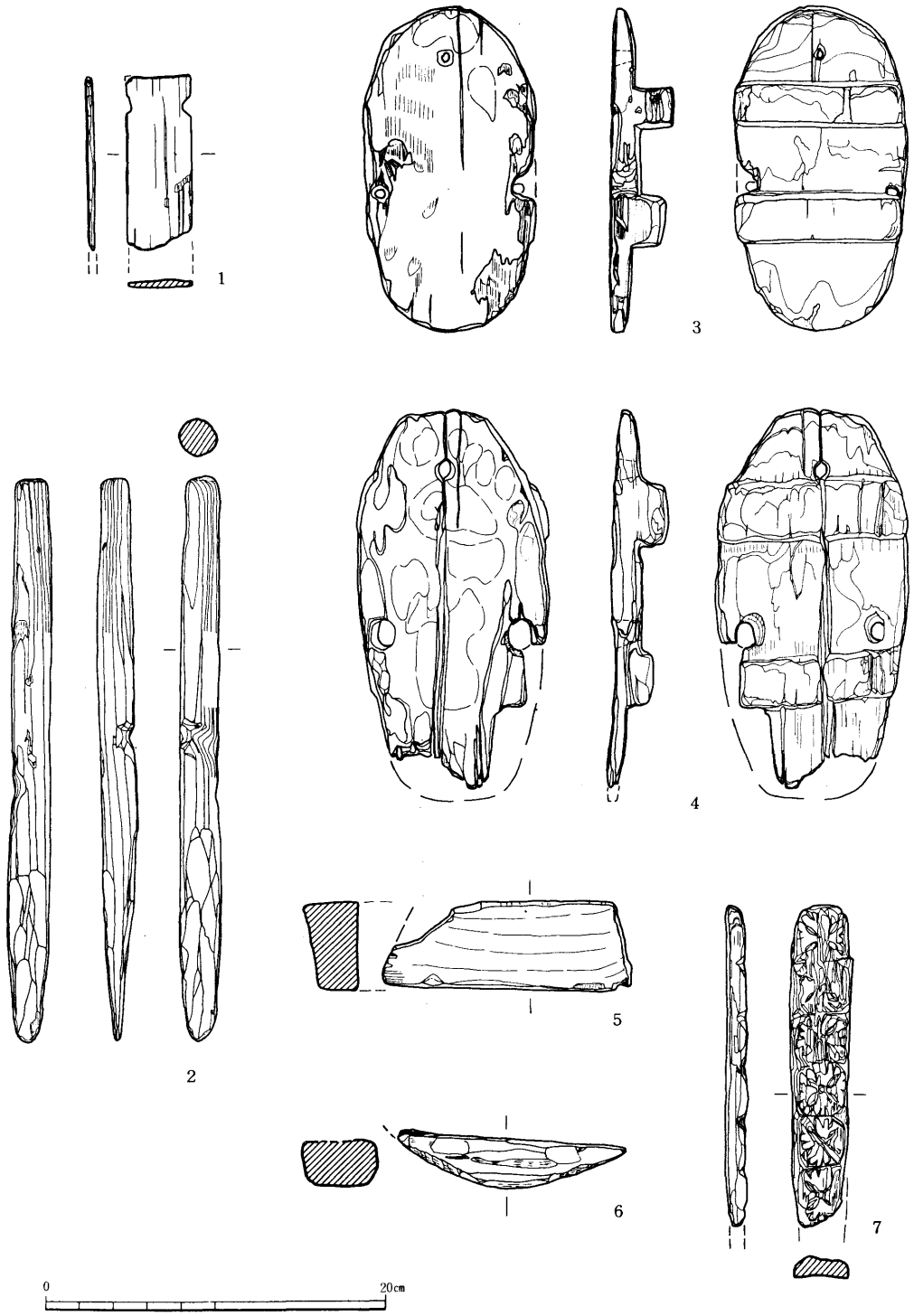


Fig.33　木製品　その1

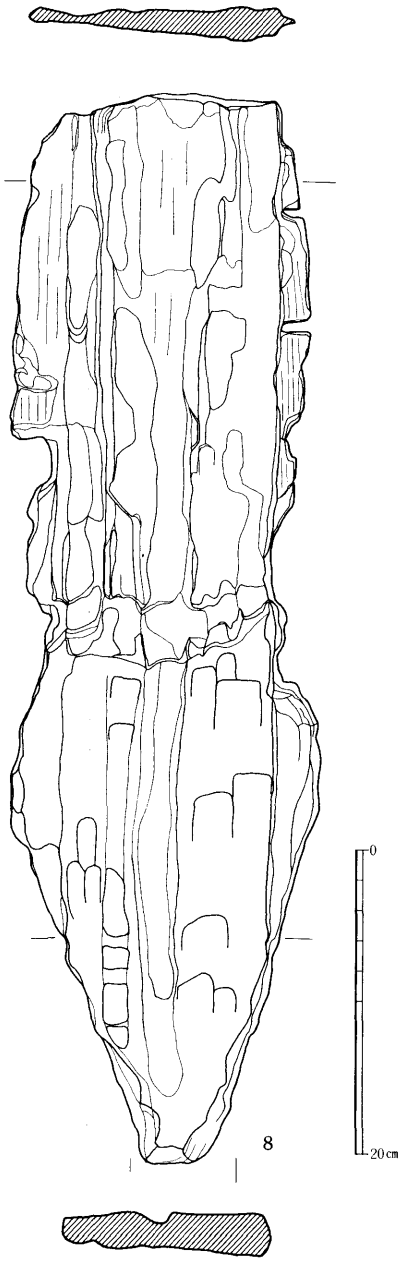


Fig.34　木製品　その2

央で2つに割れ、下方部は折損しており、歯の磨滅が激しく、残りは悪い。前緒孔は円形で垂直に、横緒孔は楕円形で内側に傾けてそれぞれ穿孔されている。台表面には指や足裏による磨滅によって生じた浅い凹みが残っており、それによると右足用と考えられる。現存長22.2cm、幅11.1cm、台の厚さ1.9cm。5は下駄の歯と思われるもので、下方に広がる形状を呈し、比較的高い。現存長14.6cm、幅5.1cm、最大の厚さ3.2cm。6・7は用途不明品である。6は弧状を呈する面をもち、反対側は大部分欠損しているが、おそらく直線的になるものと思われる。表面には焦痕が認められる。現存長13.2cm、幅2.9cm、厚さ4.4mm。7はわずかに先端部が欠損するが、完形にちかいものである。平面形は一方にやや窄みぎみの隅丸長方形を呈し、断面は蒲鉾形である。やや彎曲する方の面に刻みによって6区画をつくり、その中に「＊」形の模様を施している。現存長18.7cm、幅3.7cm、厚さ1.2mm。8は矢板で、井戸枠として使用されたものである。長方形の板の先端を矢状に尖らせている。表面の腐蝕が激しい。長さ70.8cm、幅20.6cm、最大厚2.4cm。

（菅波正人＊）

(5)　金属器・瓦・植物遺体

金属製品には古銭・鉄釘・スラグなどがある。古銭（Fig.35，1～3　PL.27）は3枚出土しており、いずれも渡来銭であ

る。1・2は唐の武徳4年(621年）初鋳の「開元通宝」で、1は錆化が少なく、文字は鮮明。灰褐色粘質土層出土。2は腐蝕・錆化が進んでいる。包含層出土。3は北宋の元豊元年（1078年）初鋳の「元豊通宝」で、錆化は少ないが多少磨耗している。灰色グライ土層出土。鉄釘（Fig.35，4　PL.27）は1点出土し、茎部断面方形を呈する角釘の上半部である。上端を短かく折り曲げ頭部としている。銹化は著しい。現存長3.8cm、茎部厚0.6cm。スラグ（PL.27）は3点で、径3～4cm、厚さ1.5～2cm程度の小さいものである。黒色粘土層他包含層出土。その他金属品として、黒色粘土層から鉄製品の一部とみられる長さ5.3cm、厚さ4cmの板状鉄片（PL.27）が出土しているが、銹化が著しいため詳細不明。

瓦（Fig.35，5　PL.27）は、瓦当面に唐草文を配した軒平瓦の破片一点がある。色調は淡青灰色、焼成は堅緻。表面には透明釉が薄くかかる。時期は近世以降。

植物遺体としては、マツカサ（PL.27）が数点あり、いずれも各包含層より出土。その他に近世の井戸内Pitより桜の皮（PL.27）も出土している。

（森　田）

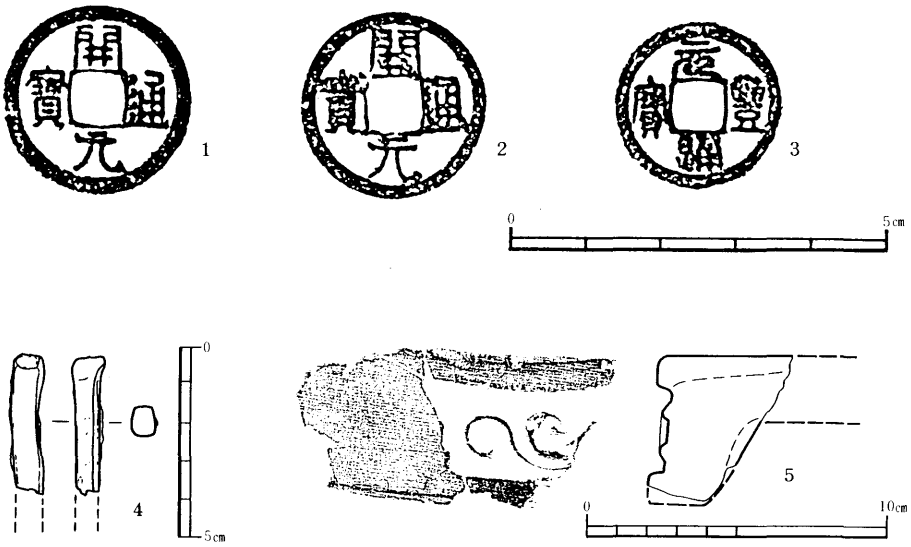


Fig.35　金属器・瓦

6　小　結

1．遺構について

今回検出されたのは調査区東部および南西隅で確認された低丘陵上で掘立柱建物跡１棟、土壙３基、柱穴多数および両丘陵縁辺部を侵食しつつ北ないしは北西に開ける谷の谷頭付近を中心として営まれた井戸５基である。

掘立柱建物跡は近世に下るもので身舎１間×１間である。土壙のうちSK１は平面形態隅丸方形で床面から炭化物とともに１個体分の高坏が出土したが、谷頭付近包含層出土の数点の高坏と時期的に大差なく、周辺における遺構の分布状況等から推して谷あいにおける祭祀と係わりをもつものと推察される。井戸は木組みのもの（SE１）、素掘りのもの（SE５・６）がある。また基底面に曲物を設置した例（SE２・３）があるが上部が削手されているため井側の構造は判然としない。このうちSE１は東、北両側辺部分は欠失しているが他の二側辺に沿って横位に据えられた井側にあたる矢板等の転用部材が内側に倒れ込んでおり、横板組みの施設が想定される。両部材とも四隅に枘穴、切り込み等の加工痕は認められない。また、西隅矢板の両側には杭の可能性をもつ部材が検出され、岡山県下市瀬遺跡井戸Ⅱ[1]（畿内第Ⅴ様式）に類似する。基底面からは布留式併行の甕が出土しており、全国的にも類例の少ない井戸の資料である。

学内における同時期の住居は本調査区南東約90mのＮ－14区（第二学生食堂敷地内）で竪穴式住居６基が検出されており、谷頭周辺の湧水点付近へ営まれた井戸を単位とした住居・集落の一定のまとまりが考えられるのに対して、本調査区南西約50mに位置するＬ・Ｋ－14区（本部管理棟敷地内）[2]で検出された室町時代の石組み井戸１基は環濠内の建物に個別に付随し、建物に規制された分布状況を示している。奈良・平安時代では建物と井戸との相関関係に今後の検討を要するが、防府市下右田遺跡[3]にみられるように少くとも鎌倉時代以降、井戸が一単位の住居に付随し機能するようになるものと思われる。

今回検出されたSE１は古墳時代以降の人々の動態、社会の成長を如実に反映する井戸を媒介とした住居、集落の復原に極めて貴重な資料を提供した。また、遺物包含層からは８Cから16Cの遺物が多量に出土しており、学内において住居、集落の復原が時間的連続性をもって行いうる可能性を秘めており、周辺地域における今後の調査が期待される。

（河　村）

〔注〕

１）岡山県教育委員会『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査１』（1973年）。
２）山口大学埋蔵文化財資料館『山口大学構内遺跡調査研究年報－昭和56年度－』（山口大学、1982年）。
３）山口県教育委員会『下右田遺跡　第１・２次調査概報』（1978年）。
　　山口県教育委員会『下右田遺跡　第３次調査概報』（1979年）。

2.　遺物について

出土遺物は縄文時代から近世まで各時代のものがある。その大半は遺物包含層出土のもので遺構に伴うものは少ない。量的には奈良時代から室町時代にかけての土器類が多い。

縄文時代の遺物としては石鏃（Fig.30，1）があり、形態的に早・前期の可能性をもつ。これまで吉田遺跡の既出遺物中では晩期のものが最も古いとされてきたが、本例の出土により吉田遺跡の歴史がさらに遡ることとなった。

弥生・古墳時代の遺物は、本調査地点より南方背後にあたる丘陵部に同時代の集落跡が確認されていることから、その地域からの流れ込みが大半と推定されるが、出土量は他の地点に比べて少ない。なお、古墳時代の遺物の中で、高坏（Fig.19）は谷頭の湧水点近くから完形を含め集積した状況で出土しており、この地での祭祀行為に伴ったものと察する。

奈良時代から鎌倉時代にかけての遺物には、遺跡の性格を解明する上で注目されるものが多い。その中には石銙帯、木簡、畿内系瓦器など山口盆地初例のものがある他、緑釉陶器や陶硯など周防国内においては稀少な遺物も出土し、また白磁や青磁、銅銭など中国から輸入されたものも含まれている。なお、この時代における遺跡の性格を遺物から若干考えてみると、まず奈良時代から平安時代初めにかけては石銙帯から律令官人、陶硯から識字層者との関係が看取され、この地に官人を含めた上層階級者の存在が察せらる。また、包含層出土のため時期を断定できないが、木簡（付札）の出土により当地が物資集散地にあてられ、前述の遺物を含め勘案すると、当時吉田遺跡が律令機構の地方行政組織の範疇に組み込まれていたと推定され、当調査地周辺にそれに係わる施設の存在が予想される。さらに、中世初めにおいては、これまで周防国府跡でしか出土していない畿内から搬入された瓦器や、周防国内の在地集落跡と比べて量的に卓越している輸入陶磁器類などから、富裕層の存在が伺われる。具体的には文献史料においてもこの地における古代・中世時の集落・施設等は全く明らかではなく、今後の研究を待たなければならないが、その解明にあたっては、律令下時代では郡家（吉敷郡衙）、郷家（浮囚郷など）、初期庄園（椹野庄）、中世に至っては保（恒富保）、在地豪族の館（吉田氏）などの関係を考えなければならないと察する。この問題は吉田遺跡自体のみならず、山口盆地内における古代・中世史研究にとっても大きな課題であり、今後の調査に期待される。

（森　田）

第３章　吉田構内ラグビー場防球ネット設置に伴う調査

１　調査の経過

当調査地点は、吉田構内の西寄りに位置するラグビー場の北東端の一辺にあたり、遺跡保存地区のすぐ北西、また昭和56年度に発掘調査が行なわれた教育学部講義棟の西隣りにあたる地域である。調査の契機となった防球ネット設置はラグビー場北東辺と南西辺の二カ所に計画されたものであるが、後者側については周辺における既往の調査結果並びに工事内容等を勘案するに埋蔵文化財に対する影響はないと推定されたことから、調査対象からは除外した。ただし、北東側は周辺での遺跡の埋蔵状況から察して遺物、遺構が遺存している蓋然性が非常に高いと考えられたため、昭和58年12月20日から年末までを予定として調査を開始した。しかし後述のごとく当初の予想以上に遺構、遺物を検出したためさらに延長して昭和59年１月19日まで実質約20日間にわたって発掘調査を行なった。

調査はまず防球ネットに伴う側溝の付設予定地の範囲に幅１ｍ、長さ90ｍのトレンチを設定し、さらに南西側に10ｍ間隔で接して設置される支柱基礎部分（北から順に第１～第11グリッド）についても前者のトレンチから張り出す形で調査区を設定した。発掘調査は、とくに側溝付設部分のトレンチに関して、工事掘削深度までの範囲を実施した結果、南半部で竪穴式住居跡１基、溝３条、土壙１基、柱穴等の多数の遺構が検出され、また遺構面が南から北へ向かって傾斜していることも明らかになった。ただし、北半部では遺構面が工事基底面よりもさらに下方に位置することが察せられるに及んで、工期の関係、かつ遺物包含層、遺構等が存在しても直接破壊されることはない点等を考え基底面以下の調査は控えた。なお、構内造成に伴う置土までは機械を使用して排除し、それ以下は手掘りによる分層発掘を行なった。

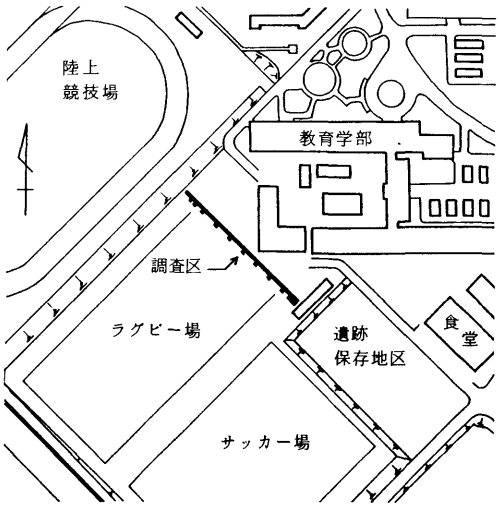


Fig.36　調査区位置図

2　層位

調査域の現地表面標高は概ね18.80ｍ前後である。現地表面から遺構面に至るまでの基本堆積層は第１層；真砂土、第２層；石炭殻、第３層；埋め土、第４層；暗褐色粘質土、第５層；褐色粘質土である。第１～第３層は大学統合移転時の造成に伴うもの。第４層は旧水田の耕作土であり、約10㎝程度の厚さで全体的に南東から北西に向ってゆるやかに傾斜する。第５層は水田の床土で、平均約10㎝の厚さで、やや南東側の方が厚い。第４層と同様、全体的に北西に向かって傾斜しているが、$y=360$付近から北側、少なくとも$y=350$付近まで褐色粘質土は認められない。地山（遺構面）は黄褐色粘質土ないし黄橙色粘質土で、南東側では砂礫混りになる。なお、住居跡付近の西壁断面には遺物包含層の堆積が認められるのに対し、東壁断面では全く見られないこと、およびトレンチ北西端付近では構内造成に伴う置土直下が地山（橙色砂礫混り粘質土）となっていることなどから、調査域内は後世において幾度か削平を受けているものと考える。

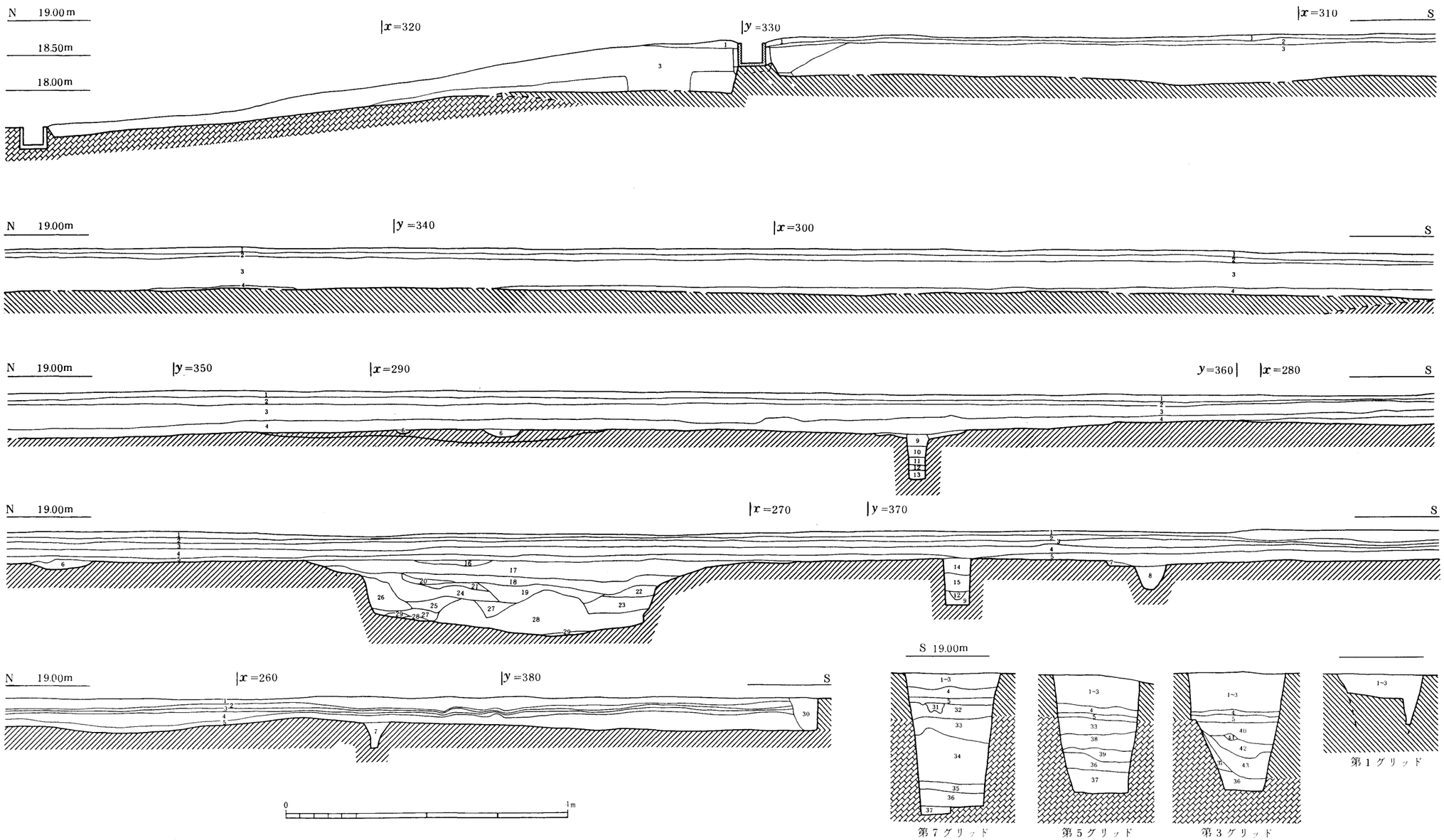
一方、支柱基礎グリッドでトレンチ北半部の旧地形把握および遺構面下の土層確認のための深掘りを行なった結果、第３グリッド、すなわち、$x=308$、$y=335$付近以西では後世に地山の削平が行なわれており、水田造営時に約80㎝の客土を行なって水田面を造出していることが判明した。

3　遺構

今回の調査で検出した遺構は竪穴式住居跡、溝、土壙、柱穴、暗渠等である。遺構の大半はトレンチ南半部で検出し、北半部分については遺構面まで掘削しておらず不明である。南半部に限って述べると、包含層のほとんど残存しないこと、また同一遺構面で埋土の異なる遺構が検出されることなどから、遺構の多くは後世多少なりとも上部が削平されていると察する。

(1)　竪穴式住居跡（Fig.39　PL.29～31）

トレンチ内南端に位置する。今回の調査範囲では全体プランの約３分の１程度を検出したに留まり、全体の規模等については把握していない。平面形態は隅丸方形になるものと推定されるもので、東辺4.45ｍ、現存壁高27～37㎝を測る。住居跡は包含層である第６・７層から掘り込んで造営されており、住居跡の埋土は西壁断面において第８～第11層である。壁溝は認められず、また住居跡内で柱穴が４個検出されたが、住居に伴うものかどうかは判然としない。埋土中からは多量の土器類が出土した。床面付着のものもあるが、多くは第８層の黒褐色粘質土に包含するものである。



層　位

- 地山面
- 未完掘面
- 遺構面

1 真砂土
2 炭　殻
3 構内造成時の置土
4 暗褐色粘質土（旧耕土）
5 褐色粘土質
6 暗茶褐色粘質土
7 暗黒褐色粘質土
8 明黒褐色粘質土
9 灰色土
10 黄褐色粘質土
11 砂　層
12 木　枝
13 灰色細砂
14 淡黄灰色土
15 小石を多く含む淡灰色砂礫
（暗渠埋土）

16 黒灰色砂混り土
17 黒褐色土
18 茶褐色土
19 黒茶褐色土
20 暗茶色粘土
21 暗灰色砂礫
22 暗灰橙色土
23 黒灰色土（シルトに近い）
24 橙褐色土
25 灰白色シルト
26 黄褐色粘質土
27 灰色シルト
28 灰色砂礫
29 黒色粘土
（1号溝埋土）

30 攪　乱
31 茶色粘質土
32 淡褐色粘質土
33 黄褐色粘質土（地山）
34 黄色粘質土
35 灰褐色粘質土
36 黄色味を帯びた青灰色粘質土
37 青灰色粘質土
38 黄褐色粘質土（マンガンを含む）
39 青灰色砂質土
40 黄褐色粘質土（黒褐色粘質土を含む）
41 灰白色粘質土
42 明灰白粘質土
43 暗青灰色粘質土

Fig.37　土層断面図

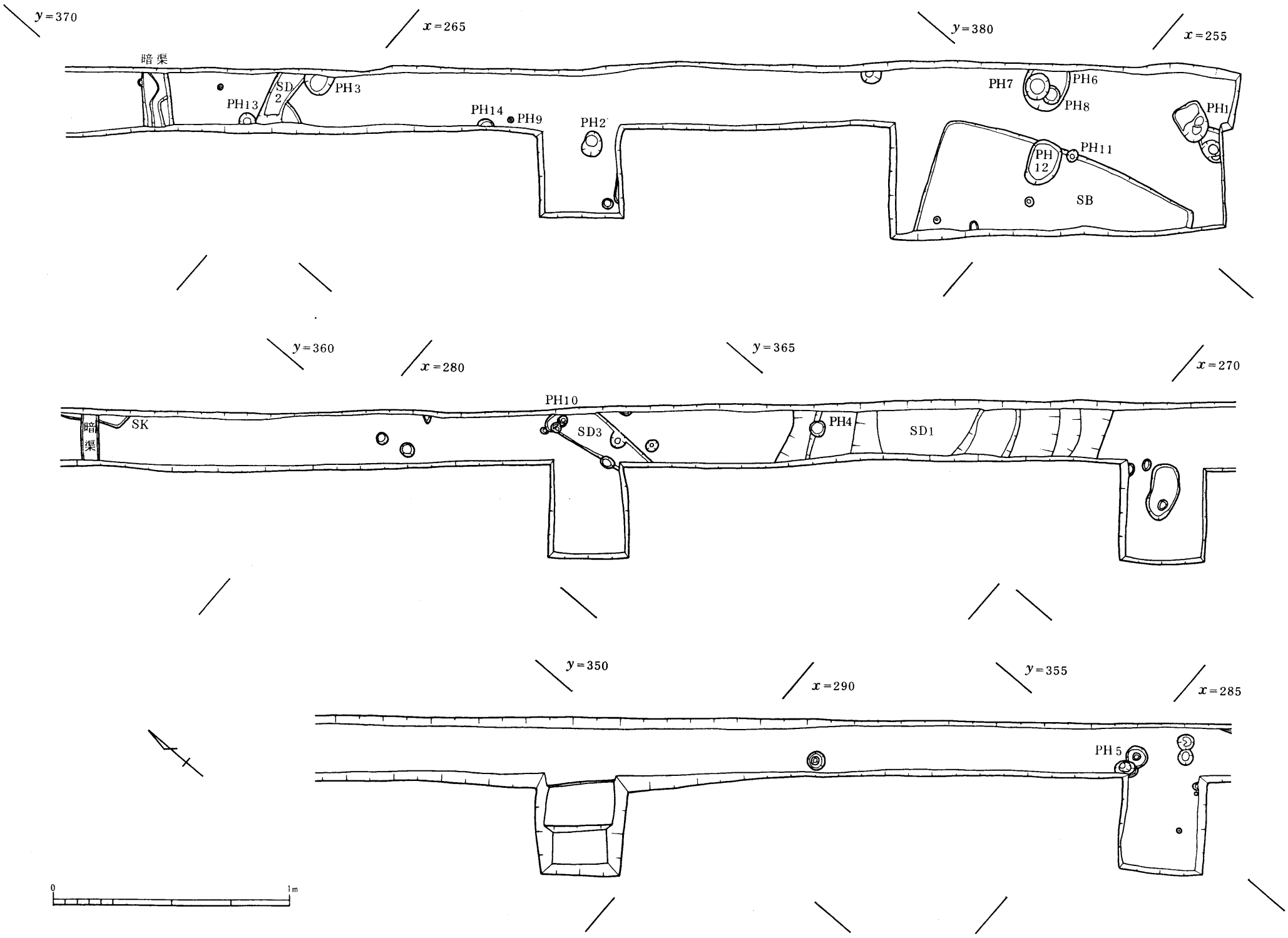
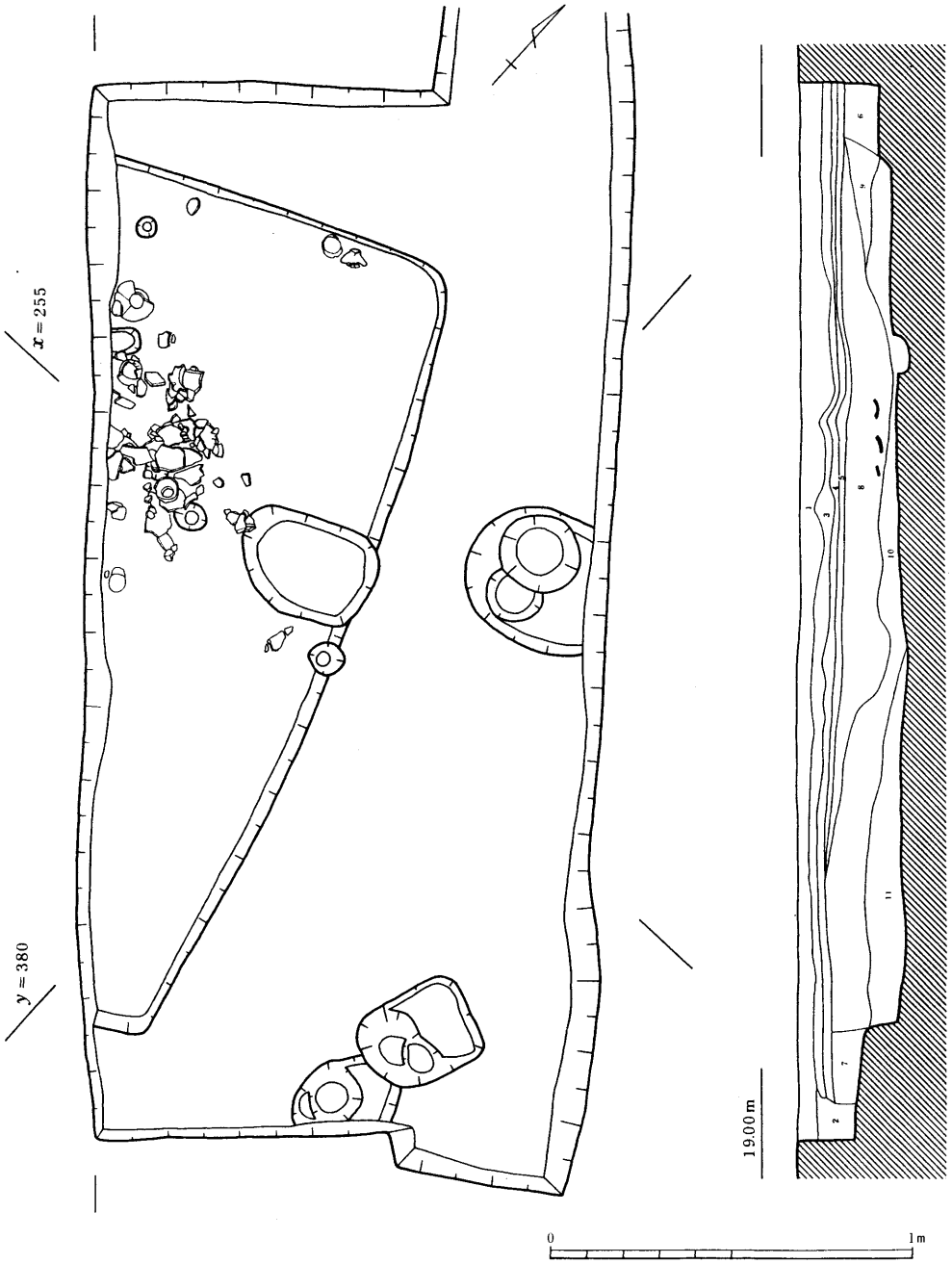
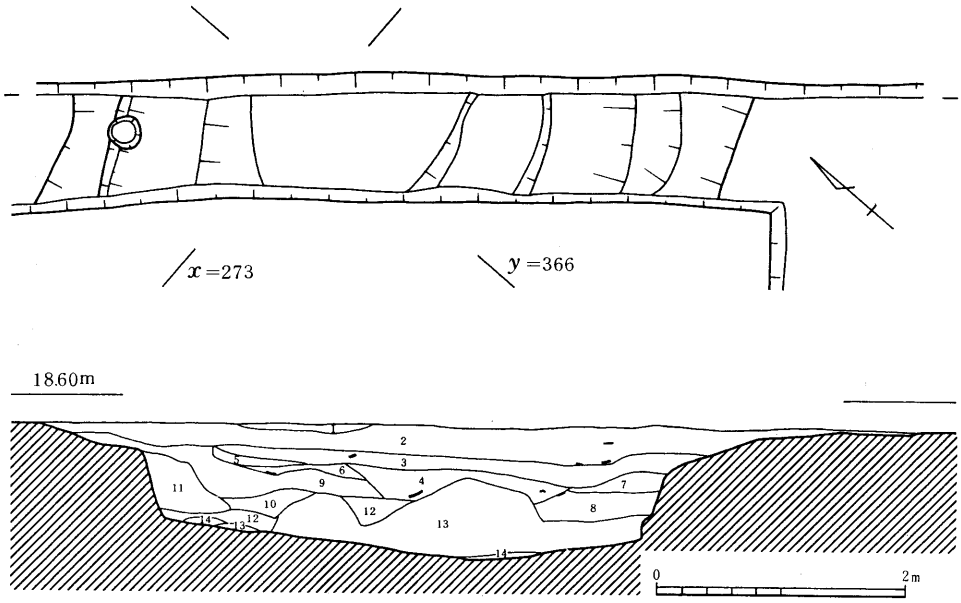

y=370
x=265
y=380
x=255
暗渠
PH13
SD 2
PH3
PH14
PH9
PH2
PH7
PH6
PH8
PH1
PH 12
PH11
SB
y=360
x=280
y=365
x=270
PH10
暗渠
SK
SD3
PH4
SD1
y=350
x=290
y=355
x=285
PH 5
0
1m

Fig.38　遺構配置図



1　表土　2　撹乱　3　灰褐色粘質土　4　黄褐色粘質土　5　暗灰橙色粘質土
6　暗黒褐色粘質土　7　暗褐色粘質土　8　黒褐色粘質土　9　暗灰褐色砂質土
10　暗褐色粘質土　11　暗褐色粘質土（砂礫混り）

Fig.39　竪穴式住居跡



1 黒灰色砂混り土	2 黒褐色土	3 茶褐色土	4 黒茶褐色土	5 暗茶色粘土
6 暗灰色砂礫	7 暗灰橙色土	8 黒灰色土（シルトに近い）	9 橙褐色土	
10 灰白色シルト	11 黄褐色粘質土	12灰色シルト	13 灰色砂礫	14 黒色粘土

Fig.40 SD 1

(2) 溝状遺構

SD 1（Fig.40 PL.32）

トレンチ南半部中程、南東端より約22 m北西の x ＝273、y ＝366付近に位置する。上面幅5.50 m、底面幅3.82 m、深さ1.10 mを測り、西北西―東南東にかけて走向するとみられる。上半部はゆるやかに下降するが、途中で垂直気味に落ち込み底面へ達する。埋土はトレンチ北側壁面での土層を観察すると14層に区分される。第 3 層以下は複雑な堆積状況を示しており、埋土土質および出土遺物から勘案すると比較的短時間に埋没したと考えられる。

SD 2（Fig.38 PL.33(1)）

調査区域南東端より北西側約16 m、x ＝266、y ＝372付近に位置する。PH 3 、PH13によって切られている。幅36～40㎝、深さ 5 ㎝程度の小規模のもので底は、東から西へ向かってわずかな傾斜面を呈する。埋土は風化礫を若干含む暗黒褐色粘質土の単一層。出土

遺物は弥生土器の小破片が数点。

SD 3（Fig.38　PL.33(2)）

SD 1 の北西約 3 m、x ＝276.5、y ＝362.5付近に位置しており、周辺のピットを切っている。幅62cmを測り、流路は南北方向である。片段の溝で深さは北側で約 7 cm、南側で約12cmを測る。北西側の肩部は内方に彎曲しており、北東側の肩と連続して長細い形状の土壙となる可能性もある。埋土は暗茶褐色粘質土の単一層で、弥生土器片数点が出土した。

(3)　土壙（Fig.38）

SD 1 の北西約 5 m に位置し、2 号暗渠によって切られている。遺構は調査区外にも拡がっているため全体の形状、規模等は不明である。深さは約 4 cm程度で浅い。埋土は暗茶褐色粘質土で、出土遺物は無い。

(4)　柱穴（Fig.38）

柱穴等の掘り込みは総数39個検出した。柱穴は埋土により暗茶褐色粘質土のもの、暗黒褐色粘質土のもの、および明黒褐色粘質土のものに区分できる。SD 1 以北には暗茶褐色粘質土のもの、SD 1 以南には明黒褐色粘質土のもの（PH 1 ・ 3 ・ 9 ・13・14）と暗黒褐色粘質土のもの（その他のもの）とが分布する。出土遺物が少ない。

（磯部・河村）

4　遺物

今回の調査で出土した遺物には弥生土器、土師器、石器がある。とりわけSD 1 からは弥生時代中期後半から後期初頭の土器、住居跡から古墳時代初頭の土師器がまとまって出土しており、発掘面積の狭小さにもかかわらず比較的良好な資料が得られた。

(1)　竪穴式住居跡出土遺物（Fig.41　PL.35）

出土土器の大半は第 8 層からで、中央付近に集積した状態で検出され、6 ・10のみ住居跡内東北隅付近から床面付着の状態で出土した。大半は弥生時代終末から古墳時代初頭のものであるが（ 1 ～14)、15～20は弥生時代前期から中期と推定されるもので流れ込みのものと考える。

1 ～ 4 は壷。1 は直口壷の口縁部で、頸部から直線的に立ち上がる。外面に刷毛目を施し、内面は器面磨滅のため不明。2 は口縁部片でナデ調整。3 は底部片で平底である。外面箆削りの後ナデ、内面箆削り。4 は小型丸底壷で口縁部を欠失する。外面横方向の箆削りの横ナデ、頸部直下に刷毛目が残る。内面胴部はナデ、内底面は細かな箆削りを行なう。

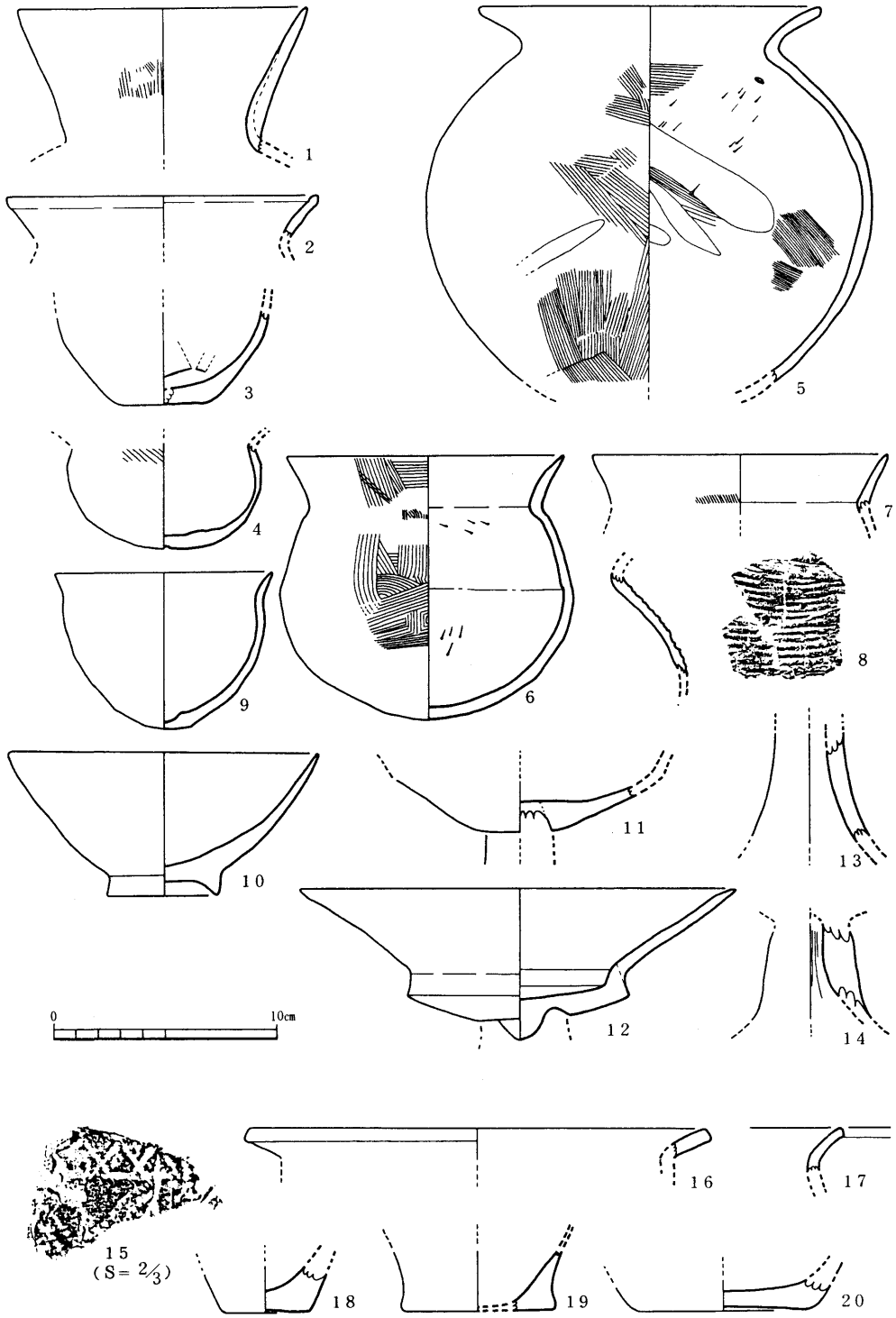


Fig.41　住居跡出土遺物

5～8は甕。口縁部を欠失する8以外は「く」の字状に外反する口縁をもつ。5は球形の胴部をもつもので底部を欠失する。外面刷毛目、内面刷毛目の後篦削りを施す。内面所々に指圧痕が残る。6は小型の甕で丸底。球形の胴部をもつ。外面刷毛目、内面粘土帯の継ぎ目が見られ、それを境に上位は横方向、下位は斜方向に篦削りを施す。7は器壁がやや薄く口縁端部が尖りぎみである。ナデ調整を施す。頸部には刷毛目が残る。8は胴部片で外面叩き目、内面ナデを施す。9・10は鉢。9は卵形の胴部に短く外反する口縁部をもつ。底部は平底ぎみで不安定。全面ナデで仕上げる。10は脚台をもち、体部がやや内彎ぎみに立ち上がる。器面荒れが著しく、脚台にわずか指圧痕が残るほかは調整不明。11～14は高坏。11は坏底部のみの破片で器面磨滅のため調整不明。12は坏身が底部から二段の屈曲をもち口縁部が大きく開く。器面磨滅のため調整不明。13は裾がゆるやかに広がるもので調整は不明。14は脚下部が裾で水平に折れ曲るものと思われる。外面ナデ、内面には絞り痕が見られる。

15は貝殻腹縁による斜格子文と木葉文を施す。16・17は甕の口縁部片である。18～20は底部片で上げ底状のもの（18・20）と平底のもの（19）がある。18・19は器面磨滅のため調整不明。20はナデを施す。

(2)　溝状遺構

SD 1 出土遺物

出土遺物は埋土の位置によって上層（第1・2層）、中層（第3～12層）、下層（第13・14層）と3区分した。なお、中層のうち上位の層では若干時期の異なる土器が出土したため、この一群を別にして取り上げた。

上層出土遺物（Fig.42　PL.35）

21は朝顔型に開く口縁部をもつ壷で、端部は下端がやや下垂し、上端は上方に伸び、複合口縁状になる。口縁端部には円形浮文を貼り付ける。器面荒れのため調整不明。22は「く」の字に外反する壷の口縁部。全面刷毛目の後ナデを施す。23は壷の胴部片で刺突文を刻む。24は壷の胴上部片。断面三角形の突帯を三条巡らす。25～33は「く」の字に外反する口縁部をもつ甕。胴部の張りが弱く最大径が口径を上回らないもの（25～29）と張りが強く口径を上回るもの（30～33）がある。29は端部をつまみ上げる。30は肥厚した口縁部に二条の沈線を施す。25・33は器面磨滅のため調整不明。他は口縁部内外面に横ナデを施す。27の頸部内面は磨き、28は口縁端部内面を篦で押えて跳ね上げ状にする。32の頸部内面には刷毛目が残る。

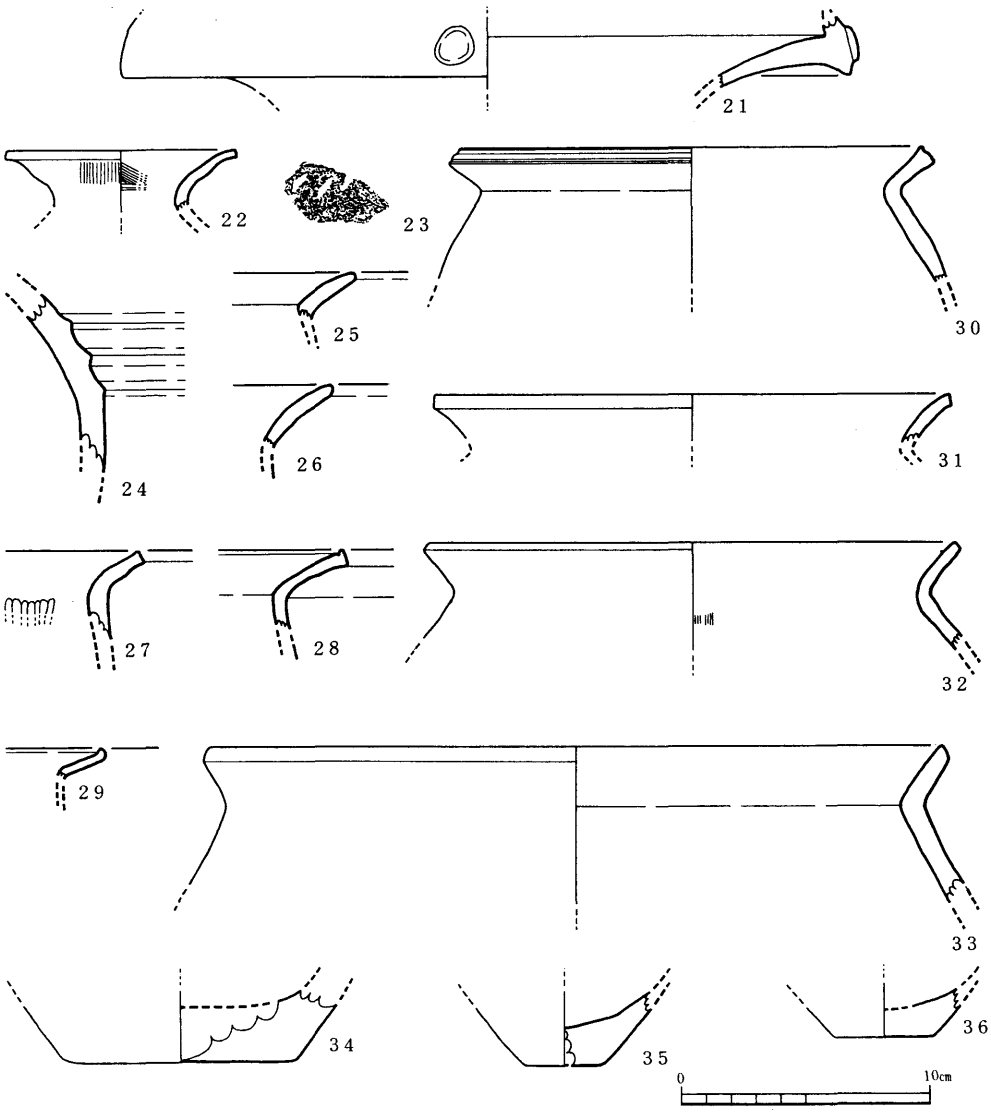


Fig.42　SD1 上層出土遺物

中層出土遺物（Fig.43～45　PL.35～37）

土器

37～40は壷。37は「く」の字に外反するもので口縁端部がわずかに肥厚する。端部よりやや下位に紐通しの小孔を穿つ。内外面ともナデ仕上げ。38は直立する短い頸部に強く屈曲し外反する口縁部をもつ。口縁端部外面は窪み、内面は上方へ肥厚する。全面ナデ仕上げ。39は口縁部が短くゆるやかに外反するもので、肥厚した端部の外面には一条の沈線を

巡らす。全面ナデ仕上げ。40は直線的に外方に開く長頸壷の口縁部。端部はやや窪む。口縁部は横ナデ、以下外面は縦方向の篦磨き、内面ナデを施す。41～51は「く」の字に外反する口縁をもつ甕。短く外反する口縁部をもち胴部の張りが強く口径を上回るもの（43・47・49・50）と最大径が口径を上回らないもの（48）がある。43は口縁部が強く屈曲して外反し、端部外面に3条の篦描き沈線が巡る。44は口縁端部が窪む。51は厚手の小型の甕で口縁端部は尖りぎみにおさめる。43は口縁端部内面に篦による押圧痕が残る。胴部外面は粗い刷毛目、内面はナデ。47～50の胴部は器面磨滅のため不明。51は全面的に丁寧な仕上げで外面および口縁部内外面は刷毛目の後ナデ、胴部内面はナデ調整。52～55は底部。52～54はわずかな上げ底、55は平底である。52は内外面ともナデ仕上げ。53～55は外面刷毛目の後ナデ、内面ナデにより仕上げており、52・55の内底面に指圧痕、53の内面には篦削り痕が残る。56～58は高坏の脚部。58は中空の部分が少ない。いずれも内面に絞り痕が見られるが、器面磨滅のため調整不明。

59・60は砥石である。59は円礫を素材とし、使用頻度が高く正面中央部が大きく窪む。研砥は正面と背面の一部、両側面の四面を使用。研砥方向は左上がりに斜交、両側面は縦方向。荒砥である。残存長13.1cm、幅10.6cm、厚さ5.9cm、重量1,082.0g。折損品である。60は小形のもので仕上げ砥である。正背両面と上面の一部を研砥面として使用する。研砥方向は正面左上がり、背面縦方向で、どちらも斜交して用いる。長さ8.2cm、幅9.0cm、厚さ3.2cm、重量275.0g。

61～72は上述した中層上位のもの。61～63は壷の口縁部。61は頸部から朝顔形に大きく開くもので、口縁端部は丸くおさまる。ナデ調整。62・63は小型の壷。62は「く」の字に外反するもので外面斜め方向、内面横方向の刷毛目調整を行なった後、口縁端部をナデている。63は複合口縁壷の口縁部で口縁上段部を欠失する。器面磨滅のため調整不明。64～68は甕。64～66は口縁部が水平に近く折れ曲る。68は薄手でやや上げ底の底部に張りの少ない胴部をもち、口縁部は「く」の字に外反する。端部内面はやや上方へもち上がる。いずれも口縁部内外面は横ナデ仕上げ。65は外面縦刷毛、66は頸部内面篦削り。68は胴部外面縦方向の刷毛目、底部内外面がナデ。底部内面に指圧痕、口縁端部下外面には篦による押圧痕が残る。69・70は底部。69は上げ底の壷の底部で外面縦方向の刷毛目、側面顕著なナデ。内面はナデ仕上げで指圧痕が残る。70は平底で器面磨滅のため調整不明。71・72は高坏の坏部片で坏底部から屈曲して外反する口縁部に至るもの。両者ともにナデ調整を施す。

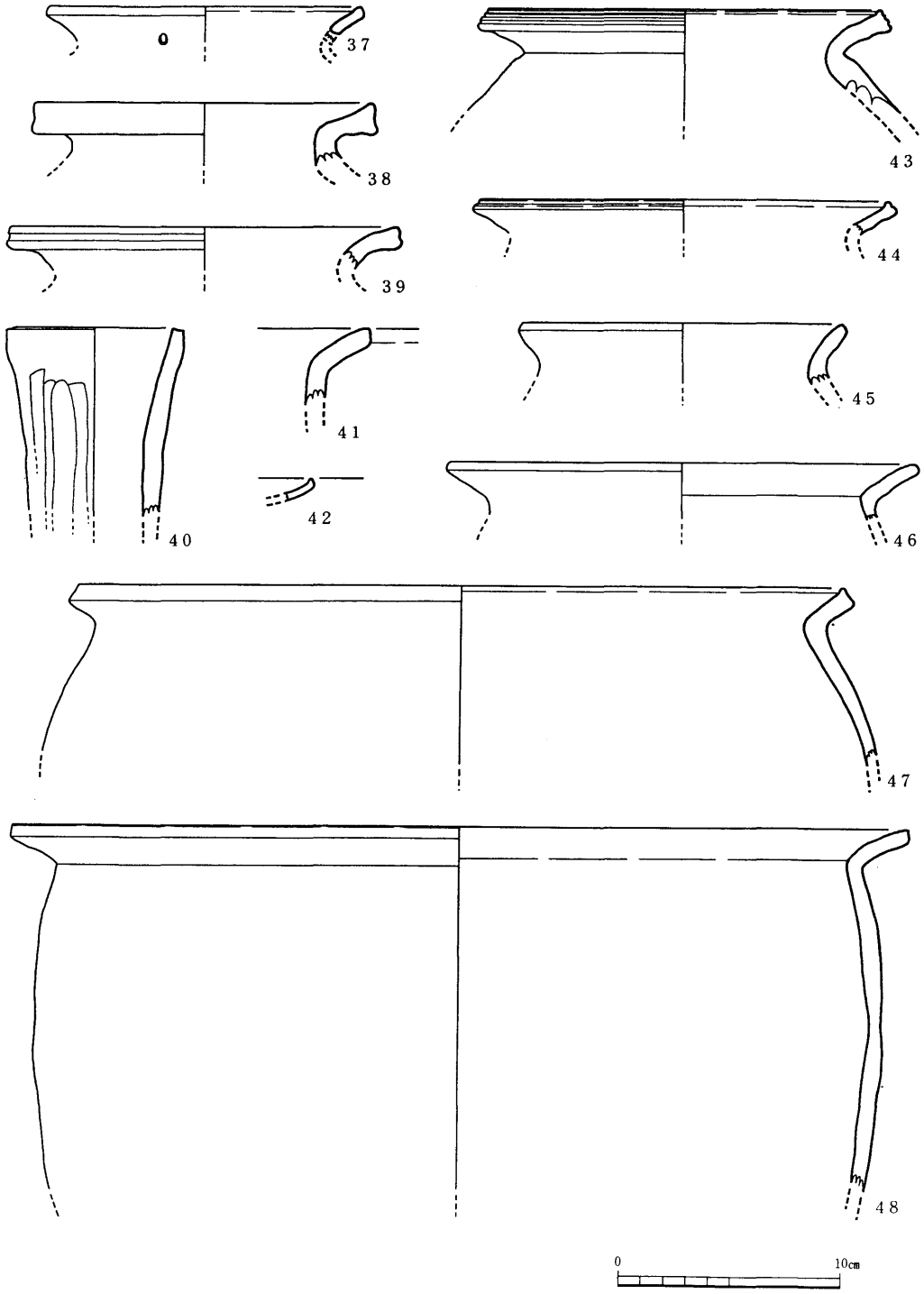


Fig.43　SD１中層出土遺物（１）

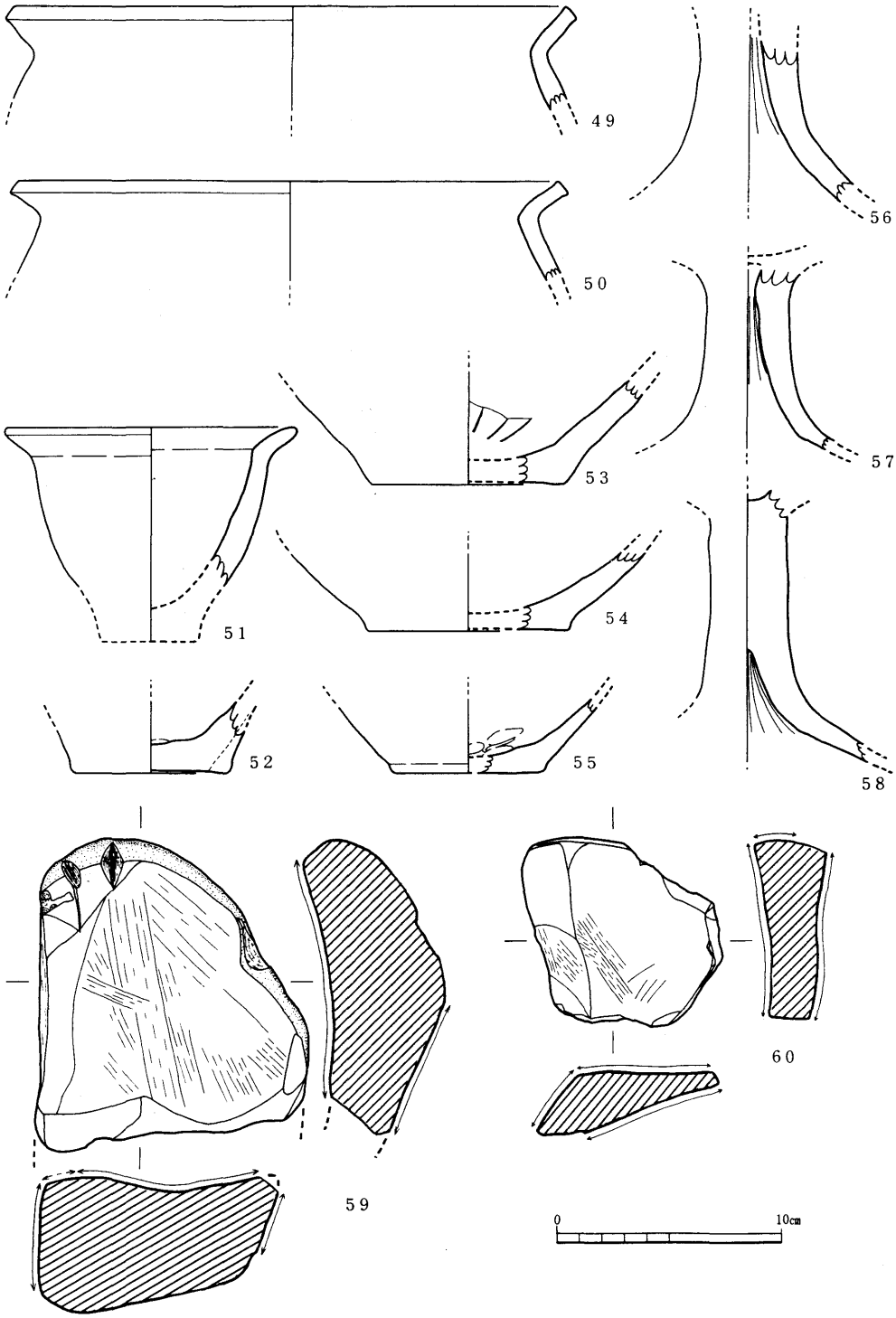


Fig.44　SD１中層出土遺物（２）

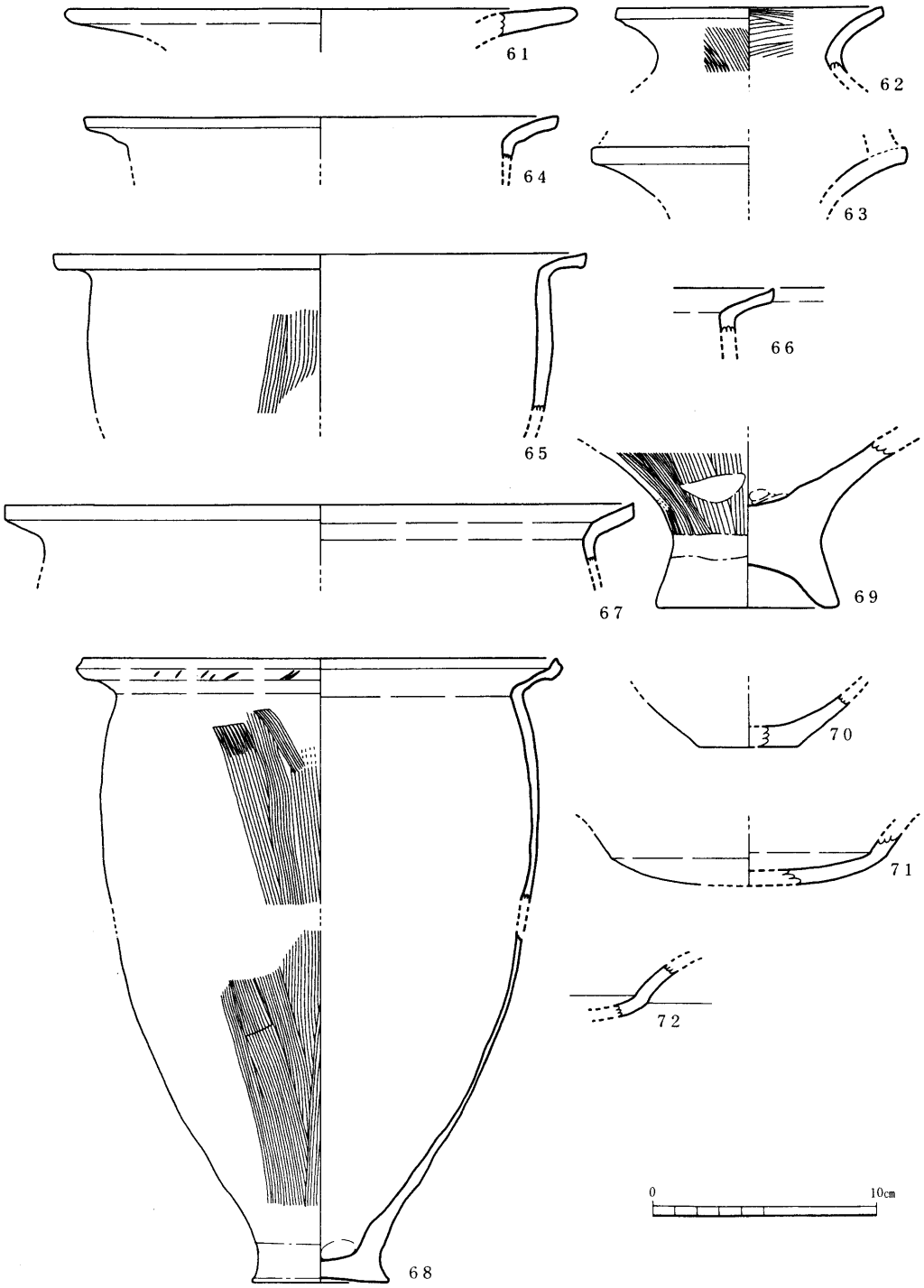


Fig.45　SD1中層出土遺物（3）

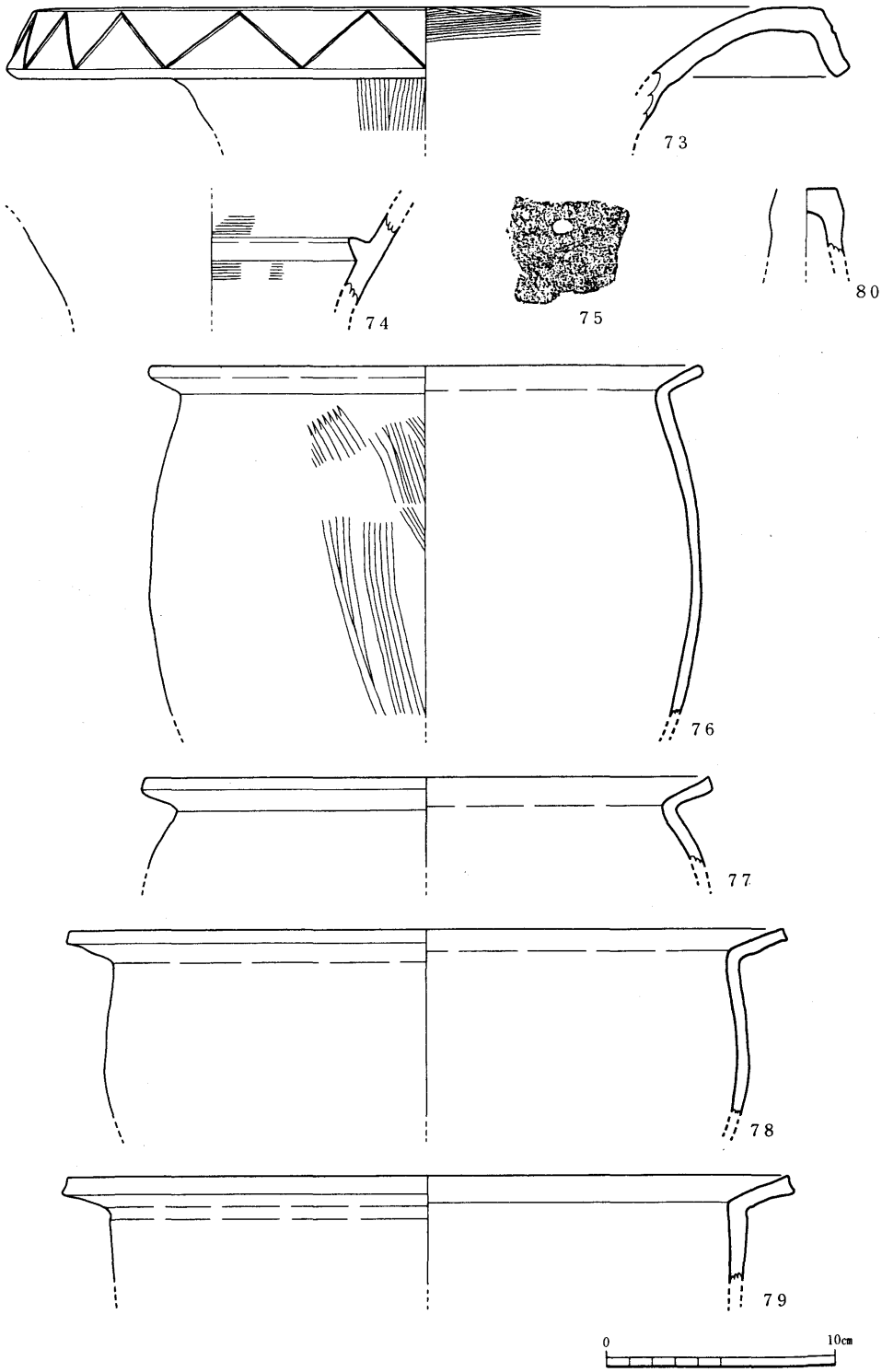


Fig.46　SD1 下層出土遺物

SD 1 下層出土遺物（Fig.46　PL.37）

73～75は壷。73は朝顔形に開く口縁の端部が下垂し、外面に刷毛原体押圧による鋸歯文を施す。外面縦方向、内面横方向に刷毛目を施した後、内面下半にナデを施す。74は頸部で、内面に断面三角形の突帯を貼り付ける。外面および突帯はナデ、他は刷毛目調整。76～79は口縁部が「く」の字に短く外反する甕。いずれも口縁部内外面はナデ。胴部外面は76が粗い刷毛目、77・79がナデ、78が刷毛目の後ナデを施す。80は高坏の脚部片。器面磨滅のため調整不明。

SD 2 出土遺物（Fig.47, 81）

甕の口縁部。わずかに肥厚する端部外面に二条の沈線が巡る。内外面ともナデ調整。

SD 3 出土遺物（Fig. 47, 82　PL.37）

外反する口縁部をもつ甕で、端部は丸くおさめる。外面縦方向の刷毛目、内面ナデ調整。

(3)　柱穴出土遺物（Fig. 47, 83～86　PL.37）

遺物が出土したのはPH 1～PH10である。いずれも細片で、図化できたのはPH 1（83）、PH 5（84）、PH 7（85）、PH 8（86）出土の5点である。83は壷、84・85は甕の口縁部。83は口縁端

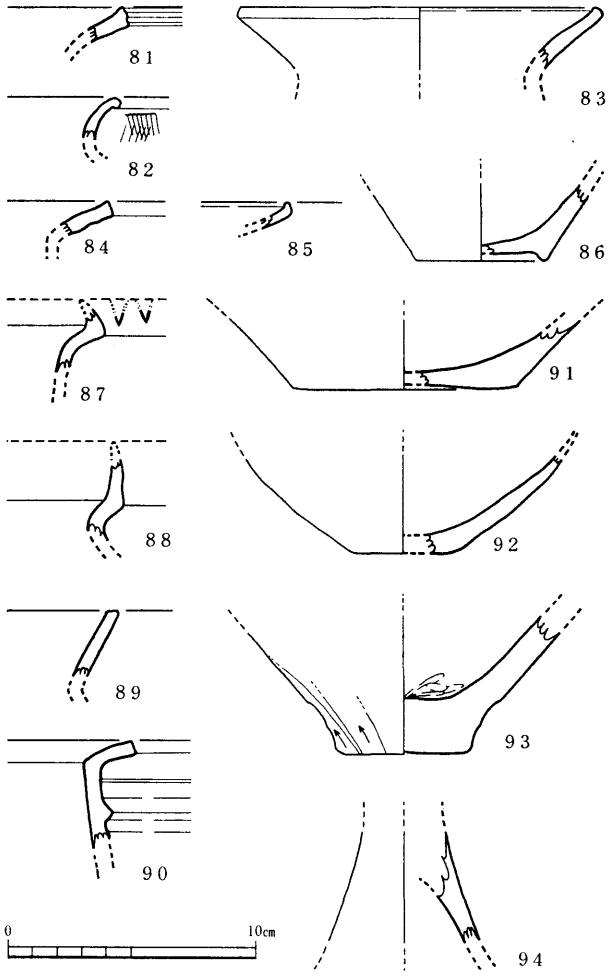


Fig.47　その他の遺構および包含層出土遺物
（81，SD 2　82，SD 3　83～86，柱穴　87～94，包含層）

部内面を内上方にわずかにつまみ出す。84は端部が平坦。85は端部内面を上方にわずかに引き出す。

(4)　包含層出土遺物（Fig.47, 87～94　PL.37）

87は口縁部があまり明瞭でない稜をもって屈曲する複合口縁に近い壷で、口縁部外面には箆描き鋸歯文を施す。内外面ともナデ調整を行なう。外面丹塗り。88～90は甕の口縁部。88は口縁部の屈曲が明瞭でほぼ直立して立ち上がる複合口縁甕。器面磨滅のため調整不明。89は直線的に開き、口縁端部はほぼ水平面をなす。ナデを施す。90は「く」の字に短く外反する口縁下に断面三角形の一条の突帯を巡らす。外面ナデ調整。91は壷、92・93は甕の底部。91は上げ底、92は底部が小さく丸底に近い。93は平底である。91・92は内外面ナデ仕上げ。93は外面箆削りの後ナデるが、ナデきれず底部平面は不整八角形をなす。内面はナデ仕上げで、指圧痕が残る。94は高坏脚部。ゆるやかに裾が広がるものと思われ、全面ナデ調整。外面各所に丹の痕跡が残る。

（磯　部）

Tab.14　出土遺物観察表（1）

図版番号	器　種	口　径（復原値）	器　高（現存高）	底　径（復原値）	色　　調	胎　　土	焼　成	備　　考
竪穴式住居跡								
1	直口壷	(13.0)	(6.5)		外面―橙色 内面―浅黄橙色	0.1～0.3cmの砂粒含む	やや軟	
2	壷		(4.2)		淡黄色	0.1cm程度の砂粒含む	良　好	
3	壷		(4.2)		灰白色	精良	良　好	
4	壷	(15.4)	(16.8)		外面―橙色 内面―灰黄色	0.1～0.5cmの砂粒含む	良　好	底部欠損
5	甕	(14.0)	(1.9)		乳灰褐色	精　良	良　好	
6	甕	(13.2)	(2.2)		外面―にぶい黄橙色 内面―灰白色	砂粒を含む	良　好	
7	甕		(2.0)		明黄褐色	精　良	やや軟	
8	甕	(20.2)	(1.4)		にぶい橙色	0.1～0.2cmの砂粒含む	良　好	
9	高　坏	19.6	(6.8)		外面―橙色 内面―乳灰色	0.1cm程度の砂粒含む	やや軟	脚部欠損
10	高　坏		(2.0)		外面―淡橙色 内面―灰白色	砂粒を若干含む	やや軟	口縁部および脚部欠損
11	高　坏		(4.9)		灰白色	精　良	やや軟	脚部破片
12	高　坏		(4.3)		外面―橙色 内面―灰白色	0.1cm程度の砂粒含む	良　好	脚部破片

Tab.15　出土遺物観察表（2）

図版番号	器　種	口　径（復原径）	器　高（現存高）	底　径（復原径）	色　　調	胎　　土	焼　成	備　　考
13	底　部		(2.1)	(4.0)	灰白色	0.1～0.4cmの砂粒含む	良　好	
14	底　部		(2.7)	(7.0)	外面―にぶい赤褐色 内面―橙色	極めて精良	やや軟	
15	底　部		(4.2)	(4.0)	灰白色	精　良	良　好	
16	底　部		(1.4)	(7.6)	外面―橙色 内面―にぶい赤褐色	砂粒多量に含む	良　好	
17	鉢	14.0	6.4	5.0	外面―橙灰白色 内面―橙灰色	0.1～0.2cmの砂粒含む	良　好	ほぼ完形
18	小　型 丸底甕	12.5	11.8		外面―上:灰色,下:黒褐色 内面―乳灰色	0.1～0.3cmの砂粒含む	良　好	口縁部・体部一部欠損
19	小　型 丸底壺		(4.7)		外面―灰白色 内面―浅黄橙色	精　良	良　好	口縁部を欠損すること
20	鉢	9.6	7.0	2.1	外面―灰色 内面…乳灰色	0.1～0.6cmの砂粒含む	良　好	ほぼ完形
SD1 上層								
21	壺		(2.9)		橙乳色	0.1～0.5cmの砂粒含む	やや軟	
22	壺	(9.4)	(2.5)		外面―茶褐色 内面―茶灰色	0.1～0.2cmの砂粒含む	良　好	
23	壺		—					
24	壺		(7.2)		外面―橙白灰色 内面―黄灰色	0.1～0.3cmの砂粒含む	良　好	
25	甕		(1.9)		乳白色	0.2～0.6cmの砂粒含む	やや軟	
26	甕		(2.6)		外面―乳褐色 内面―乳白色	砂粒多量に含む	やや軟	
27	甕		(3.6)		乳褐色	砂粒多量に含む	良　好	
28	甕		(3.2)		外面―橙灰色 内面―淡橙灰色	0.2～0.3cmの砂粒含む	良　好	
29	甕		(1.3)		橙　色	0.1～0.3cmの砂粒含む	やや軟	
30	甕	(18.4)	(5.4)		橙灰色	微砂粒を含む	良　好	
31	甕	(20.8)	(2.0)		褐　色	0.1～0.3cmの砂粒含む	良　好	
32	甕	(21.1)	(3.8)		外面―乳褐色 内面―乳白色	0.1～0.4cmの砂粒含む	良　好	
33	甕	(29.4)	(6.3)		橙　色	0.2～0.4cmの砂粒含む	やや軟	
34			(2.9)	(9.2)	乳白色	0.1～0.6cmの砂粒含む	良　好	
35			(3.0)	(2.8)	外面―橙色 内面―黒灰色	0.1～0.4cmの砂粒含む	やや軟	
36			(2.0)	(3.8)	外面―乳灰色,底部は黒色 内面―乳灰色	0.1～0.6cmの砂粒含む	やや軟	
SD1 中層								
37	壺	(11.9)	(1.6)		外面―灰白色 内面―乳灰色	精　良	良　好	
38	壺	(15.0)	(2.8)		乳灰色	0.1～0.5cmの砂粒含む	良　好	
39	壺	(17.4)	(1.9)		乳白色	0.1cm程度の砂粒を多量に含む	軟	
40	長頸壺	(7.0)	(8.4)		外面―橙色 内面―乳灰色	0.1～0.3cmの砂粒含む	良　好	丹塗り
41	甕		(3.4)		朱　色	0.1cm程度の砂粒含	軟	

Tab.16　出土遺物観察表（3）

図版番号	器　種	口　径（復原値）	器　高（現存高）	底　径（復原値）	色　　調	胎　　土	焼　成	備　　考
42	甕		(1.0)		外面—茶褐色 内面—灰褐色	精　良	良　好	
43	甕	(17.4)	(5.6)		外面—灰褐色 内面—乳灰色	0.1～0.7cmの砂粒含	良　好	
44	甕	(18.0)	(1.5)		外面—茶褐色 内面—乳灰色	精　良	良　好	
45	甕	(14.3)	(2.7)		灰褐色	0.1～0.2cmの砂粒含	良　好	
46	甕	(20.8)	(2.5)		外面—灰褐色 内面—乳灰色	0.1～0.4cmの砂粒含	やや軟	
47	甕	(34.0)	(7.9)		外面—橙灰色 内面—乳白灰色	0.1～0.3cmの砂粒含	やや軟	
48	甕	(39.8)	(16.1)		外面—灰褐色 内面—乳灰褐色	0.1～0.4cmの砂粒含	良　好	
49	甕	(24.3)	(5.6)		黄白灰色	0.1～0.5cmの砂粒含	良　好	
50	甕	(24.1)	(4.4)		外面—乳灰褐色 内面—灰白色	0.1cm程度の砂粒含	やや軟	
51	小型甕	(12.6)	(7.0)		外面—橙灰色 内面—黒灰色	0.1～0.3cmの砂粒含	良　好	
52			(3.2)	(6.8)	外面—橙色 内面—黒灰色	0.1～0.2cmの砂粒含	やや軟	
53			(5.0)	(8.6)	灰褐色	0.1～0.2cmの砂粒含	良　好	
54			(3.4)	(9.1)	乳灰色	0.1cm程度の砂粒含	良　好	
55			(3.3)	(7.0)	外面—灰褐色 内面—茶褐色	砂粒を若干含	良　好	
56	高　坏		(7.5)		乳白灰色	0.2～0.5cmの砂粒含	やや軟	
57	高　坏		(8.0)		乳灰色	0.1～0.5cmの砂粒含	良　好	
58	高　坏		(12.1)		乳白灰色	砂粒を多量に含	良　好	
61	壷	(22.4)	(1.3)		外面—乳白色 内面—乳灰白色	0.1cm程度の砂粒含	良　好	
62	壷	(11.9)	(2.9)		外面—乳灰褐色 内面—乳白灰色	0.1～0.3cmの砂粒含	良　好	
63	壷		(2.3)		朱　色	0.1～0.3cmの砂粒含	やや軟	
64	甕	(21.0)	(2.0)		橙灰褐色	0.1～0.3cmの砂粒含	やや軟	
65	甕	(23.7)	(7.1)		外面—茶褐色 内面—橙褐色	0.1～0.4cmの砂粒含	やや軟	
66	甕		(2.1)		外面—橙灰白色 内面—乳灰色	精　良	良　好	
67	甕	(28.0)	(2.8)		外面—茶褐色 内面—赤褐色	0.1～0.4cmの砂粒含	良　好	
68	甕	(21.0)	(26.7)	6.1	橙灰褐色	0.1～0.2cmの砂粒含	良　好	
69			(7.4)	(8.2)	乳褐色	精　良	良　好	
70			(2.4)	(4.4)	外面—灰白色 内面—黒灰色	0.1～0.3cmの砂粒含	やや軟	
71	高　坏		(2.8)		橙　色	精　良	軟	
72	高　坏		(2.6)		外面—橙灰白色 内面—橙白色	0.1～0.4cmの砂粒含	良　好	

Tab.17　出土遺物観察表（4）

図版番号	器　種	口　径（復原値）	器　高（現存値）	底　径（復原値）	色　　調	胎　　土	焼　成	備　　考
SD1 下層								
73	壷	（36.6）	（5.4）		外面―橙灰色 内面―乳灰色	0.1～0.2cmの砂粒含	良　好	口縁部片
74	壷		（4.0）		乳灰色	精　良	良　好	頸部片
76	甕	（23.9）	（15.3）		外面―乳灰褐色 内面―乳灰色	精　良	良　好	
77	甕	（24.6）	（3.9）		外面―乳褐色 内面―淡褐色	砂粒多量に含む	良　好	
78	甕	（31.2）	（8.1）		外面―上:橙褐色,下:黒褐色，内面―橙褐色	精　良	やや軟	
79	甕	（31.4）	（4.7）		外面―乳灰褐色 内面―橙褐色	精　良	良　好	
80	高　坏		（3.0）		橙　色	精　良	やや軟	脚部片
SD2								
81	甕		（1.4）		灰白色	0.1～0.3cmの砂粒含	良　好	
SD3								
82	甕		（1.7）		外面―黒褐色 内面―灰白色	砂粒を含む	良　好	
柱穴出土遺物								
83	壷	（13.8）	（2.5）		灰赤色	砂粒多量に含む	良　好	PH.1 出土
84	甕		（1.4）		黄橙色	砂粒多量に含む	良　好	PH.5 出土
85	甕		（1.1）		橙　色	精　良	良　好	PH.7 出土
86			（3.1）	（5.2）	外面―橙色 内面―赤黒色	0.2～0.4cmの砂粒含	良　好	PH.8 出土
包　含　層								
87	壷		（2.6）		乳白灰色 丹－赤褐色	精　良	良　好	外面に丹塗りの痕跡有り
88	甕		（3.1）		橙　色	精　良	やや軟	端部を欠損
89	甕		（2.7）		外面―灰黒色 内面―黒色	0.1cmの砂粒含	良　好	
90	甕		（4.4）		橙白灰色	0.1～0.2cmの砂粒含	良　好	頸下に突帯を有す
91			（2.8）	（9.2）	外面―浅黄橙色 内面―オリーブ黒色	0.1～0.2cmの砂粒含	良　好	
92			（4.0）	（3.8）	淡黄色	砂粒を含む	良　好	
93			（5.6）	（5.6）	外面―黄灰色 内面―灰色	砂粒を含む	良　好	
94	高　坏		（4.5）		乳白灰色	砂粒を含む	良　好	

5　小結

(1)遺構について

当調査区は吉田遺跡内の西部、大塚川による浸食面を臨む微高地の一角にあたる。

遺構の埋土は(1)暗茶褐色粘質土、(2)明黒褐色粘質土、(3)暗黒褐色粘質土のものが見られるが1号溝以北では(1)、以南では(2)、(3)が分布する。1号溝をみる限りでは黒褐色粘質土を埋土とする遺構は中期後半から後期初頭を上限とするものである。

主要な検出遺構について述べると、竪穴式住居跡は隅丸方形の平面プランを呈するものと思われ、時期は弥生時代終末から古墳時代初頭に属する。内部からは多量の土器類が出土したが、本来住居跡に伴うと思われるのは床面より出土の2点のみで（Fig.41，6・10)、他の大半は中央付近に集中して床面より浮いた状態で検出されており、一つに住居廃絶直後に土器捨場として意識的に投げ込まれたものと推測する。

1号溝は出土遺物から弥生時代中期後半から後期初頭に属すると考えるが、溝の性格、機能については竪穴式住居・土壙・溝等の存在が確認されていることから、集落に関連する蓋然性が高いと察するが、本溝の調査範囲が狭小なため現段階では可能性を指摘するにとどめ、今後の調査に期待したい。

(2)　出土遺物について

出土遺物の大半は土器類で、他には1号溝から石製品が2点出土した。とりわけ竪穴式住居跡出土遺物は県内の同時期のものとは異なった様相を示しており、それが一括資料として得られたのは大きな収穫である。竪穴式住居跡出土遺物を概観すると外面叩き目を有する土器片が出土するなど、畿内系土器の要素が強く感じられる。床面出土の鉢（Fig.41の10）は山口市湯田楠木町遺跡で類例が見られる[1]が、湯田楠木町出土のものは脚台が消滅して上げ底状になっており、今回出土のものよりもやや時期の下るものであるが、ともに後期において丸底化の進む県内では特異なものであろう。大阪府東奈良遺跡[2]や奈良県纒向遺跡[3]などに類例があり、畿内第5様式の系統とみる方が妥当であろう。また、坏身底部から2段の屈曲をもって広がる高坏（Fig.41，12）を同様、県内では防府市下右田遺跡に類例があるのみで[4]、畿内に多く類例がみられる。このタイプの土器は、例えば東奈良遺跡の土器編年では東奈良Ⅲ期[5]、纒向遺跡ではやや新相を示すものが3式期に位置づけられており[6]、庄内Ⅰ式期併行のものと思われる。したがって、住居跡が廃絶し、さらに可能性の一つとして土器捨場としての機能を果たしたのは上述の時期とさほど差はないと思われる。これらの土器は搬入品かあるいは模倣品かは不明だが、県内での当時の土器様相を知

る上で貴重な資料となりうると考える。

以上述べてきたように、今回の調査は吉田の地において弥生時代から古墳時代に生きた人々の生活の一端を垣間見たにすぎないが、検出された溝の目的・機能、周辺の住居跡群との関連性、さらに弥生時代から古墳時代への端境期における畿内系文化の流入過程および吉田遺跡における位置づけなど、集落形態、時間的推移を把握するための新たな幾つかの問題が提起されることとなった。

なお、今回の調査結果を含め、その地域には弥生時代から古墳時代にかけての集落関連遺構が密集して埋存しており、今後この周辺での工事に際しては十分な事前調査が必要と思われる。また、今回の工事に関連して、当初検出した竪穴式住居跡内には支線が付設される計画であったが、関連部局・業者の御協力と御理解の上、着工に際して一部施工内容を変更し住居跡部を迂回して頂き、本遺構は再び埋めもどされて保存されるにおよんだ。また、工事自体も最小限度の調査に留めたため発掘調査終了後引きつづき着工に入り、工期等に大きな支障もなく完成に至った。これらのことは、埋蔵文化財保護の立場と工事サイドの相互理解の上に成り立ったもので、今後構内において両者が共存していく上で意義のある事例となろう。

（磯　部）

〔注〕
1）山口市教育委員会『湯田楠木町遺跡第Ⅰ地区発掘調査概報』（1975年）。
2）東奈良遺跡調査会『東奈良遺跡発掘調査概報Ⅰ』（1975年）。
3）奈良県立橿原考古学研究所『纒向』（1976年）。
4）山口県教育委員会『下右田遺跡第3次調査概報』（1979年）。
5）注2）に同じ。
6）注3）に同じ。

第４章　教育学部附属光小学校自転車置場設置に伴う試掘調査

１　調査に至る経過

山口県光市大字室積浦１－１に所在する山口大学教育学部附属光小・中学校構内において自転車置場が新営されることとなった。工事自体の掘削深度は約30cmと比較的浅いものであったが、構内には周知の遺跡として「御手洗（みたらい）遺跡」があり、埋蔵文化財に対する行政上の手続きを必要とした。昭和40年に附属中学校体育館新営工事中において遺物包含層が確認されているが、その後全く調査が行なわれておらず、今回の工事地点を含め構内全体の包含層の広がりが把握されていないこと、また体育館地点の包含層最上限が地表下17cmであり、場所によっては非常に浅いところから検出される可能性も指摘できるなどから、本工事中に際して遺物包含層にかかった場合、文化財保護法のもと工事中断の事態も考えられるため、万一にも工事に支障を来たさないための配慮を加え、関係当局と協議の結果、工事着工前に埋蔵文化財包蔵有無の確認調査を行なうことを決定した。

調査は昭和59年２月20日に実施した。方法は工事範囲（Fig.48斜線部分）内の３カ所に試掘坑を設定し、一部機械を用いて掘削した。調査総面積約50㎡。

（森　田）

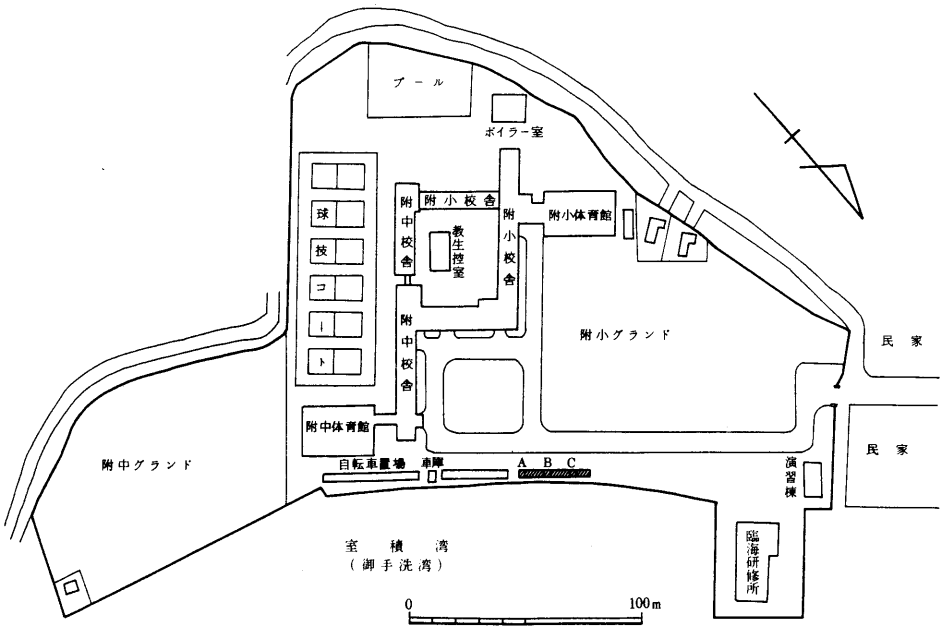
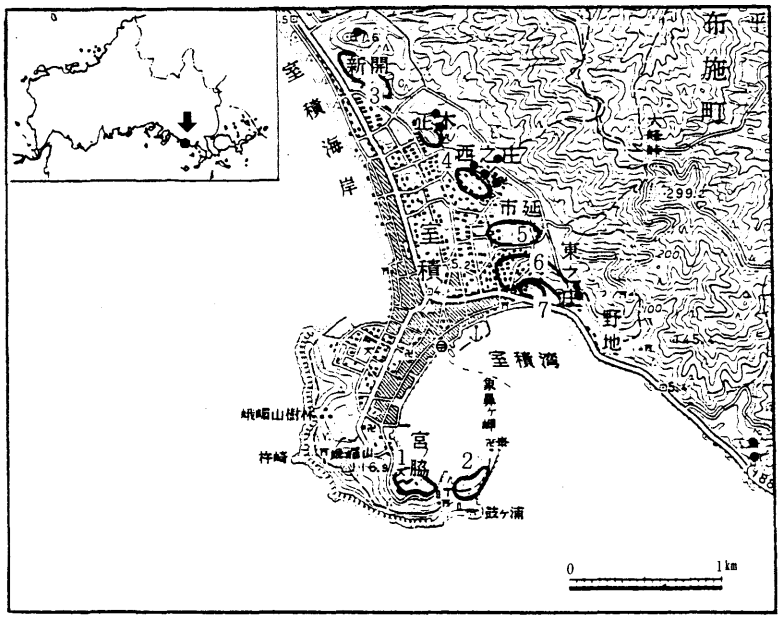


Fig.48　調査区位置図

2　位置と環境　— 室積の歴史的変遷を中心に —

御手洗遺跡は、山口県光市室積に所在する山口大学教育学部附属光小・中学校の構内とその周辺に広がる縄文時代から中世にかけての遺跡である。遺跡の所在する光市は山口県の東南部、島田川下流域を中心とした地域にあり、室積は島田川河口より南方、周防灘に面した海岸沿いに位置する。室積周辺は海岸部に内陸から小起伏山地である千坊山地が迫っているため低地は狭隘であり、わずかに千坊山・大峰山南麓裾部で小規模な扇状地を形成している。戸仲から室積に至る海岸には、島田川の土砂運搬作用によって砂浜が発達し、現在室積の市街地の大部分はもと島であった峨嵋山（別名　普賢山）との間に形成された陸繋砂州上に立地する。御手洗遺跡は室積半島峨嵋山の北縁海岸部に存在し、眼下には内湾の室積湾（御手洗湾）が広がっている。なお、この地は典型的な陸繋島地形として全国的に著名であり、その景観とくに先端部の砂嘴である象鼻岬は「周防天の橋立て」と言われるなど風光明媚の地として古くより知られ、現在瀬戸内海国立公園の一部をなしている。

以下、御手洗遺跡をとりまく歴史的環境についてみると、まず「室積」という地名の由来は、江戸時代に編修された地誌『防長風土注進案』[1)]に「当村の儀は無漏津・室津海、又



1. 御手洗遺跡
2. 月待山遺跡
3. 新開遺跡
4. 西之庄遺跡
5. 市延遺跡
6. 東之庄 神田 遺跡
7. 横樋遺跡

• 印は古墳

Fig.49　周辺地形図および遺跡分布図

は室積・室津見とも書来り候由、中古よりもっぱら室積の字相用い候。むろつみといふ事的説も相見えず候えども、周防洋中、当港のみ八方の風を防ぎ、船かかりよろしく、誠に室の内に住むに同しきとの諺にて、いつとなく室住と唱え来り申候由申伝え候。また或説に伝、館の字、古訓ムロスミと相見へ候えば、当港住昔より繫泊の場所に御座候えば、外国聘使などのために館舎設け置かれたれば、自然と地名に相成候やとの申伝へも御座候」とあり、この両説ともその真偽は定かではないが、室積湾が良好な港として古くより使用されていたことに関連している。

室積の地域で人々が営みをはじめた時期は、今のところ縄文時代後期まで遡ることができる。東之庄にある横樋遺跡[2]がこれに相当する遺跡で、室積湾北岸近くの扇状地上に立地する。昭和40年に遺物包含層が確認され、それに伴い縄文土器・石器・植物遺体などが出土しており、石器類の中に漁具である石錘が多数あることから、当時より前面の海域で漁労を行なっていたことが察せられる。その他縄文時代の遺跡としては東之庄・神田[3]で石棒が発見されている。また東之庄とは室積湾を挾んで対峙する位置にある御手洗遺跡からも晩期に比定される土器が出土している。

弥生時代の遺跡としては、御手洗遺跡がある。この遺跡の詳細は第3節で記するが、弥生時代前期から後期までの各時期の土器が出土している。また東之庄や市延でも弥生時代の石斧が採集されている[4]が、山麓裾部では今のところ集落跡と推定される遺跡が見つかっていない。なお、弥生時代は大陸から稲作技術が伝播し、一般に人々は各地に定住し生活を営むようになり、生産力向上とともにそのフィールドを拡大していくが、この地にあっては大きな集団を形成するまでには至らなかったと察する。あくまでも推測の域を出ないが、それは当時の農耕が湿田経営であって、本地での低地の多くは海成砂層のためそれに適した土地の確保が難しかったと思われるためで、わずかに山裾縁辺部で農地を開発し、かつこの海域を利用した小規模な半農半漁を行なう程度の集団が存在したと思われる。

しかし、古墳時代になると遺跡の数は急増してくる。その多くは千坊山西南麓傾斜変還線付近の標高10～40mに立地するもので、北から新開遺跡、西之庄遺跡、西延遺跡、東之庄・神田遺跡など[5]が連続する。また御手洗遺跡でもこの時代の遺物が多く出土する。いずれの遺跡もこれまで正式な調査がなされていないので詳細は明らかでないが、今日まで数多くの遺物が採集されており、この時代より本格的に村落が形成され、地域的展開が活発化した様相を示している。その要因を考えると、これまで上記の理由で多くの人々をうけ入れるには生産基盤が不十分であったと思われるが、古墳時代中期以降に至って農耕技術

に大きな画期、すなわち乾田の開発が進展することによって生産力の増加を可能にしたことも一つとして上げられると考える。また、これら集団の存在を裏づける墳墓もある。その多くは集落跡と推定されるそれぞれの遺跡付近に造営されており、その立地は概して遺跡より高い地点、標高50～60ｍ前後に多数点在する。新開には金山古墳、西之庄には蓬萊山古墳、げんべい山古墳、西御意古墳群、御ケ迫古墳群、東之庄には人見田古墳、東之庄古墳など[6]がある。これらの古墳は横穴式石室をもつ後期の小円墳がほとんどであるが、東之庄古墳だけは主体部が箱式石棺で中期に遡るものである。またこの中でげんべい山古墳[7]は飾大刀・鏡・銅鋺など優品が副葬されていたことでとくに著名である。なお、この時代はヤマト政権の全国支配体制形成過程の中にあって地方の在地有力首長層を基盤に国造制が成立しているが、熊毛・玖珂二郡にまたがる広い地域では「周芳国造」が存在しており、室積の地もその統治下に包括されたと察する。

奈良時代に至ると、室積湾を俯瞰し周防灘を広く眺望できる東之庄呉町の地に、県内では数少ない古代の寺院が建立されていたと推定されており[8]、これまで多量の瓦が出土している。昭和58年度に山口大学人文学部考古学研究室によって発掘調査が実施され[9]、直接寺院に関するものかは現在検討中であるが平安時代前半までにおさまる時期の溝状遺構も検出されている。また以前採集の瓦の中に白鳳時代の軒丸瓦が含まれており[10]、創建時期を考える上で問題を提起している。さらに平安時代初め頃には、空海（弘法大師）が西千坊山に妙相寺を、最澄（伝教大師）が東千坊山に相意寺を興したと伝えられており[11]、古くはこの地域周辺における伝教の拠点になっていたと思われる。

また、律令時代には各地に郷里制をひいているが、この地は『和名類聚抄』に挙げている周防七郷の内、「多仁郷」が室積付近に当てはまる説がある[12]。

平安時代から中世にかけては、この地に石清水八幡宮宝塔院領の荘園がおかれ「室積荘」と称した[13]。15世紀以降に大内氏台頭とともに武家領に移行するが、山城国石清水八幡宮の社領の場合とくに10世紀以後隆盛することや室積庄の地名が石清水文書の中で承安元年（1171年）のものに記述があること[14]などから[15]、比較的長い間宮寺領として存続していたと察する。今の東之庄や西之庄などの地名も荘園時代の名残りであろう。

なお、室積湾（御手洗湾）の港としての歴史的変遷を若干述べると、地理的に良港であることはいうまでもなく、湾の周辺に遺跡が縄文時代後期より連綿していることから、かなり古くから港として使用されていたことが窺われ、『万葉集』巻15に記されている天平八年（736年）の遣新羅阿倍朝臣継麻呂一行の航路の一停泊地と「熊毛浦」と称する地がこ

の室積であるとも比定[16]されている。平安時代になるが、古文書[17]で大同元年（806年）に僧空海が帰朝の際、この港に寄っていることが記され、また、『防長風土注進案』で伝えるところ治承元年（1177年）には京都東山で鹿ケ谷事件を起こした平康頼の乗船が寄航[18]し、さらに『散木奇歌集』から源俊頼もこの港に来ているなど[19]、古くより官船の停港地にも定められていたことが予想される。さらに、平安時代末期応保・長寛年間（1160年代）の成立といわれる『本朝無題詩』には、詩人釈蓮禅と藤原周光の乗った船がこの地に泊り、その時に両人は室積の様子を詩にしており、それによれば当時すでに漁村としても栄えていたことが知り得る[20]。

中世に至ると倭寇が横行するようになるが、室積周辺地域も例外ではなく『老松堂日本行録』によれば、応永二十七年（1420年）に朝鮮国王世宗の使として来日した宋希環が無隠頭美島（室積）に寄港した際に「海辺居人賊徒故」と言っており[21]、当時においてこの地が海賊の根拠地であったことがわかる。また『満済准后日記』では永享六年（1434年）に渡唐船の警固を「周防・伊予辺海賊」に命じている[22]ことから、これら海賊は大内氏の警固衆として活躍したかもしれない。

さらに江戸時代には、幕藩体制の確立とともにこの室積港は熊毛宰判の管轄に属し、萩本藩の保護をうけて整備され、周南地方の主要商港として繁栄する。元禄十四年（1701年）に室積浦の一百姓が「港内の見入りよろしく、夜中にも回船が出入できるようにしたい」という目的で、象鼻岬に自費による燈籠堂の建設を願い出て許可されており、元禄頃には港が諸国回船の出入で賑わっていた様子が察せられる[23]。享保十四年（1729年）には「室積御番所」が設置され、自他藩の御用船や、朝鮮来信使船などの諸用を取り扱う海上御勤方が確定し、藩港としての重要性を高め、また安永年間までに越荷事業[24]を行なう会所が置かれて[25]、主に防長米の積み出し港として栄える。享保末から宝暦年間にかけ一時衰微したものの、その後藩政改革の一環として整備され、また近接地で塩田の開発なども行なって、再び港町の繁栄を呼びもどし、藩末期には薩長交易港にもなっており、防長では三田尻港と共に藩の重要な役割も担っていた。

この時代においては漁港としても栄えており、寛永検地の際に調べられた浦屋敷数[26]は102屋敷で防長での平均を大きく上回っている。また藩の特別免許を得た御用浦、立浦（本浦）でもあった。

以後、明治に至ると長距離定期船の寄港地としても選定されていたが[27]、明治20年代終り頃から交通事情の変化[28]により、港の重要性は漸次的に上関港に移り、室積港は斜陽の傾向

を辿ることになり[29]、現在は近海漁業の基地として地方一般的な漁村化を呈している。

（森　田）

〔注〕

1）山口県文書館『防長風土注進案』（山口県立図書館、1963年）。
2）福本幸夫『先原史時代の光市』（1966年）。
3）山口大学島田川遺跡学術調査団『島田川』（1953年）。
4）注3)に同じ。
5）注2)に同じ。
6）注2)に同じ。
7）弘津史文『周防国熊毛郡上代遺跡発見地調査報告書』（1977年）。
8）注3)に同じ。
9）山口大学人文学部考古学研究室御教示。
10）中野孝之「山口県出土の古瓦」（『山口県地方史研究』 1975年）。
11）福本幸夫『郷土史散歩』（光地方史研究会、1958年）。
中道静夫『室積郷土史説』（1981年）。
12）当郷域については、光市室積・光井地区と田布施町周辺にあてる二説がある。
『防長地名淵鑑』には「今多仁郷を前記各村とすれば、波濃郷過小となりて成立せず、波濃郷は必ずや今の田布施の地域に亙り、田布施川貫流の地とせざる可らず」といって、光市のうち室積及び光井村を多仁郷の古郷域にあてている。また、布引敏雄氏は多仁郷の比定地を『光市史』の中で源頼朝書状（尊経閣・東福寺文書）より、田布施町周辺を有力視している。いずれにしても現時点明確でない。
13）布引敏雄「古代・中世のひかり」（『光市史』、 1975年）。
14）藤井一二「大寺社領の成立と分布」（『日本歴史地図』原始・古代編（下）、1982年）。
15）山口県文書館「石清水文書」（『山口県史料　古代編』、1973年）。
16）栄原永遠男「海路と舟運」（『古代の地方史』第２巻、1977年）。木下　良「国郡区の編成と主要施設・交通」（『日本歴史地図』原始・古代編（下）、1982年）。
17）注１）に同じ。
18）注13）に同じ。
19）注13）に同じ。
20）小川国治「近世のひかり」（『光市史』、1975年）。および山口県文書館『山口県史料　古代編』（1973年）。
21）山口県文書館「老松堂日本行録」（『山口県史料　中世編上』、1979年）。
22）山口県文書館「満済准后日記」（『山口県史料　中世編上』、1979年）。および　注14）に同じ。
23）注13)に同じ。
24）寄港する他国の廻船に対し、藩内諸郡から廻送された防長米を販売することを主たる業務とし、積荷の保管や融資なども行なうものである。当時、下関や中ノ関でも同様のことが行なわれていた。
25）小川国治「近世のひかり」（『光市史』、1975年）。
26）石原啓司「海の産物」（『防長産業の歩み』、山口県教育委員会、1981年）によると防長両国で浦屋敷が存在する村は49カ村で、屋敷総数は2900を数える。一村平均（屋敷数／村数）は約59である。
27）中道静夫「近代のひかり（村政の推移室積）」（『光市史』、1975年）。
28）山陽路線から外れたことや船舶の大型化などの要因による。
29）昭和20年での室積港へ入港する日本型船・西洋型風帆船の数は、上関港を上回っていたが、以後逆転し昭和29年には顕著な差が表われる。

3 「御手洗遺跡」の既往調査について

山口大学教育学部附属光小・中学校の構内に周知する「御手洗遺跡」の発見は、同校の前身である山口県女子師範学校当時の昭和7年において、グランドの東南隅から弥生時代のものと考えられる太型蛤刃石斧が表採されたことにはじまり[1]、昭和10年までに弥生土器も採集され[2]、当地に古代の遺物が散布していることが明らかになった。

戦後に至って同校が山口大学山口師範学校光附属小・中学校の名称で開設していた昭和25年、同校に赴任していた小野忠熙氏（元山口大学教育学部教授）によって構内の面する海岸線で土師器の散布が認められ、これを契機として翌年にわたり半島部分の踏査が行なわれた[3]。その結果は土器類が峨嵋山の東北麓に位置する標高20ｍ程の通称月待山付近を中心として、西は附属小学校付近から、東は象鼻岬の鈎状砂嘴の中央部までの間に分布していることが判明し、月待山の平坦面付近と象鼻岬の中央部では遺物包含層も確認された。この昭和25・26年の踏査結果から遺物の散布が附属構内およびその付近のみならず、象鼻岬までの広い範囲に及んでいることから、その後構内の地域も「月待山遺跡」として包括され扱われる[4]。但し、詳細は後述するが昭和40年に構内で遺物包含層を確認し、多くの遺物が伴出されたことにおよんで、当地と月待山付近では遺物の時期が異なることが明確になり[5]、現在は構内およびその付近に限っては「御手洗遺跡」と称して区別している。

構内に遺跡が埋存していることが明白になったのは昭和40年11月のことで、附属中学校体育館新営工事中に際し、同校教諭増本忠一・福本幸夫両氏等によって同敷地内より遺物包含層が確認され、それに伴って多量の土器類が出土したことによるもので、その調査の概要は『先原史時代の光市』の中に記述されている[6]。それによるとこの調査は、偶然工事中に遺物を発見したのが切っ掛けで行なわれたもので、工事途中のため十分な調査時間はなく、かつ調査の時点で既に工事基盤までの掘削が終了段階であったため、土層壁面による遺物包含層の確認とそれからの遺物採集に重点がおかれていた様子である。

遺物包含層について考えてみると、まず報告者である福本氏は筆書の中で「少なくとも今回の調査の範囲においていえることは、附中体育館敷地約600㎡の範囲からは多量の土器を出土しており、遺物包含層があること。さらにその包含状態は海岸に近い北東部が濃密であること。基礎工事のためトレンチ式の地面掘り下げが、発見当時はすでに掘り下げ終了時であったため、土器の出土状況は明らかでないけれども、各時期の文化遺物が混在していたと思われるようである。この遺跡のある附属光中学校のグランドは、そのGLが御手洗湾の大汐時における最高潮位から164cmという低地である。基礎工事のための掘り

下げは、このGLから150cmまでであった。遺物包含層上限は、グランドGL下17cmから110cmの傾斜を東から西にむかってもっており、平均して75cmである。その下限（包含層の厚さ約50cm）は67～160cmである。包含層は峨嵋山麓（グランドの南側）から海岸に向って、さらに月待山側（グランドの東側）から西の校舎側に向って、それぞれ傾斜しているが、その厚さは概して同じ約50cmである。包含層は黒褐色の海成砂礫層である。なお、包含層の上下共に海成の砂礫層であるが色が黄茶褐色・黄褐色・褐色等の層をなしているので、包含層との区別は明瞭であった。グランドの埋文の土層は10～30cmの薄いものであった。」と以上のように述べている。このことから察すると、この調査ではGLから1.5m前後の深さまでの土層が調べられており、その深度内では本来の地山面は検出されていないが、その間いくつかの層をなす厚い海成砂礫の堆積があり、遺物包含層もその一層であることが窺われる。遺物包含層堆積面の旧地形は、調査範囲内において包含層下限の高低差が1m前後あることから、平坦な地形ではなく緩傾斜面状をなし、南東から北西方向すなわち中学校グランドから校舎側に向って下っていると推定される。遺物包含層は黒褐色の海成砂礫層で、旧地形に則し厚さ約50cmと平均した堆積であり、調査区東側でのその上限はGL下17cmと非常に浅い位置にある。なお、この地点でのグランドの置土・整地土の厚さは10～30cmで、その直ぐ下には自然堆積とみられる包含層を含む海成の砂礫層であることと上述した土層の堆積状況を勘案すると、中学校グランド側の造成の大半は埋め土によるものではなく、一端削平した後整地されたとする蓋然性が大きいと思われる。[7] したがって包含層の遺存度は調査地点から東側より西側の方が高いと予想される。

包含層から出土したとされる遺物は、縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・瓦質土器等である。[8] これらの中で縄文土器を含む若干の遺物は器表が摩耗しているが、大半は破片が多いものの摩耗の度合が少なく比較的良好な残りである。縄文土器は1点のみで晩期に比定されるものである。弥生土器も出土点数は少量なれど、前期・中期・後期にわたってそれぞれの時期のものがあり、とくに前期の小型の蓋は完形にちかく、外面には貝殻施文によって美しく文様が施されており極めて優品である。土師器は須恵器と共に多数出土しており、中には東之庄遺跡や市延遺跡出土のものと同様のタイプのものがある。須恵器は記載写真や文面から察して一時期に限定されるものではなく、多型式におよんでいると思われる。瓦質土器は数点のみで時期は中世の範疇と推定する。

おわりに報告者は結果として、御手洗遺跡は出土遺物よりかなり長期間にわたる遺跡と考え、包含層に関してはおそらく攪乱堆積であると思われるが、一部漂着堆積も含まれる

だろうと推定している。なお、その調査は工事中に実施したもので、十分な調査ではなかったものの、御手洗遺跡の状況や時期などを知る上で数多くの手掛かりを与えたと共に、調査対象地が約600㎡と比較的狭く限られた範囲内で、この地域では数少ない弥生時代の遺物を伴出することを含み、縄文時代から中世まで長期にわたる遺物が混在して出土することは稀れで、遺跡の性格等が注目された。また一方で、包含層の拡がりや遺構の有無・詳細な土器の出土状況などのあらたな問題も提起されてきた。

その後、今回の調査（昭和58年度）までの期間においては全く調査が行なわれておらず、御手洗遺跡の解明は進展していなかった。

（森　田）

〔注〕

1）小野忠熙「光市室積月待山附近の遺跡」（『島田川』、1953年）。
2）小川五郎「防長石器時代遺物発見地名表」（『防長史6．2』、1935年）。
3）注1）に同じ。
4）注1）の文献においては、構内出土の石器が月待山遺跡出土のものとして記載されている。
5）月待山出土の土器の主体は中世の土師器類である。
6）福本幸夫「御手洗遺跡」（『先原史時代の光史』、1966年）。
7）注6）のP76に記載されている御手洗遺跡の予想包含層限界線の設定とくに東限ラインの推定はこの考えに則するものと思われ、中学校グランドの地域ではすでに包含層が削平されている可能性もある。また昭和7年に校庭の東南隅で石斧が表採されたのもこれに起因するのかもしれない。なお、予想包含層限界線の西限ラインの根拠は今のところ知り得ない。
8）遺物は現在附属光小学校に保管されているが、現時点実見していないので、この報告は注6）の文献を参考とする。

4　層位と遺構

Aトレンチ（PL.38）

自転車置場布設予定範囲内の最南端地点に設定した3.5ｍ×3.5ｍの規模のものである。今回の調査のトレンチ中では昭和40年に古代から中世までの遺物が多量に包含する層を発見した地点に一番近いだけに遺物包含層を検出する可能性が最も高いと予想されたトレンチである。地表面下1.5～1.7ｍまで掘削した結果、最上部は20～30cmまでは整地土で、以下全て人為的な埋め土であり、地山および古代から中世にかけての遺物包含層は検出されなかった。なお、埋め土内から近世から近代の瓦等が多量に出土した。

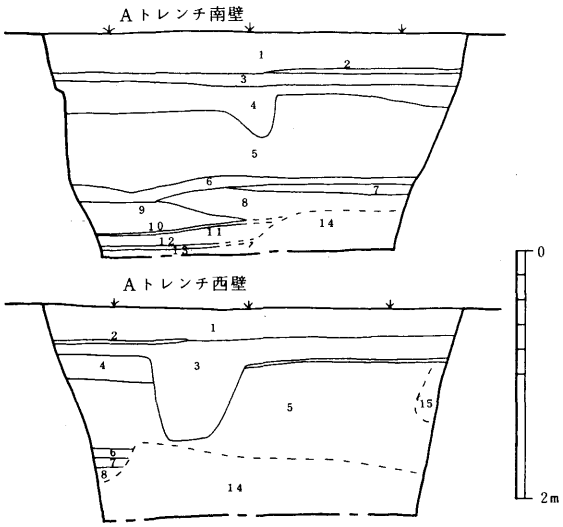
Bトレンチ

工事範囲内の中央部に設定した3.5ｍ×2.5ｍのトレンチで、工事基底面である地表面下30cmまで掘削した結果、すべて整地土の範疇内であった。出土遺物は全く無い。

Cトレンチ（PL.39(1)）

工事範囲内の北寄り地点に設定した3.5ｍ×4.0ｍのトレンチである。地表面下2.3ｍまで掘り下げた結果、底面まで近世から近代の土器類を多く含む埋め土であった。なお、南壁で割石積みの石垣状遺構を確認した。この石垣は地表面下約1.5ｍで上面が検出され、1ｍ以上の高さがあり、さらに海岸部に向かってのびている。

（森　田）



土　層　名

1. 整　地　土
2. 炭　殻　層
3. 黄 灰 色 砂
4. 濁淡灰橙色
5. 淡黄灰色砂（小石混り）
6. 黒灰色砂（小石多含）
7. 淡黄灰色砂
8. 淡黄灰青色砂
9. 黄 灰 色 砂
10. 黒灰色細砂
11. 淡黄灰色粗砂（小石多含）
12. 黒灰色細砂（炭層）
13. 淡灰白色細砂
14. 淡灰橙青色（瓦留め）
15. 黒　色　土

Fig.50　土層断面図

5　遺物

(1)　磁器（Fig.51　PL.40）

1～6は染付で埦（1～5）と湯呑み（6）がある。1～3・6は有田系のもの。1は暗青色の呉須で外面は上半に「木の葉文」、下半に櫛目文帯、内面は口縁直下に六条の圏線を施し、また見込みにも一条有する。胎調は白色、釉調は淡灰白色。2は外面の二条の圏線間に抽象化された「雲間飛鳥文」[1)]を施し、内面は口縁部下に二条、見込み付近に一条の圏線が巡る。呉須は鳥および雲が濃青色、圏線が暗青色。胎調、釉調とも白色。3は濃青色の呉須で外面に網目条文様、内面には六条の圏線を施す。胎調、釉調とも白色を呈す。4は外面高台脇に二条の圏線が巡り、また体部には円文を配し、その中に紅葉、山、垣根、菊、蝶等の文様を、その間隙に「福」、「寿」の銘を印刷絵付けする。5は外面に草花文を施すと思われ、口縁部内外面にそれぞれ二条、一条の圏線を巡らす。呉須は花のみ鮮青色で他は青緑色。胎調は橙褐色を呈するが、他品に比べ焼成ともに粗雑である。6は口縁部下と底部に幅広く暗青色の呉須を巡らせ、その間に松葉状の斜格子文を施す。胎調は白色、釉調は淡灰白色。7は埦。外面上半部および内面は灰色の釉で、見込みに目跡が見られる。外面下半部には淡茶色の釉を薄く施す。生地は緻密で灰白色を呈する。

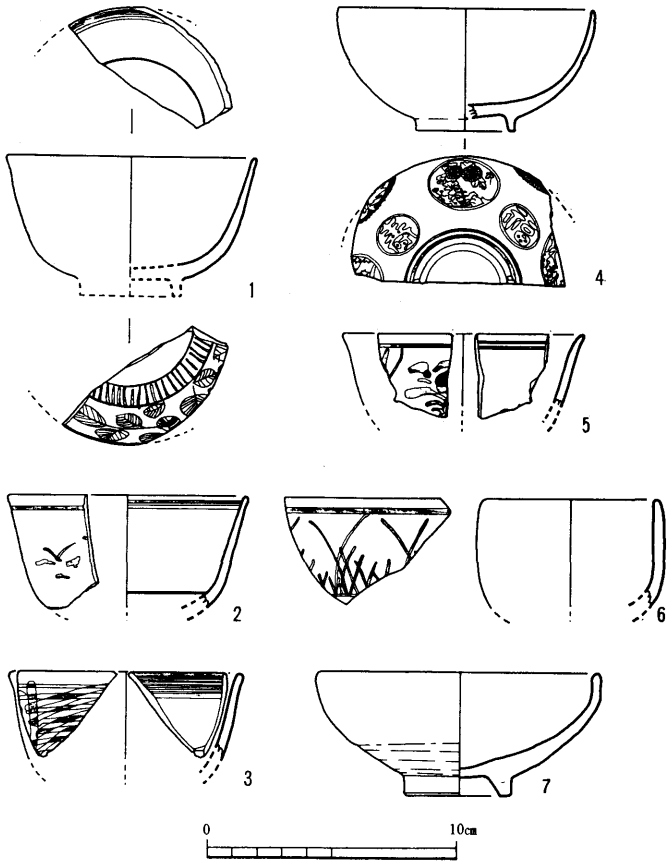


Fig.51　出土遺物（磁器）

(2)　陶器（Fig.52，53，8～20　PL.40，41）

甕、鉢、徳利、埦、蓋、擂鉢などがある。

8・9は中型の甕で、8は上半部を欠失している。

底部外面を除き全面に施釉しており、釉の境に焼成台の痕が残る。胎土は浅黄橙色を呈しやや粗雑。焼成は良好。釉色は赤黒色。9は口縁部が直立ぎみに立ち上がり、端部は内外方に拡張して断面「T」字形をなす。端部上面に二条の浅い凹線を巡らす。胴部を巡る十条の沈線の3本目と4本目の間に波状文を施す。内面に叩き目が残る。内外面とも暗赤褐色の釉を施す。胎土は赤褐色を呈し緻密、焼成は良好。9は石州に器形、文様等、類似品が見られ、石州系統と思われる。[2)]

10〜12は鉢。10・11は口縁部が外方に水平近く屈曲し、端部内面をつまみ上げる。両者とも体部外面下半を除いて施釉しており、釉色は10が極暗赤褐色、11が黄白灰色。素地はともに緻密で淡黄色を呈し、焼成も良好。12は大鉢の底部で、高台部分を除きうぐいす色の釉を施す。素地は緻密で明黄灰色を呈す。13は小型の甕。口縁部が直立し、端部は外方へ折れ曲がるもので暗褐色の釉を施す。素地は緻密で赤褐色を呈する。

14は埦。見込み部に蛇の目剝ぎの跡が見られ、畳付部と蛇の目部分を除き、緑茶褐色の釉を施す。素地は緻密で暗紫灰色を呈する。

15・16は蓋。いずれもつま

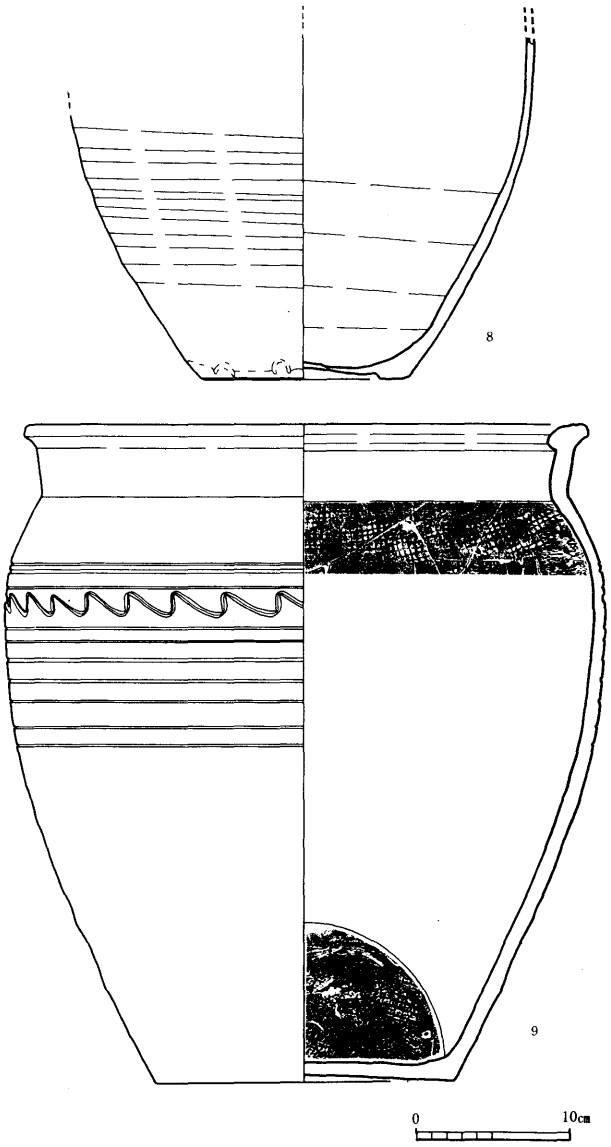


Fig.52　出土遺物（陶器）

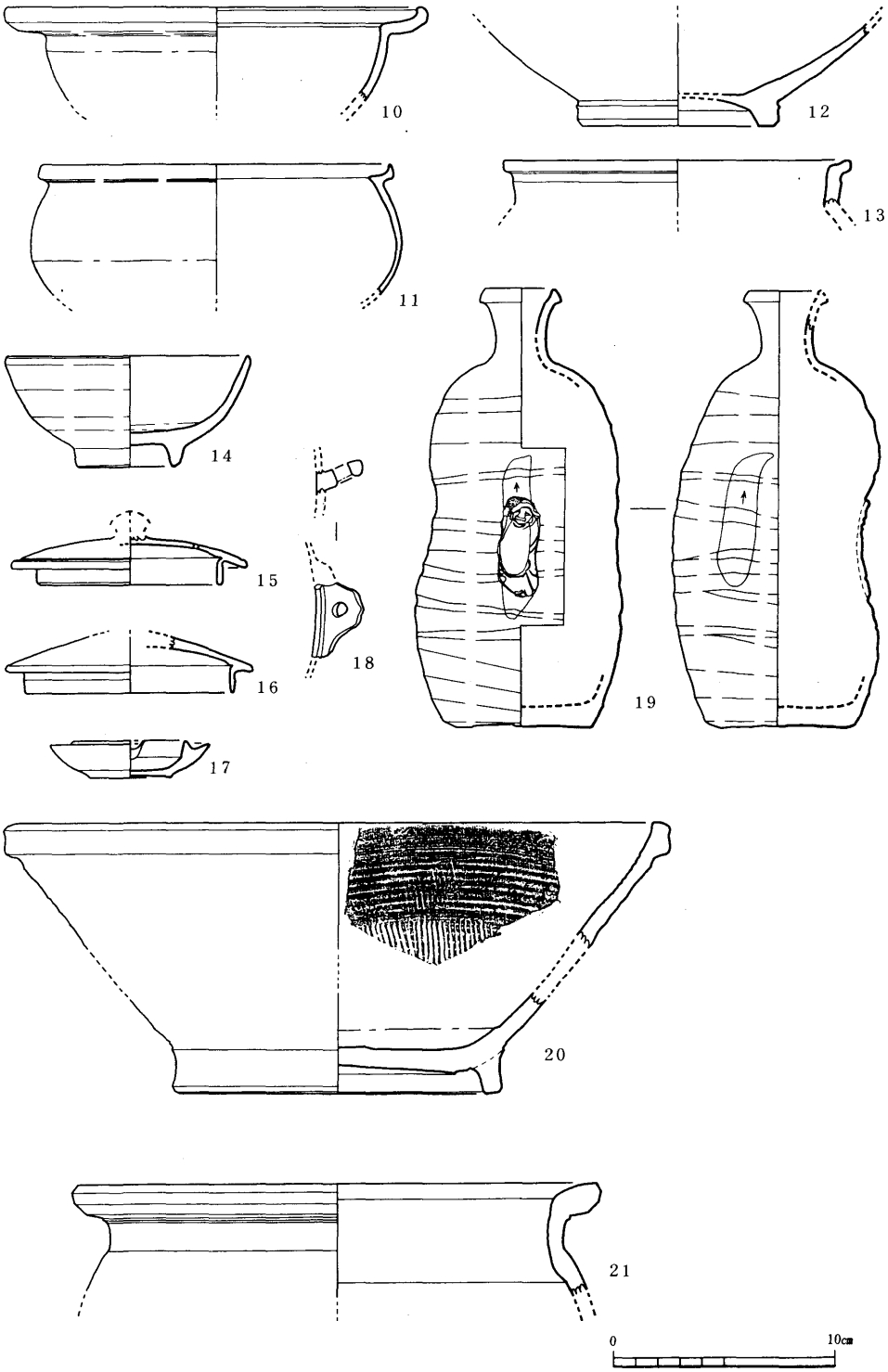


Fig.53　出土遺物（陶器、瓦質土器）

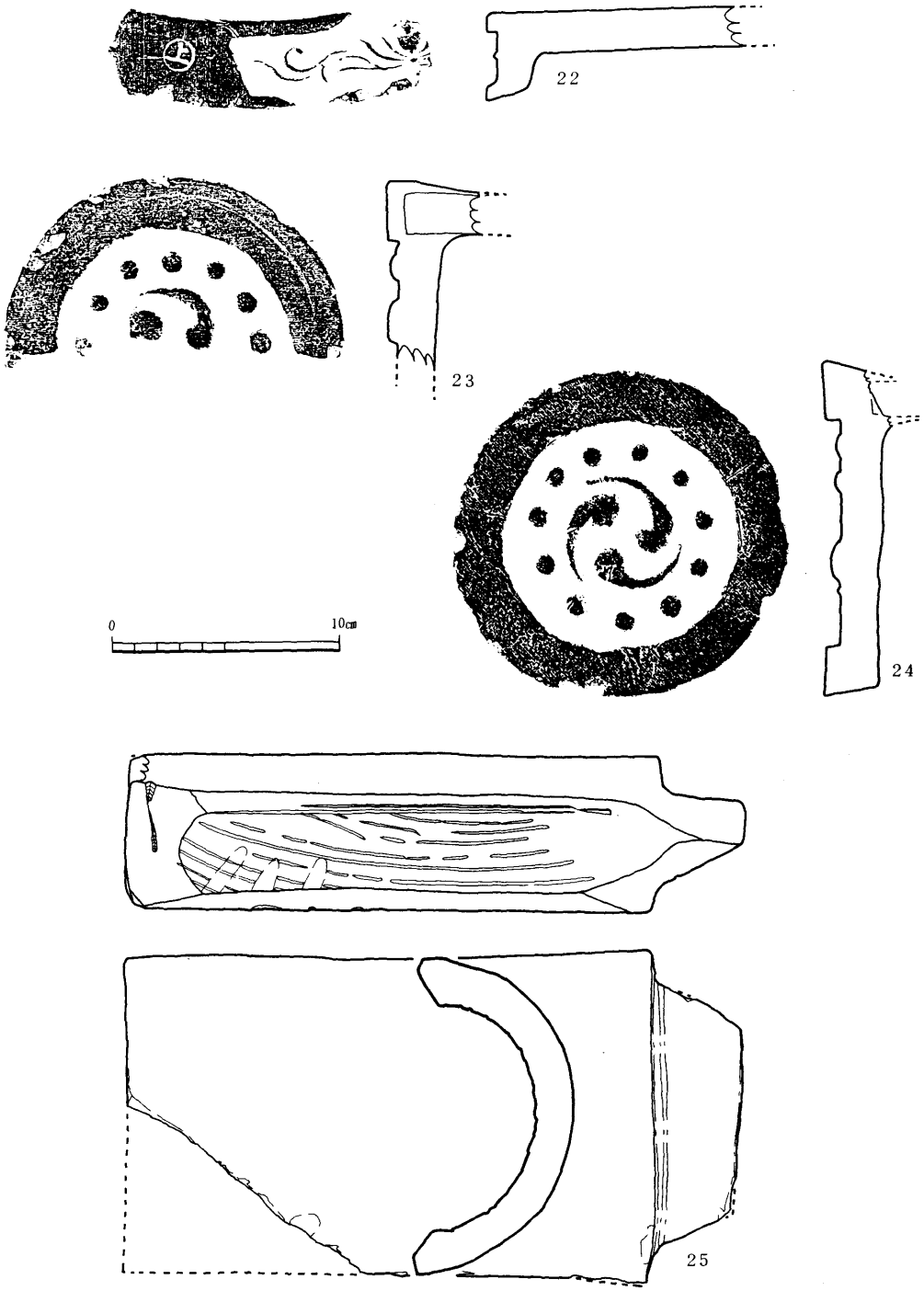


Fig.54　出土遺物（瓦）

み部分を欠損する。15は天井部中ほどに2個対の穴を穿ち、天井部にのみ透明釉を施す。16は無釉。素地は共に緻密で15は橙褐色、16は灰黒褐色を呈する。

17は灯明皿。油皿部は短く立ち上がり、一カ所三角形の切り込みを有する。底部は糸切りである。内面に暗赤褐色の釉を施し素地は緻密で橙褐色を呈する。

18は鍋等の耳。素地は黄白灰色で緻密。灰白色の釉を施す。

19は備前系[3]の人形貼り付け徳利。胴部中位3カ所を指圧により凹ませ、うち1カ所に人形を貼り付ける。素地はやや粗雑で淡褐色を呈し、胴上半部にのみ明茶色の釉を施す。

20は擂鉢。体部はやや内彎ぎみに立ち上がり、口縁は玉縁状に肥厚する。高台は底部をカキ目状整形した後に貼り付ける。素地は緻密で赤褐色を呈する。

(3)　瓦質土器（Fig.53，21　PL.40）

小型の甕。短く直立した口縁部は上位で肥厚して上外方へ屈曲する。全体的に丁寧なナデ調整を施しており、口縁部内面に煤付着。暗灰色を呈し、胎土は良好。焼成は堅緻。

(4)　瓦　（Fig.54　PL.41）

22は軒平瓦の破片で、瓦頭に均整唐草文を有す。胎土は精良で金雲母を含み、焼成は堅緻。23・24は軒丸瓦で右回りの巴文を有す。色調は23が青灰色、24が灰色でともに胎土は精良、焼成は堅緻。25は丸瓦で尻部を一部欠損する。外面は篦削りののちナデ、内面には型の痕跡が残る。胎土は精良で金雲母を含み、焼成は堅緻。色調は灰色。

上述した遺物のうち産地を明確に比定できるものはなく、わずかに9の甕が石州系、19の人形貼り付け徳利が備前系の所産で、全体的に見て近世に属すると思われるが、中には4のように印刷絵付けを行なったものもあり、時期は19世紀に位置づけられよう。

（磯　部）

〔注〕

1）該当する文様が見当たらないため、小稿では「雲間飛鳥文」として扱った。

2）原宏ほか『日本やきもの集成8　山陰』（平凡社、1981年）。

3）村上正名ほか『日本やきもの集成9　山陽』（平凡社、1981年）。
桂又三郎『陶磁大系10　備前』（平凡社、1981年）。
備後、鞆で生産される保命酒の容器として生産されたもので江戸時代中期から明治初め頃まで大量に焼かれた。
貼付する人形は、大黒天、恵比寿、布袋などが多く、本品では大黒天と思われる人形が貼り付けてある。

6　小結

今回の調査では、施工範囲内の３カ所に試掘坑を設定し、一部地表面下約２ｍまで掘削した。その深度内はいずれの地点も近世以後の埋め土内に留まり、昭和40年に附属中学校体育館の地点で見つかっている縄文時代から中世にいたる遺物包含層は確認できなかった。ただし、埋め土内からは近世後半から近代前半にかけての土器や瓦が多量に出土し、また石垣状遺構の一部も検出した。

工事に関しては、施工基盤が地表面下30㎝であり、土層の観察からその掘削の大半は整地土内におさまるもので、直接埋蔵文化財に影響が無いと判断した。そのため調査後日、埋蔵文化財運営委員会の承認を得て、工事の着手が行なわれた。

縄文から中世にかけての遺物包含層の未検出については、調査地点が最も海岸よりに位置し、その海岸面との間が大きく段差になっていることから、構内造成においては他地点よりも高く埋め土を施していると推定されるところである。そのため今回の掘削深度よりもさらに下に存在する可能性も指摘できるが、石垣状遺構検出に関連して海岸沿いということで後世の港湾整備のため既に破壊されているとも考えられ、今回の調査だけでは明確な結論づけは早計であろう。

石垣状遺構については、埋め土内の出土遺物から推定して近代初め頃まではその姿は地上に現れていたと思われ、江戸時代中期から明治時代初めにかけて現在の普賢寺前から山口大学附属光小学校の海岸辺りに室積会所の諸施設が置かれ、その役所と波戸は附属小学校海岸敷地内の臨海実験場付近に構築されていたといわれる事柄[1)]に関連するものかもしれない。この推測が当を得ているとすれば、今後の調査如何では文献だけでは明らかにされていない室積会所をはじめとして当時の港湾の様子を具体的に究明できると思われ、また遺物では今回の調査範囲が僅少にもかかわらず19世紀代中心にした土器類が多量に出土することで、当時の商品流通を考える上での一資料として、ひいては、これを契機に近世文献史学と埋蔵文化財調査の結びつけによって、毛利藩の経済経営の一端をより明確に知り得、近世史の研究がさらに進展する可能性も考えられる。

（森　田）

〔注〕
１）光市教育委員会『光市史』（1975年）。

第５章　宇部（常盤構内）工学部校舎新営に伴う試掘調査

１　調査の経過

調査地区は工学部キャンパスのほぼ中央部、工業化学科棟および機械工学科棟に囲まれた本館中庭に位置する（Fig.55, PL43(1)）。本地区への校舎新営に伴い、昭和59年１月23日から31日にかけて人文学部考古学研究室の協力を得て、旧地形の残存状況、土層の堆積状態並びに遺構、遺物の有無の確認を主眼として試掘調査を実施した。

本地区は工学部の前身である宇部工業専門学校当時、機械系教室の存在していた地域にあたり[1]、調査当初よりこれらの付随諸施設の埋存が予想された。しかるに、同キャンパスは周辺に点在する諸遺跡、とりわけ東方に所在する常盤池遺跡とは直線距離にしてわずかに300ｍを隔てる位置にあり、かつまた同一段丘（洪積世段丘の第Ⅲ段丘[2]）上に立地することから予定地内６ケ所にトレンチを設定して調査を行なった。（Fig. 56）。

調査は新営予定地約270㎡の

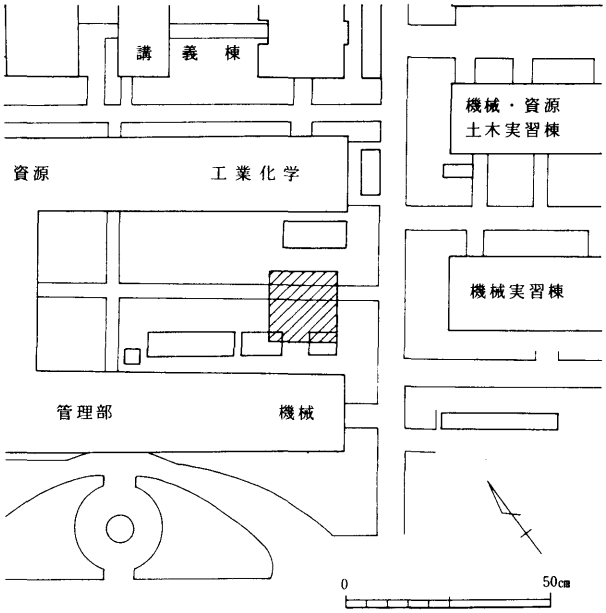


Fig.55　調査区位置図（１）

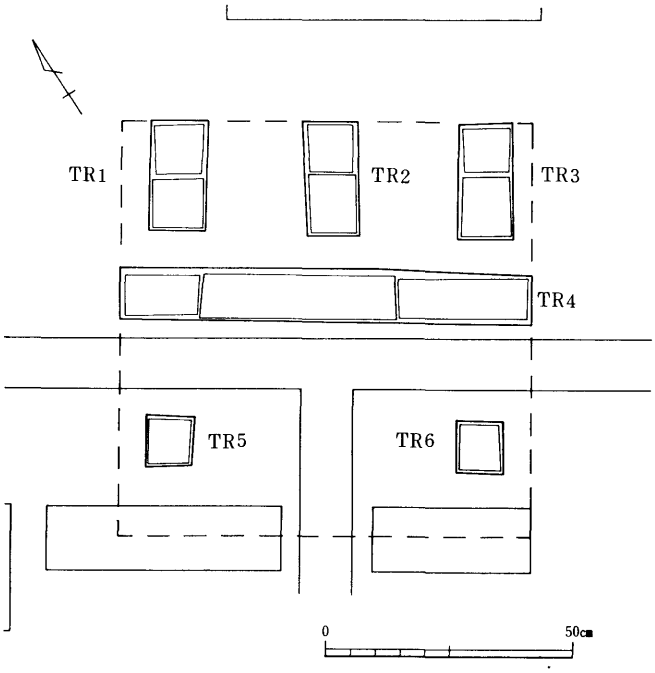


Fig.56　トレンチ設定図

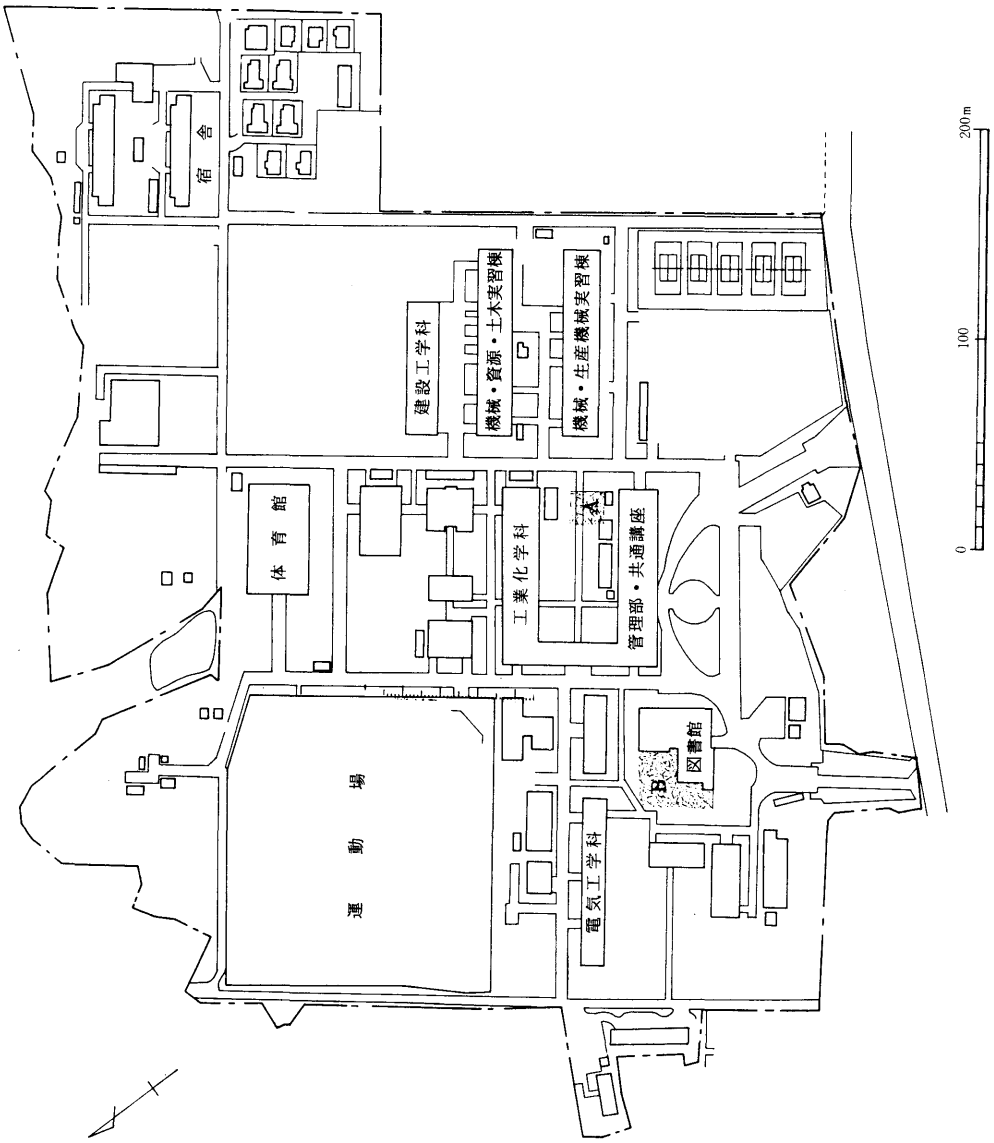


Fig.57　調査地（A－校舎・B－図書館）

うち約70㎡について既設構造物を回避しながら、北半部に2 m×4.5 mのトレンチを3カ所、中央部に2 m×16.5 mのトレンチ、南半部に2 m×2 mのトレンチを2カ所（北からTR1 ……TR 6と呼称する）設定して行なった。

表土は機械を使用して除去し、TR 1 ～TR 3 各北半部は第2層以下を掘削し土層の堆積状況を観察した。

その結果、調査区内は後世の削平が著しく、顕著な遺構・遺物は皆無であったが、TR 4表土中より須恵器片および磁器が出土した。

2　位置と環境

工学部キャンパスは本州の最西端山口県の南西部に位置する宇部市に所在し、市街地の北東約2 kmの低丘陵上に立地する（Fig.58）。

宇部市中・北部は雁子山、霜降岳等老年期山地の残丘が随所に存在するが、地勢の大部分は標高100 m前後の低丘陵（侵食平坦面）が発達し、県下第三位の河川、厚東川はこの低丘陵地帯を侵食しつつ南西に貫流する。西部地域厚東川河口の広汎な平野は、上流域に形成された小規模な谷底平野とは異なり、「開作」等の地名にみえるようにその大部分は毛利藩政以後（元禄以後）の干拓および延宝年間以後の石炭採掘[3]に伴う残土による埋立てによって形成されたものである。

一方、東部地域の沿岸部は基盤とする三群変成岩類、花崗岩等の火成岩類の侵食面に堆積した洪積層の数次にわたる隆起によって発達した海岸段丘を形成し、その前面に段丘を開析する侵食谷、海浜等には沖積層が堆積している。宇部市沿岸部を中心として広範囲に分布するこの洪積世段丘は宇部台地と呼ばれ、市域では高位、中位計4段の段丘面が確認されている。しかし、同一段丘面は一様な高度、平坦面を形成しておらず、市域西部、中部、東部三地域において各段丘ともそのあり方に相違がみられる。中位段丘のうち旧石器時代の遺跡が確認されている第Ⅲ段丘b面、第Ⅳ段丘を例にとると、前者は西部では標高15～30 mの持世寺面、中部では標高25～35 mの野中面、東部では標高25～30 mの古殿面、後者は中・西部では各々標高10～20 mの下岡面、亀浦面、東部では標高10～15 mの丸尾原面に対比され、地形的に同一段丘として標式的に把握されている[4]。

長桝遺跡、本郷遺跡、常盤池遺跡等東部地域に集中的に認められる後期旧石器時代の遺跡は、こうした侵食谷によって開析された中位段丘の台地縁辺部に立地する。遺物はすべて表採資料で前二者からはナイフ形石器、台形石器、掻器[5]、また、先に述べた如く工学部

キャンパス東方約300ｍに位置する常盤池遺跡からは剝片尖頭器、細石刃[6]がそれぞれ採集されている。

宇部市域における沖積低地は、わずかな扇状地を除いてその大部分が海進、海退による沖積段丘と海成砂堆地によって形成されており、縄文時代以後の遺跡立地、分布のあり方を規制している。

縄文時代の遺跡数は多くはなく、市部では砂堆上に立地する前期から晩期の月崎遺跡[7]（62）、雁ケ浜旧湾に発達した３列の浜堤列の最奥部に位置する花園遺跡（58）、中部では早期に遡りうる常盤池遺跡等が知られているにすぎない。

弥生時代の遺跡も同様で、北東部、中部、東部において散発的に認められる。北東部の厚東川中流域標高約40ｍの海岸段丘（第Ⅲの段丘）上に立地する諏訪の原遺跡（４）は中期後半の集落跡として把握される。中部では前期末の琴崎八幡宮馬場遺跡（19）、石包丁を伴出した中期後半の南側遺跡（20）、貝塚を伴う集落跡として著名な中期後半の北迫遺跡（14）等が知られている。東部では中須賀遺跡（60）、月崎遺跡(62)等海岸砂堆地に遺跡が認められる。月崎遺跡は中期から後期、中須賀遺跡は花園遺跡の前面、波雁ケ浜旧湾に発達した浜堤列の２列目に位置する後期後半から終末の遺跡で、中部に営まれた南側遺跡、北迫遺跡等の真締川上流域を中心とした狭隘な沖積地と樹枝状に入りくんだ小規模な谷頭平野に依存する中期の生産体制、基盤の脆弱さが東部に明示されるように後期における海岸沖積地への進出により発展段階的に解消されたものと理解される。

さらに、出土地点は明確ではないが、沖ノ山浜松の砂中から出土したといわれる甕形土器[7]を指摘することができる。極めて特異な形態、調整方法を有するこの甕は、内傾する胴上半部に続く口縁部外面には断面カマボコ状の扁平な粘土帯を貼りつける。また、胴上半部には叩きの痕跡が残り、ナデ消した後、刷毛目仕上げを行なっている。内部には半両銭20枚以上、五銖銭96枚以上を内蔵しており、朝鮮系無文土器の系譜を引く国産土器として中期後半から後期初頭に位置づけられている[8]。

古墳時代の遺跡には埋葬跡、生産跡、祭祀跡および遺物散布地が知られているが、住居跡等明確な集落跡は未検出である。前期の埋葬跡は海岸砂丘上に立地し、東部の大須賀遺跡（67）では箱式石棺10基、壺棺３基が検出されている。鏡が出土したというが判然としない。中期は明白な埋葬跡を欠き不明である。後期になると低丘陵上、海岸段丘上に小規模な古墳が営まれるようになる。東部の若宮古墳群（61）、月崎古墳群（63）や厚東川中流域の萱曲（かなまがり）古墳（１）、持世寺古墳群（５）等の横穴式石室を内部主体とする、円墳群

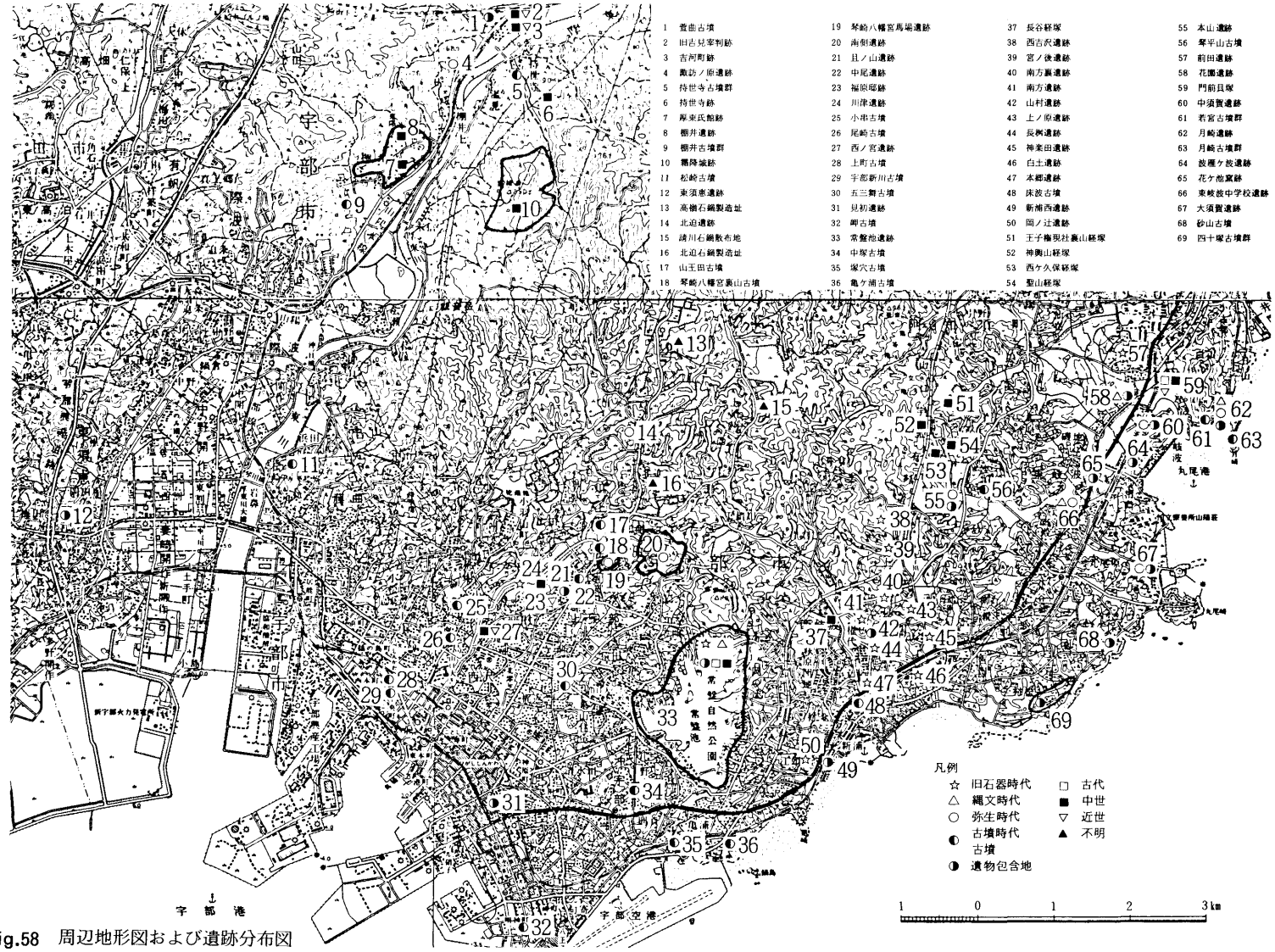


Fig.58 周辺地形図および遺跡分布図

や中部真締川上流域の旦ノ山古墳（21）、山王田古墳（17）等の円墳がそれである。後期末の埋葬跡は東部の砂山古墳（68）、厚東川中流域の棚井古墳群（９）等が知られている。なお、工学部キャンパスの南西約200ｍには後期の五三舞古墳（30）が所在したとされている。しかし、宇部市域に点在する後期の群集墳は、各地で認められるように決して爆発的な増大を示さず、膨張というよりはむしろ制約された可耕地に裏打ちされた新たな可耕地を追求した結果としてのひとつの拡張として把握される。

生産跡には花ケ池窯跡（65）があり、７世紀前半に盛行した須恵器登り窯が確認されている。また、波雁ケ浜遺跡（64）は砂堆地に営まれた後期の製塩遺跡で、美濃ケ浜式土器や製塩遺構が検出されており、県下の製塩遺跡の基準資料となっている。

また、同遺跡からは高坏や埦のミニチュア土器、土製の勾玉、小玉、スプーンや滑石製模造品が出土しており、製塩に付随する祭祀を示唆する。東須恵遺跡（12）からは剣形の滑石製模造品10点が出土しているが詳細は不明である。

くだって大化の改新後は、律令制国家の成立にともない、宇部市域は国郡制に基づく地方行政組織の一単位として長門国厚狭郡[9]に編入され、律令制下における政治、経済、社会機構として中央に掌握された。生産の場においても例外ではなく、国家的土地所有を背景とする農業生産基盤として条里制が施工された。宇部市域では厚東川下流域、河口付近および東部の低台地上に「一ノ坪」、「中ノ坪」等の坪名が散見されるが、いずれも遺存地名、文献資料に依拠するもので条里地形の復原にいたっていない。

しかし、公地公民制を基盤とする律令国家政治体制は、人口増加と田地の荒廃のもたらす口分田の不足に伴う解決手段として制定された墾田永世私有法により寺社、貴族の大土地所有を惹起し、経済的側面から瓦解をはじめる。こうした中央集権体制の崩壊による治安の混乱は身分秩序の変革をもたらし、厚狭郡内においても私的徴税単位として分割された厚狭郡東部の厚東部の納税責任者として厚東氏を登場させ、平安後期以後厚東氏は武士として成長する。

在地領主化した厚東氏は霜降城[10]（10）を構築する一方、恒石八幡宮、古尾八幡宮、川津寺、安養寺、持世寺等を建立した。このような仏教保護のもと、仏教信仰が浸透する中で、末法思想は社会現象のあらわれとして長谷経塚（37）、神輿山経塚（52）、聖山経塚（54）、等として具現化する。

源平争乱後、長門国において有力武士として頭角を現わした厚東氏は鎌倉時代には御家人として幕府を支え領国支配を行なっていた。厚東氏の館は厚東川下流域の棚井付近に所

在したとされ、付近の山麓からは直属家臣をまつる五輪塔が多数出土している。

しかし、南北朝の内乱期に至って周防国に盤踞する大内氏に屈し、現在の宇部市域は大内氏の知行下に入るようになる。そして、大内氏、くだって毛利氏の所領下で現在の宇部市域は山陽道の要所として位置づけられたのである。

（河　村）

3　層位

工学部前身の宇部工業専門学校設立時およびそれ以後の造成、環境整備等によってキャンパスの立地する洪積台地は、北から南へ階段状に少なくとも４段の削平を受けている。本調査区はその上位から３段目のテラス上に位置し、現地表は北から南へやや傾斜しつつもほぼ平坦に引きならされている。

地山面にいたる層順は単純で腐蝕土および構造時等の置土を含む第１層：表土直下に地山である第２層：黄橙色粘土が観察される。（Fig.60）。第２層上面では既設建築部材（コンクリート基礎）が見出された。第１層の堆積層はTR６を除いて平均30～40㎝であるが、TR６においては最大厚60㎝である。また、それ以下の土層の堆積状態をTR１からTR３各北端において可能な限り観察すると、第２層以下はTR１およびTR２東端にのみ見られる第３層：淡黄橙色粘土、TR１からTR３にかけて東から西へ漸次堆積厚を増しTR３では最大厚１ｍとなる第４層：黄灰橙色粘土と続き、蛇紋岩岩盤である青黄灰色土へと移行する。なお、第５層についてはその堆積厚は不明である。

（河　村）

4　遺物（Fig.59，１・２）

二点あるが、いずれも表土（置土）内からの出土で、二次的に包含されていたものである。

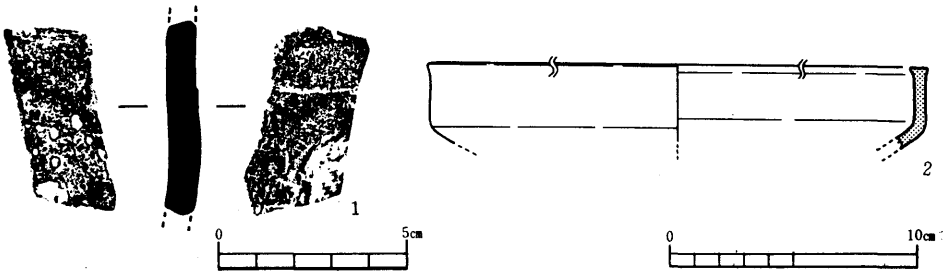


Fig.59　出土遺物

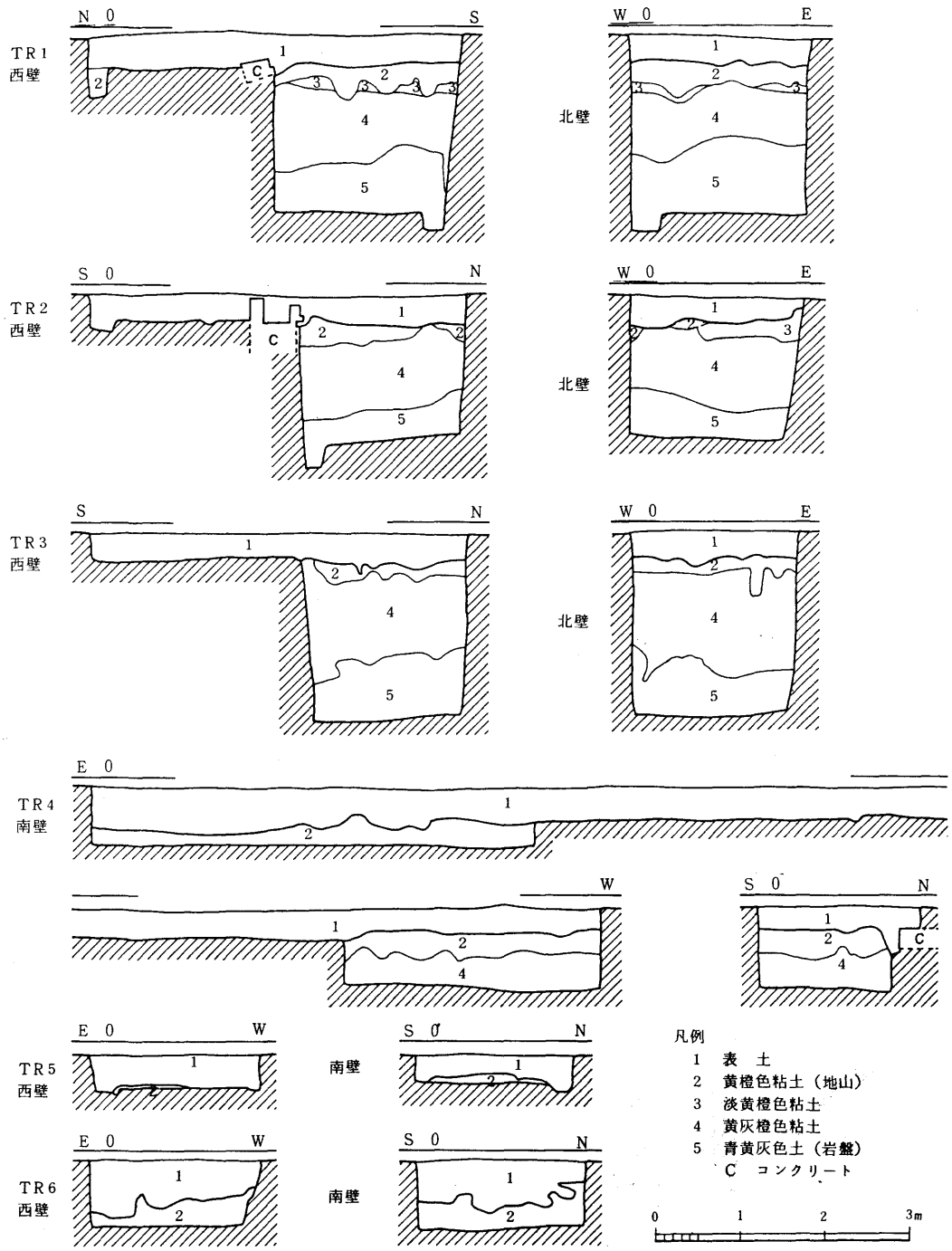

TR1
西壁
北壁
TR2
西壁
北壁
TR3
西壁
北壁
TR4
南壁
TR5
西壁
南壁
TR6
西壁
南壁
凡例
1 表 土
2 黄橙色粘土（地山）
3 淡黄橙色粘土
4 黄灰橙色粘土
5 青黄灰色土（岩盤）
C コンクリート
0 1 2 3m

Fig.60 土層断面図

小　　結

1は須恵器。破片のため器種は不明である。色調は内外面とも青灰色を呈し、胎土は精緻。内面には焼きぶくれがみられる。2は磁器の鉢と思われる。体部は稜をなして「く」の字形に屈曲する。口縁部はほぼ直立し口縁端部は平坦な面をなし内外へやや拡張する。胎土は灰黄色で黄褐色の釉を施す。

（福　島）

5　小結

今回の調査では顕著な遺構、遺物は確認されなかった。当地区では地山はすべて現地表下40～60cmの表土直下に見出され、宇部工業専門学校当時の建築基礎が埋存することから、当地区周辺が後世に大規模な削平を受けたことを窺わせる。しかし、表土中からではあったが須恵器、磁器等の遺物が出土したことは看過できない。周辺地域においても常盤池遺跡をはじめとして大小路、山門等本キャンパスと同一段丘上に立地する各遺跡から須恵器、土師器が採集されており、本キャンパス内でも第6章で述べる比較的後世の削平規模の小さな地域を中心に遺跡の埋存が予想される。従ってキャンパス内における旧地形およびその残存状況の把握と併行して今回の出土遺物の流入経路・要因について今後分布調査を含めた詳細な調査が必要である。

（河　村）

〔注〕

1）山口大学三十年史編集委員会『山口大学三十年史』（山口大学、1982年）。

2）宇部市史編纂委員会『宇部市史　自然環境・民俗方言篇』（1966年）。
小野忠熙「第四紀の宇部の海岸地形」（『宇部の遺跡』、宇部市教育委員会、1968年）。
高橋英太郎・河野通弘・長尾　恵・大浜迪郎「宇部地域の洪積層」（『山口大学教育学部研究論叢』第7巻第2号、1978年）。

3）宇部市史編纂委員会　『宇部市史　資料篇』（1966年）。

4）注2)に同じ。

5）近年、宇部台地における旧石器時代の研究は、遺跡立地のあり方を含めて山口県旧石器文化研究会により精力的に進められている。
山口県旧石器文化研究会「宇部台地における旧石器時代遺跡（1）－遺跡群の概要－」（『古代文化』第35巻12号、1983年）。
山口県旧石器文化研究会「宇部台地における旧石器時代遺跡（2）－長桝遺跡第1点　その（1）－」（『古代文化』第36巻第7号、1984年）。

6）以下、特に明記しないかぎり各遺跡の概要については下記の資料に依る。
宇部市教育委員会　『宇部の遺跡』（1968年）。
宇部市史編纂委員会　『宇部市史　資料篇』（1966年）。
宇部市史編纂委員会　『宇部市史　通史篇』（1966年）。
山口県教育委員会　『山口県文化財概要』　第4集　（1961年）。
宇部市教育委員会　『宇部市遺跡地図』
山口県教育委員会　『山口県遺跡地図』（1972年）。

7）宝暦10年（1760）作成の福原家旧蔵古銭壷箱書添文に

一、半両　秦始皇鋳之
　　實暦十辰歳迄二千六年ニ成ル

一、五銖　前漢武帝鋳之元狩五年
　　實暦十迄千八百七十八年成ル

右元文五年庚申正月領分宇部

小串村澳ノ山松濱中ヨリ
嶋村ノ百姓市左衛門ト云者掘
出而
元貞公獻之

とあり、元文５年（1740）島村の百姓市左衛門の手によって沖ノ山浜松の砂中より掘り出されたという。
現在は宇部市立図書館付設資料館に収蔵されている。
佐伯敬紀・中村博之　「沖ノ山浜松出土の土器および古銭」（『宇部の遺跡』、宇部市教育委員会、1968年）。

8）小田富士雄「山口県沖ノ山発見の漢代銅銭内蔵土器」（『古文化談叢』第９集、1982年）。
9）厚狭郡の名は長門国天平九年（737）正税帳や続日本紀神護景雲三年（769）三月の条にみえる。
10）浄名寺所蔵の家譜・恒石八幡宮旧蔵の系図および妙青寺本の系図によると七代武光による築城とある。

第６章　宇部（常盤地区）工学部図書館増築に伴う試掘調査

１　調査の経過

調査地区は大学キャンパスの西部、現図書館の西に近接した地域で前章で述べた校舎新営に伴う試掘調査地点の西方約120ｍに位置する。（Fig. 61　PL.42）本地区への図書館増築に伴い、昭和59年２月24日から同年３月１日にかけて人文学部考古学研究室の協力を得て旧地形の残存状況、構造・遺物の有無の確認を主眼として試掘調査を実施した。

本地区はキャンパス内の削平状況からみると北半分が上位から３段目のテラスの南端部（以下、上段部と呼称する）、南半部が最下段のテラスの北端部（以下、下段部と呼称する）にあたり、その比高差は約95㎝である。

調査は増築予定地約450㎡のうち約70㎡については既設構造物および樹木等を回避して上段部に1.5ｍ×９ｍのトレンチ３カ所、下段部に1.5ｍ×18ｍのトレンチ（北から順にTR１…TR４と呼称する）を設定して行なった（Fig.63）。

表土は機械を使用して除去したが、埋設管およびケーブル等地下埋設物の存在も予想されたため慎重を期した。

その結果、上・下両段部とも後世の削平が著しく、顕著な遺構・遺物は皆無であった。

２　層位

増築予定地は調査前には現図書館に付随した庭園として活用されており、上段部、下段部とも各々ほぼ平坦に造成されていた。

地山にいたる層順は極めて単純で、腐蝕土および構内造成時の置土を含む表土直下が黄橙色小礫混り砂質・粘質土の地山である（Fig. 62）。

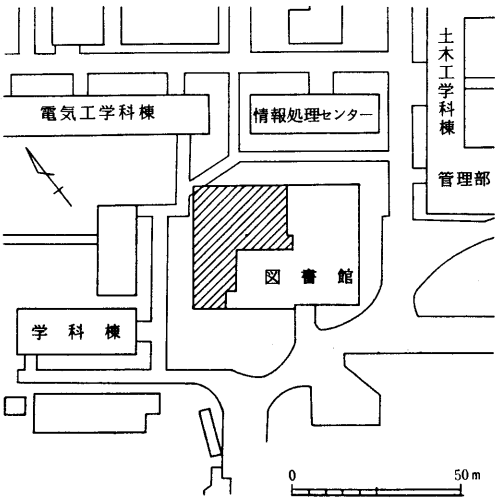


Fig.61　調査区位置図

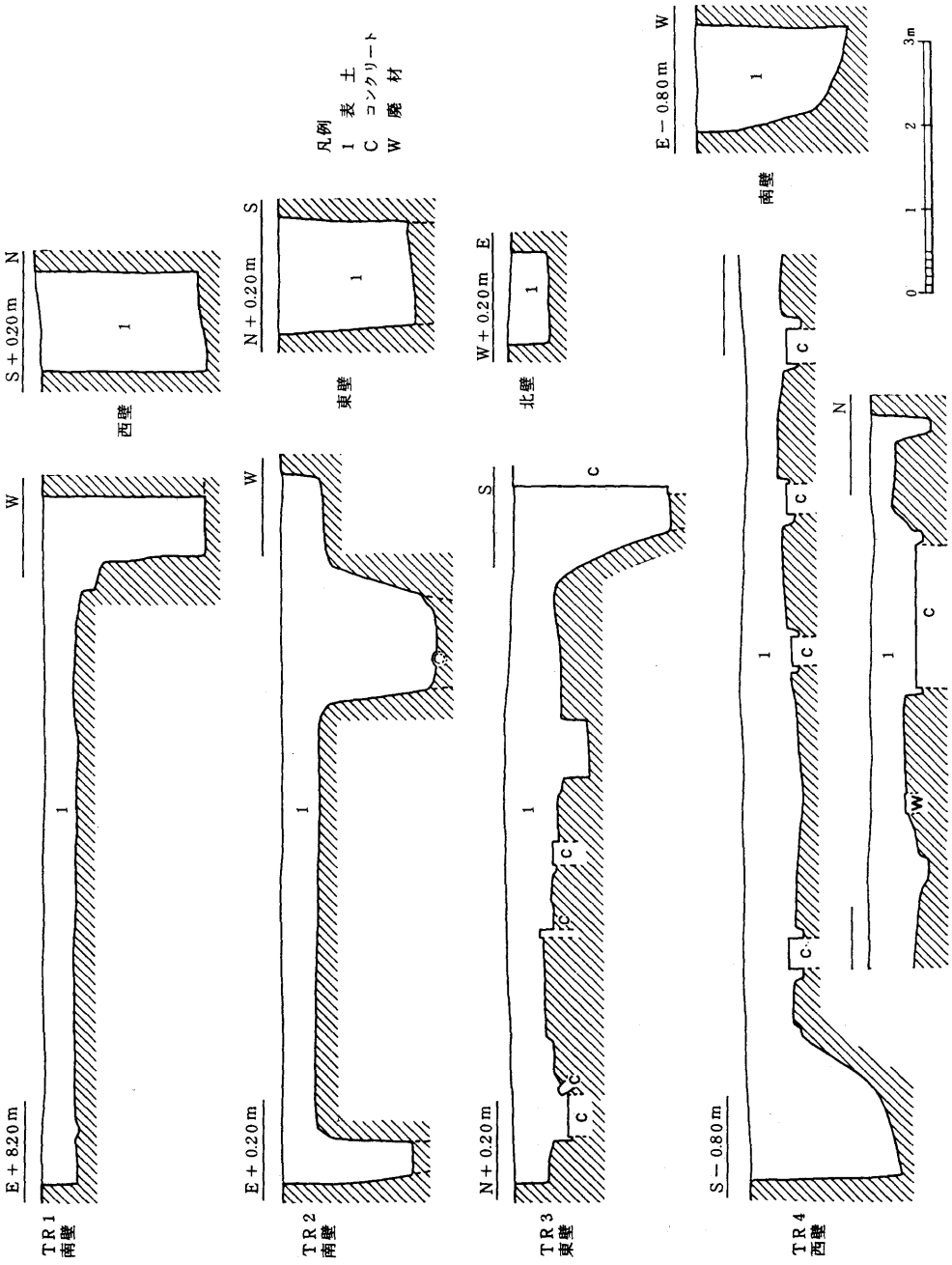

凡例
1 表土
C コンクリート
W 廃材
TR1 南壁
E＋8.20m
W
S＋0.20m
N
西壁
TR2 南壁
E＋0.20m
W
N＋0.20m
S
東壁
TR3 東壁
N＋0.20m
S
W＋0.20m
E
北壁
TR4 西壁
S－0.80m
N
E－0.80m
W
南壁
0
1
2
3m

Fig.62 土層断面図

小　　結

表土の堆積厚はTR１，TR２およびTR３，TR４両北半部で約40㎝、TR３，TR４両南半部で約60㎝である。仮基準点を指標とした各トレンチの地山面の相対高度は、TR１，TR２およびTR３北半部で－0.40ｍ、TR３南半部で－0.60ｍである。TR４北半部で－1.50ｍ、南半部で－1.60ｍである。すなわち、調査区内では地山は上、下両段部とも各々北から南へ緩やかに傾斜しており、両段部の地山の比高差はTR４北端部（下段部最北端）でみられるように少なくとも90㎝である。

こうして検出した地山面には宇部工業専門学校当時の建築用コンクリート基礎が残存し、現埋設管布設に伴う撹乱壙も各所にみうけられた。撹乱壙はTR４南端部のみ完掘したが、撹乱壙底－2.90ｍで蛇紋岩の岩盤が観察された。

3　小結

調査区内においては表土直下に地山が認められ、遅くとも校地に伴う造成による削平によって北半部と南半部の地山面の比高差は90㎝以上を示す。今回の調査はこうした後世の削平に起因するものか顕著な遺構・遺物は確認されなかった。

現在のキャンパスが北から南へ階段状に少なくとも４段に削平を受けていることは上述

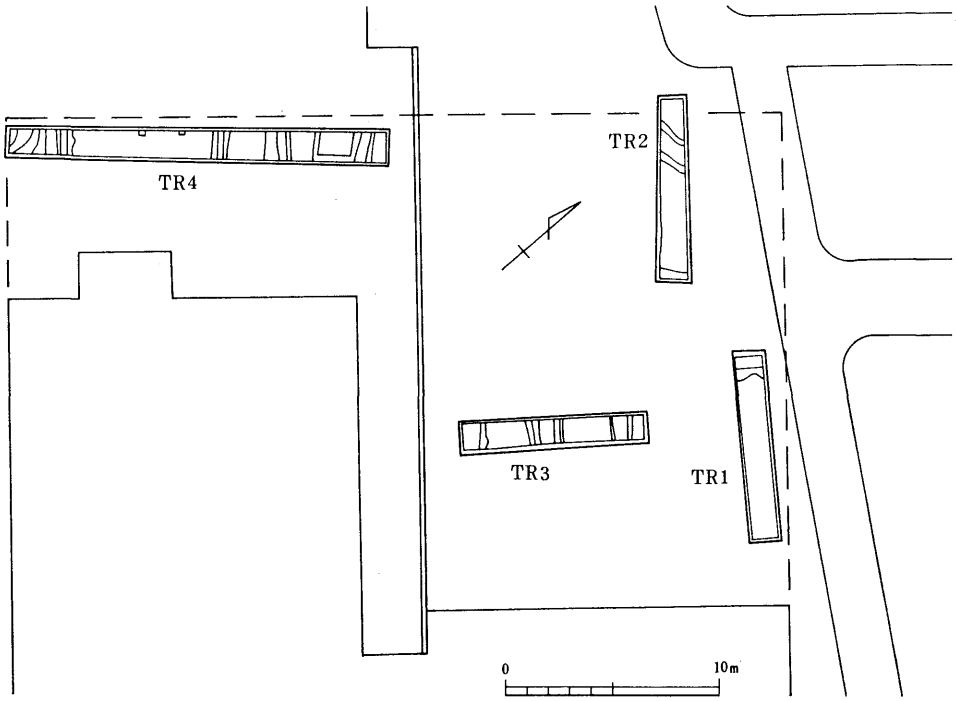


Fig.63　トレンチ設定図

のあり方について概括的にみておくことにする。

したが、ここではキャンパス造成前の資料および現況をもとにキャンパスの立地、旧地形

キャンパス北部は南から北へ、また西部は東から西へそれぞれ樹枝状に張り出した小丘陵の頂部および基部にあたり、唯一北東部の学生食堂付近が丘陵先端部に位置する。そして各小丘陵を隔てるように小規模な谷が複雑に貫入し微地形を形成する。北部の谷は現在その谷頭部が埋積されているにすぎないが、西部の谷は学外にその僅少な痕跡を残すのみで、造成によりその大部分が埋積されグラウンドとして活用されている。キャンパス中央部および東部は常盤池池畔に延びる丘陵と同一丘陵の鞍部にあたると思われるが現段階ではその詳細は不明といわざるを得ない。

こうしたキャンパス内に延びる丘陵は東部の機械・資源・土木実習棟と南西部の電子・情報処理工学科棟を結ぶラインおよびその延長上以南が造成による大規模な削平を受けている地域と思われ、逆に学生食堂およびグランド西半部付近が造成により埋積された地域で比較的良好な旧地形の残存状況を示すものと推察される。

前章で上述した校舎予定地における須恵器等の遺物はこうした削平の著しい地域よりの出土であったが、周辺諸遺跡、とりわけキャンパス南西線200ｍに所在する五三舞古墳[1]および須恵器、土師器の出土した常盤池遺跡[2]との相関関係を含めてキャンパス内における遺跡の有無の確認が急務といえる。

（河　村）

〔注〕
1）宇部市教育委員会　『宇部の遺跡』（1968年）。
2）注1）に同じ。
　宇部市教育委員会　『宇部市遺跡地図』

第７章　宇部（小串構内）医学部体育館新営に伴う試掘調査

１　調査の経過

調査地区は医学部および附属病院棟と北西―南東に走る市道を隔てた大学キャンパスの東端部に位置する（Fig.64，66　PL.49）。本地区での体育館新営に伴い、昭和59年２月２日から16日にかけて、土層の堆積状況、並びに遺構、遺物の有無の把握を主眼とした試掘調査を人文学部考古学研究室の協力を得て実施した。

調査は新営予定地約1100㎡のうち約260㎡について学生部室棟のある東半中央部を回避し、東西および南北に幅３ｍ、長さそれぞれ26ｍ（TR１）、17ｍ（TR３）および18ｍ（TR２）、25ｍ（TR４）のトレンチを２カ所ずつ合計４カ所設定して行なった。（Fig.65　PL. 50，51，52）。なお、腐蝕土および構内造成時の置土を含む表土は機械を使用して除去し、それ以下は人力による分層発掘を行なった。

その結果、顕著な遺構は検出されなかったものの、石器、土師器、須恵器、瓦質土器および磁器が出土した。

２　位置と環境

宇部市域の地勢および遺跡立地、分布のあり方は第５章で概括的に述べた。従って本稿では医学部キャンパス周辺地域についてやや詳細にみていくことにする。

医学部キャンパスは宇部市街地の北辺に位置し、埋積谷や小盆地を開析しつつ南流する真締川中流の右岸、工学部キャンパスの西約２㎞に所在する。真締川の浸食によってその流路付近には本キャンパスの立地同様小規模な沖積低地が形成されており、現在知られている遺跡はこ

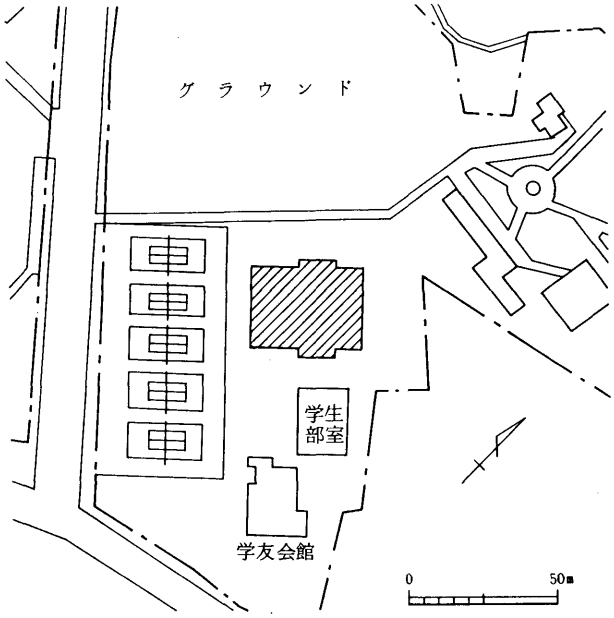


Fig.64　調査区位置図（１）

うした埋積谷、小盆地および狭隘な沖積低地を臨む段丘上、低丘陵上に所在する。

真締川上流域では北迫遺跡[1]、南方遺跡等弥生時代の遺跡が確認されている。中期後半の北迫遺跡は鹹水性のカキ、ハマグリ、ウミニナ等を主体とした貝塚を伴っており、同遺跡以南の真締川上流域標高10ｍ弱の沖積低地は往時には浅海性の入江であった可能性を示唆している。

古墳時代の遺跡はキャンパス北部に隣接する。北東から南西に延びる低丘陵先端部付近には４基の箱式石棺が検出された尾崎古墳が所在し、うち１基からは１本分の人骨と共に鉄剣１、鉄鏃２が出土している。また、同一丘陵上、同古墳の奥部には地下式横穴が存在したといわれる小串古墳がある。

川津遺跡[2]は標高10ｍ前後の段丘上に位置し、旧石器時代から中世にかけての遺物[3]が出土している。遺跡周辺には厚東氏三代武通[4]の創建による川津寺が存在したといわれ、七代武光は琴崎八幡宮の神宮寺として尊拝したという。

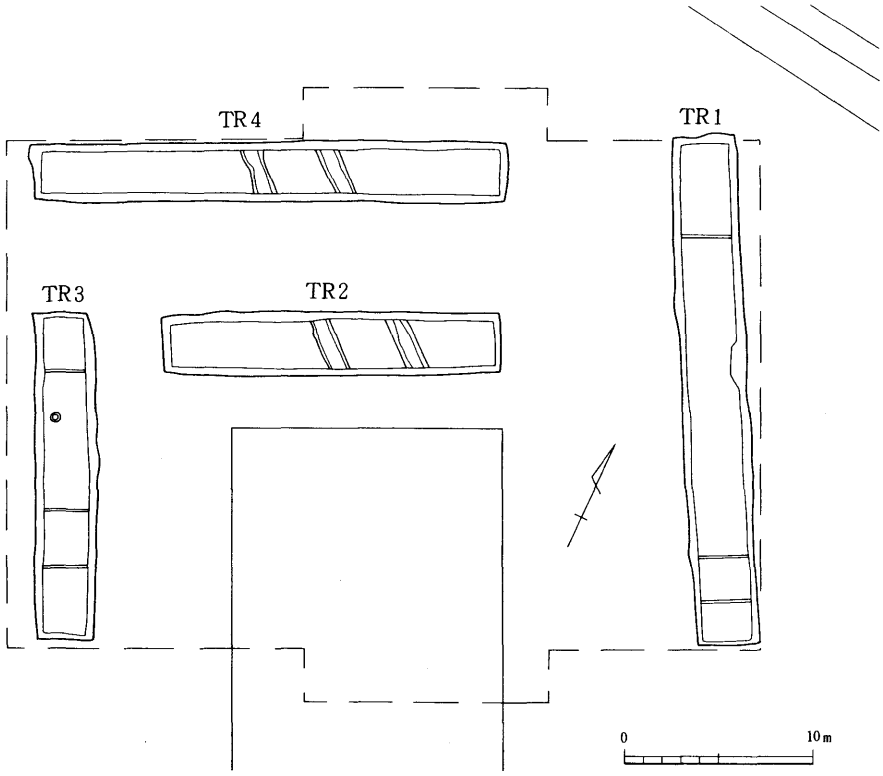


Fig.65　トレンチ配置図

宇部（小串構内）医学部体育館新営に伴う試掘調査

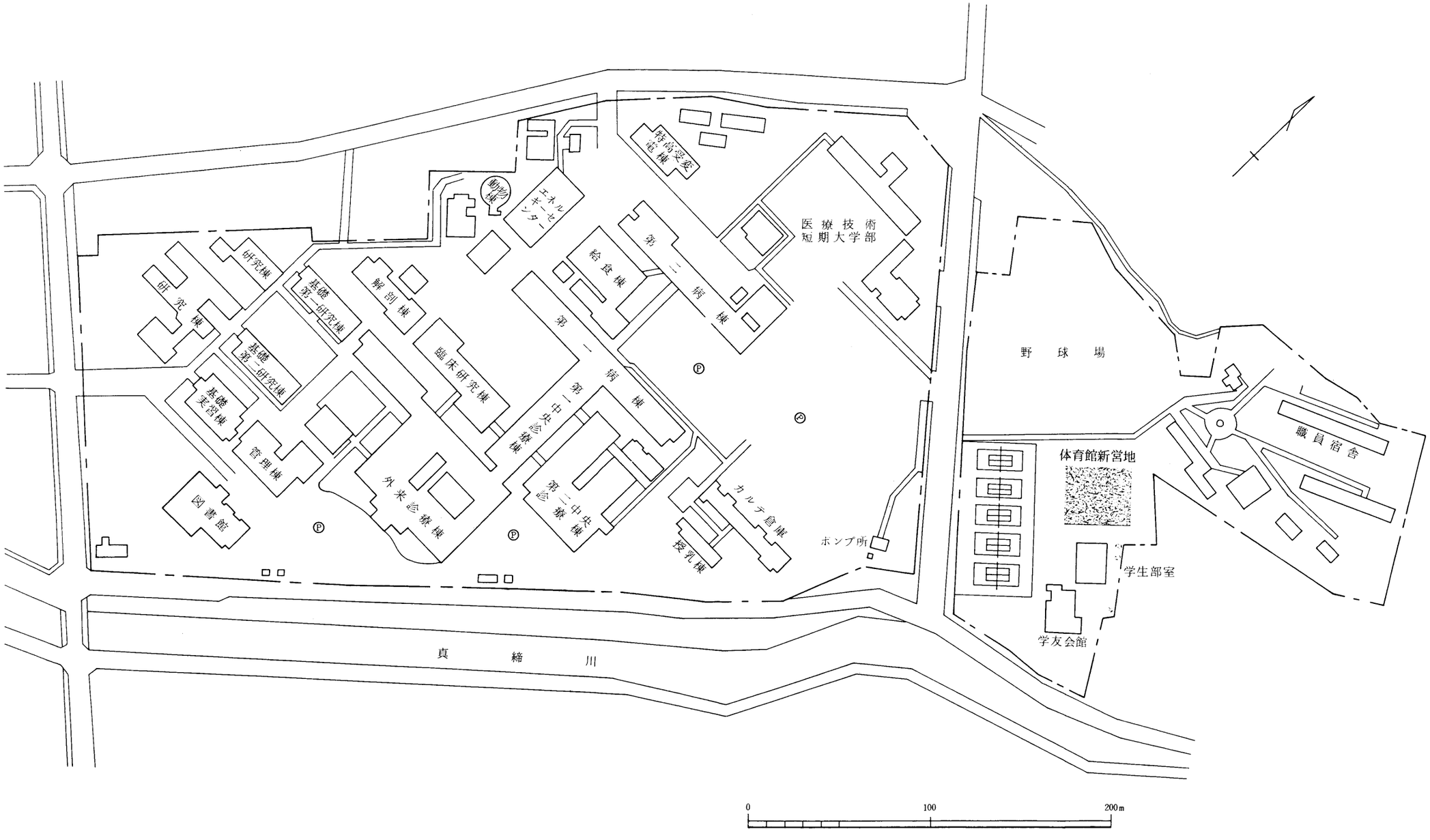


Fig.66　調査区位置図（2）

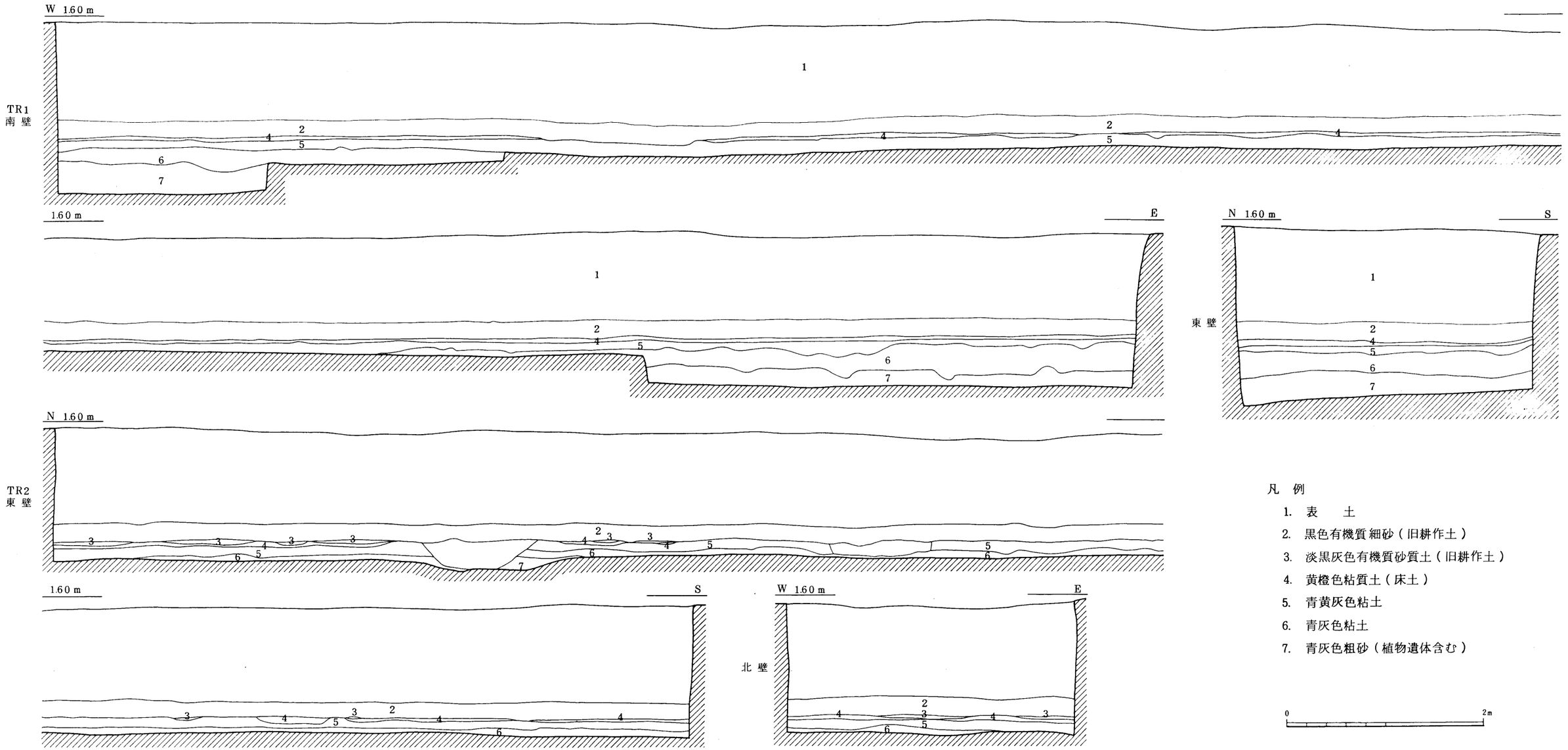


Fig.67 土層断面図（1）

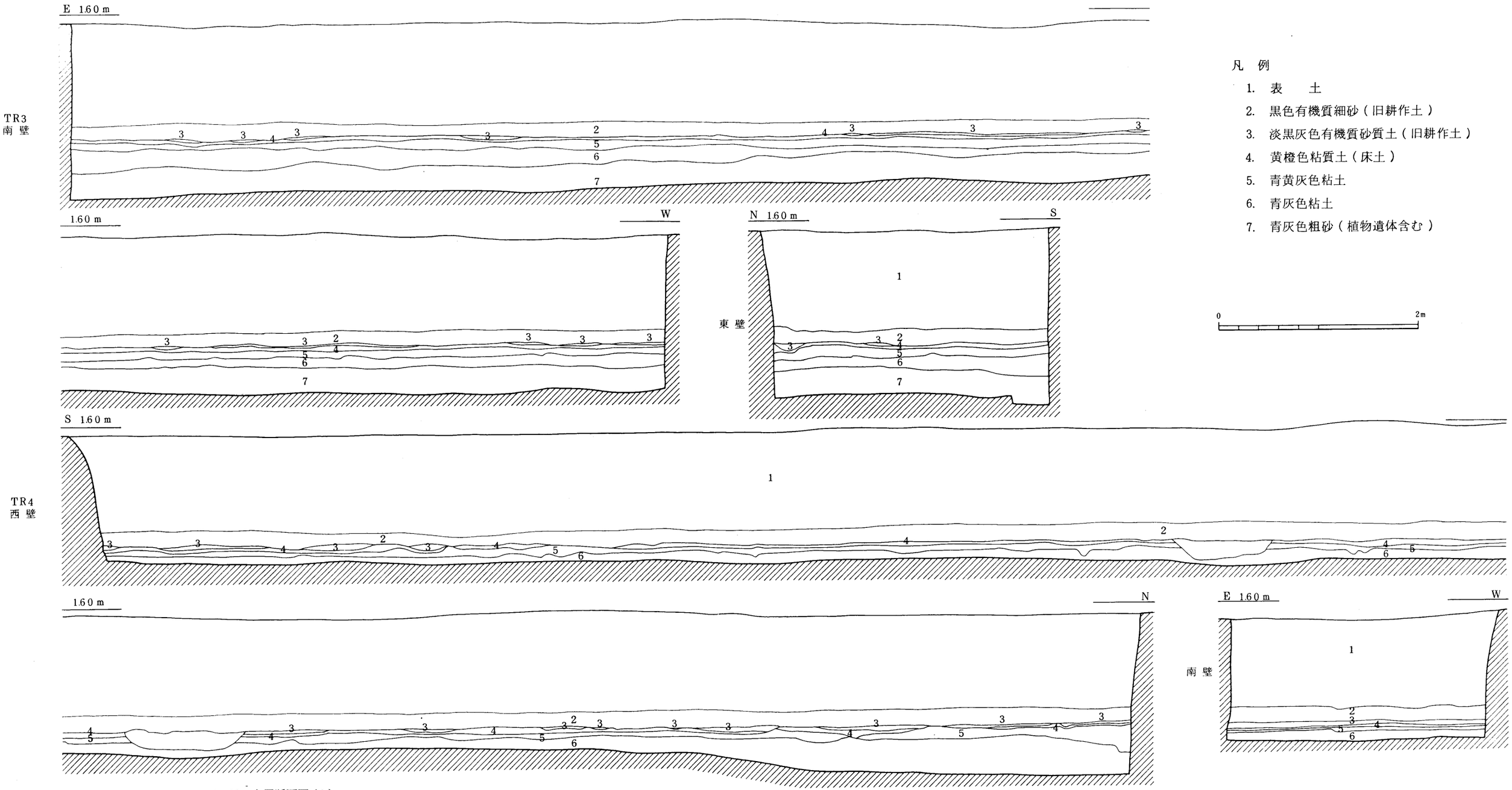


Fig.68 土層断面図（2）

3　層位

調査区内において観察した堆積層は７層に分層されるが、第７層中において激しい湧水をみたため地山面の確認には至っていない。（Fig. 67, 68）。

第１層は厚さ90～100cmの腐蝕土および構内造成時の置土を含む表土で中位以下は標高０ｍ以下である。第２層：黒色有機質細砂土および第３層：淡黒灰色有機質砂質土は二時期にわたる旧耕土と思われるが、第３層は部分的に残存するにすぎない。第４層：黄橙色粘質土は床土。第５層：青黄灰色粘土以下は第６層：青灰色粘土・第７層：植物遺体を含む青灰色粗砂と続く非人為的な二次堆積層である。なお、第７層は湧水のため完掘せず、TR１、TR３において部分的に掘り下げた。

TR３東部、第５層上面において3.5cm×4.5cm、深さ13cmの不整形ピットを検出したが遺構か否か判然としない。

また、TR２およびTR４において第２層を掘り込む２条の溝が検出された。いずれも南東―北西方向に約2.7ｍの間隔をおいて併走するもので、南側の溝が幅90～110cm、深さ10～14cm、北側が幅100～110cm、深さ15～23cmの規模をもち、溝底は南東から北西へ下降している。近代から現代にかけてのもので、真締川から分流する小河川である可能性が強い。

遺物は第２層および第４～６層において出土した。

4　遺物

出土遺物には旧石器時代のナイフ形石器、削器、剥片、細石核、古墳時代の須恵器甕および室町時代の土師器坏、土師質の鍋、擂鉢、鼎、瓦質の鍋、擂鉢、壷がある。

石器（Fig.69　PL.53）

ナイフ形石器(1)　横長剥片を素材とし切出状を呈する。先端部欠損。左右両側縁下端および基部に自然面を残し、ブランティングは素材の形状を生かし左側縁部にのみ弱く施される。内彎ぎみの刃部は長刃で使用痕を思わせる剥離痕が全縁に認められる。最大器長38.0mm、最大器幅23.5mm、最大器厚12.0mm、刃部長26.5mm、刃部角度65.5度。重量 8.9ｇ。チャート製。２層出土。

削器(2)　不定形の横長刃器状剥片を素材とした小形の削器であろう。左側縁を刃部とするが、調整はやや粗雑である。下端部に自然面を残す。最大器長21.0mm、最大器幅29.5mm、最大器厚9.0mm。重量 3.4ｇ。チャート製。６層出土。

剥片(3)　やや厚手の剥片で上下両端に自然面を残す。裏面には顕著なネガティブバルブが認められる。使用痕はみられない。最大長44.0㎜、最大幅22.5㎜、最大厚12.0㎜。重量8.4ｇ。チャート製。４層出土。

細石核（４・５）　４は小円礫を素材とした細石核で作業面は正面および裏面の一部に限定されている。打面調整作業は行なわれず、自然面を打面とする。高さ12.5㎜、幅22.0㎜、厚さ15.0㎜、作業面積18.0㎜。重量 5.1ｇ。チャート製。４層出土。５も小円礫を素材としている。打面は一方向からの剥離によって造出されている単設打面で、顕著な打面調整作業はなされていない。剥片剥離は裏面を除いて急角度になされており、角錘状の最終形を呈する。高さ19.0㎜、幅23.0㎜、厚さ15.0㎜。重量 5.0ｇ。チャート製。２層出土。

土器（Fig.70　PL.54）

土師器（１～４・11・12）　１～５は４層、６～14は５層出土。１は皿の底部で糸切り底。器面風化著しく調整不明。赤橙色を呈し、胎土精良、焼成堅緻。２・３は土師質の鍋ないしは鼎の口縁部。体部上半で内彎ぎみに屈曲した口縁端部は内側に肥厚する。２は内面屈曲部下半は刷毛目、他は横ナデ調整。赤橙色を呈し、胎土やや不良、焼成良好。３は内外面とも刷毛目調整で外面は丁寧。口唇部は横ナデ。外面黒色、内面灰褐色を呈し、胎

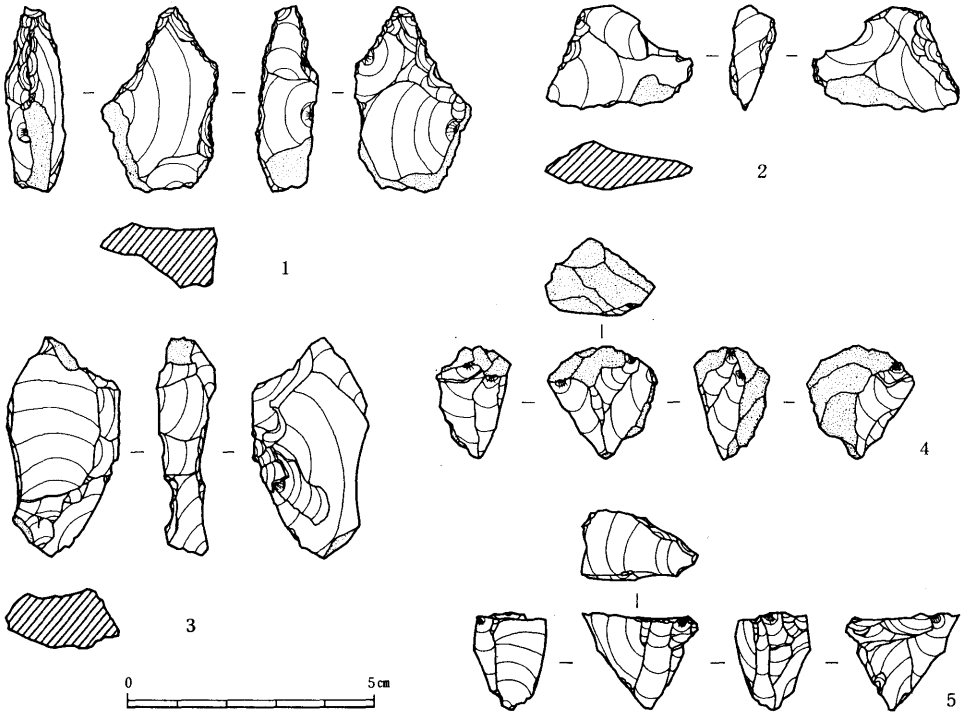


Fig.69　出土遺物（１）

土、焼成とも良好。４は土師質の擂鉢の胴部で、内面７条単位の櫛目描き仕上げがみられる。刷毛目仕上げで赤橙色を呈し、胎土やや不良、焼成堅緻。11・12は土師質の鼎の脚部で指圧による整形を施す。11は脚端部を屈曲させる。橙灰色を呈し、胎土やや不良、焼成良好。12は橙褐色で胎土不良、焼成良好。

瓦質土器（５・６～８）　５は注口部をもつ擂鉢の口縁部で、口唇部を内面に肥厚させる。内面刷毛目、他は横ナデ仕上げ。暗黒灰色を呈し、胎土、焼成とも良好。６は甕の口縁部。頸部から「く」の字に外反する口縁部は玉縁状に肥厚する。横ナデ仕上げで灰黒色を呈し、胎土やや不良、焼成堅緻。７は鍋ないしは鼎の口縁部。外面に煤付着。暗灰色を呈し、胎土、焼成とも良好。８は擂鉢の底部で内面６条の櫛目描き上げを施す。ナデ仕上げ。外面灰白色、内面乳白色で胎土精良、焼成堅緻。

須恵器(9)　甕の胴部で内外面ともナデ仕上げ、外面灰白色、内面暗青灰色。胎土良好、焼成堅緻。

磁器(10)　ゆるやかに外反する口縁部をもつ白磁の埦。釉は灰白色、素地は淡灰白色で施釉は薄い。

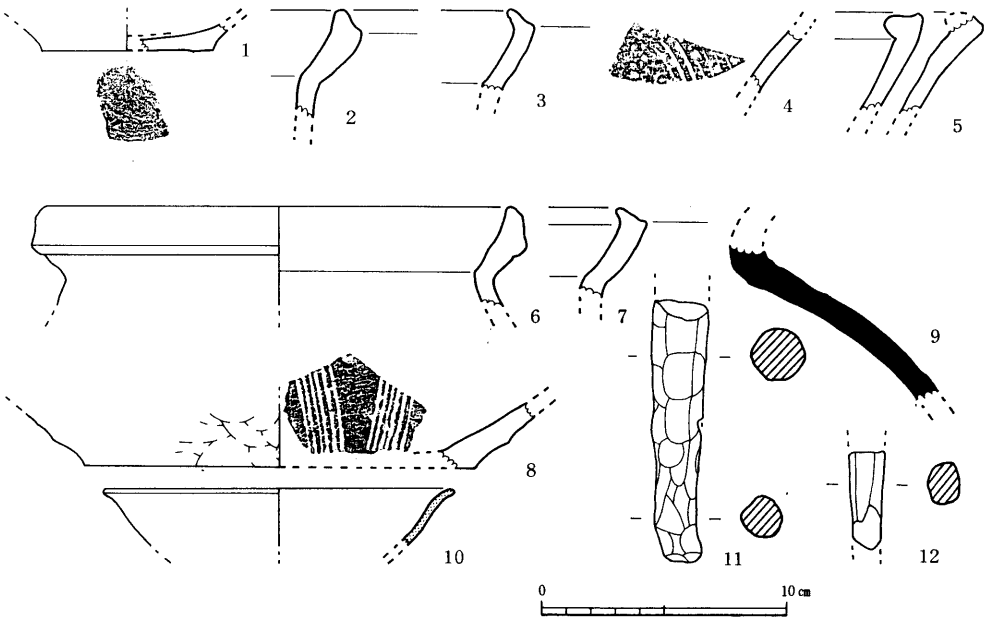


Fig.70　出土遺物（２）

5　小結

今回の調査では顕著な遺構は検出されなかったが、旧石器時代および室町時代後半の遺物が出土した。本稿では調査の成果を踏まえて今後に残された問題について若干の整理を行なうことにする。旧石器時代の遺物にはナイフ形石器、削器、剝片各１点、細石核２点があり、いずれもチャートを石材とする。一方、長桝遺跡、本郷遺跡、南方遺跡等宇部市域東部に密集する旧石器時代の各遺跡表採資料の器種構成は、ナイフ形石器、台形石器、台形様石器、掻器、削器、舟底形石器、細石器、細石刃等で石材は黒曜石、安山岩が圧倒的多数を占め、チャートは水晶と共にわずかに数点を数えるのみである。こうした表採資料の多寡、器種構成および特定石材の選択が各遺跡の性格、概念をパターン化するとすれば、遺跡規模を反映すると思われる表採資料数においてその占める各石器組成のあり方、特定原材の使用頻度からみて、とりわけ長桝遺跡におけるナイフ形石器の多さ、安山岩石材の選択は他遺跡とは明確な差異として抽出されるであろう。本調査における遺物は東部地域のこうした旧石器時代の諸遺跡とは異なり、削器を除いてすべて非人為的な二次堆積層中よりの出土であり遺跡の性格等については明確にし難い。しかし、キャンパス北部の尾崎古墳、小串古墳の所在する低丘陵がキャンパス中央部にまで延び[5]ていることは本調査区北東約1.2kmの真締川左岸、標高10ｍの中位段丘上に位置し掻器を出土した川津遺跡と同様の立地を示す旧石器時代の遺跡の存在を想定させる。

また、土器には土師器、瓦質土器、須恵器、磁器があり、須恵器を除いていずれも室町時代後半のものとみて大過ないものである。出土遺物はかなり磨滅しており、遺物を包含する堆積層はグライ化し不安定な状態であることから真締川に起因する堆積層として把握されるものであろう。その搬入経路についてはキャンパス内における今後の詳細な調査によって明らかになるものと思われ、現段階では川津寺の想定される川津遺跡および土師器が出土したといわれる西の宮遺跡等本調査区と近接する真締川中流域の諸遺跡の所在を指摘するにとどめておく。

（河　村）

〔注〕

1）以下、特に明記しない限り遺跡の概要、出土遺物については下記の資料に起拠する。
　山田亀之介　『宇部郷土史話』（宇部郷土文化会、1955年）。
　宇部市史編纂委員会　『宇部市史　資料篇』（1966年）。
　宇部市教育委員会　『宇部の遺跡』（1968年）。

2）宇部市教育委員会上野百合人氏に御教示頂いた。

3）妙青寺本、毛利家文庫本および恒石八幡宮、浄名寺に伝えられる系図、系譜にみえる。

4）防長風土注進案　舟木宰判に「厚東武光公方宇部川津村二有之候川津寺を神宮寺として御崇敬有候」とある。

5）宇部セントラルコンサルタント「山口大学医学部専修学校新営地質調査報告書」（1978年）。

第８章　教育学部附属山口小学校・幼稚園構内の試掘調査

１　調査の経過

山口市白石３丁目１－１に所在する山口大学教育学部附属山口小学校・幼稚園（亀山キャンパス）の昭和58年度事業の一つとして運動場の整備が上げられた。これまでこの構内には遺跡は周知しておらず、その工事自体もグランド整地土の入れ替えで掘削深度も比較的浅いものであったが、地理的環境や周辺の遺跡分布状況から察してこの地にも遺跡が包蔵する可能性が高いと推測されるところであり、また今日に至るまでの間、埋蔵文化財の調査が全く行なわれていないことから（第１章２「構内の調査について」参照）、59年３月の工事中に際して立会をする計画を立てた。しかし、３月初め調査予定直前に至って当初の工事内容以外に一部深さ１ｍにもおよぶ排水施設等の付随工事も本工事に先行してあることが明らかになり、かつその工事は着工済みとの連絡を受けた。資料館では急遽関係者共々現地視察を行なった結果、付随工事は既に最終段階で一部完成しており、土層の観察等は全く不可能な状況であった。また工事掘削による排土中に包含層らしき土の混在が認めら

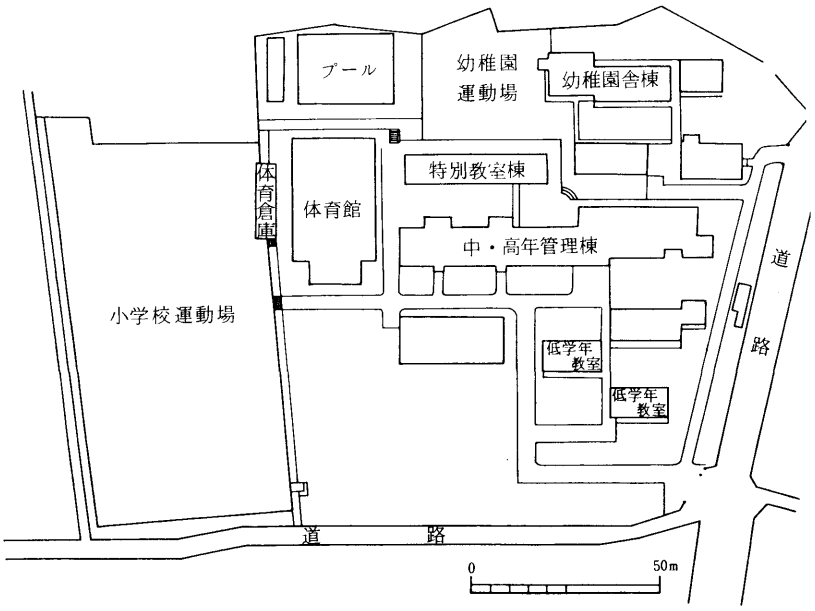


Fig.71　構内図

れたため、以後の本工事を含め、今後将来におけるこの地での工事に際しての埋蔵文化財の影響等の判断データ集積を目的とした最小限の試掘調査を本工事前に行なうことに改めた。調査は人文学部考古学研究室の協力のもと、昭和59年３月26日より１週間を予定して小学校運動場６地点、幼稚園１地点に総面積約60㎡のトレンチを設定し遺物包含層・遺構の有無確認を主目的とした調査を行なった。

調査に至っては、当初の予想以上に遺物包含層・遺構が検出されたため、３月29日に埋蔵文化財運営委員会並びに関係者等の説明会を現地にて開き、遺跡調査の公開と以後の調査方針等について検討した。その結果、工期の関係で４月第１週までに本工事に着手したいという工事関係者側の意向および本工事掘削を整地土層内に留めるとする工事内容などから考え、Ａトレンチ付近以外の地点については工事開始に同意し、３月30日をもって調査を終了した。（結果的には工事サイドの機械等の段どり都合で４月第２週以降となる。）ただし、Ａトレンチ付近は県内において稀少な木器が出土するという学術的視点から１週間の調査延長が認められるに至り４月６日まで継続実施した。

なお、４月３日には鳥形木製品に関してその発見の意義を公表するために委員会および現地説明会を行なった。

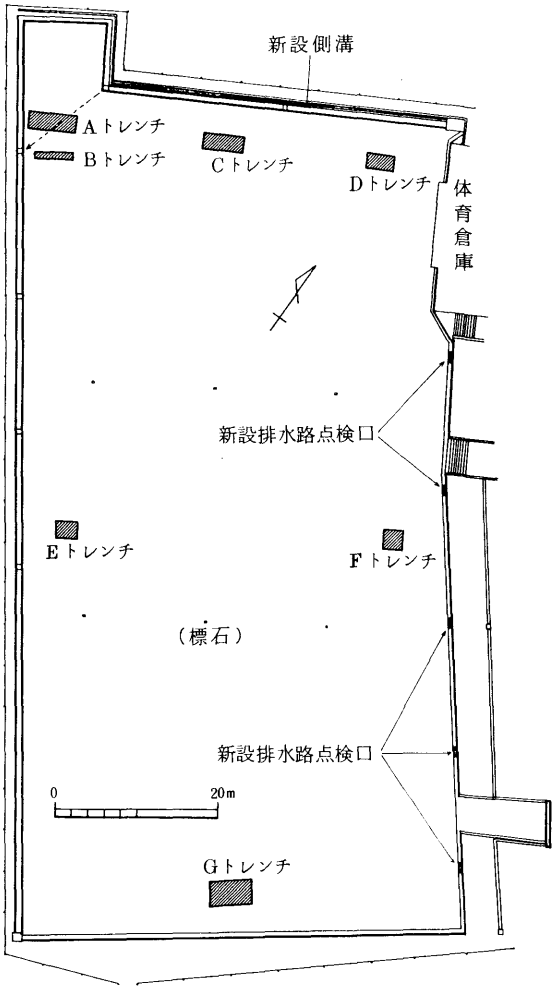


Fig.72　小学校運動場トレンチ設定図

2　位置と環境

(1)　地理的環境

白石遺跡の所在する山口盆地は、津和野一岐波構造線と称する中国山地の隆起に伴う断層作用によって生じた盆地で、かつ周辺山から河流による土砂運搬によって盆地床に沖積底地が形成された埋積盆地である。盆地周辺は主として三郡変成岩から成る小起伏山地の400ｍ前後の山々に囲繞され、とくに北西側では700ｍ以上にもおよぶ中起伏山地に相当する東・西翮山などが控え聳えている。盆地床は北東から南西方向に漸次低下し、また周辺山麓縁辺部よりも盆地中央に向かって傾斜している。盆地床には主たる構造線に沿って椹野川が貫流しており、その川沿いは氾濫原をなして低湿地の微地形を呈する。また、周辺山地に小規模な断層線谷が多くあり、それに伴って一ノ坂川や朝倉川、吉敷川などの小河川が流下して扇状地を形成するなど山口盆地の地形をより複雑にしている[1]。白石遺跡は、山口盆地のほぼ中央の北西に聳える鴻ノ峰（標高338ｍ）の南麓裾部付近に位置し、すぐ東側に独立低丘陵の春日山・亀山があり、西側は鋤尖山から派生した兄弟山・向山（障子ケ岳）を眺望できる。南側は緩傾斜面で下降し、そこには標高20～30ｍの沖積低地が拡がっている。河川は鴻ノ峰の東縁を流下してくる五十鈴川が白石遺跡の周囲、東から南にかけ走向し、西側では向山、東裾部に糸米川、南には錦川、椹野川が流れる。

(2)　山口盆地の歴史的概要

山口盆地の歴史は古く縄文時代まで遡り、椹野川流域では木崎遺跡、後河原遺跡、花の木遺跡など[2]が当時の遺跡としてあげられるが、この時代の遺跡の数は少ない。しかし、弥生・古墳時代になると飛躍的に遺跡数は増加し、概して集落は山麓縁辺部の緩傾斜面上や微丘陵上に営むことが多く、平川の吉田遺跡[3]のようにこの時代に大規模な集落を形成し、中世まで長期にわたって連綿する遺跡もみられる。また朝田遺跡[4]や亀山遺跡[5]など見張りの機能を具備した高地性集落も一時的に出現する。墓域は集落近傍の丘陵上や山麓に設定しており、弥生時代全般を通し古墳時代前期までは集団家族墓的様相の強い土壙墓・箱式石棺などの在地性の葬法を継承するが、中期以降漸次的に畿内の影響をうけ一部の地域で竪穴式石室をもつ高塚墳[6]や前方後円墳[7]が出現し、後期には横穴式石室を内部主体とする小円墳を盆地全域で採用している。古墳時代の墳墓形態の変遷はこの地における畿内勢力による在地豪族の掌握過程の一端を窺わせるが、後期には北部九州から導入されたと考えられる竪穴系横口式石室[8]や横穴墓[9]の築造もあり、山口盆地の地域的特色がみうけられる。

律令時代には、地方制度の一つとして国、郡（評）、里（郷）の行政区画が設定されて

1 白石遺跡（山口大学附属山口小学校）
2 吉田遺跡（山口大学吉田キャンパス）
3 竹の花遺跡
4 江良遺跡
5 松柄遺跡
6 亀山遺跡
7 鴻ノ峰・白石古墳群
8 茶臼山古墳群
9 糸米古墳群
10 山口高校構内遺跡
11 木戸神社古墳群
12 権現山古墳
13 荻峠遺跡
14 朝倉遺跡
15 朝倉河内古墳群
16 湯田楠木町遺跡
17 赤妻古墳
18 土師宮古墳群
19 伊梶堤遺跡
20 大判石棺
21 泉山古墳群
22 下東遺跡
23 木崎遺跡
24 太田遺跡
25 朝田墳墓群
26 天神山古墳群
27 古熊遺跡
28 橋村・御堀石棺群
29 御堀遺跡
30 入野遺跡
31 氷上古墳
32 問田・山崎遺跡
33 問田遺跡
34 新開古墳
35 日吉神社古墳群
36 乗ノ尾石棺群
37 神郷大塚遺跡
38 吉田岡畠遺跡
39 大塚古墳
40 郷遺跡
41 馬木遺跡
42 中島遺跡

Fig.73 周辺地形図および遺跡分布図

いるが、『倭名類聚抄』に記載の「吉敷郡」が山口市域を中心とした地域にあたるとされまたその郡内に10の郷が置かれ、山口盆地の幾カ所に郷の推定地がある。とくに白石遺跡のある宇野令地域は「宇努郷」[10]の郷域とされている。さらにこの時代には土地制度として全国各地に条里制を実施しているが、山口盆地内にも吉敷・湯田付近の小字名に坪名が残ることからこの地でも広く施行されていたことが想定されている。

土地所有制の変遷に関しては、8世紀以降漸次的に各地で土地の私有化が始まり荘園制を出現させるが、山口盆地内でも8世紀代に成立する東大寺領の荘園「椹野荘」が椹野川流域に推定されており、その面積は天暦四年（950年）の『東大寺封戸庄園幷寺用張』によると九十一町六段十九歩にものぼる。また鎌倉時代には朝倉庄（祇園社領）や恒富保、湯田保、南北朝・室町時代になると吉木保、宇野令などが盆地内の各地域に成立する。[11]

中世、とくに南北朝時代の天平15年（1360年）頃に大内弘世が居館を大内御堀から山口へ移して以降は、この地は大内氏の拠点地となり城下町として発展する。その大内氏は京洛を擬して山口の都市計画を進め、京から神社を勧請したり、多くの文人を招いたりなどして積極的に文化の導入を行なった結果、山口は一時京都をしのぐ繁栄となり「西の都」といわれるに至った。しかし天文20年（1551年）の陶晴賢の乱を契機に大内氏の栄華をとどめた山口の町はしだいに衰微し始める。

毛利氏支配下時代に至っても当初は、長門国一円と周防吉敷郡を分国にし、その中心地として山口を考えていたが、[12]関ケ原の戦い以後の毛利氏領国削減のため中止となり、さらに一旦防長二州の新城地の候補地にもなったが幕府に認められず、[13]この時点より長い間城下町としてきた地位を失い、以後町は急速に衰退していき、江戸時代終り頃まで続くことになる。天文末年（1550年）頃には山口の戸数はほとんど二万に近かったとされているが、近世初め頃にはすでに戸数は半分以下に減少し、慶長検地（1610年）頃には山口・三田尻（防府）を合して僅か4600戸となっている。[14]

しかし、幕末の文久3年（1863年）に藩庁が萩から山口へ移転したことによって再び繁栄を取りもどすことになる。明治4年（1871年）の廃藩置県で山口県の県庁所在地になり、それ以来、県の中枢となって今日に至っている。

(3) 白石周辺の遺跡

鴻の峰の南麓および東西を亀山と向山（障子ケ岳）に挾まれた地を中心に、[15]その近傍周辺を含めた地域に存在する古代から中世にかけての遺跡を概観する。

旧石器時代に遡る遺跡は今日知られておらず、縄文時代の松柄遺跡[16]がこの地域では最も

古い時代の遺跡に相当する。この遺跡は亀山東麓縁辺部に位置し、縄文時代晩期頃の土器包含層が確認されている。

弥生時代および古墳時代になると、山口盆地全体の様相と同じくこの地域でも遺跡が急増する。今回発見された白石遺跡もこの時期のものであるが、周知の遺物包含地としては亀山遺跡[17]、山口高校構内遺跡[18]、荻峠遺跡[19]がある。まず亀山遺跡は白石遺跡の東方に位置する標高67ｍの亀山および春日山の山頂、山麓部周辺に拡がる弥生時代中期の遺跡で、竪穴群や規模の大きい溝状遺構が確認されている。山口高校構内遺跡は白石遺跡の南西約500ｍにある県立山口高等学校敷地内西寄りの地点にあり、旧地形は糸米川が形成した扇状地の扇央部付近と思われ、低地性の遺跡である。大正年間の調査で、弥生土器、土師器、須恵器の遺物包含層の存在が認められている。荻峠遺跡は兄弟山と向山を画る峠の丘陵頂部から南西麓裾部に立地する遺跡で、弥生時代初め頃の貯蔵穴や古墳時代前期の土壙が検出されている。またこの他、鴻ノ峰南麓周辺でもこの時期の土器の散布等がみられる。しかしこれら周辺の遺跡では検出された遺構が少なく、遺跡の規模や性格、機能等を明確にするまでは至っていない。但し、この時代の墳墓は数多く確認されており、当時の墓域の立地条件や築造形態などを知り得ると共にこの時代になって多くの人々がこの地域を居住地として選定・進出し、共同体が形成されていったことが窺われる。この地域の墳墓は時期的に弥生時代終末から古墳時代初頭にかけてのものと古墳時代後期のものが大半を占め、前者には茶臼山石棺群[20]、糸米遺跡[21]、荻峠石棺群[22]がある。これらは、いずれも丘陵上にあり、主体部は主に箱式石棺を用いている他、糸米遺跡では台状墓を築き、土壙墓や壷棺墓も主体部として併用している。後者では鴻ノ峰南麓の標高50～80ｍの間に鴻ノ峰古墳群[23]や白石古墳群[24]、糸米古墳群[25]、木戸神社古墳群[26]が連続し、また支丘の丘陵端部上に茶臼山古墳[27]、向山に権現山古墳[28]がある。これらの古墳は六世紀後半から六世紀末にかけてのものがほとんどで、横穴式石室を主体部とし、その多くは径10ｍ前後程度の小円墳である。この時期の古墳はこの地域に存在した上層階級の家族墓であったと思われ、とくに鴻ノ峰Ｉ号墳では副葬品から６体以上の埋葬が推定されており、長期にわたってこの山麓が奥津城になっていたことを物語っている。

奈良時代・平安時代の遺跡は明らかではないが、中世に至ると大内氏の関係で多くなる。寺社としては鴻ノ峰山麓に鎮座する大内義興創建の山口大神宮[29]、大内弘直の菩提寺である普門寺[30]、向山には大内弘世関連の熊野神社（湯田讃井権現社[31]）などが現存する。また古城として鴻ノ峰山頂には大内義長によって築城され、現在石垣や井戸などが残り国の史跡に

なっている高嶺城跡[32]や向山に障子ケ嶽城跡[33]がある他、亀山には戦国時代末期に至って毛利によって築造されかけた長山城跡[34]がある。なお周知の遺跡には指定されていないが、この他江戸時代に作成された大内時代の復元図『山口古図』によると今は廃絶している寺社や大内氏家人の屋敷などの存在も多く認められる。さらにまた白石古墳群のある丘陵上ではこの時代の庶民の墓と推定されるものも近年の埋蔵文化財の発掘調査で明らかになってきている[35]。

〔注〕
1）三浦肇 「自然」（『山口市史』、1982年）。
2）山口県教育委員会 『山口県遺跡地図』（1972年）。
3）山口大学埋蔵文化財資料館 『山口大学構内遺跡調査研究年報』（1982年）。
4）山口県教育委員会 『朝田墳墓群Ⅵ』（1983年）。
5）小野忠熙 『高地性集落跡の研究』資料編（1979年）。
6）山口市教育委員会 『天神山古墳』（1979年）。
7）注4)に同じ。
8）朝田墳墓群の中にみられる。注4)に同じ。
9）吉敷（朝田墳墓群）や平川（日吉神社古墳）周辺に多い。
10）三浦肇「集落と都市形成」（上）上代（『山口市史』各説編、1971年）。
11）河村乾二郎 「原始・古代」（『山口市史』、1982年）。
12）三坂圭治 「毛利氏時代」（『山口市史』、1982年）。
13）候補地として山口の高嶺（鴻峯）・防府の桑山・萩の指月山の三カ所が上げられ、結局、幕府の意向に従って指月山に決まる。
14）注12)に同じ。
15）白石の地名は現在この地域の東半を称しているが、本来附属小学校付近の小さな小字地名が後世拡大したものである。高橋文雄 『続・山口県地名考』（1979年）。
16）浜田清吉 『山口市後河原の遺物発見地』（1953年）。
17）弘津史文 『防長石器時代資料』 1929 および前田耕次 「原始・古代」（『山口市史』、1982年）。
18）三宅宗悦 「周防國吉敷郡山口町糸米山口高等學校校内土器包含地發掘調査報告」（『山高郷土史研究會考古學研究報告書』、1927年）。
19）山口県教育委員会 『下東遺跡・荻峠遺跡』（1975年）。
20）弘津史文 「周防國赤妻古墳並茶臼山古墳（其二）」（『考古学雑誌』18－5、1928年）。山口市教育委員会『茶臼山古墳・大判石棺調査報告書』（1978年）。
21）山口県教育委員会 『朝田墳墓群N・糸米遺跡』（1979年）。
22）森江直紹・辻田耕次 「荻峠石棺（山口市）」（『山口県文化財第4号』、1974年）。
23）山口県教育委員会 『朝田墳墓群Ⅱ・鴻ノ峰Ⅰ号墳』（1977年）。
24）山口県教育委員会 『しらいし古墳群』（1980年）。
25）注21)に同じ。
26）山口大学文化会考古学部 『活動報告書2』（1978年）。
27）注20)に同じ。
28）注2)に同じ。
29）永正15年（1518年）に伊勢神宮より勧請を計画し、17年に完成している。
30）田村哲夫 「信仰と社寺」（『山口市史』各説編、1971年）。
31）紀州より勧請。
32）弘治3年（1557年）築城。
33）弘治3年に大内義長の残党がここで兵を挙げた。内田伸 「大内時代」（『山口市史』、1982年）。
34）注12)に同じ。
35）注24)に同じ。

3　層位・遺構

〈小学校運動場〉

Aトレンチ（Fig.74～76　PL.54～59）

運動場北西隅付近に設定した6ｍ×2ｍのトレンチである。層序は北壁で観察すると地表面下4～20cmまでグランド整地の①真砂土や②石炭殻が覆い、その直下西半部は一部後世の溝（SD2－遺物未検出のため時期不明）等で切断されるが、古墳時代の遺物を包含する黒灰色粘質土が約40cmと厚く堆積し、さらに同じく包含層の⑧黒色粘質土が続く。東半部でも近年布設の運動場整備に伴う排水管があり下部堆積層を壊しているが、東から西下りの傾斜面をもって堆積する青灰色粘土・黒色粘土が確認できる。これらの堆積層は地表面下約60cm（中央部）を上限とする青灰色粘土をベースとしており、その上面は北壁中央から両端にかけては平坦であるが、東半部で段を呈し、そして一部撹乱で明確ではないが東端で漸次的に東上方へ立ち上る様相を見せている。青灰色粘土上面の段差は南東に向って直線的にのびており、また西壁からも東方へ走向する段がある。ここの段稜に挟まれた部分の直下に堆積する黒色粘土は、植物腐敗土を有し、かつ多くの自然木、木器等を包含していることから、堆積に際しては明らかに水の集積を伴っていたこ

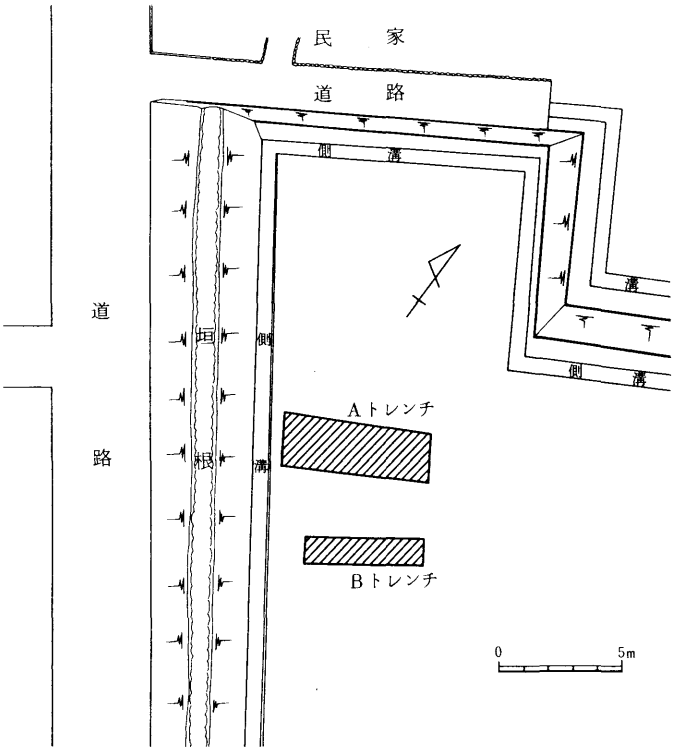


Fig.74　A・Bトレンチ設定図

とを窺わせているとともにこの部分が無遺物層の青灰色粘土を遺構下面とした遺構の存在が推定できる。その性格としては溝、沼池、小河川、それに伴う澱部分など水に関連した遺構の推測がなされるが、しかし現段階では調査範囲稀少のため断定するまでには確証を得ない。（一応SD１と称する）また、⑧黒色粘質土より上層の⑦黒灰色粘質土も

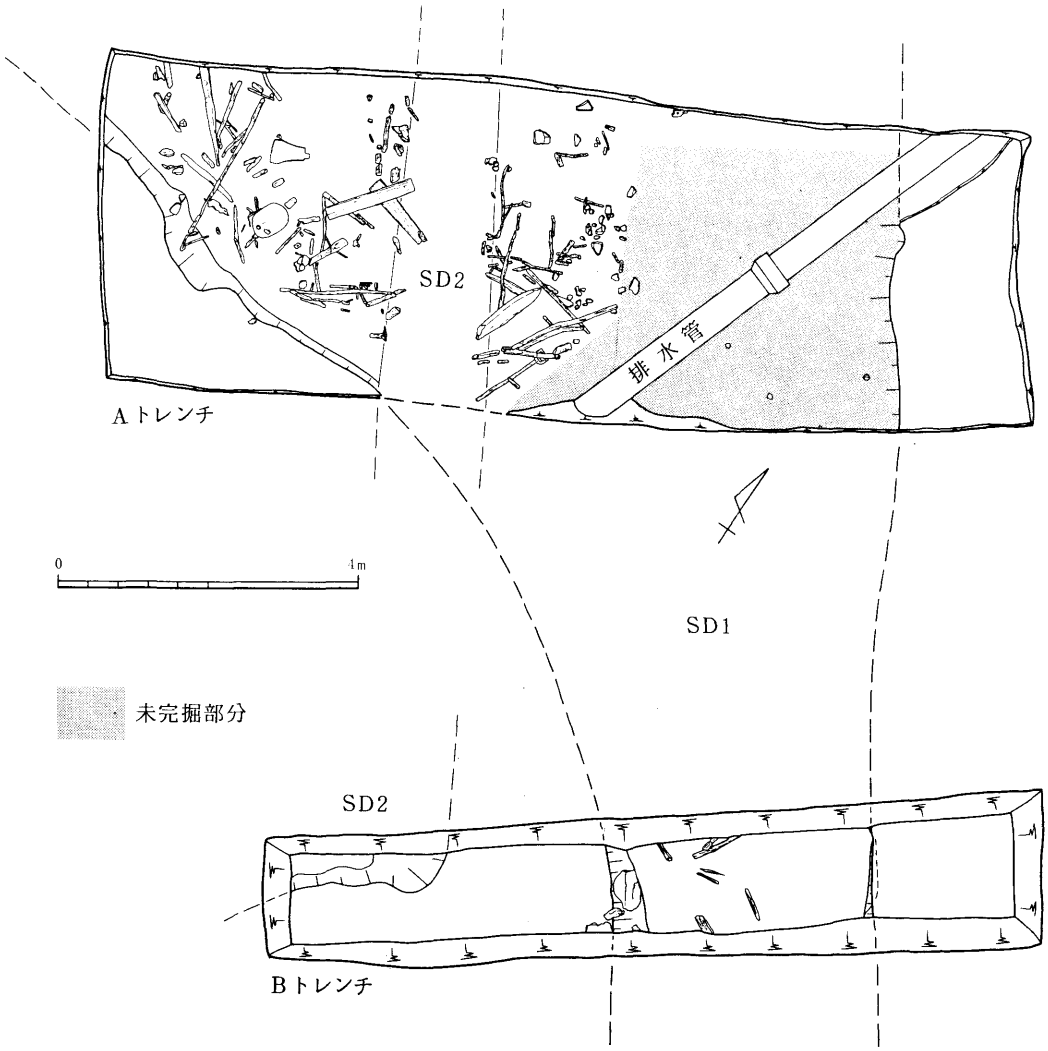


Fig.75　A・Bトレンチ遺構配置図

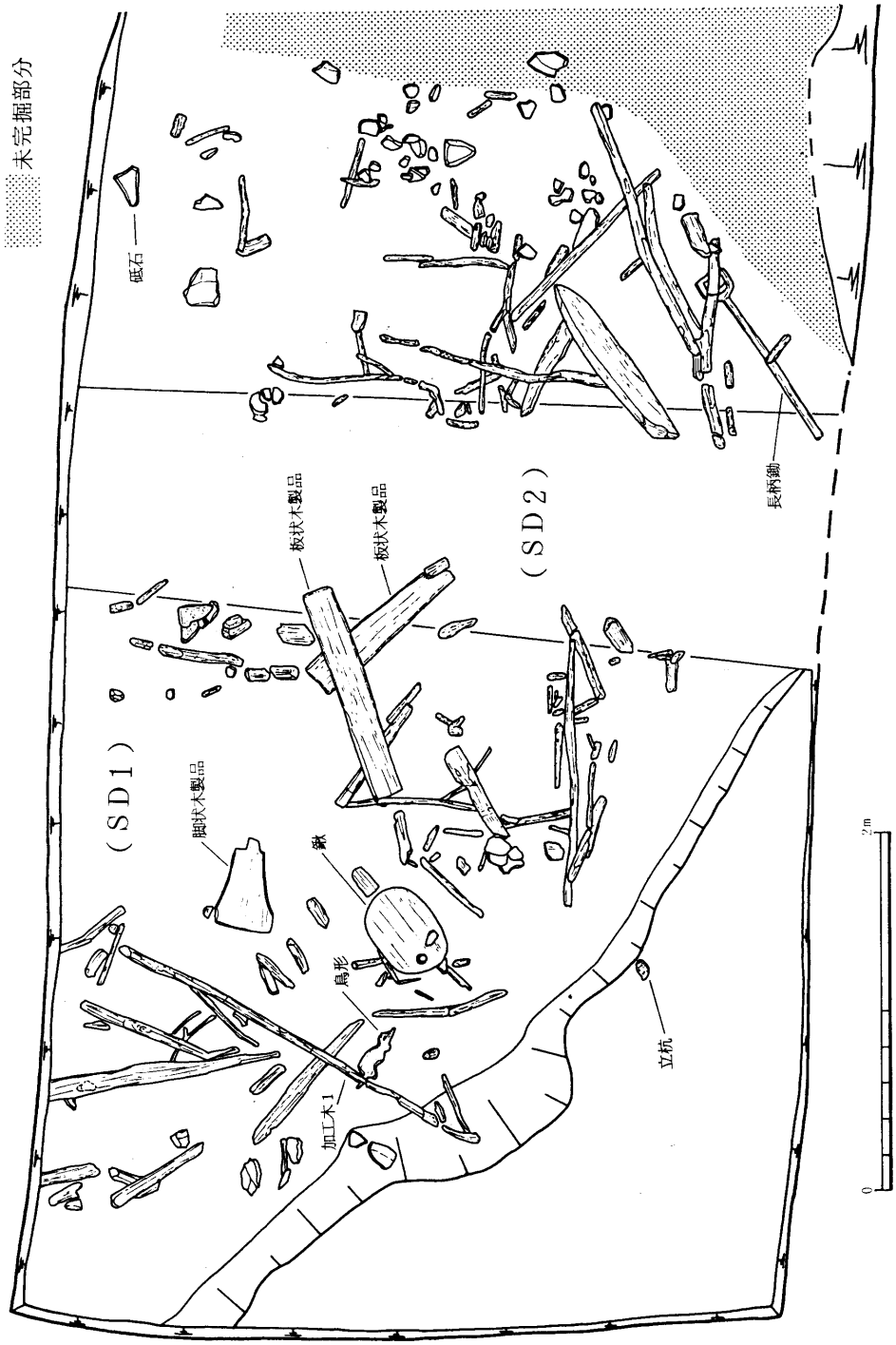


Fig.76　Aトレンチ遺物出土状況図

SD１内の埋土の可能性も十分考えられる。それは⑧黒色粘質土より先行堆積する⑨青灰色粘土・⑩黒色粘土が⑧層上面より上位まで延びていることと、ベースである⑪青灰色粘土が北壁東端で立ち上りを予想させるためで、トレンチ内で検出した段稜線はSD１内下部における一段差かもしれない。但し、仮にその場合でも当トレンチ範囲内では両肩部が明確にされないことおよび⑧層と⑦層では遺物に時期差（下限）が認められること（⑦層内がさらに細分される可能性もある）などから現時点この問題は保留し今後の調査を待って結論づけたい。また、SD１段落ち肩部上面の数箇所に木杭が打ち込まれており、護岸用施設に伴う可能性が高い。なお、工期の関係で⑨層・⑩層はほとんど掘り込まなかったが、⑨層は無遺物層で、⑩層は遺物包含層であることは確認した。

Bトレンチ（Fig.74, 75　PL.54）

Aトレンチで検出した遺物包含層・遺構の拡がりや方向をより明確にする目的で、南方向５mの間隔をもって設定した５m×１mのトレンチである。地表面から10～20cmまでは整地土で、その下はAトレンチと同様すぐに古墳時代の包含層が堆積し、青灰色粘土をベースとする。東寄りの部分には深さ40cmの溝状の落ち込みがあり、Aトレンチの両段稜線に続くと思われる。また青灰色粘土上面の遺物包含層の中にはAトレンチの⑦層と同じくSD１内埋土の可能性のものもあると考えられるが、調査範囲が狭いため明確にできない。さらに西寄り部分ではSD２に関連すると察する後世の落ち込みが検出された。

Cトレンチ（Fig.72　PL.60）

Aトレンチの東側に設定した５m×２mのトレンチである。地表面下６～10cm間はグランド整地土であり、その直下、トレンチ内西半の一部においてA・Bトレンチ地点に拡がる遺物包含層と同様な土質の暗灰色粘質土が非常に薄く堆積している。それ以下50～70cmまでは比較的短時間で自然堆積した状況を示す淡灰橙茶色砂礫や淡青灰橙色砂礫などの砂礫層が厚くある。さらに50～100cm間には土器等の遺物は認められなかったものの多量の植物遺体や炭化物を含む黒灰色粘土があり、その下の青灰色粘質土をベースとして一時この地が沼地状様になっていた可能性が看取できる。

Dトレンチ（Fig.72　PL.60）

Cトレンチの東側、運動場の北東隅に位置する地点に設定した約３m×２mのトレンチ

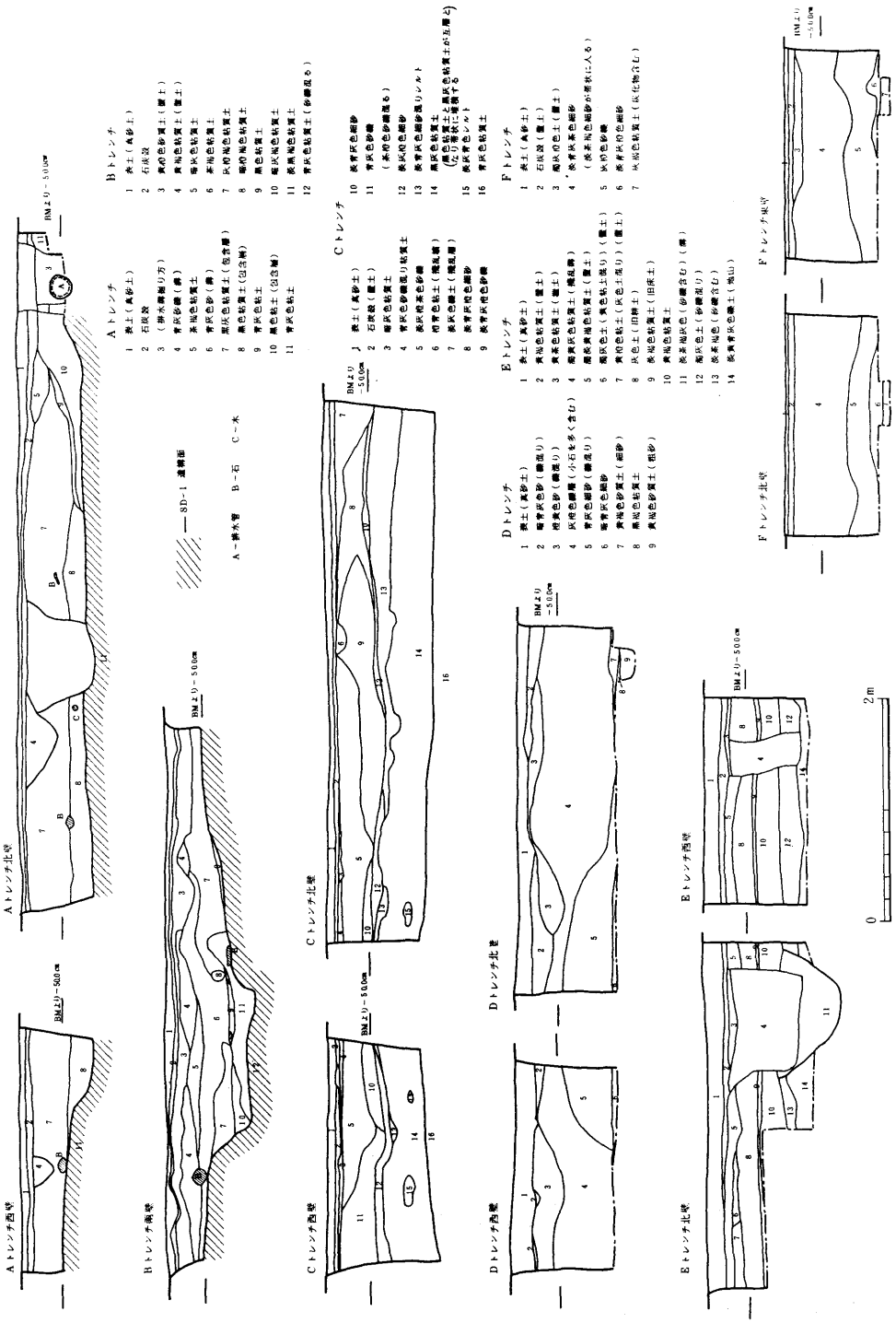


Fig.77　A～Fトレンチ土層断面図

である。土層の堆積状況はCトレンチと比較的相似しているが、古墳時代の遺物包含層と考えられる土の堆積は全く認められない。なお、トレンチ下位にはCトレンチで確認された有機物を含む粘土層に関連すると思われる黒褐色粘質土がある。

Eトレンチ（Fig.72　PL.63）

運動場中央部西側の地点に設けた3m×1mのトレンチである。地表面下30～36cmまでは整地土・埋め土で、30～50cmの間に旧耕作土および床土を残すが、一部深さ90cmまで達する撹乱壙がある。なお、調査過程において一旦床土のベースである黄褐色粘質土上面で遺構の確認を行なったが検出されず、以下トレンチ東半部を掘り下げた結果、淡茶褐色土上面から掘られている幅1.1m・深さ50cmの溝を検出した。この溝は北西から南東に向って直線的に延びており、下部は地表面下90cm前後よりある地山部を切り込む。埋土は淡茶褐灰色土の単層。時期は出土遺物が瓦一片のため断定し難いが、一応、中世頃と推定する。

Fトレンチ（Fig.72　PL.63）

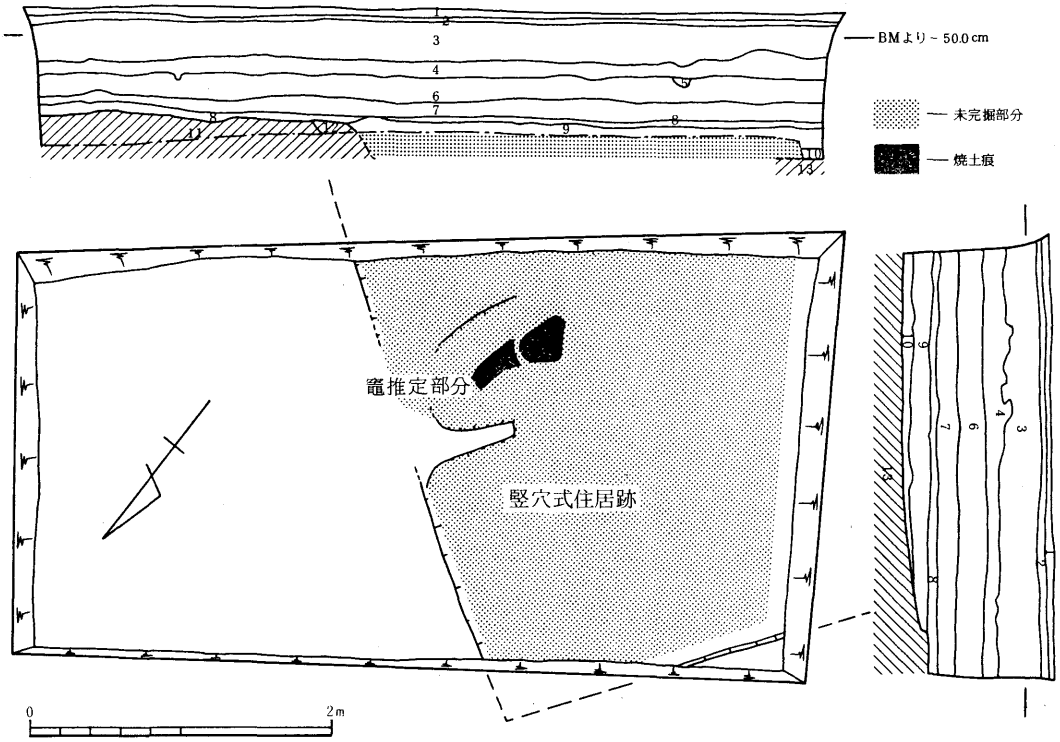
運動場中央部東寄りの地点に設定した2m×2mのトレンチである。地表面下8～15cmまでは整地土等で、その下は遺物を包含しない砂層・礫層の自然堆積層が厚く堆積する。地表面下90cm前後から堆積する灰褐色粘質土は、遺物は出土しないものの炭化物を含んでおり、C・Dトレンチで認められた有機質の黒灰色粘質土等に関連する可能性もあるが現時点明確ではない。

Gトレンチ（Fig.78　PL.61，62）

運動場南端中央に設定した約5m×3mのトレンチである。地表面下40cmまではグランド整地土・埋め土で、その下、地表面下約30cm前後と約60cm前後に旧耕作土と察する層の拡がりを認めた。ただし、この上下二枚の水田面の時期については遺物未検出のため不明である。さらに地表面下70cmの淡灰褐色砂質土の堆積層上面で黒褐色粘質土を上位埋土とした遺構を確認した。この遺構は方形プランと推定される竪穴式住居跡で、当トレンチ内ではその壁面二辺の一部を検出した。床面までの深さは約20cmと浅く、直上に遺物包含層が伴わないことも加え勘案すると住居跡上部は多少なりとも削平されていると思われる。また、北辺にあたる一壁面から住居内部に向って黄色粘土が突出しており（一側辺は彎曲気味に）、その内側部に焼土痕が認められることから、ここに竈が設置されていることが推

定される。さらに推定焚口付近で完形にちかい甕二点などが検出された。

なお、工期の関係および今回の工事ではこの遺構に支障がないということから住居跡内部は完掘せず、全体に約10cm程度の掘り込みと西側周壁沿いおよび西南壁下での床面検出、確認に留め、今後のため現状保存した。



1　表土（真砂土）
2　石炭殻（置土）
3　撹　乱　土
4　暗灰色砂質土（旧耕作土Ⅰ）
5　淡灰褐色シルト
6　淡橙色土
7　淡灰褐色砂質土（旧耕作土Ⅱ）
8　黄灰褐色シルト
9　黒褐色粘質土（住居跡埋土）
10　黒褐色（黄褐色粘土混り）粘質土（住居跡埋土）
11　淡灰褐色砂質土（礫を含む）
12　灰褐色シルト
13　黄褐色粘質土

Fig.78　Gトレンチ遺構図・土層断面図

〈幼稚園運動場〉

Hトレンチ（Fig.79　PL.63）

幼稚園運動場の中央西側寄りの地点に2 m×1 mのトレンチを設定した。表土下に造成時の整地土・埋め土が地表面下50～60cmまで存在し、その直下に旧耕作土と考える青灰色土と、それに伴う床土と推定しうる淡灰褐色粘質土があり、それ以下は自然堆積層が続く。なお、当トレンチ内では遺構は検出されず、遺物も皆無であった。

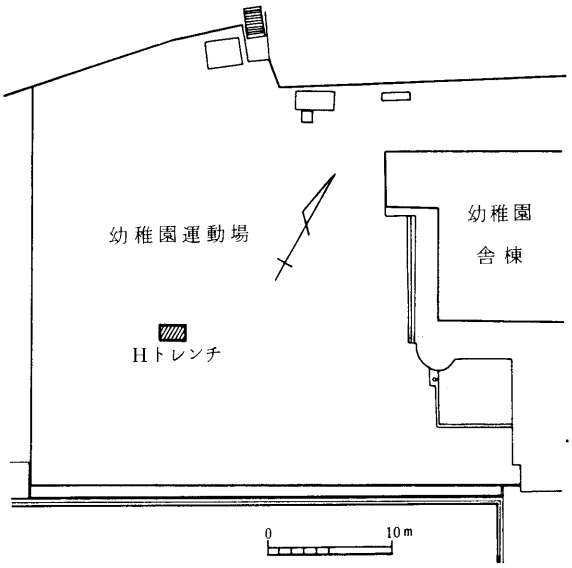
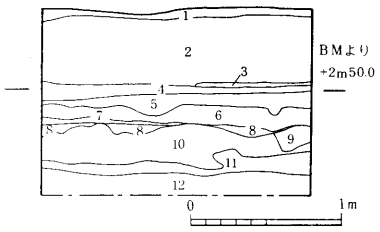


Fig.79　幼稚園運動場Hトレンチ設定図



1　表　土（整地土）
2　撹乱土（造成時の置土）
3　炭　殻（置土）
4　灰褐色粘質土（炭殻含む）（置土）
5　青灰色土（旧耕土）
6　淡灰褐色粘質土（床土）
7　黄色粘質土
8　黄灰色シルト
9　灰色（黄色混り）粘質土（若干礫含む）
10　淡灰黄色砂礫
11　淡灰褐色砂質土
12　淡青灰色砂礫

Fig.80　Hトレンチ南壁土層断面図

4　遺物

遺物を検出したのは、A・B・E・G の4トレンチであり、他にCトレンチの黒色土層から自然木が出土した。以下、Aトレンチ第8層、Aトレンチ第7層、Bトレンチ、Eトレンチ、Gトレンチごとに説明する。

Aトレンチ第8層（黒色粘土層）出土遺物（Fig.81　PL.64，67～69）

第8層（SD1）からは土器・木器・石製品・植物遺体などの遺物が出土した。

土　器

土師器甕（Fig.81，1～9）1・2は複合口縁の甕で、頸部より屈折してさらに大きく外彎しながら立ち上る口縁をもち、1の口縁端部は丸くおさまる。調整は共に口縁部は横ナデ、体部内面篦削り。2は体部外面に刷毛目調整を施し、また体部器壁はかなり薄い。3～8は「く」の字状に外反する口縁部をもつ。3・4は内彎してのびる短い口縁で、3の口縁端部は上端に狭い面を呈し、4は若干外下方へ肥厚し丸くおさまる。調整は共に口縁部内外面共横ナデ、体部内面は篦削りを施す。5は大きく屈折して外上方へ直線的にのびる口縁で、端部は丸い。口縁外面は横ナデ、内面は左斜上りの刷毛目調整をする。6の口縁は斜外上方にのび、端部は丸い。口縁内面はナデ、外面は横ナデ、体部内面へ篦削り。7はわずかに外彎状に短く開く口縁である。口縁部の横ナデ、体部内面は篦削り、外面は横方向に篦磨きを施す。胎土は精選されている。8は外彎しながら大きくのびる口縁で、端部は面をなす。口縁内面はナデ、外面は縦方向の刷毛目、体部内面は篦削り、外面は右下りの刷毛目調整。9は甕体部上位の破片で、外面に比較的太目の左下りの叩きを施す。

土師器高坏（Fig.81　10～14）　10・11は坏部である。10の坏底部は内彎しながらひらくやや深めのもので、口縁部は逆に外上方に反る。端部は丸い。内面は丁寧な篦磨き調整、外面は磨滅のため不明。また内面には煤が顕著に付着する。11は口縁が外上方に若干肥厚してのびる。坏底部との境に稜線が入る。口縁内面は右上－左下方向に丁寧な篦磨き、外面は刷毛目と縦方向の篦磨き。12・13は脚である。12は坏部接合面より内彎気味に広がる裾部で、三カ所に穿孔を施す。内面上位ナデ、下位刷毛目調整。13は器壁が厚い短めの中空の柱部から、屈曲して裾部が広がり、端部はわずかに外方へはねる。裾部の四カ所に穿孔がある。柱部内面はしぼり目痕を残し、裾部内面はナデ、外面は篦磨きを施す。14は外下方へ大きく広がる裾部である。端部に煤が付着する。裾部内面上位は篦削り、下位は刷毛目、外面は刷毛目調整後に縦方向に篦磨き。

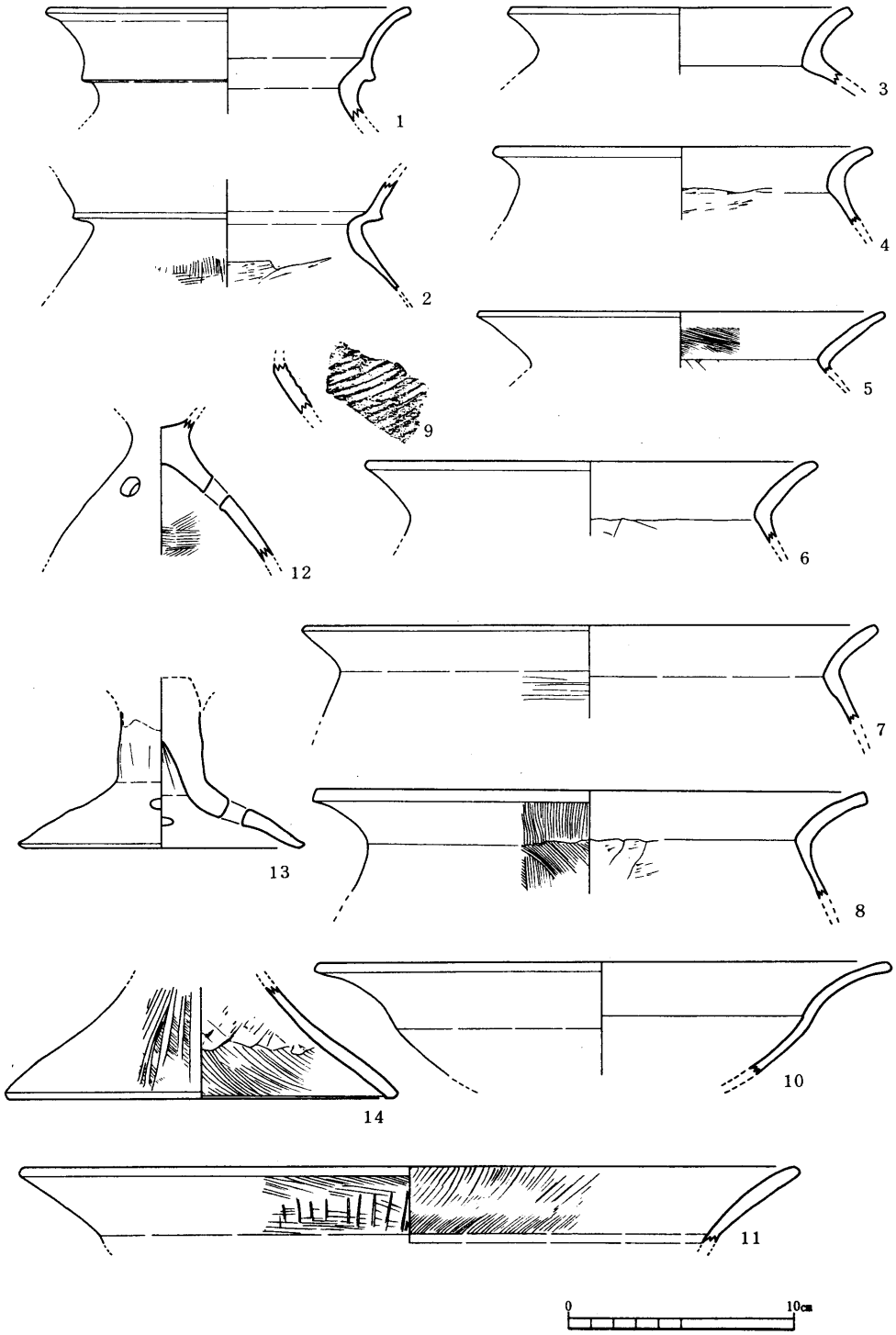


Fig.81　Aトレンチ第8層（黒色粘土層）出土土器（1）

木　器[1)]

鳥形木製品（Fig.82）　ほぼ完形である。形態は頭部が比較的大きく、前下方が先窄みになり嘴を表わす。最先端には径0.3cmの貫通孔一つを有する短い突起がつく。嘴と腹部間の頭部下面（喉部）には丸味をもつ突起を有する。背部は全体台形状様を呈し、背頂部は頭部頂より高位で直線的である。腹部は下方へふくらみをみせて切り欠きを施すが、後方に突起を残す。尾は尻部中位より小さく水平につき、断面は不整円形である。中程より外上方へ屈曲して先細りになり、その屈曲部分には斜め方向に一孔が穿たれる。なお、頭部中央両面には浅く削り凹みがあり、目が表現されている。技法は板目材の板を一枚用いて削り出しており、調整は全体的に粗い。面取りしている部分もあるが、周縁の切り欠き面には利器の削り痕が顕著に残る。孔は錐状の工具で穿たれたと察する。全長19.25cm、胴部幅5.4cm、最大厚1.7cm。なお、出土状況は加工木－１の枘穴部分に尾部が嵌った状態で検出された。

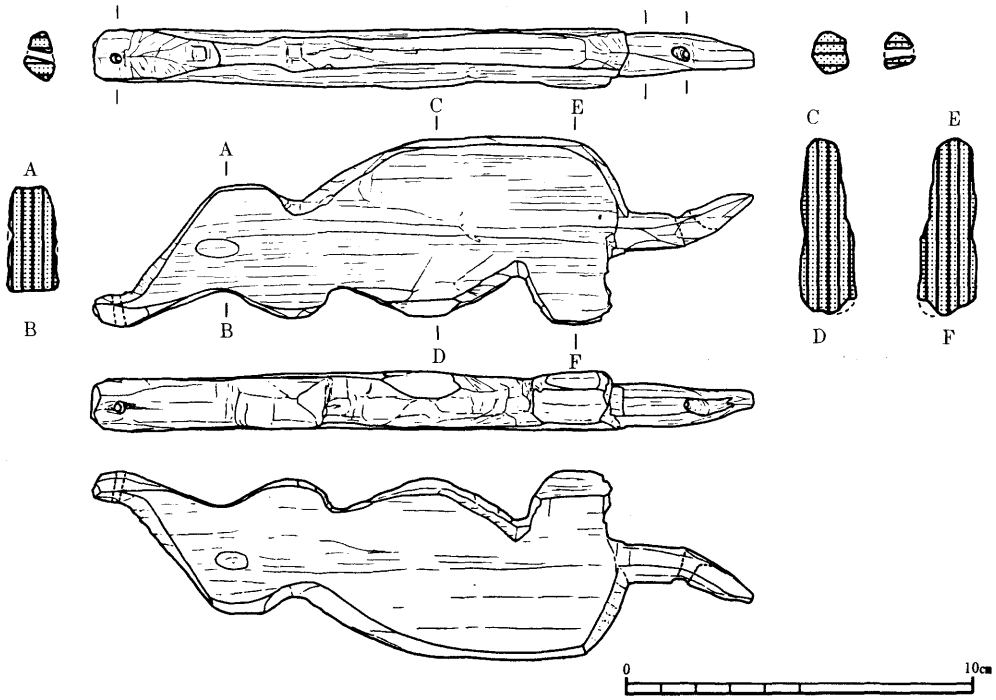


Fig.82　木器（１）

遺　物

加工木－1（Fig.83，1）　検出状況より鳥形木製品に伴う杆（竿）となる可能性をもつものである。全体わずかに反っているものの比較的直線的な枝を使用し、一部枘状になっている。遺存状態は下端が折損しており、また枘穴周辺から上端にかけ腐触が著しい。ただし、表面の大半部分で樹皮の残存が認められ、全体の表面加工はほとんど施されていないと思われるが、小枝は全て打ちはらわれているのかのびていない。枘は一端寄りに位置し、幅約1.5cmにわたって切り込んだ形を呈している。本来枘穴であった可能性も考えられるが腐触のため明らかではない。現存長106.0cm、最大厚2.9cm。

長柄鋤（Fig.83，2）　柄上部と把手の部分で、柄下部以下身は欠損する。柄部断面は円形。把手形状は⌓字形を呈し、内部後方に7.2cm×2.3cmを測る長方形の比較的小さい刳抜き部を有する。横木はわずかに左右に突出し他の部分より厚くする。内部前方には周縁に則ってU字状に巡る浅い凹線を施す。カシ類の一木づくりで、縦木取りである。全体多少磨耗しているが丁寧なつくりである。現存長59.9cm、把手長9.4cm、把手巾11.3、柄部厚さ2.1cm。

鍬　（Fig.84，1）　身の完形品である。平面形が概して楕円形を呈し、中央に突起を施さないもので他にあまり類例をみないものである。全体に縛手で刃縁、頭部は共に大きく内彎しており両側縁は平行して直線的になっている。刃部は周縁沿いをわずかに外方へ削りつくりだしており、加工痕がみられる。柄孔は頭部寄りにあり、着柄角度約70°をもって穿たれている。柄は断面円形のものと考える。全長25.7cm、最大幅17.6cm、最大厚1.2cm、柄孔3.3cm×3.1cm。樹種はカシ類と思われる。なお、ここでは一応鍬身の完成品と考えているが形態的に多少疑問を残す。

脚状木製品（Fig.84，2）　枘差結合法[1]による組み合せ式の木製品の脚と考えるものである。器種は上部構造で異なるが、腰掛ないしは案・小机等と推定する[2]。形状は縦長の台形を呈し、上端（短辺側）中央には上部の板の枘穴に挿入させるための突起が造り出している。下端は平坦面を呈し、部分的に焼けこげている[3]。面脚部上部では突起方向にかけての工具痕が多く残る。全長25.1cm、脚長22.2cm、脚上端幅8.0cm、脚下端幅16.0cm、最大厚3.5cm、突起最大長3.2cm、突起幅3.5cm、突起厚2.0cm。

板1・2（Fig.85，1・2）　1・2ともに板状製品の一部であるが、いずれも付随的な加工がみられる。1は側面寄りに3.1cm×1.3cm、0.8cm×0.3cmの大小二つの方孔が穿つ。全体に磨耗している。現存長50.6cm、現存最大幅9.7cm、最大厚1.3cm。柾目材。2は一側面際に切り込みを入れ、そこには他のものを組み合せ結縛したと推定しうる幅

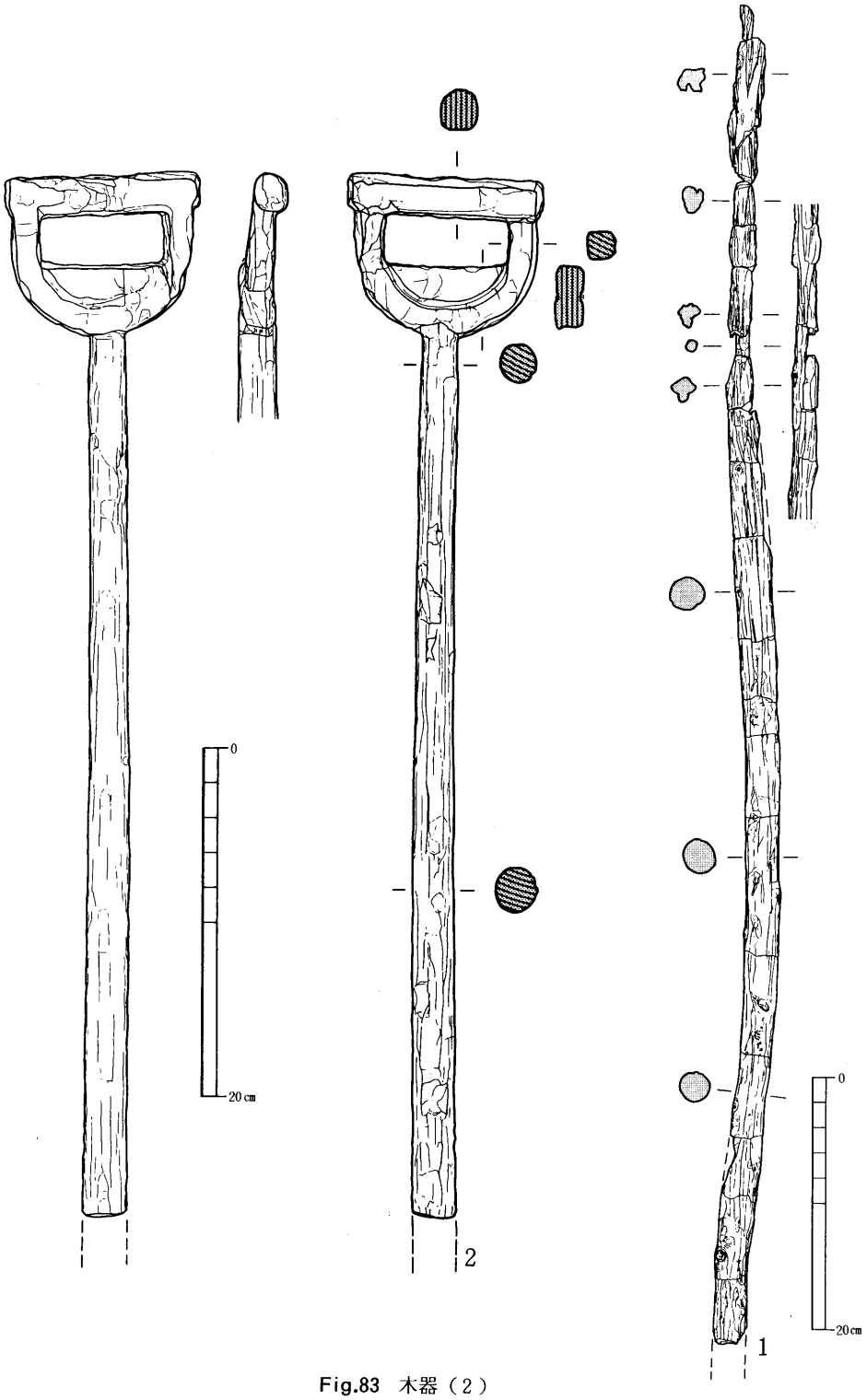


Fig.83　木器（2）

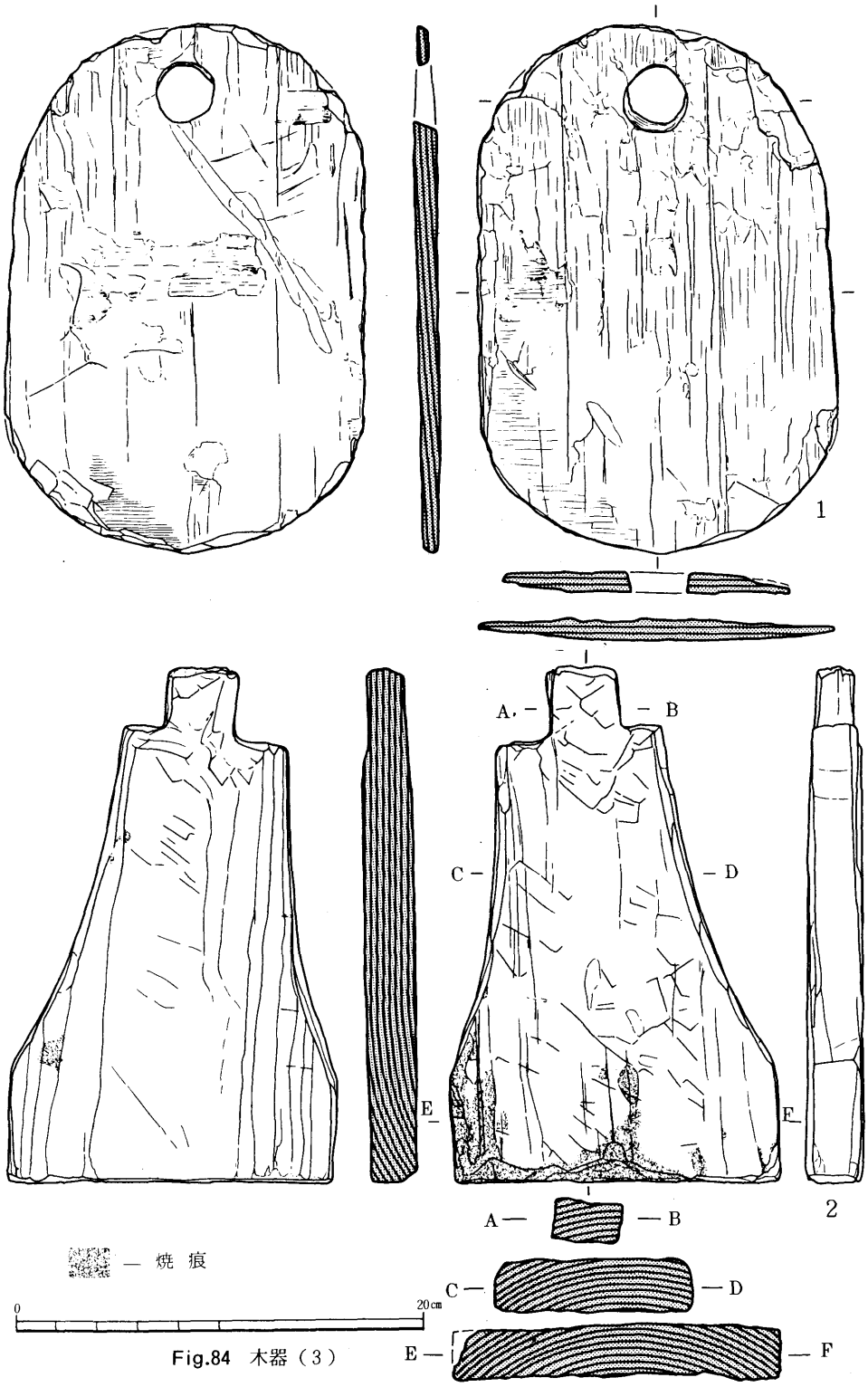


Fig.84　木器（3）

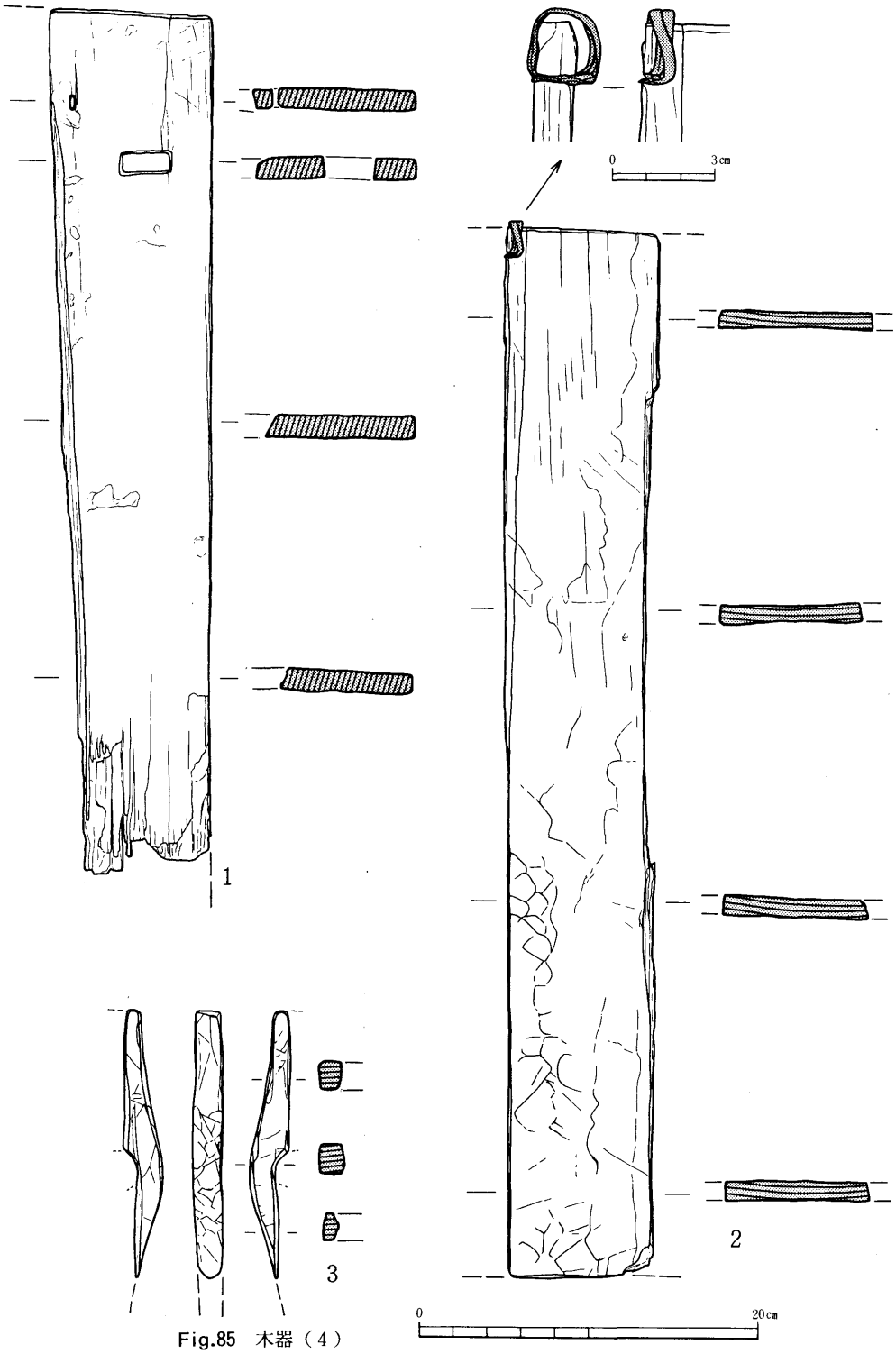


Fig.85　木器（4）

0.3～0.5cmの桜の樹皮が通しており、現状では一部２重の輪になっている。全長61.4cm、現存幅8.7cm、最大厚1.2cm。柾目材。

用途不明品１　（Fig.85，３）　欠損品で全体の形状は不明である。両面は平坦で、側面は緩やかにカーブを描く。中央には穿孔を有すると思われる他、側面には多数の細かな加工痕跡が観察できる。現存長15.7cm、最大現存幅2.2cm、最大厚1.8cm。

石製品その他

砥石（Fig.86）　折損面を除き、各面が研砥面として使用されており、とくに記載面は使用度が少ない。全体二次的な磨滅をうけているが、部分的に研磨痕、擦痕が残る。現存長10.4cm、幅6.6cm、最大厚3.4cm。

植物遺体（種核）（PL.63）　植物種子としてモモ（Prunus Persica）の核が出土した。

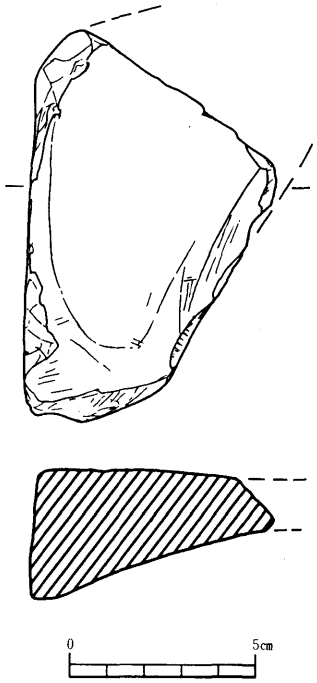


Fig.86　石製品

Ａトレンチ第７層（黒灰色粘質土）出土遺物（Fig.87　PL.65）

この層からは土器類が多量に出土したが、細片が多い。

土　器

土師器・壷（Fig.87，１～３）　いずれも複合口縁壷の口縁部の破片である。１は大きくひらいた後、さらに外斜方に短かくのびる。上半部横ナデ。２は短い直立の口縁上段部分で、上端部は面をなし、外面には５条の櫛描き波状文を施す。下端は貼り付け面である。調整は内外面共横ナデで、内面には一部指頭痕がある。３はいわゆる箍状部分で上面に口縁上段部の貼り付け痕跡が残る。外面横ナデ、２の破片と直接接合しないが、同一個体の可能性がある。

土師器・甕（Fig.87，４～18）　４は小型の甕で、口縁は短く外反し、体部は肩がはらず、最大腹径は口径よりも小さい。口縁内外面横ナデ、体部内面箆削り、外面磨滅のため不明。５～７は複合口縁のもつもので、口縁は外彎して立ち上る。端部は丸く終るもの(6)とやや面を呈するもの(5)がある。いずれも内外面共横ナデ。８～18はくびれ部が「く」

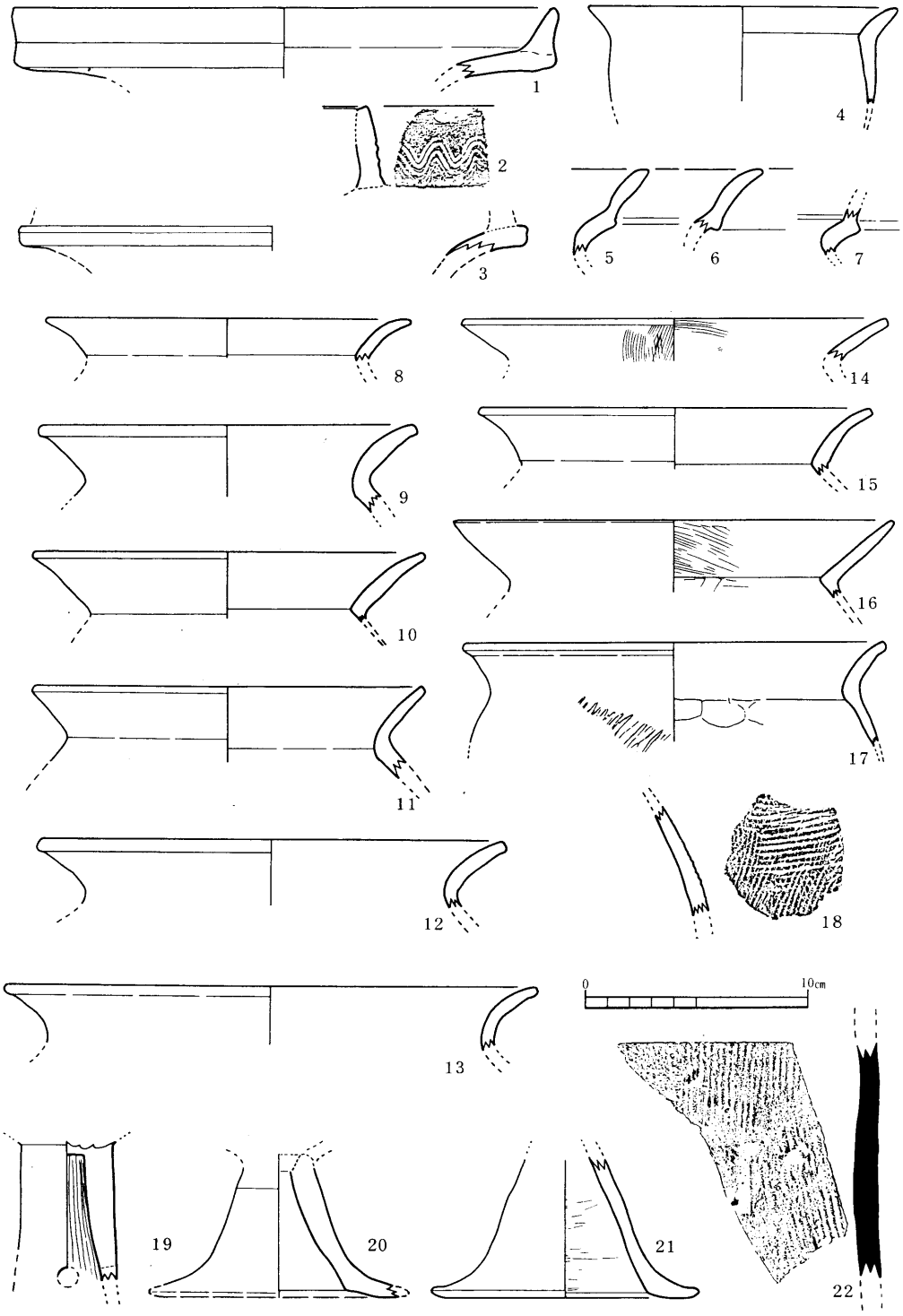


Fig.87　Aトレンチ第7層（黒灰色粘質土層）出土土器

Tab.18　出土土器観察表（1）

No.	器種	口径・底径 (cm)	器高 (現存高) (cm)	色調	胎土	焼成	備考
Aトレンチ黒色粘土層出土土器							
1	土師甕	15.8	(4.7)	外面－暗灰黄色（2.5Y） 内面－一部にぶい黄橙色（10YR）	0.1～0.2cmの砂粒多含	良好	煤付着（外）
2	土師甕		(4.7)	灰黄褐色（10YR）	精良　微砂少量	良好	煤付着（外）
3	土師甕	14.8	(3.4)	灰黄色（2.5Y）	精良　0.2～0.7cmの小石若干	良好	煤付着（外） 口縁内面に黒斑
4	土師甕	16.2	(3.4)	外面－にぶい黄褐色（10YR） 内面－にぶい黄橙色（10YR）	0.1～0.2cmの砂粒含む	良好	煤付着（外）
5	土師甕	17.7	(2.7)	外面－灰黄褐色（10YR） 内面－にぶい黄橙色（10YR）	0.1cm程度の砂粒含む	良好	煤付着（外）
6	土師甕	19.6	(3.6)	灰黄色（2.5Y）	0.1～0.2cmの砂粒含む	良好	煤付着（外）
7	土師甕	25.0	(4.4)	浅黄橙色（10YR）、体部内面－黒色（N）	精良　微砂少量	良好	
8	土師甕	24.3	(4.9)	橙色（5YR）	0.1cm以下の細砂多含、 くさり礫含む	良好	煤付着（外）
9	土師甕			橙色（5YR）	0.1～0.2cmの砂粒含む	良好	
10	土師高坏	25.0	(5.0)	外面－にぶい黄橙色（2.5Y） 内面－灰黄褐色（10YR）	0.1～0.2cmの砂粒含む	良好	煤付着（内外）
11	土師高坏	34.2	(3.35)	にぶい黄橙色（10YR）	0.1～0.2cmの砂粒多含	良好	
12	土師高坏		(6.4)	にぶい黄橙色（10YR）	0.1～0.2cmの砂粒含	良好	3孔
13	土師高坏	・12.2	(7.5)	にぶい黄橙色（10YR）	0.1cm以下の細砂多含、 くさり礫含む	良好	4孔
14	土師高坏	・16.4	(4.9)	灰黄色（2.5Y）	0.1cm以下の細砂含	良好	煤付着（内端部） 黒斑有
Aトレンチ　黒灰色粘土層出土土器							
1	土師壺	14.2	(3.2)	外面－橙色（7.5YR） 内面－浅黄橙色（7.5YR）	0.1～0.2cmの細砂多含	やや軟	
2	土師壺		(3.7)	にぶい黄橙色（10YR）	0.1～0.4cmの砂粒多含	良好	
3	土師壺		(1.3)	にぶい黄橙色（10YR）	0.1～0.4cmの砂粒多含	良好	2と同一の可能性あり
4	土師甕	13.6	(4.4)	外面－浅黄橙色（10YR） 内面－橙色（2.5YR）	0.1～0.5cmの砂粒多含	やや軟	
5	土師甕		(3.9)	外面－淡黄色に近い灰白色（5Y） 内面－灰色（N）	0.1～0.3cmの砂粒少量	良好	
6	土師甕		(3.9)	灰黄褐色（10YR）	0.1～0.2cmの砂粒多含	良好	煤付着
7	土師甕		(2.1)	外面－にぶい黄橙色（10YR） 内面－淡黄色（2.5Y）	細砂少量	良好	
8	土師甕	16.1	(1.9)	灰黄色（2.5Y）	0.1～0.2cmの砂粒少量	良好	
9	土師甕	16.6	(4.0)	外面－灰白色（2.5Y）、内面－灰黄色（2.5Y）	精良　微砂少量	良好	煤付着（外）
10	土師甕	16.2	(3.1)	外面－灰白色（2.5Y）、内面－黄灰色（2.5Y）	0.1～0.2cmの砂粒含む	良好	口縁内面に黒斑
11	土師甕	17.3	(4.1)	浅黄橙色（10YR）	0.1～0.3cmの砂粒含む	良好	煤付着（外）
12	土師甕	20.6	(3.1)	外面－にぶい褐色（7.5YR） 内面－にぶい橙色（7.5YR）	0.1～0.2cmの砂粒含む	良好	煤付着（外）
13	土師甕	23.6	(2.9)	外面－浅黄橙色（7.5YR） 内面－浅黄橙色（10YR）	0.1～0.4cmの砂粒多含、 くさり礫含む	やや軟	
14	土師甕	18.8	(1.9)	にぶい黄橙色（10YR）	0.1～0.2cmの砂粒含む	良好	
15	土師甕	17.2	(3.0)	外面－にぶい黄橙色（10YR） 内面－灰白色（2.5Y）	0.1～0.3cmの砂粒多含	良好	
16	土師甕	19.3	(3.5)	外面－にぶい黄橙色（10YR） 内面－灰黄褐色（10YR）	0.1～0.4cmの砂粒多含、 くさり礫含む	良好	
17	土師甕	18.5	(4.7)	灰黄褐色（10YR）	0.1～0.2cmの砂粒少量	良好	煤付着（外）
18	土師甕		(5.2)	にぶい褐色（7.5YR）	精良　微砂少量	良好	煤付着（内、外）
19	土師高坏		(6.3)	灰白色（2.5Y）	精良	良好	
20	土師高坏		(6.5)	外面－灰黄褐色（10YR） 内面－にぶい黄橙（10YR）	精良	良好	
21	土師高坏	・10.0	(6.9)	淡黄色（2.5Y）	精良	良好	
22	須恵器壺		(10.8)	外面－青灰色（5B）、内面－灰白色（N）	密	堅緻	

＊色調は農林省農林水産技術会議事務局監修
「新版　標準土色帖」に準じた。

の字形になるタイプである。大半は口縁が外彎気味に外方にのびるが、16は直線的である。口縁端部は全体が丸くおさまるもの（８・10・16・17）と若干外下方に肥厚して丸く終るもの（９・12・13)、面を呈するもの（11・14・15）とに分けられる。なお11の口縁端部は部分的に外下方へ肥厚している。また、くびれ部内面が丸味をもつものと稜をなすものがある。調整は口縁内外面共に横ナデ（８～10・13・17）内面粗い刷毛目・外面横ナデ（12・16)、内面横方向の刷毛目・外面縦方向の刷毛目（11・14）などがある。体部内面はいずれも篦削りで、外面は17で左下りの叩き目が認められる他は欠損して不明。18は甕の体部の破片で、比較的細い叩き目を有し、さらに粗い刷毛目調整が施されている。

土師器・高坏（Fig.87，19～21）　すべて脚部である。19は中空で柱状を呈し、３カ所に孔を施こす。内面はしぼり痕が顕著に残り、外面は磨滅のため調整不明。20・21は裾部に至り大きく屈曲し、水平ちかくなる。21の端部は上方にやや肥厚気味に丸くおわる。20は外面および内面裾部をナデ、脚部を篦削り後回転ナデ。21は脚部内面を篦削りで、外面は磨滅のため不明。

須恵器（Fig.87，22）　壷ないし甕の胴部の一部分である。外面は平行叩きを施こすが、器表には指頭痕のため凹凸がある。内面はスリケシ。

Ｂトレンチ（包含層）出土遺物（Fig.88　PL.64）

当トレンチからは土器類の他、落ち込み部分で自然木等が出土した。

土　器

土師器・壷（Fig.88，１）　いわゆる大型の複合口縁壷である。頸部は斜外上方にのび、上位でさらに屈曲して内面に段を呈する。口縁部は頸部の上端部に貼りつき、わずかに内彎して外上方に立ち上る。口縁端部はやや丸く終る。全体器壁は厚く９㎜前後を測る。内外面とも篦磨きと思われるが磨滅のため不明瞭。

土師器・甕（Fig.88，２～５）　２・３は外上方へ内彎気味に立ち上る複合口縁で、屈折部分外側は稜をなす。２は口縁端部は丸い。調整は内外面共に１は横ナデ、２は横方向に篦磨き。４・５は「く」の字形に短く外彎して外反する口縁をもつもので、４の口縁端部は浅い沈線が巡り外側に狭い面を呈する。５の端部は丸く、体部は肩が張らずになだらかに下る。両者共に口縁部は横ナデ、体部内面は篦削り、外面は縦方向に刷毛目調整。

土師器・高坏（Fig.88，６・７）　６は脚部で、端部は内側に若干肥厚する。内面は刷毛目、外面は篦磨きで、刷毛目痕も認める。７は坏部である。内面坏底部とは口縁部

の境に稜をなし、口縁は外上方に大きく外反する。端部は丸い。調整は磨滅のため不明。

須恵器・坏（Fig.88，８）　坏身の底部で、断面逆台形状の低い高台が貼り付く。調整は内外面共に回転ナデ。

瓦質土器・土鍋（Fig.88，９）　口縁上端は面をなし、外周に鍔が貼りつく。体部はゆるやかに内彎しながら下る。内面は横方向へ粗い刷毛目、鍔・口縁上面は横ナデ。外面は顕著に煤が付着する。（包含層上位出土）

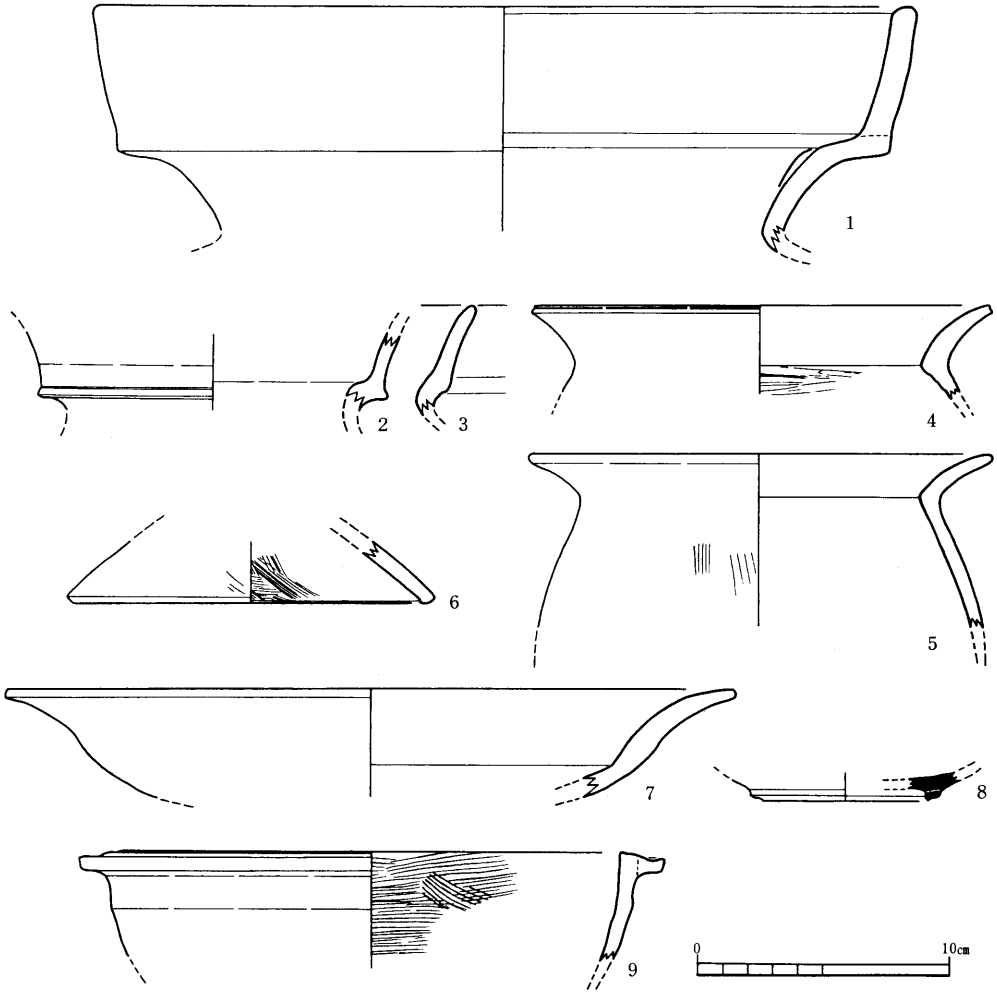


Fig.88　Bトレンチ出土土器

Eトレンチ出土遺物

（Fig.89　PL.67）

丸瓦　後部片である。玉縁をもつもので、幅約3cmを測る。凸面はヘラ磨き、凹面は、細かい布目痕がわずかに残る。色調灰白色。胎土は砂粒を多く含む。時期は中世と思われる。（溝内出土）

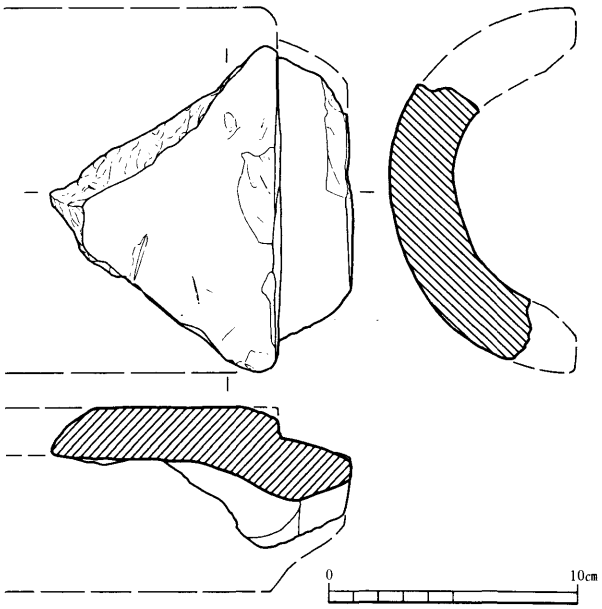


Fig.89　Eトレンチ出土瓦

Gトレンチ（竪穴式住居跡内）出土遺物（Fig.90　PL.67）

竪穴式住居跡内の埋土上層である黒褐色粘質土から、完形をちかいものを含めた土師器類が出土した。

土　器

土師器・壷（Fig.90，1・2）　1は外上方に先窄みながらのびが短かい口縁をもつ、体部は肩が張らずに下る。口縁部は横ナデ、体部内面は篦削り。2の口縁は体部よりそのままのび、先窄みである。器壁は厚く、底部は平らをなす。調整は全体にナデ。

土師器・甕（Fig.90，3～5）　3は外彎しひらく口縁をもち、片口を有する。端部は面をなす。体部は最大腹径（23.7cm）が体高の中位にあって、球形を呈する。外底部はわずかに平底気味である。口縁部は横ナデ、体部内面は篦削り。外面は刷毛目調整を施すが、指頭による凹凸が残り全体的に整形が粗い。4はわずかに内彎気味に立ち上る口縁で、端部が若干外へ肥厚し上端は面をなす。体部は球形を呈し、最大腹径（27.0cm）が体高の中央よりやや上に位置する。器壁は薄い。口縁部は横ナデ、体部内面はナデ仕上げ、外面は比較的細かい刷毛目調整。5は球形の体部を呈し、底部はわずかに平坦面を有する。内面は篦削り、外面刷毛目。

土師器・鉢（Fig.90，6）　小型のもので、口縁先端はわずかに外反し、体部は外方へ張らず彎曲してのびる。口縁部および体部上位は横ナデ、体部下位は多方向に刷毛目調整。

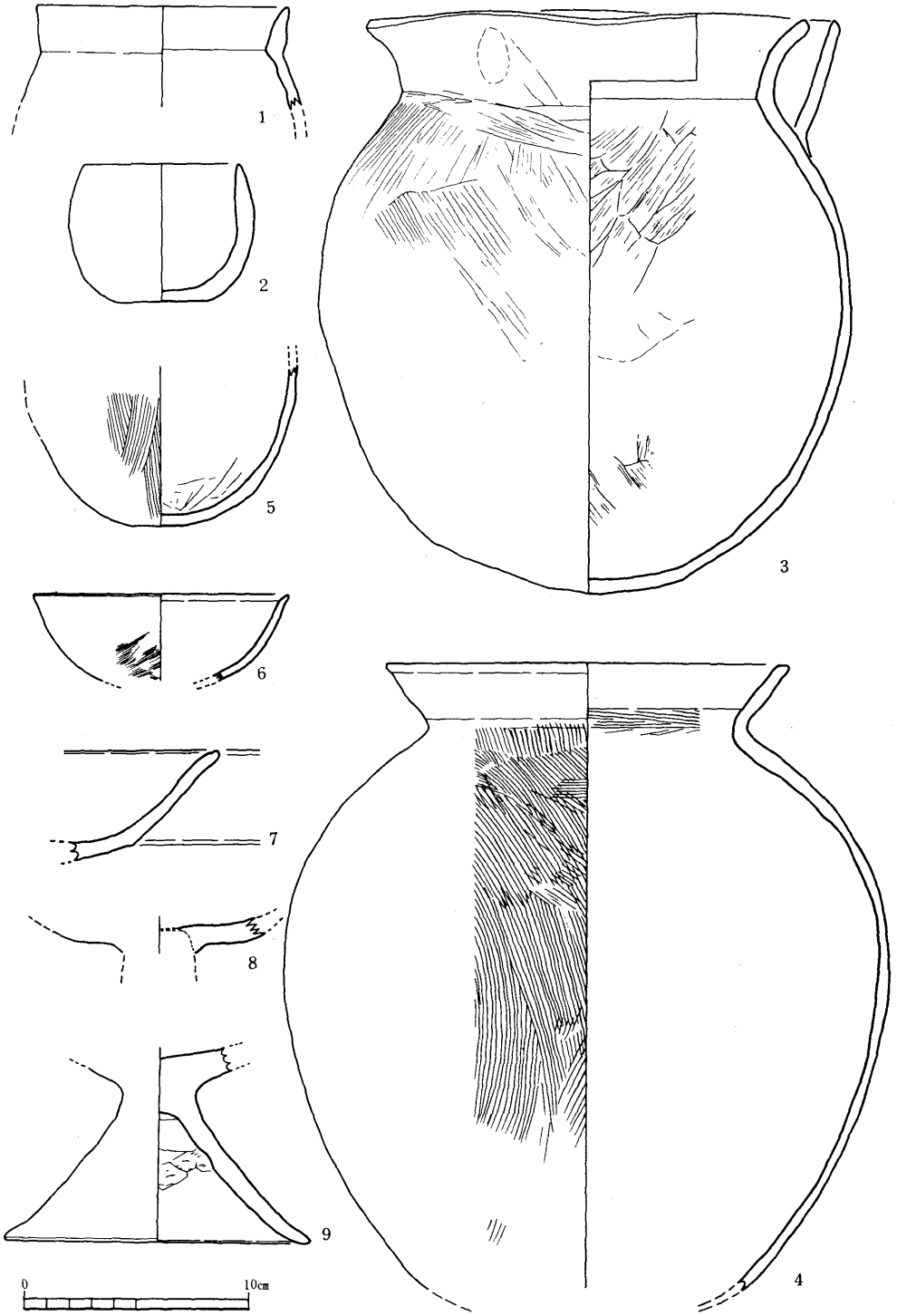


Fig.90　Gトレンチ（住居跡内）出土土器

土師器・高坏（Fig.90，７～９）　７は坏部上半部で、口径は小片のため明確できないが約20cm前後と思われる。概して直線的に広がり、上端部に至ってわずかに外反し、小さくつまみ上がる。調整は丁寧な篦磨き、８は坏底部分で、脚ははめ込み式となる。内面篦磨き、外面回転ナデ。９は全体が大きくひらく脚部で、坏底部よりほぼ直線的に外下方へのび、端部に至ってさらに外反する。坏底部は厚みがある。脚部上位内面篦削り、外面篦磨き、下位内外面共横ナデ。

Tab.19　出土土器観察表（２）

No.	器種	口径 (cm)	器高 (現在高) (cm)	色調	胎土	焼成	備考
Bトレンチ							
1	土師壺	32.6	9.9	浅黄橙色（10YR）	精良 0.2cm程度の砂粒少量	やや軟	
2	土師甕		(3.2)	内面－にぶい黄橙色（10YR）	0.1cm程度の細砂含む	良好	
3	土師甕		(4.5)	浅黄橙色（10YR）	精良　微砂少量	やや軟	煤付着（外面）
4	土師甕	18.1	(3.8)	外面－黒色（10YR）、内面－褐灰色(2.5Y)	精良　細砂少量	良好	煤付着（外面）
5	土師甕	18.1	(7.0)	淡黄色（2.5Y）	0.1～0.3cmの砂粒多量、くさり礫含む	良好	煤付着
6	土師高坏	14.2	(2.5)	外面－にぶい黄橙色（10YR） 内面－にぶい橙色（7.5YR）	精良　微砂少量	良好	
7	土師高坏	29.1	(4.4)	にぶい橙色（10YR）	0.1～0.2cmの砂粒含む	良好	
8	須恵器坏	6.6	(1.2)	外面－青灰色（5B） 内面－明青灰色（10BG）	精良　微砂含む	堅緻	
9	瓦質鍋	20.0	(4.4)	灰色（N）	精良　微砂少量	良好	煤付着（外面）
Gトレンチ（住居内）							
1	土師壺	13.6	(4.3)	橙色（5YR）	極めて精良　くさり礫含む	やや軟	
2	土師壺	6.8	5.15	橙色（5YR）	極めて精良	良好	
3	土師甕	19.4	26.05	橙色（5YR）	0.1～0.2cmの砂量含む	良好	煤付着（外面）
4	土師甕	17.9	(27.85)	にぶい橙色（5YR）	微砂比較的多く含む	良好	
5	土師甕		(7.1)	外面－浅黄橙色（10YR） 内面－淡黄色（2.5Y）	精良 0.1～0.2cmの砂粒若干	良好	煤付着（外面）
6	土師鉢	11.3	(3.9)	黒褐色（2.5Y）	精良　微砂少量	良好	
7	土師高坏		(4.9)	にぶい橙色（7.5YR）	精良　微砂少量	良好	
8	土師高坏		(1.6)	浅黄橙色（7.5YR）	極めて精良	良好	
9	土師高坏	(13.4)	(8.7)	にぶい橙色（7.5YR）	極めて精良	良好	

〔注〕
1）小林行雄『続古代の技術』（1964年）。
2）奈良国立文化財研究所の町田章先生から「脇息」の可能性を御指摘、御教示を受けた。記して感謝いたします。
3）突起部上面には結合を強固させるために直軸方向にそって中央に木楔が入れられている可能性がある。
京都大学の小野山節先生より来館の折り、御教示受けた。記して感謝いたします。

5　小結

(1)　埋蔵文化財の調査結果と今後の方針

運動場面積は小学校・幼稚園の両者合わせて約6000㎡あるのに対し、今回の試掘調査総面積は約60㎡で全体の１％程度にすぎず、遺物包含層、遺構の分布範囲を明確にすることは極めて早計と考えるが、一応現時点でわかり得た結果について述べる。

まず小学校運動場では、古墳時代の遺物包含層・遺構および後世の耕作面積が運動場中央部から両端にかかるA・B・C・E・Gトレンチで確認された。検出された遺構を考えると、竪穴式住居跡は単独で存在することは稀で、普通数棟をもって集落を形成されており、また溝状遺構は機能上さらに拡がると察せられる点などから、とくに西半部では広い範囲にわたって遺構が埋存している蓋然性が高く、今後この地域で工事を行なう時は十分な事前調査が必要と思われる。運動場東半部は遺物包含層、遺構が検出されなかったが、その要因は各トレンチの土層の比較および周辺の地形を勘案すると、旧地形は北から南へ、さらに東から西へ傾斜下向していると推定できるが、現在校舎・体育館等が建てられている敷地と小学校運動場の境が約1.5m程度段差があり後者側が低くなっていることから、東半部は運動場造成に際して既に削平された可能性が大きいと察する。ただし、古墳時代より前代のものに関しては、本来の地山がEトレンチでしか確認できなかったため、現時点ではその有無は確定しがたい。

幼稚園運動場の方は、調査地点が１カ所だけで、その結果は運動場全域を包括して言えるものではなく、当トレンチに限ると小学校運動場に埋存していた古墳時代の遺物包含層に相当するものは全く無く、またそれ以前、以後の遺物の出土も無かった。しかし、地表面下60㎝前後には旧耕作土や遺物包含層の可能性のある淡灰褐色粘質土があることから、今後深く掘り下げる工事に際しては調査が必要と思われる。

なお、今回の運動場整備工事に関しては、試掘調査直前にほぼ完工したA・Cトレンチ付近の排水溝では、遺物包含層の一部が破壊された可能性もあるが、試掘調査以後行なった本工事（グランド整地土すき取り工事）は現整地土内での掘り返しに留めることで、直接埋蔵文化財に影響ないとし、改めて調査は実施しなかった。

(2)　遺構・遺物について

溝状遺構（SD１）　A・Bトレンチで検出した溝状遺構は、前章で述べた通り現時点では規模・性格・機能等については明確に断定できないが、立地条件や出土遺物、さらに同構内で古墳時代の住居跡が検出されたことから察して、集落に関連する可能性が高いと

推測する。出土遺物はAトレンチ黒色粘土層のものについて述べると、土器は全て破片でかつ細片が多いものの中には磨滅が極めて少ないものも含まれていることから、比較的近傍より流失したものとみられる。土器の形態をみると、甕形土器の中に山陰系の特徴を具備した複合口縁をもつもの（第81図１・２）があり注目される。搬入品か或は在地産かについては今後胎土等の細部観察を待って結論づけたいが、山陰の編年では広義の鍵尾式に相当し、藤田憲司氏編年[2]のⅢ～Ⅳ期に属すると考える。鍵尾式はさらに新古の様相からⅠ式（的場式）とⅡ式に区分されている[3]が、本例はⅠ式の特徴である口縁外面に施される浅い繊細な櫛描き平行凹線は認められない点などから、後出的な様相が伺われⅡ式の範疇内において併行すると思われる。また、甕では体部外面に叩き目を施しているものがある（第81図９）。周防における叩き目技法の出現は、弥生土器か土師器かで議論の多い吹越遺跡４号住居出土土器群[4]いわゆる吹越式－山本一朗氏による周防の土器編年[5]のⅨ式の段階では認められず、山本氏編年X式、例えば湯田楠木町遺跡でみられるように畿内から伝播した庄内型土器の影響をもってなされたと推定されている。高坏類は山本氏編年では概ねⅨ～X式に属するもので、県内では秋根遺跡、土井ケ浜遺跡、吹越遺跡、北九州では高島遺跡[6]や出土のものに類似性が看取されるものがある。なお、周防の土器編年研究は、編年を行なう上での良好な出土土器資料はわずかで、とくに在地系と外来系との共併関係を示す具体的資料は稀少で、両者による相互の併行関係は未だ解明途中にあると考える。そのため当資料に関しても詳細な時期を決定しかねるが、一応上記のことを総合して勘案すると、黒色粘土層内の土器類は細分型式上では一時期に限定しうるものではなく、新古の様相が混在しており、一括資料として扱うには躊躇する。いずれにしても布留式の時期まで下るものではなく、敢えて畿内編年に対象するならば新しい様相のものは庄内式併行期と察せられることから、これらは弥生時代終末から古墳時代初頭の時期に位置づけられると考える。

木製品はこの地点の湧水点が高く、埋土が湿潤していたことが概ね良好に遺存する要因になったもので、県下では数少ない木製品出土地として注目されよう。木製品の中で特筆すべきものに鳥形木製品がある。この類は朝鮮半島や大陸などに現存する民族例から、霊鳥信仰を示す鳥杵と考えられている。今日まで日本における弥生時代から古墳時代にかけての鳥形木製品は西日本を中心に15遺跡31例に及ぶものの、既出例の場合すべて鳥形本体のみの出土で、杵とセットになって検出されたものは皆無であったことから、本例は霊鳥信仰が古く大陸から日本へ入って来た証拠を示すより具体的事例として、また従来より想

定されている装着方法とも異なる点なども加え、貴重な発見といえよう。

竪穴式住居跡　Gトレンチで確認した竪穴式住居跡は、工期等の都合でその一部を検出したに留まったが、平面形態は方形プランを呈すると察せられ、規模は周壁二辺と竈の確認により、すなわち一般的に竈は一辺の中央に付設される例が大半を占めることから推定し、この住居の一辺は4m前後を測るものと思われる。この大きさは当時においては普遍的な規模である。

出土土器は器形、調整手法等により布留式の様相を呈しており、Aトレンチ黒色粘土出土のものより後出的な要素を示す。ただし、詳細な時期決定は県下における土師器編年が未だ検討段階にあるため断定しかねるものの、周辺地域出土のものと対比検討するに、一応5世紀前半、およびその前後と推定され、古墳時代前半期まで遡る可能性をもつ。

今日まで白石周辺での古墳時代の遺跡は、鴻ノ峰古墳群[7]、白石古墳群[8]、茶臼山古墳群[9]など山麓およびそれより派生した小丘陵上に立地する埋葬関係のものがよく知られており、またそれらの中には発掘調査によってその実態が明らかにされているものも多くあるため、当時の奥津城の立地条件や墳墓形態などについては漸次資料が蓄積され研究も進んでいる。しかし、そこに埋葬された人々の居住地については、わずかに白石遺跡の西方500 mに位置する県立山口高等学校敷地内に須恵器を伴出する包含層が確認されている[10]ことから、集落は山麓・丘陵縁辺部直下の緩傾斜面上に存在しているのではないかと推測されていたものの、それを具体的に立証する生活関連遺構の検出が全く無く、未解決の問題であった。そのため、今回の調査で検出した竪穴式住居跡は鴻ノ峰南麓下の地域では初見のごとくであり、今後この地の歴史を究明する上で貴重な発見で意義が高い。また住居跡自体に関しても住居内の壁面に作りつけの竈を付設しているものとしては山口県下では最古時期に属し、かつ全国的にみても一般に普及するのが6世紀以降であることから、当資料は古い段階に属するものとして日本各地に波及するまでの伝播ルート解明に一石を投ずる資料になりうると考える。さらに、従来山口盆地では埋葬形態の様相により古墳時代前半期段階にあっては弥生文化の伝統を強く維持し、外来文化の伝播に対しては閉鎖的指向が強いとされていたが、今回の竈例のように生活面においては逆に先進的文化要素を積極的に摂取していたものもあったことが窺われる。

以上のような、今回の調査は限られた時間と調査範囲の中であったが学術的には予想以上の成果を上げることができた。調査の契機となった工事では本試掘調査の結果より直接埋蔵文化財に対する影響は少ないと判断されたため、検出遺構は最小限の調査後再び地中

に埋め戻されており、将来十分な調査をなされることが望まれる。なお、調査後本遺跡は「白石遺跡」と称し、周知の遺跡に登録した。

なお、調査にあたっては人文学部考古学研究室の近藤喬一・中村友博両先生をはじめ学生諸君の御協力を得た。木製品の取り上げに際しては山口県埋蔵文化財センター（渡辺一雄氏）に御願いし、また、鳥形木製品に関して國分直一先生（梅光女学院大学教授）に御教示を賜った。ここに各位に対し記して深甚の謝意を表します。

（森　田）

〔注〕

1）木製品の樹種鑑定は将来に譲る。また、実測図の断面図には年輪を模式的に図示した。ただし、加工木－1については保存処理中のため観察できなかった。

2）藤田憲司「山陰「鍵尾式」の再検討とその併行関係」（『考古学雑誌』64巻4号、1979年）。
3）前島己基・松本岩雄「島根県神原神社古墳出土の土器」（『考古学雑誌』62巻3号、1976年）。
4）平生町教育委員会『吹越遺跡第2次調査概要』（1972年）。
5）山本一郎「防長の弥生式土器」『山口県の弥生式土器－集成と編年－』（『周陽考古学研究所報』2、1979年）。
6）北九州市埋蔵文化財調査会「高島遺跡」（『古文化談叢』第3集、九州古文化研究会、1976年）。
7）山口県教育委員会『朝田墳墓群Ⅱ・鴻ノ峰Ⅰ号墳』（1977年）。
8）山口県教育委員会『しらいし古墳群』（1980年）。
9）弘津史文「周防國赤妻古墳並茶臼山古墳（其二）」（『考古学雑誌』18－5、1928年）。
山口市教育委員会『茶臼山古墳・大判石棺調査報告書』（1979年）。
10）三宅宗悦「周防國吉敷郡山口町糸米山口高等學校校内土器包含地發掘調査報告」（『山高郷土史研究會考古學研究報告書』、1927年）。

第９章　昭和58年度山口大学構内の立会調査

第１節　吉田構内の立会調査

１　理学部大学院校舎新営および付随工事に伴う立会調査

調査地区　吉田地区理学部構内Ｍ・Ｎ・Ｏ－20区，Ｏ－21区（Fig.91　PL.1－50）

調査期間　昭和58年６月17・18日　10月18日　昭和59年３月26日～３月28日

調査方法　工事施工時における立会調査

調査面積　Ａ区210㎡　Ｂ区32㎡　Ｃ区23㎡　Ｄ区36㎡　Ｅ区20㎡　Ｆ区85㎡　Ｇ区３㎡

調査協力　人文学部考古学研究室

調査結果　Ｄ区以南、以北の現地表面は階段状に南部が一段高所に位置し、その比高差は90～100㎝である。昭和53年度に実施された人文学部校舎新営に伴う試掘調査では旧耕作土直下に黄褐色粘土の地山が確認されたが、今回の調査ではＡ・Ｄ両区の旧耕作土下に４層の無遺物層を介在して現地表下120㎝で地山に達する。また、Ｂ・Ｃ・Ｅ区では各区とも16～20㎝の腐蝕土、構内造成時の置土を含む表土直下が地山で、Ａ～Ｅ区とも検出地山面の標高は20.80～20.90ｍである。Ｆ区西端では旧耕作土下標高19.60～19.80ｍで地山が検出され、$y=620$ラインでの地山の削平がみられる。

各区とも顕著な遺構・遺物は認められなかった。

（河　村）

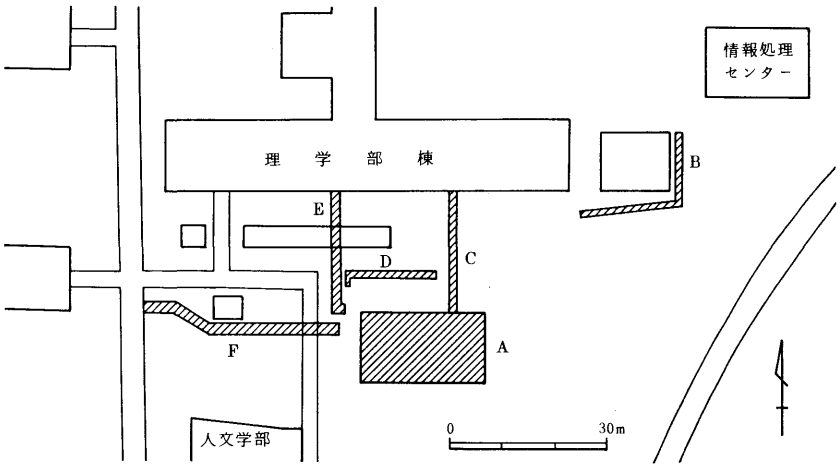


Fig.91　調査区位置図

2　正門・南門二輪車置場および正門花壇新営に伴う立会調査

調査地区　吉田地区本部構内Ｉ－12・13区，Ｊ－13区，Ｈ－23区（Fig.92，93　PL.1－51）

調査期間　昭和58年12月６日～12月14日

調査方法　工事施工時における立会調査

調査面積　Ａ区140㎡　Ｂ区23㎡　Ｃ区８㎡　Ｄ区12㎡

調査結果　花壇新営予定地Ａ区をはじめとしてＢ・Ｃ区は支柱基礎部分、すなわちＢ区30地点、Ｃ区20地点、Ｄ区16地点について遺構・遺物の有無、土層の堆積状況を観察した。

現地表面は各区ともほぼ平坦で起伏がない。Ａ～Ｃ区では土層の堆積厚は若干異なるが、工事規模範囲内では上部より厚さ10～17cmのアスファルトおよび砕石下部に厚さ30～43cmの構内造成時の置土が続く。Ａ区は比高差39cmとＢ区より低く、少なくともＡ区現地表面下50cmまでは地山面は検出されない。Ｄ区では厚さ12～17cmの腐蝕土下部に厚さ13～18cmの構内造成時の置土が堆積し、Ｃ・Ｄ両区付近では現地表面下60cmまでは人為的な二次堆積層で遺物包含層および地山は認められない。

なお、Ｄ区の東方、野球場南東部では試掘調査時に弥生時代前期および中期の竪穴式住居跡が検出されたといわれるが、規模、分布範囲等不明な点が多く今後の詳細な調査が必要であろう。

（河　村）

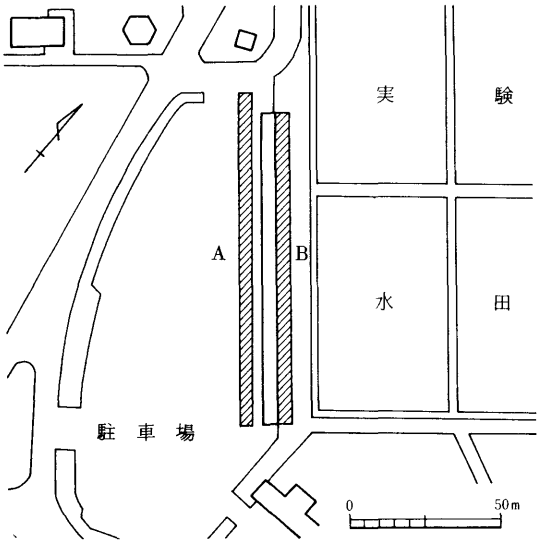


Fig.92　調査区位置図（１）

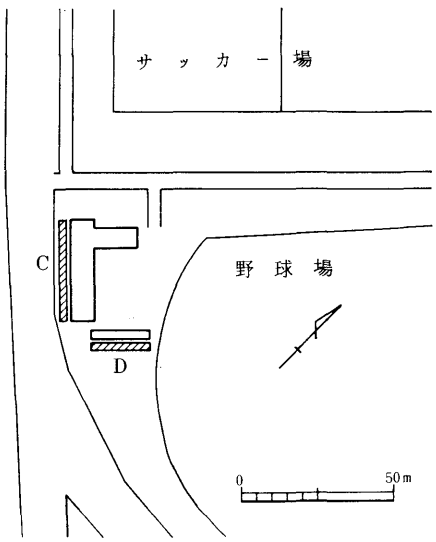


Fig.93　調査区位置図（２）

3　学生部アーチェリー場的台・電柱設置に伴う立会調査

調査地区　吉田地区構内　M－8区（Fig.94　PL.1－52）

調査期間　昭和59年2月1日

調査方法　工事施工時における立会調査

調査面積　33㎡

調査結果　当該地域は大学キャンパスの北部にあたり、姫山から南へ派生する低丘陵の先端部付近に位置する。アーチェリー場的台設置工事においては東西および南北に直交するトレンチを設定して遺構・遺物の有無、土層の堆積状態を観察した。その結果、腐蝕土および構内造成時の置土を含む厚さ30cmの表土直下が岩盤となっており、上述した丘陵は工事予定地付近で東西に切断されていることが確認された。このことは現アーチェリー場東半部も同様の状況を示すものと理解された。また、電柱設置地点は丘陵の西縁辺部にあたり、腐蝕土以下は東半部における丘陵削平土を客土した置土に続き現地表下約2mで岩盤に達する。従って、当該地域は過去に遺構・遺物が埋存していたとしても削平により消失した可能性が強い。

（河　村）

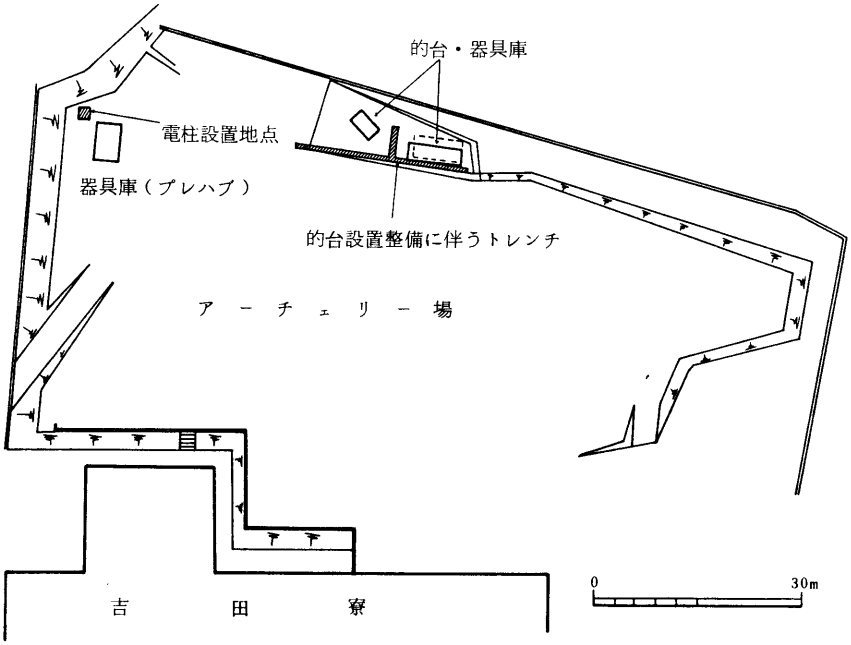


Fig.94　調査区位置図

4　学生部厩舎散水栓工事他に伴う調査

調査地区　吉田構内　L－9区（Fig.95　PL.1－53）

工事事項　厩舎散水栓取設工事・厩舎便所水洗化工事

調査期間　昭和59年2月1日

調査方法　工事施工直前における試掘立会調査

調査面積　約1.6㎡　（散水栓に伴う調査約1㎡・便所水洗化に伴う調査約0.6㎡）

調査協力　学生部

調査結果　両工事取設範囲内の二カ所に試掘壙を設定し、工事基盤である地表面下30cmまで掘り下げた結果、その間の土層は腐蝕土および近年の埋め土であり、自然堆積層・遺物包含層等は全く検出されなかった。そのため今回の工事では直接埋蔵文化財に対して支障はなかった。

（森　田）

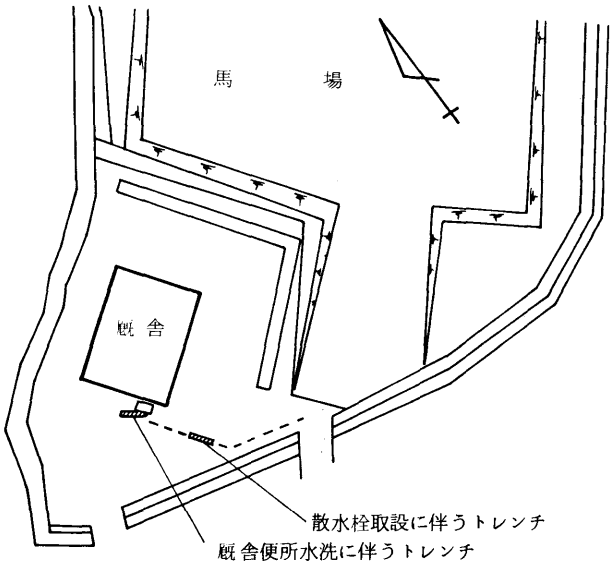


Fig.95　調査区位置図

5　学生部野球場散水栓取設工事に伴う調査

調査地区　吉田構内　JK－21区（Fig.96　PL.1－54）

工事事項　野球場散水栓取設工事

調査期間　昭和59年２月１日

調査方法　工事施工直前における試掘立会調査

調査面積　１㎡

調査協力　学生部

調査経緯・結果　工事そのものは二カ所における（Fig.96 A・B地点）既設散水栓の一部改善であるが、その予定する既設部分の詳細な位置が不明確のため、場合によっては工事掘削が既往掘削部分以下におよぶ可能性も予想されること、また、このグランド面での埋蔵文化財に関するデータが無く、支障の度合が全く判断できないことから小規模の工事ながら調査を実施した。掘削の結果、A地点では地表面下130cm、B地点は105cm下で既設配管上面が確認され、その掘削は両地点共に既往掘削部分の範囲内に留まり、直接埋蔵文化財に影響は無かった。しかし、A地点での既往掘削壙埋め土の中に遺物包含層（黒褐色粘土）がブロックとして混入されており、少量ながら弥生土器を認めた。またB地点では、既往掘削壁面より未掘部分の土層状況が観察できた。それによると地表面～44cm下－整地土・置土。44～60cm下－灰色土。60～70cm下－黒褐色粘質土（遺物包含層と思われる）。70cm下－黄褐色粘土（地山）であることが確認され、今後この周辺における調査の判断資料を得ることができた。

（森　田）

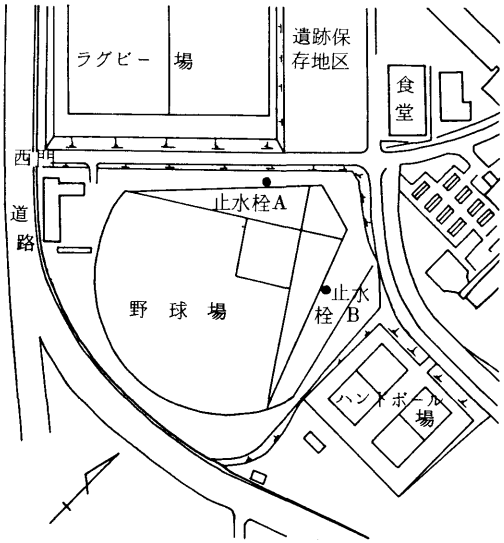


Fig.96　調査区位置図

6　学生部テニスコートフェンス改修に伴う立会調査

調査地区　吉田地区構内　C－17・18区，D－16・17区，E－16区（Fig.97，98 PL.1－55）

調査期間　昭和59年3月12日～3月28日

調査方法　工事施工時における立会調査

調査面積　12㎡

調査協力　人文学部考古学研究室

調査結果　テニスコートフェンス新規支柱基礎部分8カ所について、工事規模に対応して遺構・遺物の有無、土層の堆積状況を観察した。従って、地山面は検出していない。

なお、東西方向の新規支柱基礎部分は既設埋設物、側溝等による撹乱が認められたため調査対象箇所より除外した。

その結果、A・C・F各地点の一部は撹乱を受けていたものの弥生時代から古墳時代の少なくとも4枚の遺物包含層が検出された。しかし、

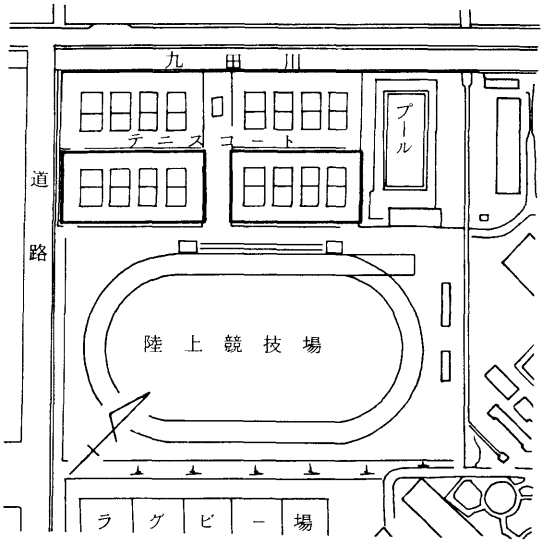


Fig.97　調査区位置図

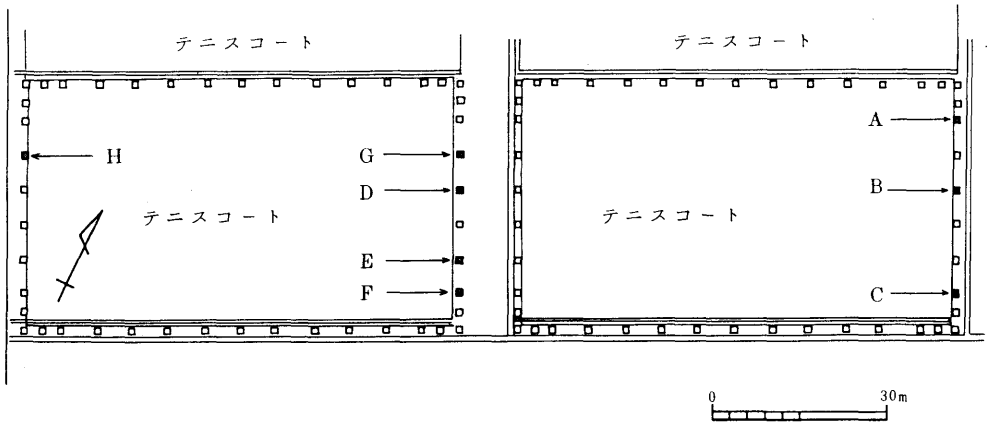


Fig.98　トレンチ位置図

各地点とも調査面積が狭小であるため遺構の埋土である可能性も残存する。各土層は概ね整合的に堆積するが、第5層茶褐色砂質土はB・C・F三地点で認められ、周辺の土地利用状況を勘案すると南から北への地山面の下降に対応した堆積状態を示すものと思われる。また、テニスコート北端部には九田川が北東から南西に流路をもつが、今回の調査地域内ではその氾濫原はみあたらず、良好な遺物包含層ないしは遺構が南部にかけて分布しているものと推察される。さらに、G地点では黄橙色粘質土を掘り込んで柱穴が検出されたが時期は不明である。

なお、本工事の掘削規模は第2層旧耕土ないしは第3層旧床土までであり、それ以下についての現状変更はない。

（河　村）

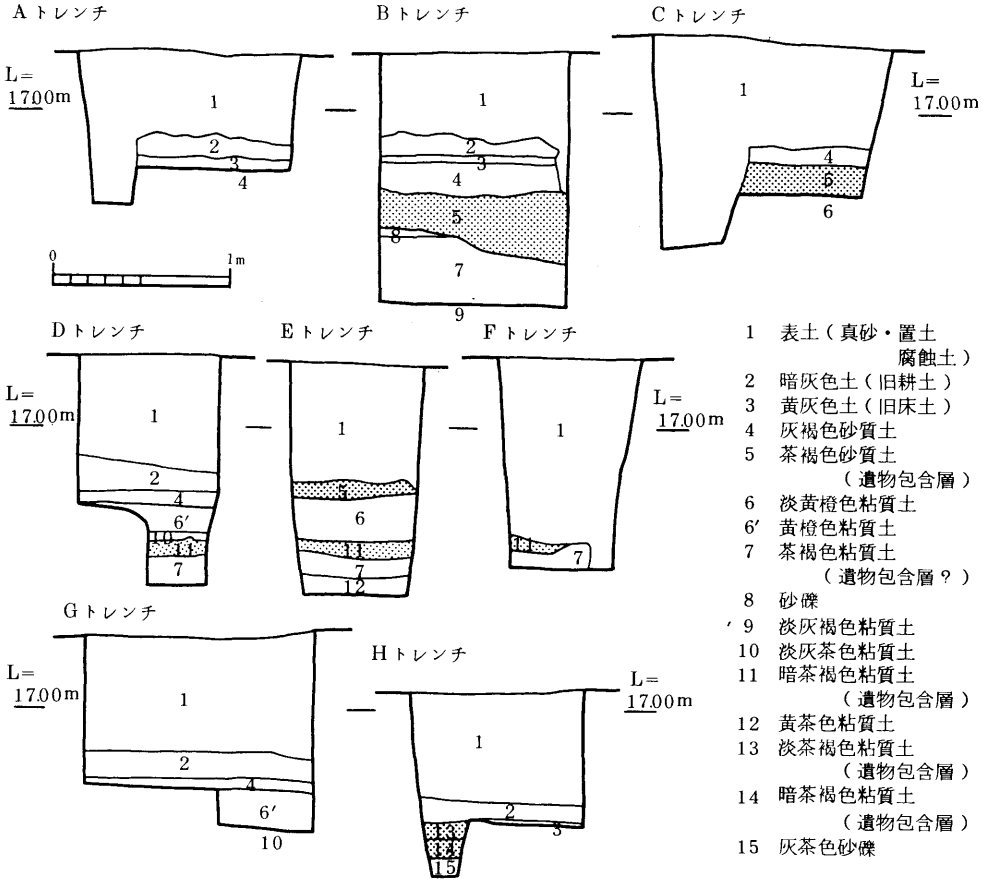


Fig.99　土層断面図

7　教養部環境整備に伴う立会調査

調査地区　教養部構内　Ⅰ－16・17区，Ｊ－17区，Ｋ・Ｌ－17・18区（Fig.100　PL.1－56）

Tab.20

事　　項	調査期間	調査面積（㎡）	調査方法
樹木移植	昭和59年３月16日	30	工事施工時における立会調査
屋外掲示板新設および改修	昭和59年３月22日	3	
自転車置場アスファルト舗装	昭和59年３月22日	35	
排水溝新設	昭和59年３月22日	13	

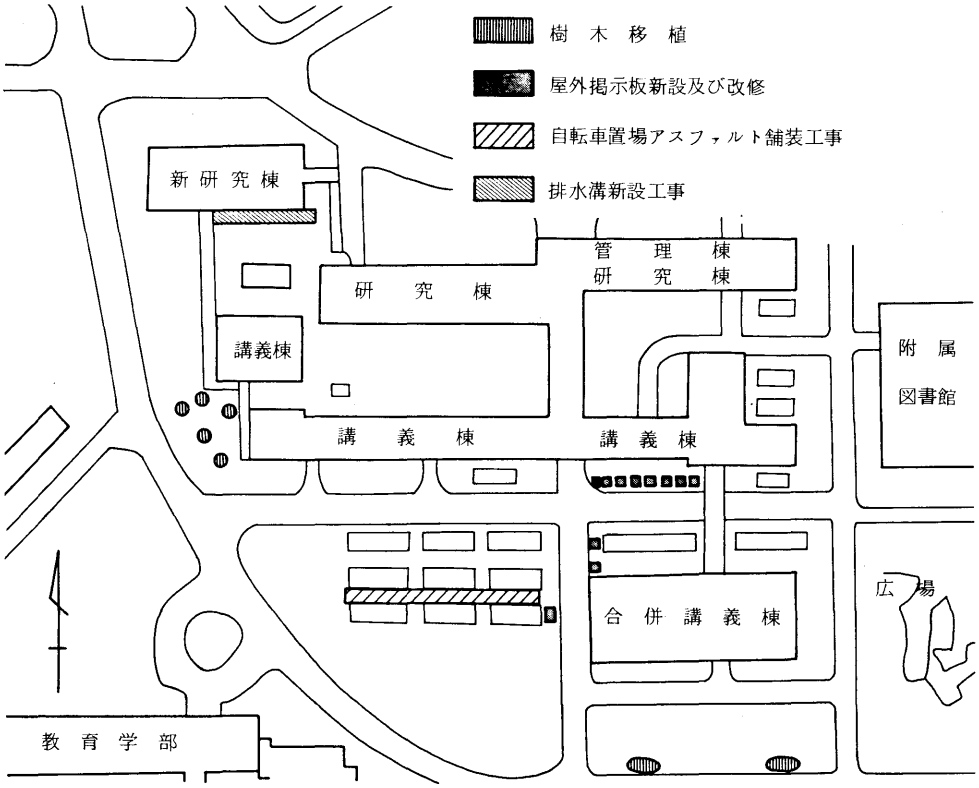


Fig.100　調査区位置図

調査結果　樹木移植においては７地点について立会調査を実施したが、工事規模との関係上、最北端のＡ地点に限定して土層の堆積状況、遺構・遺物の有無を観察した。その結果、現地表下約100cmまでは腐蝕土および構内造成時の置土を含む表土で、それ以下は無遺物層である厚さそれぞれ12cm、10cmの黄灰色粘質土、暗灰色土を介在して黄灰褐色土、灰茶褐色土、黄茶褐色土と続く。厚さ20cmの堆積をもつ黄灰色粘質土は弥生土器を包含し、灰茶褐色土および黄茶褐色土と共に遺物包含層ないしは遺構覆土と考えられる。なお、調査範囲内では地山は確認していない。

また、屋外掲示板新設および改修においては工事による掘削を伴う支柱基礎部分11地点について調査を実施した。講義棟に平行して東西方向に設定された８地点（東から第１，第２……第８地点と呼称する。）では第１～第４地点までは厚さ約45cmの腐蝕土および構内造成時の置土を含む表土直下が黄褐色粘質土の地山となっている。また、第５～第８地点では厚さ60～65cmの表土下部に茶褐色粘質土の遺物包含層が確認された。さらに、合併講義棟北西隅では表土直下、すなわち現地表下45cmで青灰色粘質土の地山が検出され、少なくともこの付近と第４ないしは第５地点を結ぶラインから地山は西方へ下降する状況が観察された。

キャンパス内は構内地区割基準ライン（PL.１）17および18によって現地表面の状況をみると、造成によって東西方向に上位（東部）から下位（西部）にかけて少なくとも５段の平坦面を形成しているが、今回の調査地域は概ね上位から３段目の平坦面に包括されるものである。したがって、教養部構内、特に講義棟以南の地域においては隣接する広場との比高差が1.1ｍあることなどから、上述ライン以東の地山はかなり削平を受けていることが予想される。一方、以西の地域は地山の下降に対応してＡ地点付近まで遺物包含層が広がり、遺構の埋存を示唆する。

自転車置場アスファルト舗装および排水溝新設地域においては、工事に伴う掘削規模、すなわち、前者は現地表下40cm、後者は50cm下部までは腐蝕土および構内造成時の置土を含む表土で、顕著な遺構・遺物は確認されなかった。

（河　村）

第2節　小串構内の立会調査

1　医学部図書館新築に伴う立会調査

調査地区　医学部構内

調査期間　昭和58年11月1日

調査方法　立会（試掘）調査

調査結果　工事日程や調査自体等の諸条件からトレンチ等による本格的な予察調査は困難であったため、機械掘削による地層の観察に重点を置き、建設予定地内の4地点（Fig. 102）に試掘壙を設定し、遺物包含層および遺構の有無を調べた。

その結果、4地点共に現地表より約0.8～1mまでは、置土（整地土）と旧建物以前に設置していたと察する構造物に関する撹乱層（ガレキ，煉瓦等）が存在する。その直下には部分的に旧耕作土の可能性のある淡青灰白色粘質土が認められた。以下、第1～3地点では工事に伴うボーリング結果（Tab.21）に示されている第2層の火山灰質に相当する土層が2.5～2.8mまで厚く堆積する。さらに下で砂層の堆積が認められたが、湧水が激しく十分な観察はできなかった。第4地点の層序は置土以下は他の3カ所とは大きく異なるものであり、粘土・粗砂が堆積する。

今回の調査では全く遺物・遺構は確認できず、土層の観察では当建物予定地に限っては埋蔵文化財が埋蔵する蓋然性は小さいと考える。

（森　田）

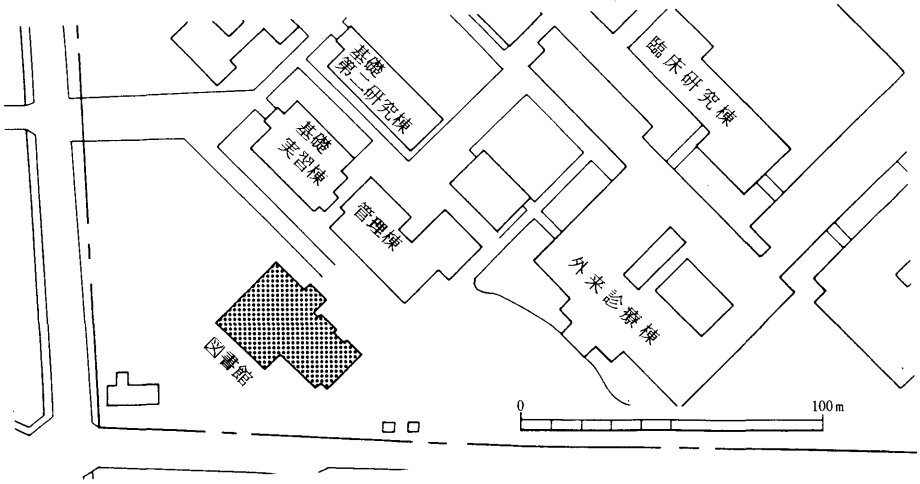


Fig.101　調査区位置図

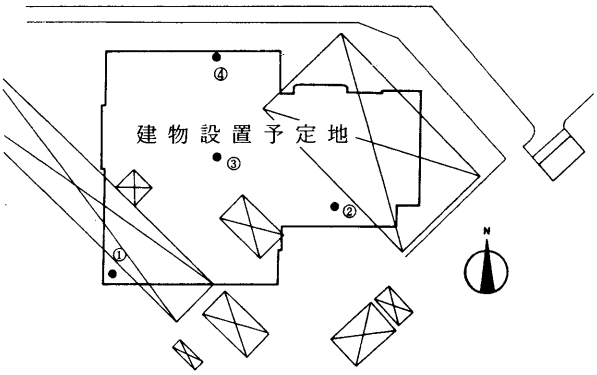
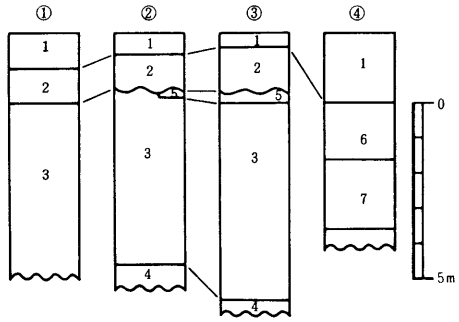


Fig.102　試掘壙設定位置図



①－第1地点
②－第2地点
③－第3地点
④－第4地点

1. 整地土
2. 攪乱土
3. 淡灰白色土
4. 砂　層
5. 淡青灰白色粘質土
6. 淡青灰色粘土
7. 青灰色粗砂

Fig.103　土層断面図

Tab.21　ボーリング調査結果表

標尺(m)	標高(m)	深さ(m)	層厚(m)	現場観察記録 土質名	色調	記事
1	7.60	1.00	1.00	埋立土	暗灰色	砂粘土、礫を含む石炭灰
2	5.96	2.70	1.70	砂	乳灰色	1.00～2.00の間粘性あり 火山灰質である
3	5.31	3.35	0.65	砂質粘土	淡青灰色	全体的に粘性大である
	5.11	3.55	0.20	礫混り砂	淡黄灰色	全体的に中粒子の砂で所々に∅2～15%の礫を含む
	4.80	3.85	0.30	粘土	黄褐灰色	
4						所々に固結した部分あり粘性大
	3.96	4.70	0.85	シルト	暗青灰色	腐植物混入 所々に粘性あり
5	3.76	4.90	0.20	粘土	暗茶灰色	粘性大
	3.46	5.20	0.30	砂質粘土	暗灰色	微粒砂を含む
	3.31	5.35	0.15	粘土混り砂	暗灰色	一部小礫を含む
6						∅2～50m/mの円、角礫、粗砂を含む
7						
8						
9						
	11.4	9.80	4.45	砂礫	暗青灰色	
10	12.4	9.90	0.10	炭	暗茶灰色	粘性大で硬い
	17.4	10.40	0.50	石炭	黒褐灰色	
11	23.4	11.00	0.60	頁岩	黒褐灰色	粘性があり硬質
	27.4	11.40	0.40	砂岩	茶灰色	中粒子の砂岩
	30.4	11.70	0.30	頁岩	茶灰色	非常に硬質
12	33.4	12.00	0.30	砂岩	暗青灰色	中粒子の砂岩

2　医学部体育館新営付随工事に伴う立会調査

調査地区　医学部構内（Fig.104）

調査期間　昭和59年３月31日

調査方法　工事施工時における立会調査

調査面積　１㎡

調査協力　人文学部考古学研究室

調査結果　第７章で述べた体育館新営に伴う試掘調査地域の東方に位置する４地点について土層の堆積状況並びに遺構・遺物の有無を観察した。

Ａ・Ｂ両地点では工事の性格上掘削が比較的小規模であったためＡ地点において上位から腐蝕土および構内造成時の置土を含む表土（第１層、以下個々の層順番号は第７章における土層の層順番号に準じる）、旧耕土（第２層、第３層）、床土（第４層）、堆積灰色粘土（第５層）および青灰色粘土（第６層）上面を確認したにとどまった。

しかし、Ｃ・Ｄ両地点において第６層下部、現地表下２ｍに植物遺体を含む青灰色粗砂（第７層）が堆積しており、体育館新営予定地内で把握された土層の堆積層順はその堆積厚には若干の差異はあるものの、少なくとも新営予定地以東のＤ地点付近までは基本的に同一層順を示していることが観察された。

今回の調査では調査範囲の狭小さと相俟って顕著な遺構・遺物は確認できなかったが、真締川等に起因すると思われる各堆積層、とりわけ遺物を包含する第５・６層の分布範囲、堆積状況について遺物の流入経路を含めて今後の詳細な調査が必要と思われる。

（河　村）

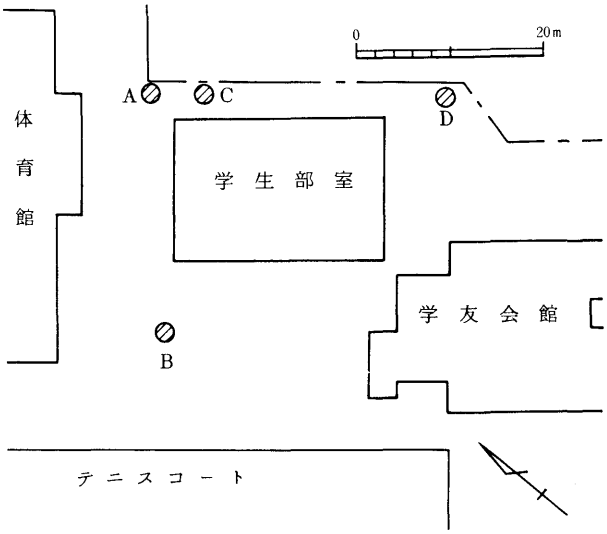


Fig.104　調査区位置図

鳥形木製品について

森田孝一

1. 白石例に関して

山口市白石所在の山口大学教育学部附属山口小学校構内白石遺跡の調査において鳥形木製品が出土した。出土状況・形状等については本文第8章を参照されたい。本例は後述する池上例や纒向例などに比べて写実性に劣り、鳥形と認定するにあたっては若干躊躇したが、検出状況により杆（竿）を共伴ししかも組み合わさっている可能性が高く、民族例では杆に付け翳すものは鳥以外一般の動物では認められない点から、また日本各地で鳥形と称しているものの中には本例よりもより簡略化されたものもあること、さらに鳥形と杆との装着方法についても池上例をはじめ民族例に多くの具体例があるように鳥形の腹部に杆をつきさすものとは異なり、本例は鳥形の尾部と杆を組み合わせたものであるが、この点では北シベリア、イェニセイ河の東域にあるドルガン地方に伝わるシャーマンの鳥杆の中に類似例がみられる[1)]ことなどを傍証とした。

本例の検出状況をみるに、現民族例の鳥杆の場合、鳥形は杆頭の先端ないしはその近くにつけられているが、本例は鳥形の背部が加工木の枘穴からの両端距離における長身の方に向いていたが、これは流失（廃棄）し埋没する際に自然的な要因で反転したのではないかと察している。また、杆との組み合わせ方法については、鳥形の尾部が挾まっていた部分は凹状になっており、装着にあたっては紐状のもので縛り固定したとも考えられる（腹部後方の突起は杆との装着を意図して作られたとも推測される）。しかし、腐蝕のため確証を得ないが、本来は穿孔穴の可能性もあり、尾部を差し込んでいたとも推測される（尾部が極度に小さいのはそのためかとも考える）。さらにこの場合、尾部の中央にある穿孔に小棒状のものを挿入しストッパーとして固定していたとも一つの憶測ができる。

本例の性格としては、溝状遺構（SD１）の機能・性格が現段階明確に把握できないため断定し得ないが、農具や生活用具と共に検出されたこと、若干時期は異なるが近傍で住居跡が見つかっていることも勘案すれば、葬送儀礼よりも農耕儀礼、集落祭祀に係わった蓋然性が高いと思われる。時期は共伴土器から古墳時代初頭の可能性が高く、より遡っても弥生時代終末である。

2. 既出例について

国内において弥生時代から古墳時代における鳥形木製品は、これまで西日本各地で出土しており、報告者が鳥形木製品と称しているものは今回の例を含めてTab.22で示す通り現在15遺跡31例におよぶ。これら鳥形の形状はバラエティに富み、写実的なものからかなり簡略化しているものまであり、鳥形と認めるには躊躇するものも含まれている。また作りも丸彫、板状、棒状とさまざまで、さらに被装着物との組み合わせが考えられるもの、そうでないものなどいくつかのタイプに分けられよう。

池上遺跡（大阪府和泉市）[2)]

6点出土しており、その内3（Fig.105，4）を除いた5点はほぼ完形品で、いずれも溝内出土である。報告書では作りの上から、丸彫りのものと板を切り抜いた扁平なものに分類し、1～3（Fig.105，2～4）を第Ⅰ型式、4～6（Fig.105，5～7）を第Ⅱ型式としている。

1－池上例のうち最も大きいもので、かなり写実的なつくりである。腹部には杆を挿入すると考えられる孔が穿たれている他、背部に別木作りの翼を組み合わせるためと推察する切り欠きがある。また胴－側面に斜め方向の溝、胴部の尾部寄りに上下貫通する方孔も有する。さらに尾の先端には鋸歯状の切り込みを施した痕跡が残る。(Fig.105，2)

2－全体に細身で、腹部には1と同様な孔を穿つ。頭部、胴部の一部、尾に朱彩が認められる。(Fig.105，3)

3－頭部から胴部の破片で、腹部に径2cmほどの不整円形を呈する浅い凹みを穿つ。(Fig.105，4)

4－板状のもので、比較的成形も丁寧であり、周縁の稜を面取りしており、とくに頭部から頸部にかけては丸味をもたせ、立体感を出している。背部に切り欠きが有する。(Fig.105，5)

5－頭部先端には嘴が明瞭に表現されている。尾部下面に細長い二孔を穿つ。また頭部一面に浅い削り込みがあり、目を表現した可能性もある。(Fig.105，6)

6－屈曲をもつ樹枝を用いたもので、他の池上例に比べると粗雑なつくりである。腹部下面に極めて浅い削り込みを認める。(Fig.105，7)

瓜生堂遺跡（大阪府東大阪市）[3)]

1－頭部から胴部にかけて現存するもので、頭部は極めて立体感をもって作られており、嘴、目が表現されている。(Fig.105，9)

2－板材の両端に三角形状の頭部と先細りの尾部を削り出すという簡粗なつくりである。(Fig.105，10)

3－尾部を欠損する。頭部は丸く、頸部は比較的細長い。(Fig.105，8)

山賀遺跡（大阪府東大阪市[4]）

1－頭部は直線的にのびる頸部に連続し、先端下には斜下方に短く屈曲する口先を表現した突起がつく。背部、腹部は丸みをもつ。尾部先端は欠損する。頭部より尾部？まで小孔が貫通し、喉部では表面に現われ溝状を呈する。(Fig.105，11)

2－直線的細長い形状で、頭部と胴部さらに尾部を区別するためと察する全周の削り込みが二カ所に施されている。尾部は先細りとなる。(Fig.105，12)

巨摩遺跡（大阪府東大阪市[5]）

5点ある。頭部を作り出した棒状のもので、尾部は斜めに短く切断したもの、長く削ったもの、大きく屈曲するものがある。木取りは丸棒のままと割截材の両者がある。

これらはいずれも鳥形としては他例に比べてかなり簡略化されて表現しているもので、他の遺跡では有頭棒状木製品として紹介している類似品もある。とくに半損品の場合、鳥形と判断するのは非常に困難と考える。(Fig.105，13～17)

亀井北遺跡（大阪府八尾市[6]）

1点出土。丸彫製でかなり写実的な秀品である。頭部には冠羽か鶏冠を表現した突起があり、胴下部には方形の枘穴を有する。

纒向遺跡（奈良県桜井市[7]）

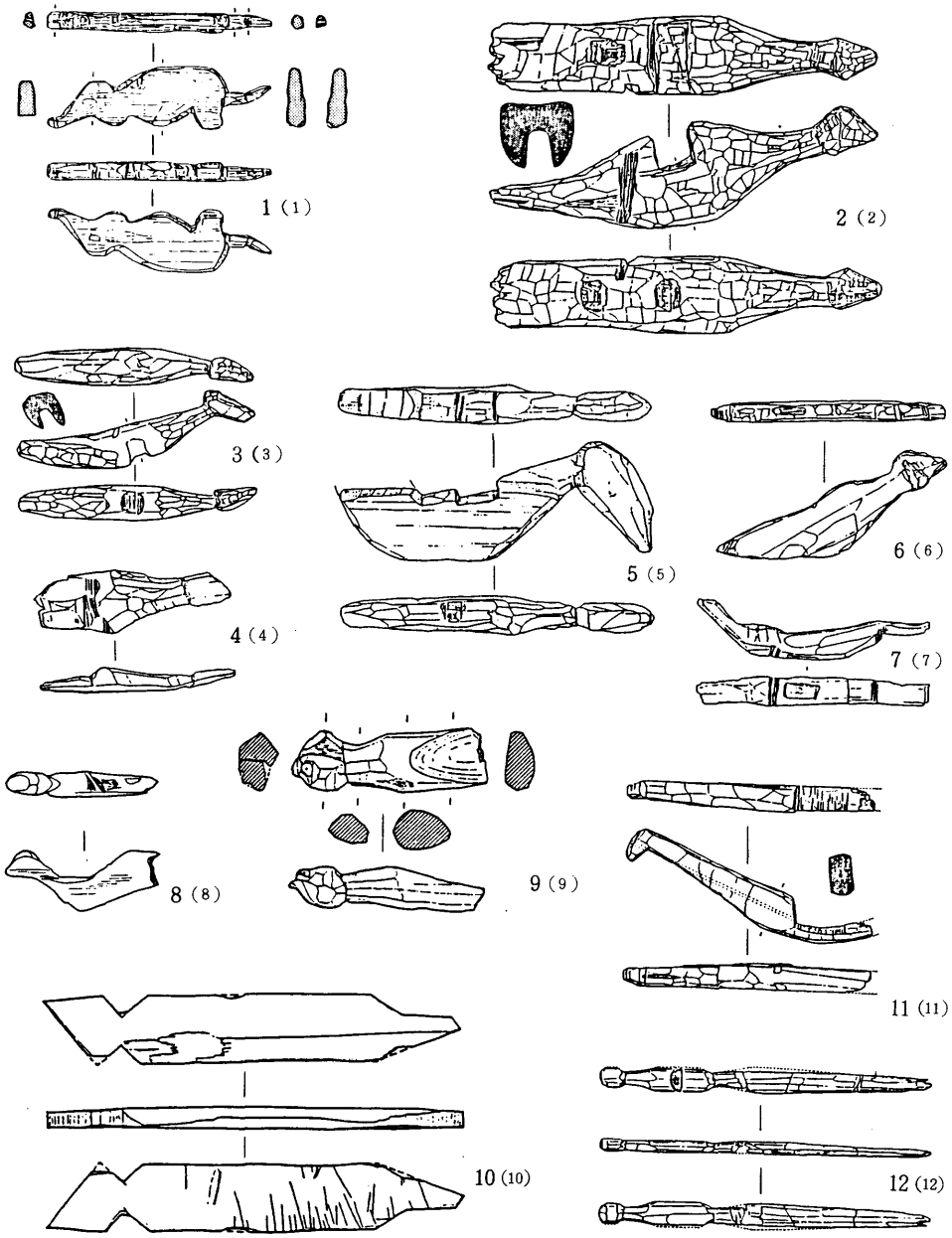
1－板状のもので、鶏を表現する。安定感のある胴部から細い頸を作りだし、頭部に至ってはその上部に鶏冠を削り出している。その鶏冠の中央に半円形の孔を施しており、報告者はここに紐等を通して器体を吊したのではないかと考えている。胴部、鶏冠部分に朱彩がある。(Fig.105，19)

2－欠損部分が多いが、形体的に1と酷似するもので、大きさもほぼ同じと思われる。胴部に朱彩有り。(Fig.105，18)

3－一木作りで、胴部上面は大きく刳込みがあり、容器にもなる。また胴部下面は平坦でこれ自体安定して置くことができる。側面からみると体部には木理が羽状に見られ、水上に浮いた水鳥を髣髴させるとしている。(Fig.105，20)

石見遺跡（奈良県磯城郡三宅町[8]）

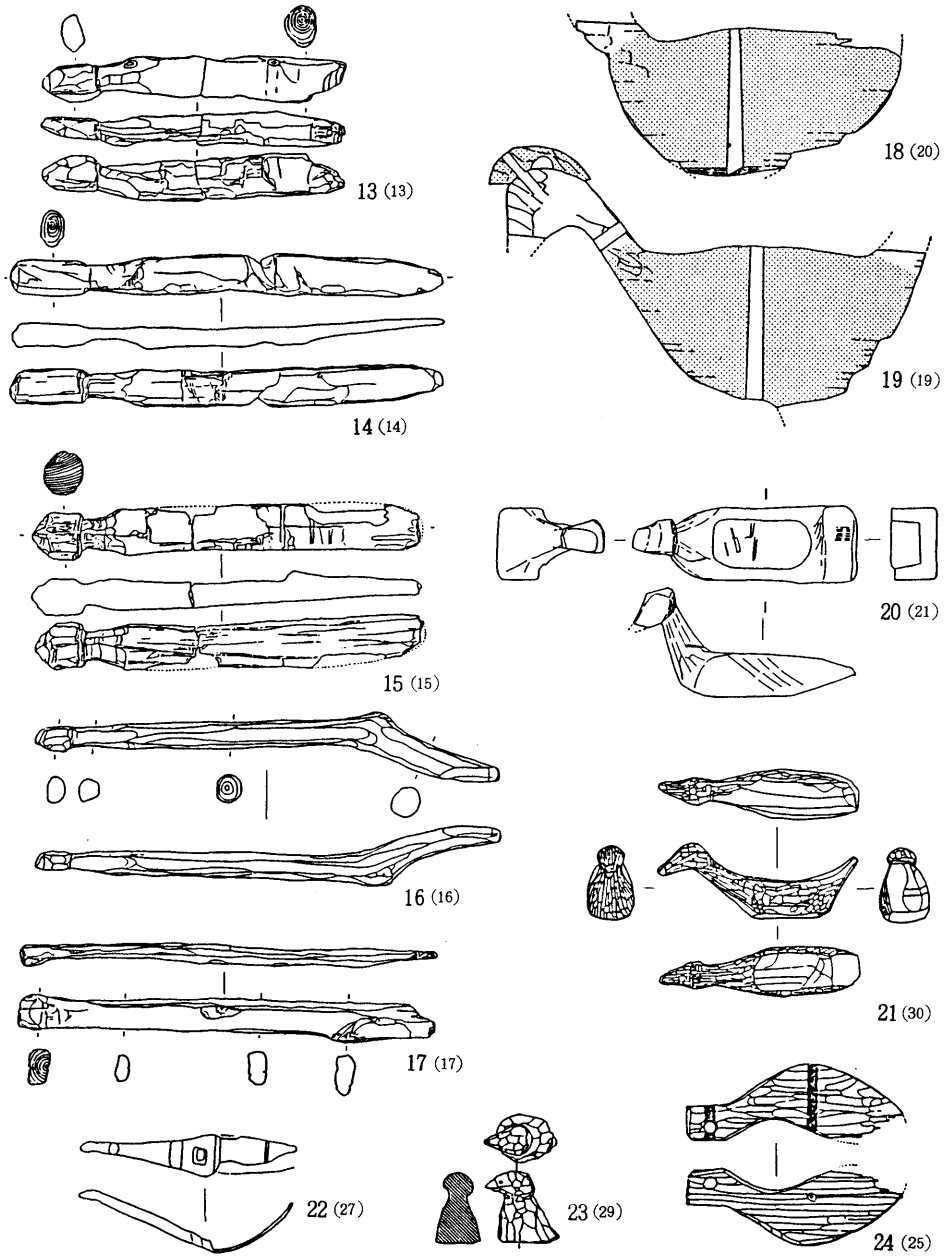
2点出土。両者とも頭部・胴部・尾部からなり、胴部に方形の貫通孔を有する。



1　白石遺跡　　2～7　池上遺跡　　8～10　瓜生堂遺跡

11・12　山賀遺跡

Fig.105　各遺跡出土鳥形木製品



13～17　巨摩遺跡　　18～20　纏向遺跡　　21　詫田西分貝塚

22　西川津遺跡　　23　宮ケ久保遺跡　　24　長越遺跡

※（　）内の番号はTab.22のNo.

Tab.22　鳥形木製品（弥生～古墳）出土地名表

No.	遺跡名	所在地	法量（cm）			樹種	出土地点	時期	備考
			全長	胴幅	厚				
1	白石	山口	19.25	5.4	1.7		溝状遺構	弥生終末～古墳前期初頭	
2	池上	大阪	33.7	7.7	6.6	ヒノキ	溝	弥生中期(第Ⅱ様式)	報告書 W-001
3	池上	大阪	20.5	3.4	3.1		溝	弥生中期（第Ⅲ～Ⅳ様式）	報告書 W-002
4	池上	大阪	(17.0)	(2.2)	5.4		溝	弥生中期（第Ⅲ～Ⅳ様式）	報告書 W-003
5	池上	大阪	(26.5)	(6.8)	3.3	シイノキ	溝	弥生中期(第Ⅱ様式)	報告書 W-004
6	池上	大阪	21.2	5.2	1.6	ヒノキ	溝	弥生中期(第Ⅱ様式)	報告書 W-005
7	池上	大阪	(21.2)	2.6	2.5		溝	弥生中期(第Ⅱ様式)	報告書 W-006
8	瓜生堂	大阪	13.5		約2		包含層	弥生中期	報告書 W-11
9	瓜生堂	大阪	★(約17)	★約5			包含層	弥生後期か	報告書 W-70
10	瓜生堂	大阪	36.0	5.9	1.9	ヒノキ	包含層	弥生後期後半	報告書 W-73
11	山賀	大阪	22.7	3.6	2.0	ヤマフジ？	溝	弥生前期中葉	
12	山賀	大阪	★約29				溝	弥生前期中葉	
13	巨摩	大阪	★約30			ユズリハ	沼状遺構	弥生中期末～後期前半	報告書 第81図-1
14	巨摩	大阪	★約38			シイノキ	沼状遺構	弥生中期末～後期前半	第81図-2
15	巨摩	大阪	★約35			シイノキ	沼状遺構	弥生中期末～後期前半	第81図-3
16	巨摩	大阪	★約36			サカキ	沼状遺構	弥生中期末～後期前半	第82図-1（有頭状）
17	巨摩	大阪	★約40			アカメガシワ	沼状遺構	弥生中期末～後期前半	第82図-2（有頭状）
18	亀井北	大阪	25.6	7.8		コウヤマキ	自然流路	弥生中期	
19	纒向	奈良	39.0	13.9	0.8－1.5	ヒノキ	古墳の周濠	古墳前期	
20	纒向	奈良	(28.0)	12.7	0.8－1.4	ヒノキ	古墳の周濠	古墳前期	
21	纒向	奈良	19.4	6.6		ヒノキ	土壙	古墳前期	(鳥舟形容器)
22	石見	奈良					溝	古墳後期	
23	石見	奈良					溝	古墳後期	
24	深草	京都						弥生中期(第Ⅱ様式)	
25	長越	兵庫	(18.3)	6.3	0.8	ヒノキ	大溝	古墳前期	
26	伊場	静岡	23.5				大溝	古墳後期　6世紀中葉～7世紀前半	
27	西川津	島根	22.5	7.3	2.0				縄文～古墳包含層出土
28	西川津	島根	(17)	5.5	1.3			弥生中期後半	
29	宮ケ久保	山口	高さ6.0			広葉樹	溝	弥生中期中葉	
30	詫田西分貝塚	佐賀	17.3	4.2	胴部高 3.2		井戸	弥生中期前葉～中葉	
31	狐塚法勝寺	滋賀	19.5	5.5	3.4		古墳の周濠	6世紀初め	

（注）法量★は報告書記載実測図より測定　（ ）内の数値は現存値

深草遺跡（京都市伏見区）[9]

1点出土。

長越遺跡（兵庫県姫路市）[10]

板付のもので、頭部は方形を呈しており、直径1cmの孔を穿ち目を表現し、また先端下部に浅い切り込み、細く面取りをして嘴を表わしている。腹部に被装着物を組み合わせたと推察される穿孔がある。(Fig.105, 24)

伊場遺跡（静岡県浜松市）[11]

板状のもので、報告者は嘴と胴上部を欠損するため、鳥形と断定しがたいと前置しながらも頭部の形状が水鳥を表現しているとしている。

西川津遺跡（島根県西川津町）[12]

2点出土。1－頭部は亀頭状に削り出し、それより頸部から胴部にかけて二等辺三角形状を呈する。胴部には長方形の孔が穿たれている。形態的に山賀1に近似する。(Fig.105, 22)　2－板状のものである。

宮ケ久保遺跡（山口県阿東町）[13]

小型のもので、頭部から胴部を造作しており、下部は平らである。嘴は尖り、頭部両側に目が表現されている。(Fig.105, 23)

詫田西分貝塚（佐賀県千代田町）[14]

立体感をもつもので、かなり写実的である。頭部から胴部側面にかけ丁寧な細かい整形がなされている。腹部下面は平坦で安定して置ける。(Fig.105, 21)

狐塚法勝寺遺跡（滋賀県近江町）[15]

1点出土。

3. 鳥杆習俗（霊鳥信仰）について

弥生時代から古墳時代にかけての鳥形木製品の出土例を上げたが、これらの中には形態から鳥杆としてではなく容器や置物として用いられたと推定しうるものもある。なお、鳥形の木製品は奈良時代から平安時代にかけての遺跡からも出土する。しかし、金子裕之氏[16]によるとこの時期の多くのものは馬形、人形、陽物などと同様に木製模造品の範疇に属するもので、これらの模造品の成立背景には、律令的祭祀の具体的内容を記録した『延喜式』の祭料記載とを比較した際にいくつかの共通項目が見い出される点から、国家祭祀政策すなわち律令的祭祀との関係を察しており、弥生から古墳時代にかけての鳥形木製品とは性

格上大きく異なるものである。

現在の鳥杆習俗は、朝鮮半島、北アジア、東南アジアの広い範囲に見うけられ、鳥杆は村や寺院の入口、墓小屋、水田の中、時には独立した場所に立てられている。中でもシベリアのエベンキ人のシャーマンテント[17]やタイ北部のアカ族の門[18]などはよく知られ、またそれらの霊魂観も様々である。日本でも対馬[19]や鳥取県[20]などで葬送儀礼に関連して見られる。

日本での鳥杆習俗は、鳥形木製品が弥生時代前期まで遡るものがあり、弥生時代の範疇のものは出土地点からみて葬送用具ではなく、集落の農耕祭祀に関係があるとし、この時代の初めに朝鮮半島より農業神と結びつき、稲作技術とともに日本へ伝播したと考えられる。また、『魏志東夷伝』馬韓の条に記述されている「蘇塗」は農耕儀礼を行なう祭場であるとともに、神杆すなわち鳥杆であったとする説[21]もある。他に銅鐸との関係も指摘されている[22]。

さらに、古墳時代に至っては、金関恕氏によると[23]弥生時代において鳥の霊力が穀霊運搬者として発揮されていたものの、この時代になると鳥の霊力は主として死霊運搬者として葬送儀礼に移行していくとの見解を出している。白鳥伝説、天若日子物語などの神話や古墳の壁画に鳥船が描かれていることもその背景を看取するものとし、鳥形木製品に関しても古墳時代のものでは纒向遺跡や狐塚法勝寺遺跡では古墳の周濠から出土しており、葬送儀礼との結びつきが窺われるようになる。また、現在日本でみられる鳥杆習俗例は墓上施設に設けられるもので、これらは古墳時代からの霊鳥信仰を継承しているものかもしれない。なお、古墳時代以降の霊鳥信仰について国分直一氏は[24]北方シャーマニズムの流れをくむ天的祭儀を主体とするものとしてととのえられたと考えている。ただし、国分氏はつけ加えて現在にのこる風鎮祭の例を上げ蘇塗系信仰は必ずしも一様に展開したわけではなかったかもしれないと述べている。

筆者は、霊鳥信仰が弥生時代から古墳時代にかけて、農耕儀礼から葬送儀礼にすべて移行したとは考えられず、古墳時代以降においても農耕儀礼の中で霊鳥信仰が引きつがれていったと考えている。それは今回の白石例を初め、長越遺跡でも古墳時代に至る可能性をもつ鳥形木製品が葬送儀礼の場というよりもより集落に関連すると予想される遺構から出土していることや、古墳時代前期の纒向遺跡の水鳥形木製品（Fig.105，20）についても石野博信氏[25]がそれを出土した土壙の性格を農耕儀礼のものと考えていること、また6世紀初頭を中心とする時期と考えられている石見遺跡においても石野氏[26]はその祭祀性格を古墳に伴うものではなく、農耕儀礼、とくに治水関係の祭祀の可能性が強いとしていること、

さらに福岡市の拾六町ツイジ遺跡[27]では奈良時代末から平安時代初期にかけての水田遺構面から鳥形木製品が検出していることなど古墳時代以降でも葬送儀礼に関する場所以外で鳥形木製品が出土する例もあることからである。

また民族学の見地から考えると、穀物起源伝承の一形式に「穂落神」と称するものがあり、その中で鳥が稲をもたらしたとする伝説や昔話は沖縄から東北に至る広い範囲に分布している。その伝承の一部は少くとも古事記や日本書紀などの時代まで遡るものがあると考えられている。穂落神伝承は、朝鮮半島や中国、東南アジアにも存在しており、東南アジアの一部の地域においては水稲耕作に先行する焼畑穀物栽培、元来は粟類の栽培と結びついていると考えられているが、日本では東南アジアの多くの地域と同様、稲作と結びついて登場するといわれている。さらに、穂落神話に対応する農耕儀礼の一つに「鳥勧請」というものがあり、分布は全国的で、起源は田植の発達以前の水稲栽培と結びついていたと推定されている。鳥勧請の具体例を挙げると、埼玉県のある村では〝鳥の口〟と称するものがあり、年頭にあたり半紙に鳥の姿を描いて粥箸に挟み田の水口に立て、そして焼米を進ぜ、その上に榛名神社の<嵐除>の御礼を挟んだ六尺ばかりの竹竿を立てるという[28]鳥杆の名残りかと思わせるものもある。

さらにまた現在の鳥杆習俗において、朝鮮半島の江原道の例[29]はジプテペギー城隍という神竿の竿頭に三羽（ところにより一羽の場合もある）の木鴨をのせた神木が田んぼの中に立てられており、農耕儀礼との関係を示唆している。他、文献史料においても807年、忌部広成の撰でまとめた書である『古語拾遺』の神話で農事を占う巫が「志止々鳥」という鳥の名であらわれる[30]。

このように古墳時代以降、後世においても鳥と農耕との結びつきを示唆するものも多くある。弥生時代からあった鳥杆習俗すなわち霊鳥信仰は、古墳時代になって葬送儀礼との結びつきが強く看取されるものの、農耕との結びつきにおいても、後世漸次的に鳥杆そのものは見られなくなるが、穂落神や鳥勧請などとしての農耕祭儀の中で生きづいていると思われる。三品彰英氏が『古代祭政と穀霊信仰』の中で、種子・穀霊・祖霊という融即的な結びつきから、農耕儀礼が死者に関する儀礼と切り離せないこと、すなわち収穫祭は祖霊祭でもあることを論じられている[31]ことに関連して、少なくとも古墳時代以降は霊鳥信仰の対象となる霊魂観も多面的におよんで農耕、葬送、大地儀礼など各種の祭祀儀礼と結びついていったと推察する。

〔注〕

1）ウノ・ハルヴァ著　田中克彦訳『シャーマニズム－アルタイ系諸民族の世界像－』（P.487、104図、1971年）。
2）江谷寛「鳥形木彫」（『池上・四ツ池』 第2阪和国道内遺跡調査会、1970年）。
（財）大阪文化財センター（『池上遺跡第4分冊の2木器編』（1978年）。
3）（財）大阪文化財センター『瓜生堂』（1980年）。および大阪府教育委員会の藤沢真依御教示。
4）大阪府教育委員会・（財）大阪文化財センター『山賀（その2）』（1983年）。
5）（財）大阪文化財センター『巨摩・瓜生堂』（1982年）。
6）（財）大阪文化財センターの赤木克視氏御教示。
7）橿原考古学研究所『纒向』（1976年）。
8）奈良県立橿原考古学研究所附属考古博物館『古代人のいのり』（1977年）。
9）注2）に同じ。
10）兵庫県教育委員会『播磨・長越遺跡－本文編－』（1978年）。
11）浜松市教育委員会『伊場遺跡遺物編1』（1978年）。
12）島根県教育委員会『西川津遺跡発掘調査報告書』（1980年）。ジャパン通信社『月刊文化財発掘情報』1985.10（1985年）。
13）中村徹也「木製動物群と土器に陽飾された動物文」（『考古学雑誌』65－3、1979年）。
14）佐賀県千代田町教育委員会『詫田西分貝塚高志神社遺跡』（1983年）。
15）ジャパン通信社『月刊文化財発掘出土情報』 1985.7（1985年）。
16）金子裕之「古代の木製模造品」（『研究論集』Ⅵ、奈良国立文化財研究所、1980年）。
17）金関恕「前方後円墳の起源」（『展望アジアの考古学』樋口隆康教授退官記念論集、1983年）。
18）鳥越憲三郎『原弥生人の渡来』（1982年）。
19）立平進「死者の鳥」（『考古学ジャーナル』 166、1979年）。
20）金関恕「神を招く鳥」（『考古学論考』小林行雄博士古稀記念論文集、1982年）。
21）注20）に同じ。
22）金関恕「考古学から観た古事記の歌謡」（『天理大学学報』西谷真治教授還暦記念論集、1985年）。
23）注20）に同じ。
24）國分直一「弥生社会と蘇塗系信仰　古代日韓関係の一面を窺う」（月刊『韓国文化』№45、6月号．1983、1983年）。
25）石野博信『古墳文化出現期の研究』（1985年）。
26）注25）に同じ。石野氏はさらに石見遺跡の祭祀儀礼について、中国・朝鮮の天的祭儀を思想的背景としていると推測している。
なお、金関恕氏は上記注22）の文献中で石見遺跡について、墳丘の削平された古墳であろうと想定している。
27）福岡市教育委員会『拾六町ツイジ遺跡』（1983年）。
28）大林太良『稲作の神話』（1973年）。
29）金両基「朝鮮古代信仰史入門」（『古代朝鮮の歴史と文化』、1975年）、（「信仰と習俗からみた相似点」『古代日本と朝鮮文化』、1979年）。
30）森貞次郎「弥生時代の遺物にあらわれた信仰の形態」（『神道考古学講座』第1巻前神道期、1983年）。
31）萩原秀三郎「よみがえり－再生の観念」（『よみがえり』、1977年）。

＜付記＞

小稿は昭和59年5月の山口考古学談話会および同年12月の九州史学会で発表したものをまとめ、加筆したものである。なお、鳥形木製品は近年ますます増加しており、筆者は今後もさらにこれに関する資料を収集し検討し、改めて論じたいと思っている。

白石遺跡発掘調査現地説明会において梅光女学院大学教授國分直一先生にはたいへんお世話になりました。また資料収集に関して赤木克視、藤沢真依、阿部幸一、白井忠雄氏らの御協力を頂いた。記して厚くお礼申し上げます。

県内の関連遺構・遺物出土地名表

(1) 木簡

今回の大学会館に伴う調査で、西北部にあたる落ち込みの最下部をなす黒色土層の泥土の中より、下駄などの木製品と共に下端が折損した木簡を検出した。それには墨痕は認められず[1]、多時期にわたる包含層からの出土のため、時期を確定することはできないが、その形態から見て、荷札や整理のために使った付札と思われる。

わが国の木簡は中国木簡の系譜を継ぐものとされている。中国において、紙が発明される以前の記録材は竹帛や木片であった。漢代の居延漢簡を始め、敦煌、楼蘭、長沙などから発見されており、中国の行政実務などが具体的に表記されている[2]。

わが国では木簡は貢進物荷札や備品などの付札や公文書・請求文書・召喚状などがある。そして、木簡は単に紙の不足を補って用いられたのでなく、奈良・平安時代の文献などからも、紙と並んで文書の起案や調整の過程に一定の役割を果していたとされている。また、広島県草戸千軒町遺跡でも帳簿・付札などが出土しており、十五世紀頃まで木簡の使用があったと言える[3]。

木簡は正倉院の付札のほかはほとんど出土遺物である。その出土は平城宮、藤原宮、太宰府、多賀城などの都城遺跡、大阪府上田部、静岡県伊場などの地方官衙遺跡に多く見られ、このことからも７～９世紀の行政実務に盛んに使用されたことが認められる。

さて、山口県内の木簡の出土地は表のとおりである。いずれも官衙より出土しており、木簡の性格から見ても、このことはうなづける。総数80弱であるが、それを形態別に分類すると次のとおりになる。型式番号は奈良国立文化財研究所の『平城宮木簡一』[4]に従う。

1. 短冊形のもので、多くは方頭のままである。(6011)
2. 一端が方頭で、他端は折損・腐蝕などにより原形の不明のもの。(6019)
3. 小型で短いもの。(6021)
4. 小型で短いもので、小孔を穿ったもの。(6022)
5. 短冊形の材の一端の左右に切り込みをいれたもの。(6032)
6. 短冊形の材の一端の左右に切り込みをいれ、他端を尖らせたもの。(6033)
7. 短冊形の材の一端の左右に切り込みをいれ、他端は欠損のため原形の不明のもの。今回出土した木簡はこれに相当する。(6039)

8. 短冊形の材の一端を尖らせたもの。(6051)

9. 短冊形の材の一端を尖らせ、他端は欠損のため不明のもの。(6059)

以上、9種に分類されるが、6011、6032、6051のの3つの型式が基本になる。一般に、形態と墨書内容の相関関係については、文書用木簡には6011型式が、また、付札には6032型式・6051型式が使用されることが多い。

県内出土の木簡の大半は墨痕は認められず、墨痕の認められるものについても、判読することのできるものはない。出土地の性格や形態から考えて、公文書や付札などに使用されたのであろうと推測できるが、その性格を詳しく知ることはできない。

しかし、今回、学館地区で木簡が出土したことにより、この地区が何らかの官庁的性格を持っていたのではないかという推察ができる。また、それに加えて同地区から平安初期以降、官人が腰帯に用いた石製の止め具用の丸鞆が出土したことからも、近くの遺構が官人の執務・生活した官庁とかかわっていたということが考えられる。今後の調査で、この地区の性格を明らかにし、周防国府との関わりを推察する意味で今回の木簡の出土は非常に意義あるものであろう。

(菅波正人＊)

〔注〕
1) 九州歴史資料館で赤外線撮影をしていただいた結果、墨痕は認められなかった。
2) 坪井清足「木簡学の提唱」(『考古学論考』小林行雄博士古稀記念論文集、1982年)。
3) 注2) に同じ。
4) 奈良国立文化財研究所『平城宮木簡一』(奈良国立文化財研究所史料V、1962年)。
5) 八木充「吉田遺跡と木簡」(『山口大学学園だより』第60号、1985年)。

Tab.23 県内出土木簡地名表

No.	遺跡名	所在地	遺跡の種類	点数	形態
1	長門国府跡	下関市長府町	官衙	2	6033、6059
2	周防鋳銭司跡	山口市大字鋳銭司字大畠	官衙	69	6019、6039、6059、6032、6051、6021
3	吉田遺跡	山口市大字吉田	集落	1	6039
4	周防国府跡	防府市国衙1丁目～5丁目	官衙	5	6039、6051、6019、6022

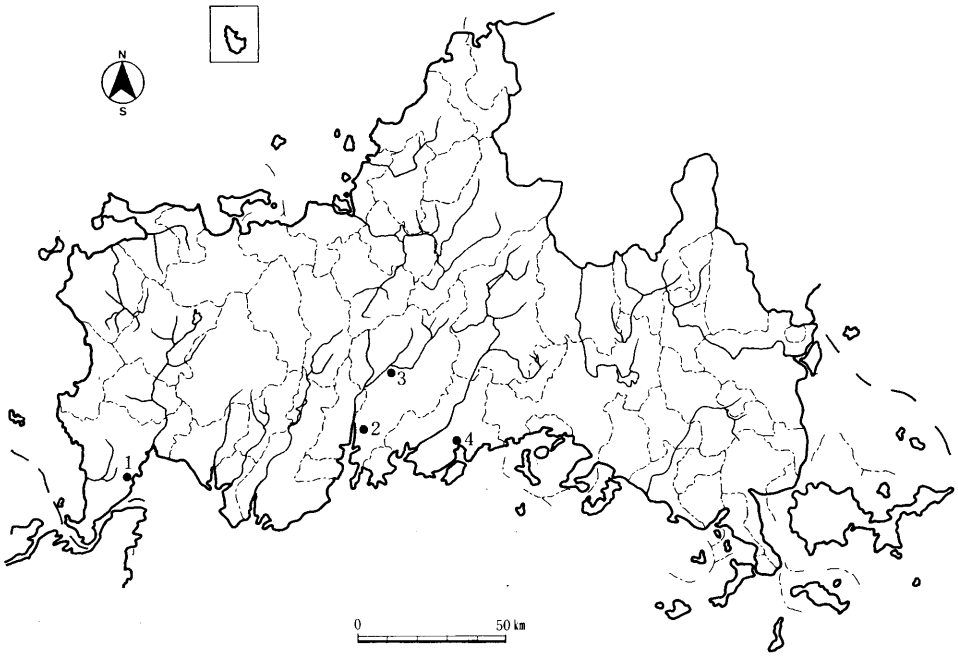


Fig.106　県内出土木簡分布図

(2) 硯

大学会館新営に伴う調査で、陶硯の破片１点が出土した。この陶硯は、いわゆる円面硯で、楢崎彰一氏の分類[1]によれば、第一種水平硯・第一類円面硯・第一型式透脚硯・Ｂ式の範疇に入るものである。また、横田賢次郎氏による九州編年[2]においては、８世紀前半から９世紀前半頃に位置づけられる。

さて、山口県において、本遺跡の出土で、８遺跡からの出土を見たことになった。以下その他の遺跡出土の陶硯について概略する。（番号は、図・表と一致する）

1. 稗尻遺跡は、須恵器窯址で円面硯１点を出土した。透脚硯であるが、透かしが、円孔５箇を用いて十字形状を呈している。
2. 秋根遺跡は、集落跡で、一説に長門国豊浦郡衙と推定されている。坏蓋（環状摘み）の内面を使用したと思われる、いわゆる転用硯１点が出土している。
3. 峠山遺跡は、窯跡で、２号窯とするものから、円面硯１点を出土している。長方形

状の透かしをもつ。[3)]

4. 長門深川廃寺は、古代寺院跡である。円面硯２点を出土している。いずれも長方形の透かしをもつ。

5. 木崎遺跡は、集落跡である。円面硯１点を出土している。脚部に長方形状の透かしをもつ。

7. 周防国府跡は、官衙跡で、円面硯10点、転用硯２点、猿面硯１点、無脚１点の出土を見ている。円面硯の中には、わずかに堤を呈する、時期的に古い段階のものも含まれている。[4)]

8. 原畠遺跡は、集落跡で、円面硯１点を出土している。

以上のごとく、出土遺跡の性格は、様々であるが円面硯の割合いが非常に多いようである。これらの時期は、おおよそ８世紀から９世紀代にかけてのものと推定される。[5)]

なお、6.吉田遺跡の性格については、木簡や石銙帯なども出土していることから、単なる集落でなかったと思われるが、詳細については今後の研究に期待される。

（高下洋一＊）

〔注〕

１）楢崎彰一「日本古代の陶硯－とくに分類について－」（『考古学論考』、小林行雄博士古稀記念論文集、1982年）。

２）横田賢次郎「福岡県内出土の硯について－分類と編年に関する一試案－」（『九州歴史資料館研究論集』９、1983年）。

３）山口県教育委員会『生産遺跡分布調査報告書』（1983年）。によれば、２号窯は７世紀後半とされているが、注２）の論文の形式編年では８世紀に位置づけられよう。

４）防府市教育委員会「周防国府跡・周防国分寺昭和56年度発掘調査概報」（『防府市文化財調査年報Ⅵ』、1984年）。

５）注２）論文の編年による。

補稿

昭和60年度６月29日、山口考古学談話会において、岩崎仁志氏より、岩田遺跡より円面硯が出土しているとの教示を得た。

Tab.24 県内出土硯地名表

No.	遺跡名	所在地	種類	文献
1	稗尻遺跡	下関市大字永田郷	円面硯	「日本の陶硯」 五島美術館　1978
2	秋根遺跡	下関市大字秋根	転用硯 （坏蓋）	「下関市　秋根遺跡」 下関市教育委員会　1977

3	峠　山　遺　跡	大津郡日置町	円　面　硯	「山口県の土師器・須恵器 —集成と編年—」 周陽考古学研究所　1981
4	長門深川廃寺	長門市西深川	円　面　硯	「日本の陶硯」 五島美術館　1978
5	木　崎　遺　跡	山口市大字吉敷	円　面　硯	「朝田墳墓群Ⅰ・木崎遺跡」 山口県教育委員会　1976
6	吉　田　遺　跡	山口市大字吉田	円　面　硯	本　書
7	周　防　国　府	防府市惣社町～国衙 ～多々良～警固町～ 勝間	円　面　硯 転　円　硯 （蓋坏・坏） 猿　面　硯 無　　脚	「防府市文化財調査年報」 Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅵ 「周防の国衙」 防府市教育委員会 など
8	原　畠　遺　跡	玖珂郡周東町大字高森 字原畠	円　面　硯	「臼田・原畑・新畑遺跡」 山口県教育委員会　1974

※なお、この表を作成するにあたっては、奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター発行の『埋蔵文化財ニュース』41（1983.6.20）を参照した。

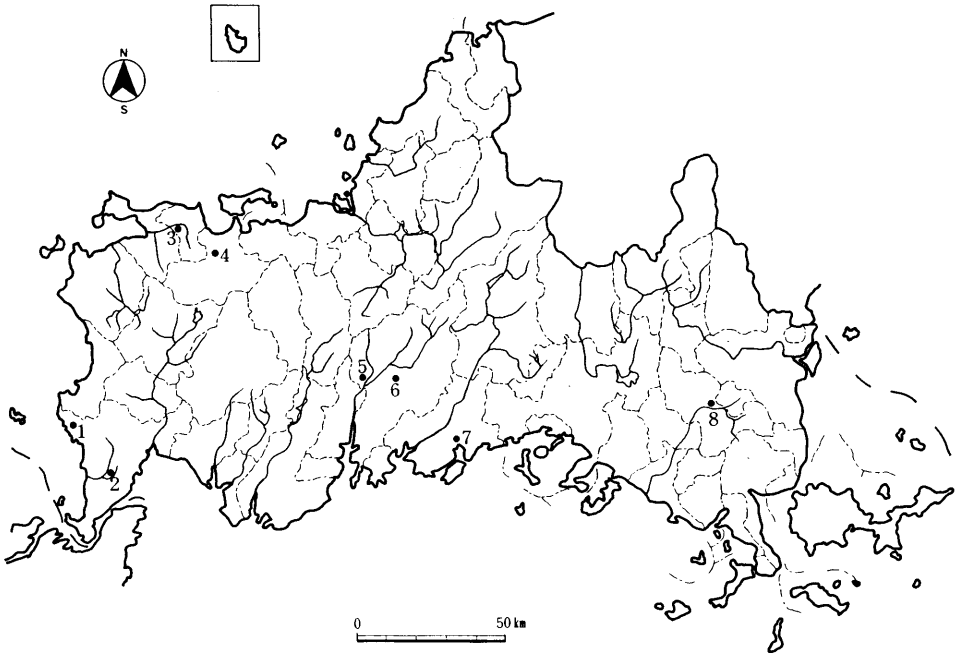


Fig.107　県内出土硯分布図

(3) 輸入陶磁器

昭和58年度吉田遺跡MN－12区の調査において、包含層中よりややまとまった量の中国産輸入陶磁器が出土した。これらの輸入陶磁器類は、若干後出すると思われる龍泉窯系無鎬蓮弁文青磁椀（Ⅰ－5・a類）片1点を含むものの、横田・森田氏編年のⅢ期1小期[1]に相当する内容を示しており、12世紀中葉から13世紀前半の年代が与えられるものである。

他に本遺跡周辺で輸入陶磁器を出土する遺跡としては、堂道遺跡[2]や吉田岡畠遺跡[3]等が挙げられる。堂道遺跡では11号土壙において南側の床面近くから白磁椀Ⅴ類と土師器が出土しており、墓の副葬品として使用されたことが推定される。また吉田岡畠遺跡は吉田遺跡の南側に隣接する遺跡ではあるが、出土資料中に15世紀代に下るかとも思われる雷文帯を持つ青磁椀[4]を含んでおり、本調査の出土資料とは大きく時代を異にすることが注意される。

県下の分布を見てみると、考古学的調査の及ぶほとんどの地域においての出土が認められるが、特に綾羅木川・椹野川・佐波川等の河川流域に集中していることがわかる。当時の文化が河川流域を中心に繁栄していたことは言うまでもないが、この分布は、輸入陶磁器の長門・周防への搬入ルートとして海路が重視されていたことを示し、響灘・周防灘の沿岸をつたい河川を逆のぼった様子がうかがわれる。しかし同一水系においても遺跡によって出土量に多寡があり、吉田遺跡以外でまとまった出土量を持つ遺跡は、周防国府周辺、周防鋳銭司周辺、長門国府周辺、及び秋根遺跡等に限られ、これらが前代の平安期には官衙的な性格を持っていた遺跡であるということは注目に値する。また吉田遺跡では四耳壷や畿内産の瓦器も少量ながら出土しており、その年代も輸入陶磁器のそれにほぼ対応するのであるが、このような土器の組成状況も前述した諸遺跡に共通のものであることが指摘でき、非常に興味深い。

以上のような状況を考える時、吉田遺跡における輸入陶磁器のまとまった出土は、当時の吉田遺跡周辺が単なる一般的な中世村落ではなかったことを示すのに充分である。ただ今回の調査ではこれらの輸入陶磁器に伴う時期の遺構が不明瞭であり、該期の吉田遺跡周辺の状況は未だに不明である。今後の調査が期待される。

（吉田　寛＊）

〔注〕

1）横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の輸入陶磁器について－型式分類と編年を中心として－」（『九州歴史資料館研究論集』4、1978年）。

2）山口県教育委員会『堂道・五反地遺跡』（1973年）。

3）山口県教育委員会『吉田岡畠・吉田大谷・下長野遺跡』　第23集（1973年）。

4）亀井明徳「日本出土の明代青磁椀の変遷」（『古文化論攻』鏡山猛先生古稀記念、1980年）。
なお、地名表作成にあたっては、12世紀から13世紀代（宋代前後）に製作された椀・皿を出土した遺跡に限定した。短期間で作成したため遺漏も多いかと思われるが諒とされたい。

Tab.25　県内出土輸入陶磁器地名表

No.	遺跡名	所在地	内容	文献
1	伊倉遺跡	下関市伊倉	F Ⅲトレ　Ⅲ2b層　青. 龍泉?埦（底）1点 F Ⅲトレ　Ⅲ2a層　白. 埦（底）2点 F Ⅲトレ001－1層　白. 皿（底）1点	下関市教委(1984)「伊倉遺跡」Ⅱ
2	綾羅木郷遺跡	下関市大字綾羅木	V Ⅲ地区L.N.6048　青. 龍泉　埦Ⅰ－1（完）1点 T Ⅱ地区L.N.5506　青. 龍泉　埦　（底）1点 F X地区L.N. 304　青. 龍泉　埦　（底）1点 F X地区　青. 同安　皿　（完）3点	下関市教委(1981)「綾羅木郷遺跡」Ⅰ
3	秋根遺跡	下関市秋根	井戸跡　青. 龍泉　埦（口）3点　（底）1点 包含層　白. 埦（底）2点 青. 龍泉　埦（底）1点　同安. 皿（底）1点 白. 埦（完）9点（口）6点（底）9点（体）1点 皿（完）6点（底）7点 青. 龍泉　埦1－2　（完）1点（口）7点（底）4点 埦1－4a　（完）4点（口）5点（底）4点 埦1－5　（完）5点（口）6点（底）6点 坏Ⅲ－4・b（完）1点 同安　埦Ⅰ－1・b（完)2点（口)2点（底)7点(体)3点	山口県教委(1973)「秋根遺跡」山口県報告. 17. 下関市教委(1777)「秋根遺跡」
4	綾羅木地区条里遺構	下関市大井綾羅木延行・有富	包含層　5点（詳細不明・写真のみ掲載） 包含層　白. 玉線3点ほか	下関市教委(1983·84)「綾羅木川下流域の条里遺構」Ⅰ・Ⅱ
5	神田遺跡	下関市神田	白. 埦（口）1点	山口県教委(1979)「神田遺跡第6次調査概報」
6	塚本古墳	下関市塚本	墳丘盛土撹乱層　青. 龍泉埦1－2か	山口県教委(1973)「塚本古墳」
7	長門国分寺	下関市長府町	国分寺地区　青. 埦（底）1点　白. 皿1点 下安養寺地区　白. 埦（完）5点（口）1点（底）5点 皿（完）2点（口）2点（底）1点 青. 龍泉　埦（口）1点（底）1点 同安　埦（底）1点 その他（底）1点	下関市教委(1982)「長門国府」Ⅴ
8	長門国府	下関市長府町	青. 龍泉　埦（完）1－4・a 1点　1－5・b 1点 その他1点 同安　埦1－1・b 1点　皿1点　その他1点 白. 埦（完）2点（口）4点（底）3点　皿2点 青. 埦　龍泉（底）1点　同安. 埦1－1・b（底)1点 白. 埦（底）1点	下関市教委(1978)「長門国府」Ⅱ 下関市教委(1980)「長門国府」Ⅳ
9	城山遺跡	豊浦郡豊浦町川棚	包含層　白. 埦（口）1点（底）1点	富士埜勇(1984)「響灘沿岸の高地性集落」「高地性集落と倭国大乱」
10	甲山29号墳	豊浦郡豊浦町	玄室床部　青. 詳細不明（写真のみ掲載）	「豊浦町史」(1979)
11	深川廃寺	長門市板持	水田より採集　青. 龍泉. 埦1－4a　1点 Ⅲ地区柱穴　白. 埦（底）1点　SX301. 白. 皿(底) 1点 地山面. 青. 埦1－5・b（口）1点	山口県教委(1977)「長門深川廃寺」 長門市教委（1985）「長門深川廃寺Ⅱ」
12	大井·宮ノ馬場付近	萩市大井·宮ノ馬場	表面採集　青磁片6点	長谷川道隆（1977）「大井で採集された南宋の青磁」「史都萩」34

13	下東遺跡	山口市大字吉敷	Ⅱ－1層（包含層）青. 龍泉 埦1－4a （完）2点 同安 埦Ⅰ－1a （口）1点	山口県教委(1975) 「下東遺跡」
14	朝田墳墓群Ⅰ地区	山口市朝田	Ⅱ－1層. 白. 埦（底）1点 Ⅱ－2層 白.埦（口）1点 地山面 白. 埦（底）1点 柱穴内 白.埦（口）1点	山口県教委(1977) 「朝田墳墓群Ⅰ」 山口県報告. 32
15	王子の森墳墓群	山口市朝田字王子の森	表面採集 青. 龍泉 埦（完）1－4a 1点	山口県教委 (1979) 「王子の森古墳群」
16	山口大学構内吉田遺跡	山口市大字吉田	本書参照	
17	吉田大浴遺跡	山口市大字吉田	溝状遺構 青. 同安 埦（底）1点	山口県教委（1973） 「吉田大浴」
18	吉田岡畠遺跡	山口市大字吉田	報告書記載不十分のため、詳細な内容、点数は未把握	山口県教委（1973） 「吉田岡畠」
19	堂道遺跡	山口市大字黒川	11号土 白. 埦（完）1点 A地区包含層 青. 龍泉 埦（底）1点 同安 埦（底）1点	山口県教委(1973) 「堂道・五反地遺跡」
20	周防鋳銭司跡	山口市大字鋳銭司	包含層. 青. 龍泉 埦1－5・b 2点（口・底） 1－4・a（完）1点（底）3点(口)2点 白. 埦（底）1点	山口県教委(1978) 「周防鋳銭司跡」
21	今宿西遺跡	山口市大字鋳銭司	BP－6（掘立柱建物） 白. 皿（底）1点	山口県教委(1984) 「上辻・大歳・今宿西」
22	大歳遺跡	山口市大字鋳銭司	PH300（掘立柱建物柱穴）青.龍泉.埦Ⅰ－5・b（完）1点 BP－1（墓） 白.埦（底）1点 BP－2（墓）白.埦（完）1点 BP－4（墓）青. 同安埦（完）1－1・b 1点 皿（完）1点 BP－5（墓）白.皿（完）2点 P－7.白.埦（底）1点 溝状遺構 白. 埦（口）1点 青. 龍泉 埦（底）1点	
23	高根遺跡	山口市大字江崎字高根	第Ⅱ地区B区包含層 青. 龍泉 埦1－5.8点 同安 皿2点 その他17点	山口県教委(1973) 「高根遺跡」
24	右田・一丁田遺跡	防府市右田・一丁田	一丁田地区小川跡 青. 埦（底）1点 右田地区B－2溝. 青. 龍泉 埦1－5・b（完）1点 埦（底）2点 皿（完）1点	山口県教委(1973) 「右田一丁田遺跡」
25	右田遺跡（右田中学校内所在遺跡）	防府市右田	包含層 白. 埦（口）1点（底）2点 青磁片	防府市教委(1979) 「防府市文化財年報」Ⅱ
26	下右田遺跡	防府市下右田	Ⅴ地区B－33 白. 埦（口）1点 皿（完）1点 Ⅷ地区P－63 青. 皿（完）1点 B－33 青. 埦1－5a（完）1点 不明 白. 埦（底） Ⅴ地区P－137 青. 龍泉 埦1－5・b（口）1点 Ⅵ地区PH－170 青. 龍泉 埦Ⅰ－4a（完）1点 Ⅴ地区B－63 青. 龍泉 埦Ⅰ－5・b（完）1点	山口県教委（1978） 「下右田遺跡」第1次・2次調査概報 山口県教委（1979） 「下右田遺跡」第3次調査概報 山口県教委(1980) 「下右田遺跡」第4次概報・総括
27	奥正権寺古墳	防府市大字大崎字奥正権寺	羨道部埋土中 白. 皿（完）1点 玄室内埋土下位 青. 龍泉 埦1－5・a （口）1点	山口県教委(1983) 「奥正権寺遺跡」Ⅰ
28	玉祖遺跡	防府市大字江崎字居舎	W－6（井戸） 青. 龍泉 埦1－5・b（完）1点	山口県教委(1983) 「玉祖遺跡」
29	多々良寺山9号墳	防府市国分寺町多々良寺山	石室内流入土 青. 皿（完）1点	防府市教委(1975) 「多々良寺山9号墳」

30	周防国府	防府市国衙1～5丁目	西国衙地区　白. 埦（口）6点　皿（口）7点 青. 龍泉. 埦1－5b 1点　（底）1点 国府中学敷地内　青. 皿（完）1点 東国衙地区　白. 埦（口）2点　（底）1点 青. 龍泉　埦（完）2点 同安　埦1－1・b（完）1点 その他（口）1点 D地区　白. 埦（口）1点 K地区　青. 龍泉埦（底）1点　皿（口）1点 白.埦（底）1点 SD104.5層　白. 埦Ⅷ－3（完）1点　（底）1点 青. 皿1点 青. 埦J～2a（完）1点 I－5・b（完）1点 6層　白. 埦V－1（完）1点　（底）1点 青同安埦I－1・b（完）1点　皿（完）1点 SD104.7層　白. 埦Ⅳ－1・a（完）1点 Ⅵ－1・b（完）1点 V類3点　皿（完）2点 SD107.　青. 同安埦Ⅱ類（口）1点　皿（口）1点 白. 埦V－4a（口）1点　埦（底）1点 皿（底）1点 東南隅包含層　白. 埦（口）1点（底）2点 皿（底）1点 GL地区柱穴・その他　白. 埦Ⅳ類（完）1点 HL地区柱穴・その他　白. 皿（底）1点 SE129.　白. 埦Ⅳ－1・a（完）1点 V－4・b（完）1点 埦（完）1点（口）1点 青. 埦（口）1点 SK107.　白. 埦（完）2点（口）1点 SE128.　青. 龍泉埦1－5b（完）1点 同安皿1－1・b（完）1点 白. 埦（口）1点（底）1点 SX108.　白. 皿Ⅸ－2（完）1点 Ⅸ－1・d（完）1点 Ⅸ－1・b（完）1点 その他皿（完）2点（底）2点 埦（完）2点	防府市教委（1967） 「周防の国衙」 防府市教委（1975） 「周防国衙－南限地域－の調査」 防府市教委（1979） 「防府市文化財調査年報」Ⅱ 防府市教委（1980） 「防府市文化財調査年報」Ⅲ 防府市教委（1981） 「防府市文化財調査年報」Ⅳ
31	平原経塚	徳山市戸田	集石遺構　青. 龍泉　埦I－5・b（口）1点	前田耕次・岩崎仁志(1984) 「徳山市平原経塚」 「山口県文化財」14
32	筏山経塚	玖珂郡玖珂町	経塚　白. 小皿1点（合子1点共伴）記述のみ、詳細不明	「玖珂町史」(1972)
33	中土井遺跡	熊毛町平生町	採集品（底）8点　（口）7点　詳細不明	「平生町史」(1978)
34	今井遺跡	熊毛郡平生町大字大野字今井		山口県教委（1979） 「今井遺跡」
35	岩戸遺跡	熊毛郡大和町大字岩田		大和町教委（1974） 「岩戸遺跡」

（昭和60年3月現在）

○採録にあたっては、原則的に埦・皿に限り、文献は、写真・実測図が掲載されているものを、基本とした。

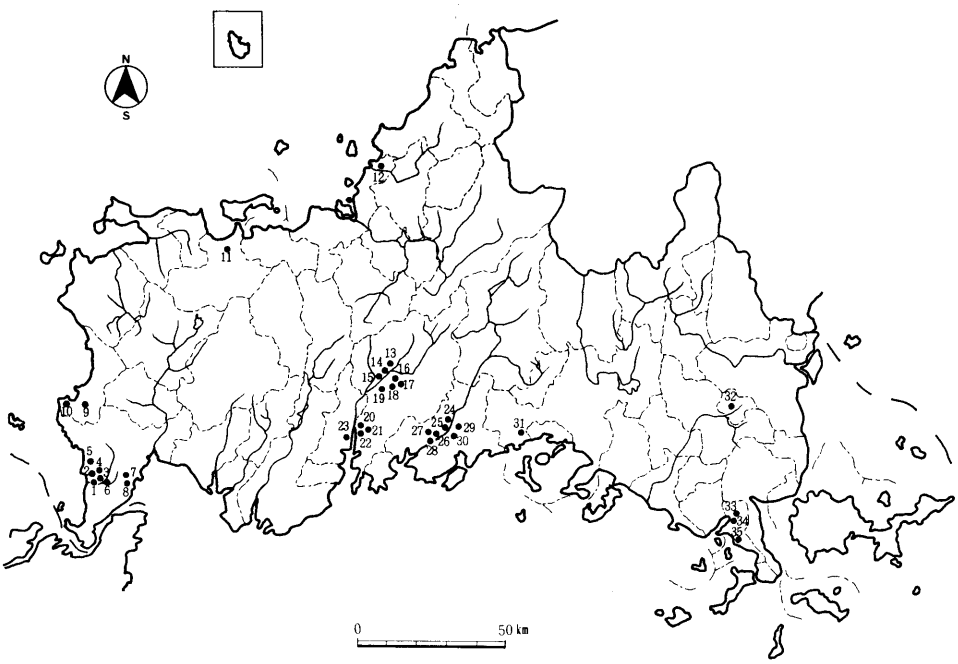


Fig.108　県内出土輸入陶磁器分布図（宋代，埦・皿）

(4)　緑釉陶器・瓦器

吉田遺跡の瓦器は、在地産黒色土器が内黒のもの（Ａ類）しか確認されていないことや胎土・技法等から見て、畿内産和泉型と考えられる。なお詳細は第２章（Ｐ.52 ）に譲る。緑釉陶器は、須恵・土師の両質のものが存在する。従来、『延喜式』に見える「長門国瓷器」が土師質の緑釉陶器である可能性が指摘されており[1]、緑釉の付着したトチンも長門・周防両国府域で出土してはいるが、窯跡は未だ不明である[2]。また近年、近畿圏の緑釉陶器は出土例やその窯跡の発見が相次ぎ、日常雑器的な様相を帯び始めたが、長門・周防においては官衙・寺院での出土が主であり、地方性を感じさせる。生産・搬入の問題[3]とからめて今後検討されるべき課題であろう。

（杉原和恵＊）

〔注〕

1）寺島孝一「いわゆる『長門国瓷器』をめぐる二、三の私見」（『古代学叢論』、角田文衛博士古稀記念、1983年）。

2）山口県教育委員会『生産遺跡分布調査報告書・窯業』（『山口県埋蔵文化財調査報告書第74集』、1983年）。

3）注２）文献において、長門・周防各国庁の自給自足的な直轄窯の存在が示唆されている。しかし最近、周防国府東南部にあり、畿内産瓦器・緑釉陶器・トチン等を集中的に出土する国府津推定地の周辺には、条坊路の及んでいなかったことが調査により明らかにされてきており、独立性の強い、商品集積・流通能力を持った一団の存在する可能性も、あながち否定できまい。

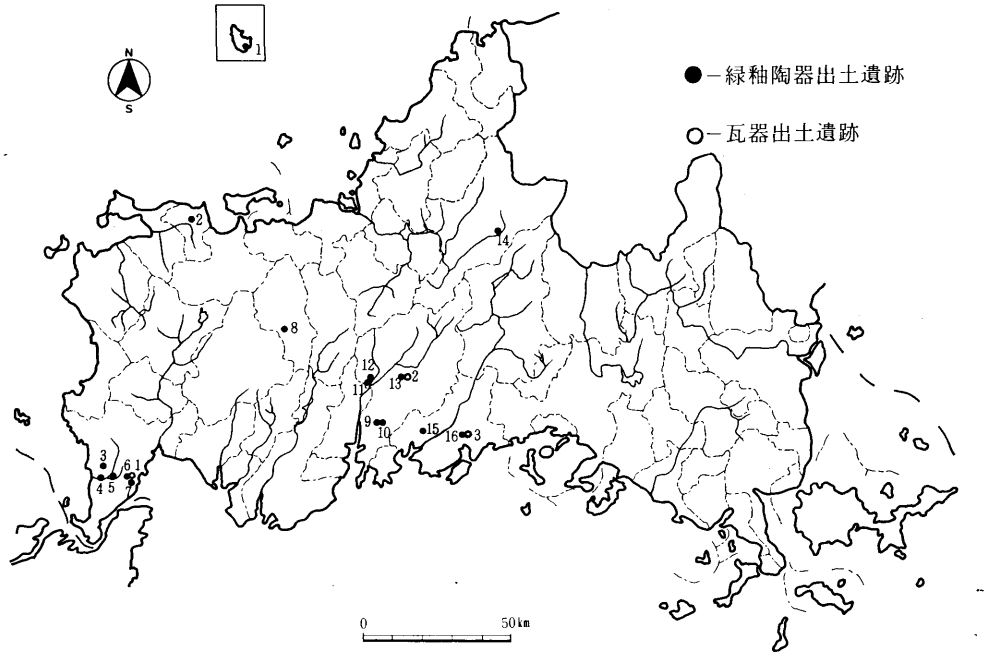


Fig.109　県内出土緑釉陶器・瓦器分布図

Tab.26　県内出土畿内産瓦器地名表

No.	遺跡名	所　在　地	出土した地区・数量	文　　献
1	長門国分寺	下関市長府町	下安養寺地区　LW112　　椀 1	「長門国分寺」長門国府周辺遺跡発掘調査報告V 1982 下関市教育委員会
2	吉田遺跡	山口市大字吉田	MN－12区包含層　　椀 3	本書
3	周防国府	防府市国衙	IE区　　不詳	「周防国府跡昭和51年度発掘調査概報」 防府市教育委員会
			IG区　SD104－5層　　皿 1　椀 1 6層　　皿 1 ? 椀 2 7層　　皿 3　椀 3 ID区　SD107　　皿 1 ? 椀 2	「防府市文化財調査年報Ⅱ」 1979 防府市教育委員会
			IH区　SE129　　皿 1　椀 1	「防府市文化財調査年報Ⅳ」 1981防府市教育委員会

（昭和60年6月現在）

Tab.27　県内出土緑釉陶器地名表

No.	遺跡名	所在地	胎土 須恵質	胎土 土師質	文献
1	見島ジーコンボ古墳群	萩市見島字片尻	番外15号墳　盤 1 105号墳埋土　鉢 1	番外15号墳　小鉢 1 鉢 1 盤 1 154号墳撹乱層　破片 1	「見島総合学術調査報告」1964 山口県教育委員会
				(113号墳 墳丘外表　花瓶 1 16号墳　水注(?) 1)	「見島ジーコンボ古墳群」山口県教育委員会 1983
2	堀田遺跡	大津郡日置町堀田	――	第3層　椀 2	「日置村堀田遺跡・豊浦町吉永遺跡埋蔵文化財緊急調査概報」1972 山口県教育委員会
3	神田遺跡	下関市富任町	――	D区　細片 1	「山口県下関市神田遺跡第2次発掘調査概報」1972年3月
				(井戸 青灰色　質土層　椀 3)	山口県埋蔵文化財調査報告第12集「下関市神田遺跡第3次発掘調査概報」19732 山口県教育委員会
4	綾羅木地区条里遺構	下関市綾羅木		(Ⅳ層　小瓶 1 椀 1)	「綾羅木川下流域の条里遺構」団体営川中地区圃場整備事業対象地域内条里遺構調査概報Ⅱ 1984 下関市教育委員会
5	秋根遺跡	下関市秋根町	＜1974年概報中＞　椀 1 (内底花文)	左例を除き全て土師質　椀多数 皿 長頸瓶 水注 } 少量	「下関市 秋根遺跡」1977 下関市教育委員会
6	長門国分寺	下関市長府町	――	X層上位整地層　多嘴壷 1 Ⅳ1c層　椀 1	「長門国府」長門国府周辺遺跡発掘調査報告Ⅳ 1980 下関市教育委員会
			Ⅳ層　高台付皿　1	＜下安養寺地区＞ LD125E　高台付皿 1 LK115　広口壷 1 V11層直上　高台付皿 1 (LD125E　小瓶 1)	「長門国分寺」長門国府周辺遺跡発掘調査報告V 1982 下関市教育委員会
7	長門国府	下関市長府町	――	B地点LD004　皿 6 椀 1	「長門国府」長門国府周辺遺跡調査報告Ⅲ 1978 下関市教育委員会
				(地点無記載　椀 1)	「長門国府」長門国府周辺遺跡調査報告Ⅲ 1979 下関市教育委員会
8	三戸遺跡	美祢郡秋芳町大字岩永本郷字三戸		(三戸山南側掘部水田側溝　坏 1)	「三戸遺跡」1981 秋芳町教育委員会
9	周防鋳銭司	山口市大字四辻字大畠	＜第1次調査＞ 第6トレンチ溝中　椀 3	＜第1次調査＞ 第6トレンチ溝中 口縁片 4 底片 1 細片 5	「周防鋳銭司跡」1978 山口市教育委員会
			＜予備調査＞ I10b1土坑中　皿 1 G12トレンチ床土層　椀 1 G11n3床土上　椀 1 H10n1包含層　椀 2	＜予備調査＞ G12je14遺構面上　皿 1 H10a13包含層　皿 1 椀 1 I10p13柱穴中　椀 1 F12o1井戸埋土中　椀 1 I10e13柱穴中　椀 1	
10	下北田遺跡	山口市大字四辻字大畠	――	柱穴中　皿 1 椀 1	「周防鋳銭司跡」所収 附編 下北田・上北田遺跡 1978. 山口市教育委員会

11	朝田墳墓群	山口市大字朝田字高井		(Ⅳ地区表採　細片1)	岩崎仁志氏御教示による
12	木崎遺跡	山口市吉敷木崎		(Ⅳ地区柱穴　細片1)	「朝田墳墓群Ⅰ・木崎遺跡」 1976 建設省山口工事事務所 山口県教育委員会
13	吉田遺跡	山口市大字吉田	MN-12区包含層　皿 2 碗 1	MN-12区包含層　碗 2	本書
14	突抜遺跡	阿武郡阿東町大字地福上		(Ⅲ地区　PH-25 碗 1 DW-23 碗 1 表採　碗 1)	「よみがえる弥生のムラ－突抜・馬場遺跡－」 山口県教育委員会 1985
15	玉祖遺跡	防府市大字大崎字居合		(第1地区B-1-PH9　細片1)	「玉祖遺跡・西小路遺跡」 1983 山口県教育委員会 建設省山口工事事務所
16	周防国府	防府市国衙	<西国衙>　皿・碗12 <東国衙>　皿 2	<西国衙>　皿・碗 5 蓋(香炉?) 1 <東国衙>　皿 1	「周防の国衙」 1967 防府市教育委員会
				(<D区>　細片1 <I区>　碗 1 <K区>　皿 1)	「周防国衙－南限地域－の調査」 1975 防府市教育委員会
				<IE区>　(坏・皿数量不明)	「周防国府跡昭和51年度発掘調査概報」 防府市教育委員会
				<東南隅>地点不明　底部1 (　細片2)	「防府市文化財調査年報Ⅱ」 1979 防府市教育委員会
			<53年度> ID区SD105　皿 2	<53年度> IG区SD104-5層壷数個体分 ID区SD105　碗 1 SD106　碗 2 SK106　碗 1	
				<第22次調査> (HC区SK112　碗 1)	「防府市文化財調査年報Ⅳ」 1981 防府市教育委員会
			――――	<第23次調査> IH区SK117　碗 1	
				<第26次調査> 1F区(SK123　耳坏1 褐色砂質土包含層　碗2 褐色砂質土包含層　碗2 地点不明　碗1 壷1 細片1)	「防府市文化財調査年報Ⅵ」 1984 防府市教育委員会
			――――	<第28次調査> GF区第1トレンチ　壷1	

(昭和60年6月現在)

◦器形や胎土は報告書の記述に従った。
◦胎土の須恵質・土師質の区別が報告書でなされていない場合は(　)でくくって便宜的に土師質の欄に記載した。

(5) 竈付竪穴式住居跡

県内における造り付けの竈を付設した竪穴式住居跡は、推定されるものを含めて9遺跡34基におよぶ。時期は、古墳時代後半期が大半であるが、前半期のものとしては今回調査した白石遺跡（第8章参照）の他に山口大学吉田構内に存在する吉田遺跡にも一基（Tab.28. №2）ある。吉田例は北壁中央部に半円形状の切り込みをもち、その内部面に焼土痕が集積していたことから竈の存在が推定されているものであるが、しかし、それには粘土帯や板石など天井部の構築を示すものが全く認められず、いわゆる定形化された竈とは考え難い。また同じ吉田遺跡の検出住居跡の中に古墳時代前期に比定されるもので、住居の中心部に炉とさらに東南壁中央に炊事用の炉と推定される炭化物・焼土痕を充塡した掘り込みを付設しているものがあり[1]、上記の例もこれに類する炉から竈への移行する過渡期のもので炉の機能分離に伴うものと思われる。なお、下松市宮原遺跡では弥生時代終末に比定される円形プランの住居内に竈様構造のものがあるとされるが[2]、設置位置等から竈としては断定し難いもので、炉の可能性が高いと思われる。したがって、現時点では白石例のものが一部ながら粘土帯を確認しており、出土土器から5世紀前半期、より遡って4世紀末であることから、県内での定形化した竈の最古例に位置づけられよう。全国的傾向をみると、その出現は西谷正氏によると弥生時代後期に造り付け竈の概念が朝鮮半島から伝播したことによるとされ[3]、北部九州においては古墳時代前期初頭、少なくとも4世紀には出現している。それ以降各地に伝播し、漸次増加していくものの、一般化するのは古墳時代後期・6世紀以降になる。この点からすれば、山口県下では白石遺跡や下右田遺跡・綾羅木郷遺跡など中期までに属するものが存在することから、比較的早い段階で造り付け竈が普及したことが看取される。

竈の設置位置は、Tab.28に示した通り、圧倒的に北壁中央部に多く、北壁から西壁に集中することが指摘でき、この点、福岡県でも同様の傾向が認められ[4]、計画的に設置されたことが伺える。その理由としては日照と風方向の二つの条件が大きく左右したと考える。

（森　田）

〔注〕
1）小野忠熙・中野一人「山口」（『三世紀の考古学』下巻、1983年）。
2）山口県教育委員会『宮原遺跡・上広石遺跡』（1973年）。
3）西谷正「加耶地域と北部九州」（『大宰府古文化論集』上巻、1983年）。
4）北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室『葛原(A)・(B)遺跡』（1984年）。

Tab.28　県内竈付竪穴式住居跡

No.	遺跡名	所在地	住居跡名	竈位置	遺存度	出土遺物	時期	文献
1	白石	山口市	SB－1	北壁	○	H	4世紀末～5世紀前半	
2	吉田	山口市	P. D. Ⅱ	北西壁中央部	△	HQM	古墳時代初期	1
3	毛割	山口市	1号住居跡	西壁北寄り	○	HSQ	7世紀前半	2
4			2号住居跡	西壁中央部	○	HS	7世紀前半	2
5			3号住居跡	北壁中央部	○	HSQ	7世紀前半	2
6			4号住居跡	北壁	○	HSQ	7世紀前半	2
7			5号住居跡	西壁中央部	○	HSM	7世紀前半	2
8			6号住居跡	北壁	○	HS	7世紀前半	2
9			7号住居跡	北壁	○	HSQ	7世紀前半	2
10			8号住居跡	北壁中央部	△	H	7世紀前半	2
11			9号住居跡	北壁中央部	○	HS	7世紀前半	2
12			10号住居跡	北壁中央部	○	HSE	7世紀前半	2
13			11号住居跡	北壁中央部	○	HSM	7世紀前半	2
14			12号住居跡	西壁	△	HSE	7世紀前半	2
15			13号住居跡	北壁	○	HSQ	7世紀前半	2
16			14号住居跡	北壁	△	HSQ	7世紀前半	2
17			15号住居跡	北壁	△	HSE	7世紀前半	2
18			16号住居跡	北壁	○	HS	7世紀前半	2
19	問田片川	山口市	10号住居跡	北壁	○	S	6世紀末～7世紀	3
20	下右田	防府市	DW－2	北壁中央	△	HSQ	5世紀後半	4
21			DW－3	東南壁・東壁	○	H	5世紀後半	4
22	坂手沖尻	阿東町	3号住居跡	北壁中央部	△	H	古墳時代後期	5
23			4号住居跡	北壁中央部	△	H	古墳時代後期	5
24	秋根	下関市	1号住居跡	北壁中央部	△	HSQ	6世紀後半	6
25			2号住居跡	北壁中央部	○	HS	6世紀後半	6
26			3号住居跡	北壁中央部	△	HQ	6世紀後半	6
27			4号住居跡	北壁中央部	○	HSP	6世紀後半	6
28			6号住居跡	北壁中央部	△	HQ	6世紀後半	6
29			7号住居跡	北壁	△	HS	6世紀後半	6
30			LS004	南壁中央部	△	H	6世紀後半	7
31	綾羅木郷	下関市	住居跡1号	北西壁中央	△	HSQM	5世紀末	8
32			住居跡3号	北壁中央	○	HS	5世紀末	8
33			住居跡4号	北壁中央	○	HS	5世紀末	8
34	寺秋	下関市	1号住居跡	東壁？	△	H	古墳時代	9

※遺存度　○－粘土壁が残存するもの　．△焼土痕等から竈の存在が推定されるもの

※出土遺物　H土師器・S須恵器・Q石製品・鉄器・鉄魂M

P土製品・E耳環

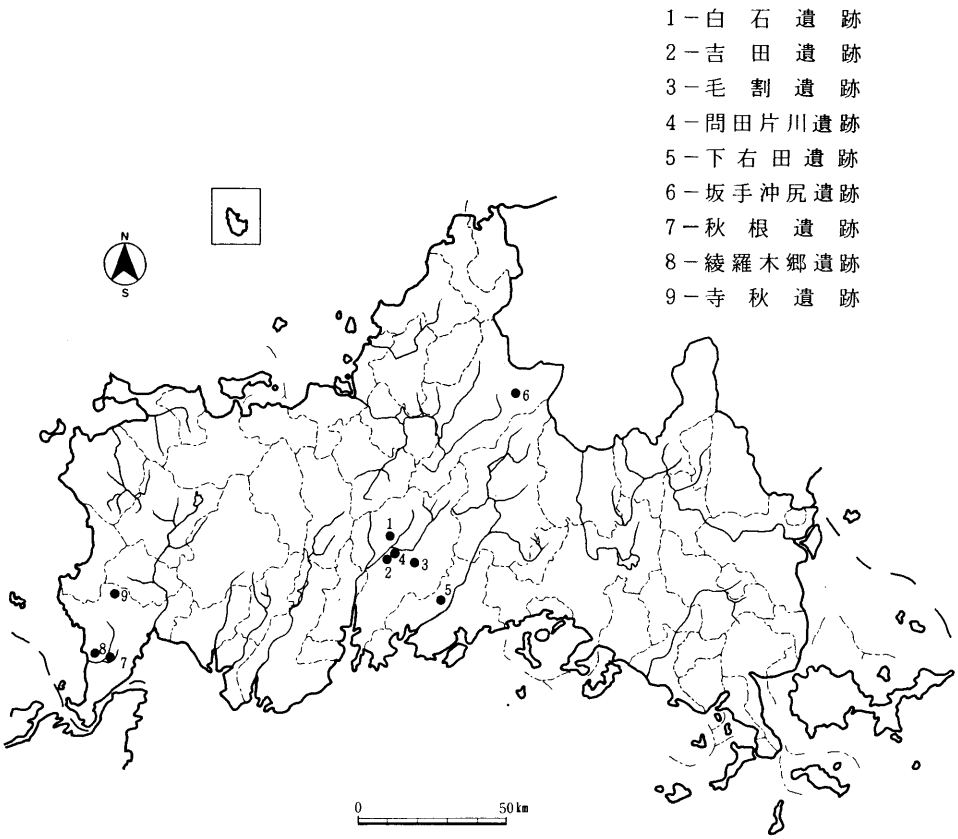


Fig.110　県内竈付竪穴式住居跡検出遺跡分布図

文　献
1）山口大学文化会考古学部　『吉田遺跡・第1地区E地区発掘調査概報』（1971年）。
　山口大学吉田遺跡調査団　『吉田遺跡発掘調査概報』（1976年）。
2）山口市教育委員会　『毛割遺跡』（1983年）。
3）山口市教育委員会　『問田片川遺跡』（1985年）。
4）山口県教育委員会　『下右田遺跡』　第3次　（1979年）。
5）山口県教育委員会　『坂手沖尻遺跡・惣の尻遺跡』（1978年）。
6）山口県教育委員会　『塚本古墳・秋根遺跡・石原遺跡』（1973年）。
7）下関市教育委員会　『秋根遺跡』（1977年）。
8）下関市教育委員会　『綾羅木郷遺跡』（1981年）。
9）山口県教育委員会　『寺秋遺跡・湯免遺跡』（1979年）。

遺物取り上げ工法の一例

1. はじめに

ここで紹介する遺物取り上げは、山口市白石に所在する附属山口小学校・幼稚園運動場整備に伴う試掘調査（第８章参照）において、昭和59年４月に実施したものである。本例の遺物はＡトレンチSD２内で検出した木製品－加工木１（Fig.83，1　PL.69）である。他の木製品は比較的遺存状態が良好であったため容易に取り上げられたが、当遺物は腐触、脆弱化が進行しており、直に取り上げると崩壊する恐れが考えられたもので、またこの木製品は鳥形木製品（Fig.82　PL.67）に組み合わされる杆の可能性が大きく、学術的に資料価値が高いと察したことも勘案し、取り上げに際しては十分な配慮が必要となった。そのため、保存処理の実績をもつ山口県埋蔵文化財センターに御協力を願い、同職員渡辺一雄氏の指導のもと、以下の方法、工程で取り上げた。

2. 取り上げ

Ⅰ　（前段階）

取り上げ作業にかかるまでに検出状況の実測、写真撮影を完了しておき、また木製品の場合は乾燥すると形状が変形したり、罅割れを生じることが多いため、検出直後から布等により湿潤状態に保っておく。

Ⅱ　（仮強化）

取り上げ作業に入ると、まず遺物自体を仮強化するため、高分子物質のP.E.G（ポリエチレングリコール）の溶液を浸漬させる。P.E.Gとはエチレンオキシドの重合物（$CH_2CH_2O)n$ であり、重合度によって液体と固形状のものがある。今回使用したものは「P.E.G－4000」で、はじめ低濃度の溶液を含浸した後、濃度を上げた（写真①）。さらに遺物および周囲の土を仮強化する。湿潤状態のため、アクリル系の合成樹脂（バインダー17）の含浸とゆるやかな乾燥を行ない徐々に硬化させる（写真②）。

Ⅲ　（梱包）

取り上げ範囲を定め、周囲の土を削除する（写真③）。遺物の既出表面を湿った和紙を湿拓の要領で丁寧に覆い、ウレタンフォームとの剥離材とする（写真④）。（写真⑤－仕上り状態）。次に、遺物全体を包囲できる大きさに作った木枠を嵌め込む（写真⑥）。そして木枠の中で硬質性ウレタンフォームを注入させ（写真⑦）、ウレタンフォームが木枠

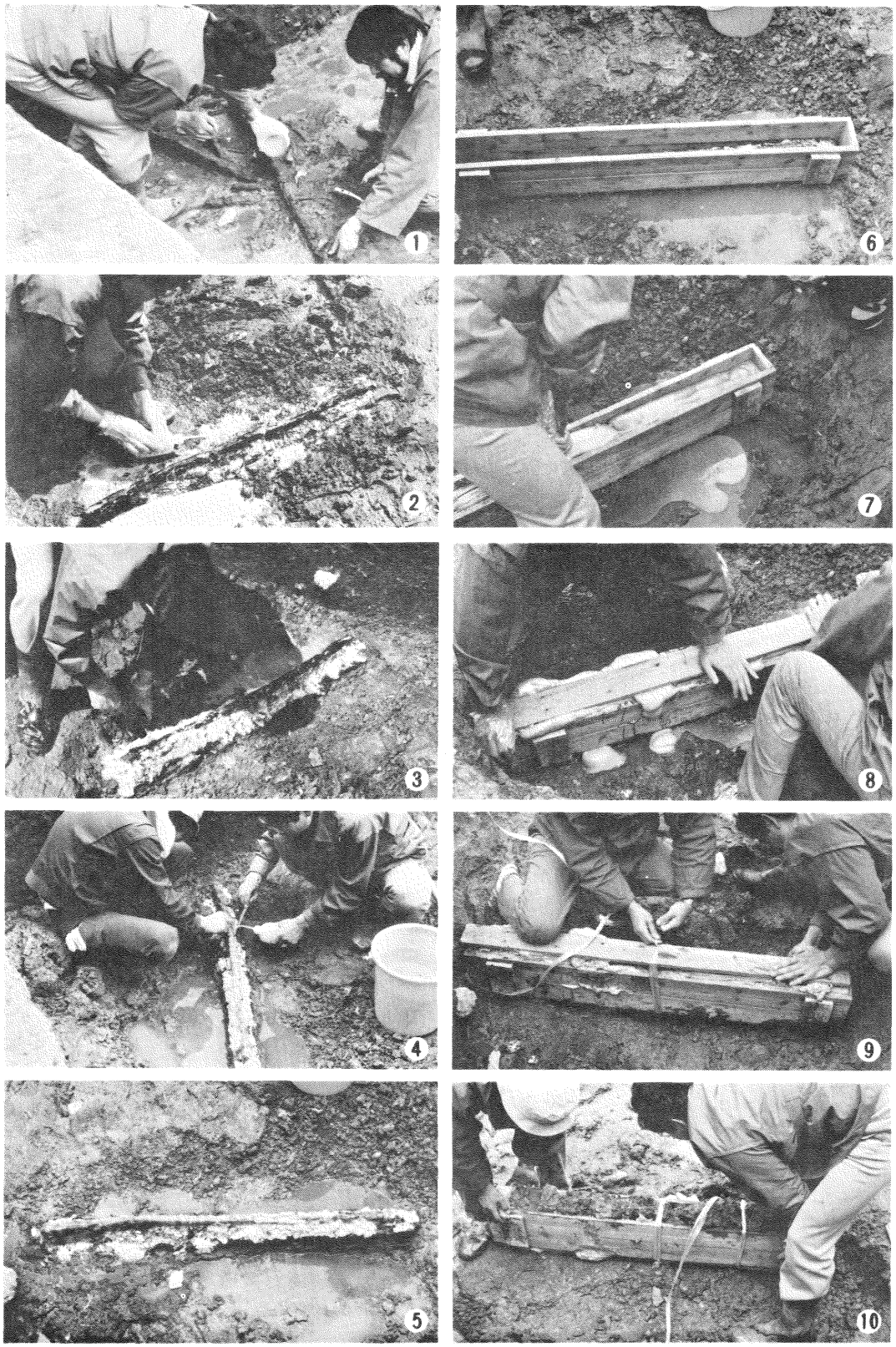


Fig.111　木製品取り上げ工程

上面まで発泡したら板材で蓋をし梱包する（写真⑧）。なお、硬質性ウレタンフォームとは、イソシアネート成分とポリオール成分からなる二種類の原液を混合させることにより発泡し、数分間程度で硬化するものである。発泡スチロール状のため、木枠内の空間部分に良好に充塡し固まり、かつ軽量で、硬化後の加工も容易である。

Ⅳ　（切り離し）

木枠の下の土を切り離し（写真⑨）、反転させる（写真⑩）。その後、離面の余分な土を除去する。

なお、他の実例の場合、下面の不要の土をできるだけ除去し、その部分にウレタンフォームを封入させ、再び反転して元の状態にして木枠をはずし搬送することがあるが、本例は比較的軽量なため、木枠をつけたまま、かつ反転した状態で搬送した。

以後、室内において慎重に遺物を取り出すことができ、詳細な実測図、写真等を行なった。現在、当遺物は山口県埋蔵文化財センターにおいてP.E.G含浸法による処置中である。

（森　田）

〔参考文献〕

- 奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター「遺物・遺構の取りあげ工法」（『埋蔵文化財ニュース』 16、1978年11月）。
- 沢田正昭「遺跡・遺物保存の化学」（『考古学のための化学10章』、1981年）。

山口大学構内遺跡調査要項

山口大学埋蔵文化財資料館規則

（設置）

第１条　山口大学に山口大学埋蔵文化財資料館（以下「資料館」という。）を置く。

（資料館の業務）

第２条　資料館は、学内の共同利用施設として、次の各号に掲げる業務を行なう。

一　山口大学構内等から出土した埋蔵文化財の収蔵・展示及び調査研究

二　山口大学構内等における埋蔵文化財の発掘調査並びに報告書の刊行

三　その他埋蔵文化財に関する必要な業務

（運営委員会）

第３条　資料館に関する事項を審議するため、山口大学埋蔵文化財資料館運営委員会（以下「委員会」という。）を置く。

２　委員会に関する規則は、別に定める。

（館長）

第４条　資料館に館長を置く。館長は委員会の議を経て学長が委嘱する。

２　館長の任期は２年とし、再任を妨げない。

３　館長は、資料館の業務を掌理する。

（調査員）

第５条　資料館に調査員若干名を置く。

２　調査員は、委員会の議を経て館長が委嘱する。

３　調査員は、資料館の業務を処理する。

（特別調査員）

第６条　埋蔵文化財に関する特別な分野の調査研究を行なうため、資料館に特別調査員若干名を置くことができる。

２　特別調査員は、委員会の議を経て館長が委嘱する。

（雑則）

第７条　この規則に定めるもののほか、資料館に必要な事項は別に定める。

山口大学埋蔵文化財資料館運営委員会規則

（趣旨）

第１条　この規則は、山口大学埋蔵文化財資料館規則（以下「資料館規則」という。）第３条第２項の規定に基づき、山口大学埋蔵文化財資料館運営委員会（以下「委員会」という。）に関し、必要な事項を定めるものとする。

（審議事項）

第２条　委員会は、次の事項を審議する。

一　山口大学埋蔵文化財資料館（以下「資料館」という。）に関する基本的なこと。

二　資料館の管理運営に関すること。

三　資料館の整備充実に関すること。

四　資料館の運営に要する経費に関すること。

五　その他必要な事項

（組織）

第３条　委員会は、次の各号に掲げる委員をもって組織する。

一　資料館規則第４条第１項の館長

二　各学部及び教養部の教官各１名

三　事務局長

２　前項第２号の委員は、それぞれの部局の推薦に基づいて学長が委嘱する。

（任期）

第４条　前条第１項第２号の委員の任期は２年とし、再任を妨げない。

（委員長）

第５条　委員会に委員長を置き、委員の互選とする。

２　委員長は、委員会を招集し、その議長となる。

（幹事）

第６条　委員会に幹事を置き、庶務部長、経理部長及び施設部長をもって充てる。

（委員以外の出席）

第７条　委員会が必要と認めるときは、委員以外の者を委員会に出席させることができる。

（事務）

第８条　委員会の事務は、庶務部庶務課において処理する。

（雑則）

第９条　この規則に定めるもののほか、委員会の運営に関し必要な事項は、委員会が定める。

Tab.29－１　山口大学埋蔵文化財資料館運営委員会委員　（昭和５９年度）

部局名	氏名	官職	任期	備考
医学部	黄　基雄	教授	58. 4. 1～60. 3. 31	委員長
人文学部	八木　充	教授	58. 4. 1～60. 3. 31	館長
人文学部	近藤喬一	教授	59. 4. 2～61. 4. 1	
教育学部	川村博忠	助教授	58. 4. 1～60. 3. 31	
経済学部	及川　順	教授	58. 4. 1～60. 3. 31	
理学部	久田見　守	助手	58. 4. 1～60. 3. 31	
工学部	木村　允	教授	58. 4. 1～60. 3. 31	
農学部	木脇祐順	教授	58. 4. 1～60. 3. 31	
教養部	木村忠夫	教授	58. 4. 1～60. 3. 31	
事務局	佐藤士郎	事務局長		
事務局	五田次雄	事務局長		

（昭和６０年度）

部局名	氏名	官職	任期	備考
医学部	黄　基雄	教授	60. 4. 1～62. 3. 31	委員長
人文学部	近藤喬一	教授	59. 4. 2～62. 4. 1	館長
人文学部	中村友博	助教授	60. 5. 29～62. 5. 28	
教育学部	三浦　肇	教授	60. 4. 1～62. 3. 31	
経済学部	及川　順	教授	60. 4. 1～62. 3. 31	
理学部	岩田允夫	教授	60. 4. 1～62. 3. 31	
工学部	島　敞史	教授	60. 4. 1～62. 3. 31	
農学部	西野武蔵	教授	60. 4. 1～62. 3. 31	
教養部	木村忠夫	教授	60. 4. 1～62. 3. 31	
事務局	五田次雄	事務局長		
事務局	大谷　巌	事務局長		

Tab.29－２　山口大学埋蔵文化財資料館特別調査員

学部等	氏名	官職	専攻科目等	備考
人文学部	中村友博	助教授	日本考古学	５９年度
教育学部	三浦　肇	教授	地理学	５９年度
理学部	富阪武士	教授	鉱物学	５９・６０年度
理学部	松本徳夫	教授	岩石学	５９・６０年度
農学部	勝本　謙	助教授	植物分類学	５９・６０年度
工業短期大学部	池谷元伺	教授	年代測定	５９・６０年度

山口大学構内の主な調査

◦旧調査区名は吉田遺跡調査団使用のもの
◦41年から57年までの調査は全て吉田地区
◦地点はFig.1を参照

Tab.30　山口大学構内の主な調査一覧表（1）

調査年度	旧調査地区名又は調査名	学内地区割	地点	担当者	調査区分	面積(㎡)	遺構	遺物	備考
昭和41年	第Ⅰ地区A・B区	L・M－15区	1－1	小野忠熙	事前	30?	弥生竪穴住居,柱穴	弥生土器,土師器,須恵器	吉田第1次発掘調査
	第Ⅳ地区 家畜病院建設予定地	S・T－19区 S－20区	1－2	小野忠熙	事前	2000	溝，柱穴	弥生土器,土師器,瓦質土器,須恵器	吉田第2次発掘調査
	第Ⅱ地区	P・Q－19・20区	1－3	小野忠熙	試掘			弥生土器,土師器	吉田第3次発掘調査
	第Ⅸ地区 牛舎建設予定地	S－10区	1－4	小野忠熙	事前	300	弥生溝，土壙 古墳竪穴住居 中世住居跡,溝	弥生土器,土師器,須恵器,瓦質土器,陶磁器	吉田第4次発掘調査
	第Ⅳ地区	S・T－10～13区	1－5	小野忠熙	試掘				吉田第5次発掘調査
昭和42年	第Ⅲ地区杭列区	E－20	1－6	小野忠熙	事前	1100	杭列	弥生土器,土師器,須恵器,瓦質土器,矢板状木杭	吉田第6次発掘調査
	第Ⅲ地区南区	G・H－22・23区	1－7	小野忠熙	事前		河川跡，柱穴	縄文土器，弥生土器，木器,石器	吉田第7次発掘調査
	第Ⅲ地区北区	I・J－20・21区	1－8	小野忠熙	事前	1400	竪穴住居,溝,土壙,柱穴		吉田第8次発掘調査
	第Ⅲ地区東南区	H－23区 I・J・K－24区	1－9	小野忠熙	事前		弥生竪穴住居	弥生土器	吉田第9次発掘調査
	第Ⅲ地区野球場	I－22・23区 J－21・22・23区 K－22・23区	1－10	小野忠熙	試掘		中世柱穴	瓦質土器	吉田第10次発掘調査
	第Ⅴ地区学生食堂	I・J－19・20区 J－20区	1－11		事前		弥生溝，古墳土壙	弥生土器,土師器	吉田第11次発掘調査
	第Ⅴ地区	I・J・K・L・M－18・19・20区	1－12	山口大学吉田遺跡調査団	試掘		河川跡，柱穴，土壙	弥生土器,土師器	吉田第12次発掘調査
	第Ⅰ地区C区 大学本部建設予定地	K・L－14区	1－13	〃	事前	600	竪穴住居，溝，土壙	土師器，須恵器，瓦質土器	吉田第13次発掘調査
昭和44年	第Ⅴ地区教育学部			〃	試掘		河川跡	弥生土器,土師器須恵器	吉田第14次発掘調査
昭和46年	第Ⅰ地区D区第1地点	L－13区	1－14	〃	試掘		溝	弥生土器,木炭屑	吉田第15次発掘調査
	第Ⅰ地区D区第2地点	〃	1－15	〃	〃			弥生土器,土師器,瓦質土器	吉田第16次発掘調査
	第Ⅰ地区D区第3地点	M－13区	1－16	〃	〃		竪穴住居 土壙，柱穴	土師器	吉田第17次発掘調査
	第Ⅰ地区D区第4地点	M・N－13区	1－17	〃	〃		弥生竪穴住居，溝，土壙	弥生土器,土師器,石器，瓦質土器	吉田第18次発掘調査
	第Ⅰ地区D区第5地点	L－13区	1－18	〃	〃		弥生溝	弥生土器	吉田第19次発掘調査
	第Ⅰ地区D区第6地点	M－13区	1－19	〃	〃		古墳竪穴住居 弥生溝	弥生土器,土師器,石器	吉田第20次発掘調査
	第Ⅰ地区D区第7地点	〃	1－20	〃	〃		溝	弥生土器	吉田第21次発掘調査
	第Ⅰ地区E区 第2学生食堂建設予定地	N・O－15区	1－21	〃	事前	900	弥生～古墳竪穴住居,土壙，溝，柱穴	弥生土器,土師器須恵器,瓦質土器石器，鉄製品	吉田第22次発掘調査
昭和50年	第Ⅱ地区			〃	試掘			弥生土器	吉田第23次発掘調査
昭和51年	第Ⅲ地区			〃	〃		竪穴住居	弥生土器,土師器須恵器	吉田第24次発掘調査
昭和53年	人文学部校舎新営予定地	M・N－21区	1－22	近藤喬一	〃	180			吉田第25次発掘調査
	教育学部附属養護学校新営予定地	A・B・C・D－20・21・23・24区	1－23	山口大学埋蔵文化財資料館 山口市教育委員会	〃		溝，土壙	縄文土器 弥生土器	吉田第26次発掘調査
昭和54年	理学部校舎新営予定地	O－19区	1－24	山口大学埋蔵文化財資料館	〃	250			吉田第27次発掘調査
	農学部動物舎新営予定地	P－18区	1－25	〃	〃	380			吉田第28次発掘調査

調査年度	調査名	学内地区割	地点	担当者	調査区分	面積(㎡)	遺構	遺物	備考
昭和54年	本部管理棟新営予定地	L－14区	1－26	山口大学埋蔵文化財資料館	事前	740	溝，土壙，柱穴中世井戸，土壙墓，住居跡	弥生土器，土師器石製品	吉田第29次発掘調査
昭和55年	経済学部校舎新営予定地	K・L－21区	1－27	〃	〃				吉田第30次発掘調査
	農学部農業観測実験施設新営	Q－15区	1－28	〃	〃	50	溝・土壙		吉田第31次発掘調査
	本部	F－20・21区 G－19区 H－20区	1－29	〃	立会				工事続行 吉田第1次立会調査
	農学部	P・Q－17・18区	1－30	〃	〃				吉田第2次立会調査
昭和56年	教育学部校舎新営予定地	H－19区	1－31	〃	事前	400	弥生竪穴住居，土壙・溝，柱穴	弥生土器，石製品	吉田第32次発掘調査
	教育学部音楽棟新営予定地	H－16区	1－32	〃	〃	100	溝		吉田第33次発掘調査
	教育学部美術科・技術科実験実習棟新営予定地	J－19・20区	1－33	〃	〃	130	旧河川，溝 柱穴	縄文土器，弥生土器 須恵器，土師器	吉田第34次発掘調査
	正門橋脚新営工事	H－11区	1－34	〃	立会				工事続行 吉田第3次立会調査
	時計塔埋設工事	H－14区	1－35	〃	〃				工事続行 吉田第4次立会調査
	本部構内擁壁工事	K－14区	1－36	〃	〃				工事続行 吉田第5次立会調査
	教養部構内擁壁工事	I－17区	1－37	〃	〃				工法等変更6次立会
	構内循環道路舗装工事	吉田構内	1－38	〃	〃				工事続行　7次立会
	農学部中庭整備工事	O－17区	1－39	〃	〃				工事続行　8次立会
	暖房施設改修工事	O－16区	1－40	〃	〃				工法等変更9次立会
	学生部文化会車庫新営工事	L－8区	1－41	〃	〃				工法等変更10次立会
	学生部馬場整備工事	M・N－8・9区	1－42	〃	〃				工事続行　11次立会
昭和57年	附属図書館増築予定地	M－16区	1－43	〃	事前	600	弥生～古墳溝，土壙・柱穴，杭列	弥生土器，土師器，須恵器，石器	吉田第35次発掘
	教育学部附属養護学校プール新営	M－22区	1－44	〃	立会				吉田第12次立会
	放射性同位元素総合実験室排水　新営工事	O－18区	1－45	〃	〃				吉田第13次立会
	教養部自転車置場昇降口新営工事	K・L－17区	1－46	〃	〃				吉田第14次立会
	教養部中庭環境整備工事	J・K－16区	1－47	〃	〃				吉田第15次立会
昭和58年	大学会館新営予定地	M・N－13区	1－48	〃	事前	2000	古墳井戸，土壙，柱穴，中世井戸，掘立柱建物	弥生土器，土師器，須恵器，輸入陶磁器，国産陶器，瓦質土器，瓦器，緑釉陶器，	吉田第36次発掘
	ラグビー場防球ネット新営予定地	G・H－19区	1－49	〃	〃	120	弥生溝，弥生～古墳竪穴住居，土壙	弥生土器，土師器，石製品	竪穴住居は工法変更により現地保存 吉田第37次発掘
	教育学部附属光小学校自転車置場新営予定地			〃	試掘		近世～近代石垣	陶磁器，瓦質土器，瓦	御手洗第1次発掘
	工学部校舎新営予定地			〃	〃	70		須恵器	遺構，遺物包含層なし 常盤第1次発掘
	工学部図書館増築予定地			〃	〃	70			遺構，遺物包含層なし 常盤第2次発掘
	医学部体育館新営予定地			〃	〃	260		土師器，瓦質土器，石器	小串第3次発掘
	理学部大学院校舎新営および付随工事	M・N－20区 O－20・21区	1－50	〃	立会	410			工事続行 吉田第16次立会
	正門・南門二輪車置場および正門花壇新営工事	I－12・13区 J－13区 H－23区	1－51	〃	〃	180			工事続行 吉田第17次立会
	学生部アーチェリー場的台・電柱設置工事	M－8区	1－52	〃	〃	30			工事続行 吉田第18次立会
	学生部厩舎関連工事	L－9区	1－53	〃	〃	2			工事続行 吉田第19次立会
	学生部野球場散水栓取設工事	J・K－21区	1－54	〃	〃				工事続行 吉田第20次立会
	教養部環境整備工事	I－16・17区 J－17区 K・L－17・18区	1－55	〃	〃	80			工事続行 吉田第21次立会
	学生部テニスコート改修工事	C－17・18区 D－16・17区 E－16区	1－56	〃	〃	12			工事続行 吉田第22次立会
	医学部図書館増築工事			〃	〃				吉田第23次立会
	医学部体育館新営付随工事			〃	〃				工事続行 吉田第24次立会

調査年度	調査名	学内地区割	地点	担当者	調査区分	面積(㎡)	遺構	遺物	備考
昭和59年	学生部ボート艇庫合宿所整備			山口大学埋蔵文化財資料館	立会				宇部市小野湖
	学生部ヨット艇庫合宿所整備			〃	〃				山口市秋穂
	医学部学生部室改築			〃	事前	32		瓦質土器,磁器	小串第4次発掘調査
	医学部体育館新営			〃	〃	65		土師器，瓦質土器，磁器	小串第5次発掘調査
	医学部基幹整備（特高受電設備）			〃	試掘	28		動物遺体(貝殻)	小串第6次発掘調査
	医学部臨床講義棟・病理解剖棟新営			〃	〃	38			小串第7次発掘調査
	大学会館付随工事(ケーブル埋設工事)	N－14区		〃	事前	160	弥生土壙，柱穴	弥生土器	吉田第38次発掘調査
	医学部体育館浄化槽新営			〃	〃	12	近世溝	土師器，瓦質土器	記録保存 小串第8次発掘調査
	教育学部附属光小・中学校焼却場新営			〃	立会				光市室積
	大学会館付随工事(排水管および排水U型布設)	K・L－13区		〃	事前	180	弥生～中世遺物包含層古墳土壙，古代～中世土壙，溝，柱穴	弥生土器，土師器須恵器，青磁，白磁，瓦質土器	記録保存 吉田第39次発掘調査
	学生部テニスコートフェンス改修	C－17・18・19区 D－15・16・17区 E－16区		〃	試掘	25	古墳以降の遺物包含層	土師器	工事規模内埋蔵文化財支障なし 吉田第40次発掘調査
	経済学部樹木移植	K－19・20・21区		〃	立会	8			工事規模内埋蔵文化財支障なし 吉田第24次立会

※　昭和52年以前の吉田遺跡調査団の調査分については調査名が抜けているものもあり、注意されたい。昭和41年以降、吉田構内においては工事に際し、随時継続的に調査を実施している。

English Summary

This report accounts the result of archaeological researches in sixteen excavated areas located on campus in 1983. Yamaguchi University Archaeological Research was established as part of the cross-faculties public facilities of the University in 1978. We refer to a plan from the conference of the management committee first and gain approval. We then carried out the research in relation to the construction work on campus. So far the excavations have been conducted at the Yoshida campus. However, Kogushi, Tokiwa and Kameyama campus were added as field under research afresh in this time.

The current year we carried out research as follows :

1. Excavation preceding the construction work

   1) Excavation in relation to the construction of the University Hall on the Yoshida campus

   We found many pit holes on the two hills and six wells dating from the early *Kofun* to *Heian* period in a valley. A great deal of earthenware was excavated from the site and layers contained many water shed debris. In particular, these layers contained some special relics ; a stone buckle, a wooden writing tablet, green glazed ware and a circular ink slab. These relics gave us very valuable data of the Ritsuryo period.

   2) Excavation in relation to setting up nets on the Rugby ground

   As the ditches (date from the middle to the late *Yayoi* period) and a residence (from the late *Yayoi* to the early *Kofun* period) were excavated in this area, we obtained new research data concerned with the scale and density of the buried village at the southwestern area on the Yoshida campus.

2. Soundings

   1) Excavation in relation to the construction of a new gymnasium at School of Medicine on the Kogushi campus

Five stone implements, a knife tool, a micro core and so on were found. So we can conjecture that the site in the paleolithic age remains on the upper hill and its surrounding.

2) Excavation in relation to leveling the land of the playground on the Kameyama campus

Many eathenware of the early *Kofun* period and wooden tools including a spade, a hoe and an instrument in the shape of a bird with a pole were excavated. This bird is regarded as a sacred utensil used by the people who believed in the spiritual nature of this bird. These discoveries show us a part of the religious service of the village of this period.

Besides the above-mentioned, three soundings and nine examinations under construction were carried out. The result of the sixteen archaeological researches brought about some new valuable discoveries.

1 It became clear that many sites remain in the southeastern side of the Kogushi campus and under the playground of the Kameyama campus.

2 Many sites of residence and so on suggest the process of changes in the village on the southwestern side of the Yoshida campus.

3 It became clear that the Yoshida district has played an important part since the *Nara* period in the local administration under the Ritsuryo system and it may be probable that a government official's mansion is located in that area at that time.

Newly excavated articles will shed much light on this ancient age to the medieval age of this area.

4 By this research, various relics were found on the Kogushi and the Kameyama campus.

Therefore these areas should be further examined in the future.